



第  
500  
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第500集

大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

# 大川添(1)遺跡 水上(4)遺跡Ⅱ 芦沢(1)遺跡

-津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告-

→○←  
—→

青森県教育委員会

2011年

青森県教育委員会

大川添（1）遺跡  
水上（4）遺跡Ⅱ  
芦沢（1）遺跡

-津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告-

2011年

青森県教育委員会



# 序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。平成21・22年度は、大川添(1)・(2)遺跡、砂子瀬遺跡、水上(2)・(4)遺跡、芦沢(1)遺跡の発掘調査を行いました。

調査の結果、大川添(1)遺跡では、縄文時代後期の竪穴住居跡をはじめ、縄文時代中期から晩期にかけての土坑や、同時期の土器・石器等の遺物が発見されました。水上(4)遺跡・芦沢(1)遺跡では、縄文時代中期から後期にかけての遺物が散布している遺跡であることがわかりました。本報告書では、平成21・22年度に行われた大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡・芦沢(1)遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省 東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成23年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 新岡嗣浩



## 例　言

1 本書は、国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成21・22年度に発掘調査を実施した西目屋村大川添(1)遺跡、水上(4)遺跡、芦沢(1)遺跡の発掘調査報告書である。

発掘調査対象面積及び発掘調査面積は以下のとおりである。

大川添(1)遺跡 発掘調査対象面積21,000 m<sup>2</sup> 発掘調査面積8,800 m<sup>2</sup>

水上(4)遺跡 発掘調査対象面積 2,400 m<sup>2</sup> 発掘調査面積2,400 m<sup>2</sup>

芦沢(1)遺跡 発掘調査対象面積58,000 m<sup>2</sup> 発掘調査面積6,800 m<sup>2</sup>

2 遺跡の所在地及び青森県遺跡番号は以下の通りである。

大川添(1)遺跡 青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字大川添 青森県遺跡番号 343018

水上(4)遺跡 青森県中津軽郡西目屋村大字砂子漸字水上 青森県遺跡番号 343029

芦沢(1)遺跡 青森県中津軽郡西目屋村大字砂子漸字芦沢 青森県遺跡番号 343020

3 津軽ダム建設事業に伴う発掘調査報告書は、既に4冊刊行されており、本書は第5冊目となる。

4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所が負担した。

5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 平成21年5月7日～11月13日

平成22年5月6日～10月28日

整理・報告書作成期間 平成22年4月1日～平成23年3月31日

6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター中嶋副参事・新山文化財保護主幹・佐々木文化財保護主査・佐藤(純)文化財保護主査・菅原文化財保護主事が担当した。事実記載の担当は以下のとおりである。

(遺構)大川添(1)遺跡：新山、水上(4)遺跡：佐々木、芦沢(1)遺跡：中嶋

(遺物：土器)大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡：佐々木、芦沢(1)遺跡：中嶋

(遺物：石器)大川添(1)遺跡：菅原、水上(4)遺跡：佐々木、芦沢(1)遺跡：佐藤(純)

調査の概要(第1章)およびまとめ等については執筆者名を各文末に記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。

7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

航空写真撮影 株式会社シン技術コンサル

路線測量 株式会社キタコン、北村技術株式会社

石器の石質鑑定 青森県立郷土館主任学芸主査 烏口 天

リン・カルシウム分析 株式会社パレオ・ラボ

種実同定分析 株式会社パレオ・ラボ

放射性炭素年代分析 株式会社加速器分析研究所

遺物の写真撮影 シルバーフォト、スタジオエイト

8 発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

- 9 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た。(敬称略、順不同)
- 青森県立郷土館、西目屋村教育委員会、弘前市教育委員会、弘前市建設部道路維持課、  
江上 幹幸(沖縄国際大学)、上条 信彦(弘前大学)、小笠原 豊(平川市教育委員会)、  
菅野 美香子(秋田県埋蔵文化財センター)、佐野 忠史(つがる市教育委員会)、成田 正彦(弘前市教育委員会)、三宅 徹也、鈴木 克彦
- 11 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「川原平」及び西目屋村役場発行の25,000分の1地形図「西目屋村管内図」を複写して使用した。
- 12 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 13 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、挿図毎にスケール等を示した。
- 15 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。なお遺構番号は整理作業段階で付け直したものもあるが、発掘作業段階で用いた遺構の略号を( )内に合わせて記した。遺構に使用した略号は、以下のとおりである。
- S I = 塗穴住居跡、S K = 土坑、S N = 焼土遺構、S X = 性格不明遺構
- 16 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 17 遺構実測図の縮尺は、各挿図毎にスケール等を示した。
- 18 塗穴住居跡のピット及び小穴(ピット)は、床面又は検出面からの深さを計測し、挿図の( )内に示している。単位はcmである。表記は、住居跡・土坑内部は「Pit」と、住居外部については「PIT」と区別した。
- 19 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 20 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記には、『新版標準土色帖 2006年度版』(小山正忠、竹原秀雄)を使用した。
- 21 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、以下のとおりである。
- ・P = 土器・土製品、△・S = 石器・石製品・自然礫、▲・C = 炭化物、○ = 分析資料
- 22 遺物実測図には、挿図毎に1から通しの図番号を付した。同一個体と考えられる土器等には、図番号に小文字アルファベットを組み合わせて表記した。
- 23 遺物実測図の縮尺は、原則として縦文土器・礫石器は1/3、石製品・剥片石器は1/2に統一し、挿図毎にスケール等を示した。
- 24 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。
-  スリ範囲  
(石器)       タタキ・凹み範囲  
(石器)
- 25 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、表毎に指示内容を示した。土製品・石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ(cm)・重さ(g)の順に表記した。( )内の数値は現存値である。
- 26 遺物写真には、遺物実測図と共に図番号を付したが、縮尺は統一していない。

# 目 次

序

例言

目次・図版目次・写真目次

第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	1
第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第4節 大川添(1)遺跡の地形・地質	4
第2章 大川添(1)遺跡	7
第1節 調査方法と整理方法	8
第2節 調査と整理の経過	11
第3節 検出遺構と出土遺物	14
第1項 検出遺構	14
1. 竪穴住居跡 2. 土坑 3. その他の遺構	
第2項 出土遺物	34
1. 土器 2. 石器 3. その他の遺物	
第3章 水上(4)遺跡	57
第1節 調査方法と整理方法	58
第2節 調査と整理の経過	60
第3節 遺物包含層と出土遺物	62
第1項 遺物包含層	62
第2項 出土遺物	64
1. 遺物包含層出土土器 2. 遺物包含層出土石器	
第4章 声沢(1)遺跡	81
第1節 調査方法と整理方法	82
第2節 調査と整理の経過	86
第3節 出土遺物	89
1. 土器 2. 石器 3. その他の遺物	
第5章 理化学的分析	92
第1節 放射性炭素年代測定結果について(抄)	92
第2節 種実同定分析	97
第3節 リン・カルシウム分析	99
第6章 まとめ	101
第1節 大川添(1)遺跡	101
第2節 水上(4)遺跡	103
第3節 声沢(1)遺跡	104
引用・参考文献	106
遺物観察表	107
写真図版	115
報告書抄録・奥付	

## 図版目次

第1章 調査の概要	
図1 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
図2-1 美山湖周辺の河成段丘面分布図	5
図2-2 大川添(1)遺跡の調査区Aと調査区B	6
図2-3 調査区Bの地形	6
国28 遺構外出土石器(2)	50
国29 遺構外出土石器(3)	51
国30 遺構外出土石器(4)	52
国31 遺構外出土石器(5)	53
国32 遺構外出土石器(6)	54
国33 遺構外出土石器(7)	55
国34 遺構内外出土石製品	56
第2章 大川添(1)遺跡	
国3 基本層序	9
国4 遺構配置図	13
国5 第1号竪穴住居跡	15
国6 第2号竪穴住居跡	16
国7 土坑(1)	23
国8 土坑(2)	24
国9 土坑(3)	25
国10 土坑(4)	26
国11 土坑(5)	27
国12 土坑(6)	28
国13 土坑(7)	29
国14 ブロック図	30
国15 第1ブロック図	31
国16 第2ブロック図	32
国17 第3・4ブロック図	33
国18 レンチ等配置図	34
国19 遺構内出土土器(1)	38
国20 遺構内出土土器(2)	
・遺構外出土土器(1)	39
国21 遺構外出土土器(2)	40
国22 遺構外出土土器(3)	41
国23 遺構外出土土器(4)	42
国24 遺構外出土土器(5)	43
国25 遺構外出土土器(6)	44
国26 遺構内出土石器(1)	48
国27 遺構内出土石器(2)	
・遺構外出土土器(1)	49
国28 遺構外出土石器(2)	50
国29 遺構外出土石器(3)	51
国30 遺構外出土石器(4)	52
国31 遺構外出土石器(5)	53
国32 遺構外出土石器(6)	54
国33 遺構外出土石器(7)	55
国34 遺構内外出土石製品	56
第3章 水上(4)遺跡	
国35 調査区と座標系	61
国36 埋没沢と遺物包含層	63
国37 遺物包含層出土土器(1)	69
国38 遺物包含層出土土器(2)	70
国39 遺物包含層出土土器(3)	71
国40 遺物包含層出土土器(4)	72
国41 遺物包含層出土土器(5)	73
国42 遺物包含層出土土器(6)	74
国43 遺物包含層出土土器(7)	75
国44 遺物包含層出土石器(1)	78
国45 遺物包含層出土石器(2)	79
国46 遺物包含層出土土器(3)	80
第4章 芦沢(1)遺跡	
国47 基本層序	83
国48 レンチ配置図	84
国49 遺物出土状況	85
国50 遺構外出土土器(1)	88
国51 遺構外出土土器(2)	89
国52 遺構外出土石器・石製品	91
第6章 まとめ	
国53 第2号竪穴住居跡柱穴配置	101
国54 出土土器時期別比率	102

## 写真目次

大川添(1)遺跡	
写真1 空中写真	115
写真2 第1号竪穴住居跡	116
写真3 第2号竪穴住居跡	117
写真4 土坑(A I類)	118
写真5 土坑(A II類①)	119
写真6 土坑(A II類②)	120
写真7 土坑(A III類①)	121
写真8 土坑(A III類②)	122
写真9 土坑(A IV類)	123
写真10 土坑(B II・III類)	124
写真11 土坑(B III・IV類)	125
写真12 土坑(C II・III類)	126
写真13 土坑(C IV類)	127
写真14 その他の遺構・遺物集中範囲	128
写真15 遺構内出土土器	
・遺構外出土土器(1)	129
写真16 遺構外出土土器(2)	130
写真17 遺構外出土土器(3)	131
写真18 遺構外出土土器(4)	132
写真19 遺構内出土石器	
・遺構外出土石器(1)	133
写真20 遺構外出土石器(2)	134
写真21 遺構外出土石器(3)	
・遺構内外出土石製品	135
水上(4)遺跡	
写真22 遺跡全景	136
写真23 埋没沢(1)	137
写真24 埋没沢(2)	
・遺物包含層遺物出土状況	138
写真25 遺物包含層出土土器(1)	139
写真26 遺物包含層出土土器(2)	140
写真27 遺物包含層出土土器(3)	141
写真28 遺物包含層出土土器(4)	142
写真29 遺物包含層出土土器	
・遺物包含層出土石器	143
芦沢(1)遺跡	
写真30 平成21年度調査区	144
写真31 平成22年度調査区	145
写真32 遺構外出土土器・石器	146

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経過

岩木川総合開発の事業の一環として建設される津軽ダムは、昭和35年に完成した日月山ダムの度重なる計画規模を超えた出水による洪水や湯水の被害などを繰り返さないため、昭和58年から建設省東北地方建設局青森工事事務所による予備調査や実施計画調査が行われ、平成5年11月に「ダム基本計画」が公示された。

平成14年には、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所から青森県教育庁文化財保護課へ津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受け同年7月に、津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の3者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。その後、県文化財保護課による分布調査が実施され、津軽ダム建設予定地常時満水区域内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、総面積約768,000m<sup>2</sup>と確定した。

発掘調査は、青森県埋蔵文化財調査センターが担当して実施することになり、平成15年度には大川添地区・川原平地区、平成16～18年度には水上(1)遺跡、平成18年度には砂子瀬地区・美山湖右岸地区、平成19年度には砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡、平成20年度には砂子瀬遺跡・水上(2)遺跡・大川添(2)遺跡の発掘調査が実施された。

平成21・22年度の発掘調査は、各年度の4月に津軽ダム工事事務所及び県文化財保護課、県埋蔵文化財調査センターによって当該年度の発掘調査予定について協議が行われ、津軽ダム関連の工事の進捗状況に伴い、砂子瀬遺跡・水上(2)遺跡・水上(4)遺跡・芦沢(1)遺跡・大川添(1)遺跡・大川添(2)遺跡の発掘調査実施を確認した。

なお、周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事のための発掘に関する通知は、各遺跡の発掘調査が行われる年度に国土交通省津軽ダム工事事務所長から提出され、青森県教育委員会から事前の記録保存のための発掘調査を実施するよう指示がなされている。また、工事に伴う事前の準備や発掘調査時の安全管理及び設計変更に伴う調査区域の変更などについても、その都度関係諸機関と協議を行いつながら調査を進めた。

### 第2節 調査の体制

平成21年度の津軽ダム建設に伴う発掘調査は、砂子瀬遺跡E区(21年度報告書刊行)と大川添(1)遺跡のほか、砂子瀬遺跡A区・芦沢(1)遺跡(6月開始)の4箇所について、5月7日から10月30日までの間に実施することとなった。また、水上(4)遺跡は9月上旬から、大川添(2)遺跡は8月下旬からそれぞれ調査を開始し、10月30日までに終了している。砂子瀬遺跡A区・芦沢(1)遺跡は、2週間延長して11月13日まで実施した。

平成22年度は、砂子瀬遺跡A区と芦沢(1)遺跡の発掘調査を5月6日から開始し、遺構・遺物が希薄だった芦沢(1)遺跡の調査は7月31日で終了した。大川添地区は6月8日から発掘調査を開始したが、このうち大川添(1)遺跡低位面は、10月5日から調査を開始し10月28日で終了した。水上(2)遺跡は、8月から調査を開始し10月28日で22年度の調査を終了した。

発掘調査体制は、以下の通りである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

(平成21年度)所長	新岡 剛浩
次長	工藤 大 (平成22年3月定年退職)
総務G M	木村 繁博
調査第一 G M	成田 滋彦
総括主幹	中嶋 友文 (現 副参事)
文化財保護主査	新山 隆男 (現 文化財保護主幹) 佐々木 雅裕
	伊藤 由美子(現 青森県立郷土館文化財保護主査)
	佐藤 純子
文化財保護主事	菅原 優太
調査補助員	一戸 佐知絵(平成21年6月退職)、出町 好、太田 雄、 山上 猛(平成22年3月退職)、森山 裕行、佐藤 裕香、 坂本 真由美、佐藤 大介、白戸 このみ、中村 晃菜、 福田 南、岩佐 良子、山崎 淑恵
(平成22年度)所長	新岡 剛浩
次長	畠山 昇
総務 G M	木村 繁博
調査第二 G M	中嶋 友文
総括主幹	小田川 哲彥
文化財保護主幹	齋藤 岳 木村 高 新山 隆男
文化財保護主査	佐々木 雅裕 佐藤 純子 小山 浩平
文化財保護主事	岡本 洋 菅原 優太 最上 法聖
調査補助員	梅田 裕哉(平成22年8月退職)、出町 好、森山 裕行、 池田 敬亮、佐藤 裕香、馬渕 恵理香、坂本 真由美、 佐藤 大介、鳴海 賛美、澤田 知里、白戸 このみ、 中村 晃菜、岩佐 良子、山崎 淑恵、佐々木 香澄、 対馬 綾子、佐々木 隆英、佐井 かなえ、平野 華奈、 山田 真穂、大山 浩平

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授(考古学)
調査員	葛西 勲	前青森短期大学教授(考古学)
調査員	関根 達人	国立大学法人弘前大学人文学部教授(考古学)
調査員	島口 天	青森県立郷土館主任学芸主査(地質学)

### 第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡

西目屋村には現在30カ所の遺跡が登録(平成22年12月現在)されている。今年度新たに目屋ダムのある美山湖左岸側の大川添(3)遺跡が新規登録となっている。遺跡の多くは、美山湖右岸側の川原平台地と呼ばれる河岸段丘上に集中している。

地図上(図1)に見られる芦沢橋を境に北東側を砂子瀬地域、南西側を川原平地域として美山湖右岸側の遺跡を概観してみる。砂子瀬地域では、北東側から水上(3)遺跡、水上(4)遺跡、水上(2)遺跡、水上(1)遺跡、砂子瀬村元遺跡、砂子瀬遺跡、芦沢(1)遺跡、芦沢(2)遺跡の8つの遺跡が周知されている。なお、平成18年度に実施された調査により、水上(2)・(3)・(4)遺跡は新規登録されており、従来の水上遺跡は水上(1)遺跡に名称が変更となっている。川原平地域では、南西側から、焼山遺跡、大川添(2)遺跡、大川添(1)遺跡、川原平(2)遺跡、川原平(3)遺跡、川原平(1)遺跡、川原平(4)遺跡、川原平(5)遺跡の8つの遺跡が周知されている。これらの遺跡は、すべて縄文時代の遺跡として登録されており、今後の調査によって美山湖周辺地域における縄文時代の遺跡相互の関係が明らかになることが期待される。

(新山)

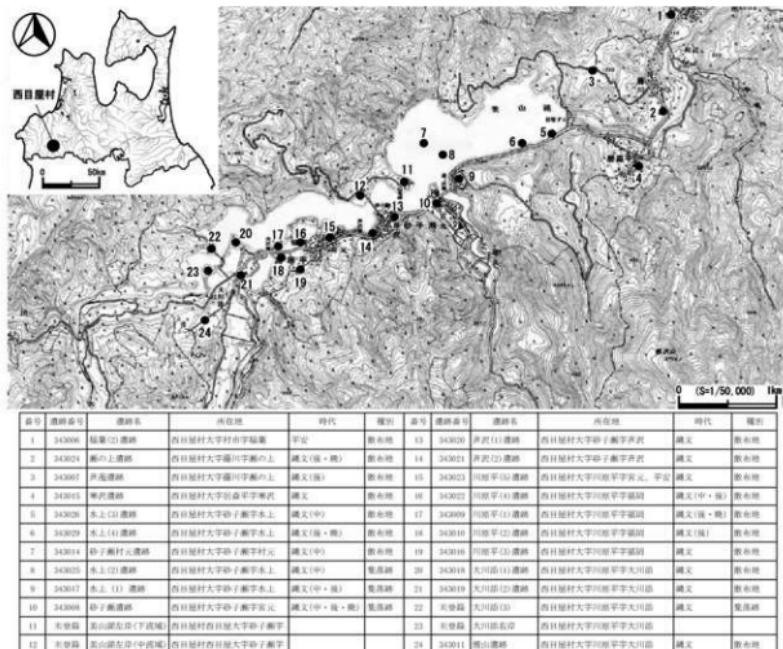


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

## 第4節 大川添(1)遺跡の地形・地質

青森県立郷土館 島 口 天

美山湖周辺の地形・地質については島口(2006)で述べてあるので省略し、ここでは大川添(1)遺跡の地形・地質についてのみ記載する。

大川添(1)遺跡は、大沢川と美山湖の合流点付近に広がる河成段丘面上に位置する(図2-1)。水野・堀田(2003)は、この段丘面をこの地域に分布する2段の河成段丘面の低位面としている。本遺跡の調査区のはほとんどはこの低位面上にあるが、北端部で標高差15mの急斜面を下った先のマウンド状地形の場所にも遺構が見つかり、調査が行われた。低位面上の調査区をA、更に低いマウンド状地形の調査区をBとする(図2-2)。調査区Bからは、縄文時代後期後葉の堅穴住居跡が1軒のみ検出され、他は土坑やピットだけであった。また、調査区AとBのそれぞれで出土した遺物の年代は、Aが縄文時代中期中葉～晚期、Bが縄文時代前期前葉～後期後葉(後期中心)であり、共通する年代があるものの完全には一致せず、若干のずれが見られた。このようなことから両調査区の関係を検討するため、調査区Bの地形の形成過程について検証を行った。

調査区Aの基本層序では、黒色土(I・II層)、漸移層(III層)、ローム層(IV層)、段丘構成層(V・VI層)が確認され、I～IV層は非常に薄く、調査区端部で斜面下に向かって厚さを若干増す。V層には長径30cm以下の亜円礫が多量に含まれ、礫の大きさは一定ではなく、礫間はシルトや砂によって充填されている。このような特徴から、岩木川または大沢川が運搬・堆積させた土石流堆積物と考えられる。VI層は亜円礫を少量含む砂層で、河川堆積物と考えられる。

調査区Bの基本層序でも調査区Aとはほぼ同様の地層の重なりが確認されたため、各層には同様のローマ数字を付けたが、両調査区の標高差が15mあるため対比は難しい。調査区Bの方が調査区Aよりローム層(IV層)が厚く、段丘構成層がV～VII層の3層に区分された点が異なる。V層には長径25cm以下の亜円礫、VII層には長径20cm以下の亜円礫が多量に含まれ、礫の大きさは一定ではなく、礫間はシルトや砂によって充填されていることから、岩木川または大沢川が運搬・堆積させた土石流堆積物と考えられる。VII層は亜円礫を少量含む砂層で、河川堆積物と考えられる。

両調査区の段丘構成層は、上述のように土石流堆積物と河川堆積物の互層になっていることが考えられ、非常によく似た層相を示す。両者の標高差が15mであることを考えると両者は対比されるものではないが、その場合、調査区Bは低位面より低位の河成段丘面ということになる。ただ、調査区Bの地形がマウンド状であることや、それを縁取るように調査区A側の急斜面との境に小谷状地形が見られることから、調査区Bが地滑り地形であることも考えられる。その場合、調査区Bは調査区Aから切り離されて15m滑り落ちたことになり、段丘構成層が対比できることになる。

### 仮説1：調査区Bは、低位面より低位の河成段丘面である。

周辺には同じような標高で、平坦な狭い地形がほかにも見られることからこの可能性は高い。ただし、調査区Bでは調査区Aよりローム層が厚く、通常、年代的に後から形成された低い段丘面にのるローム層の方が薄いということに整合的でない。

### 仮説2：調査区Bは、地滑り地形である。

調査区Bでは住居跡が1軒だけ検出されていることと、調査区Aの遺構の中に調査区の北端まで

迫っているものがあるということから、調査区Bは元々調査区Aと同じ高さにあった可能性がある。ただし、両調査区間には出土遺物の年代にずれがあることや、遺構が壊れずに15mも滑り落ちるのかという疑問が残る。また、地滑りを起こすとすると地層の層理面で滑ることが考えられるが、この周辺で基盤となっている砂子漬層の走向・傾斜は、両調査区間にある急斜面の走向・傾斜と整合的でない。

仮説1と仮説2では、仮説1の方が可能性が高い。この場合、これまでの低位面を中位面にし、この地域に発達する河成段丘面を高位面・中位面・低位面の3段とする必要がある。この2つの仮説以外に、調査区Bのマウンド状地形が土石流堆積物の末端部にできる特徴的な地形であることも考えられた。しかし、基盤の砂子漬層まで確認できていないことから、段丘構成層がどのくらいの厚さでどのように堆積しているか不明であるため、仮説として取り上げなかった。

今後の調査では、地形の特徴をよく調べることや地形を横断するようなトレーニング調査を行うようにし、様々な可能性を考慮した調査を進めることが必要である。

#### 【引用文献】

水野 裕・堀田報誠(2003) 5万分の1地形分類図「川原平」。土地分類基本調査「川原平」、青森県農林水産部農村整備課。

島口 天(2006) 第2節 遺跡周辺の地形・地質。川原平(1)・(4) 大川添(2) 水上遺跡、青森県埋蔵文化財調査報告書第409集、青森県教育委員会、p.7-9。

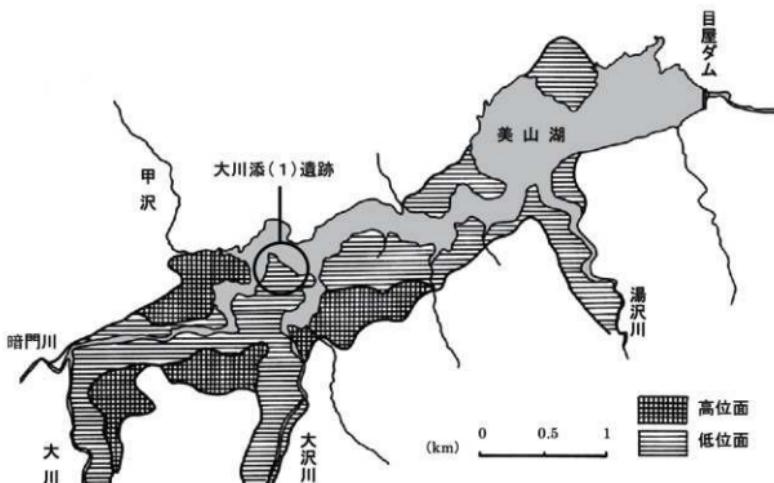


図2-1 美山湖周辺の河成段丘面分布図【水野・堀田(2003)を元に作成】

大川添(1)遺跡は、大沢川と美山湖の合流点付近に広がる河成段丘低位面上に位置し、段丘構成層は大沢川または岩木川が運搬・堆積させた土石流堆積物等からなる。

大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡



図2-2 大川添(1)遺跡の調査区Aと調査区B

調査区Aの北部端から標高差15mの急斜面を下った場所にマウンド状地形の調査区Bがある。



図2-3 調査区Bの地形

マウンド状の地形を示し、それを縁取るように調査区A側の急斜面との境に小谷状地形(写真左端)が見られる。

## 第2章

# 大川添(1) 遺跡



高位面作業風景(北東から)

## 第2章 大川添(1)遺跡

### 第1節 調査方法と整理方法

#### 1 発掘作業の方法

大川添(1)遺跡は、縄文時代の遺跡として周知されていたが、遺跡内に立木が密集していたこともあり、これまで詳細は把握できていなかった。そのため調査開始前に木の伐採を済ませてもらい、トレント(試掘坑)掘りを先行させながら調査の重点範囲を絞っていくという調査方法をとることにした。その結果、遺構・遺物が遺跡範囲内の大部分に及ぶことがわかったため、伐採済みの高位面を平成21年度に、未伐採の低位面を平成22年度にそれぞれ調査を実施することとした。調査は、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、集落の時期・構造等を把握できるような進め方をした。

##### (1)測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定

平成21年度の調査(高位面)では、平成20年度の調査で測量業者に委託して設置した基準杭をもとに、調査区内に4m×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、南から北にローマ数字とアルファベット(A～Y)、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土地標(旧日本測地系)は、I A-0 グリッドがX=57900.000・Y=-52400.000、II A-25 グリッドがX=58000.000・Y=-52300.000、III A-50 グリッドがX=58100.000・Y=-52200.000等である。測量原点には、測量業者のGPS測量機による3級基準点No2-1(世界測地系でX=58302.707・Y=-52020.019)、No2-3(X=58071.338・Y=-52260.245)、4級基準点No2-2(X=58186.890・Y=-52196.540)を使用した。レベル原点も、測量業者のGPS測量機によりBM.4(地盤高209.207m)、BM.5(地盤高214.694m)を原点として実測基準点3点(KBM.3・4・5)に設置し、必要に応じ実測基準点から移動して使用した。

平成22年度の調査(低位面)では、高位面との高低差が大きく、座標や水準点の移動距離も長いことから、新たに測量業者に委託して基準杭を設置した。

##### (2)基本層序

遺跡の基本層序については、表土から順にローマ数字を付けて呼称した。高位面と低位面とは堆積状況に共通する部分が多いため、同じ土層番号を用いて分層した(図3参照)。

##### (3)表土等の調査

遺跡範囲内の表土等の調査は、トレント掘りにより、高位面は畑作により表土が削平され、低位面は遺構確認面まで遺物が希薄であることが明らかとなつたため、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、適宜地区単位でグリッド・層位毎に取り上げた。

##### (4)遺構の調査

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付いた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に「遺構実測支援システム」(株式会社CUBIC)を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図、出土遺物の形状実測図などは、簡易遺り方測量等で縮尺1/10・1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物につ

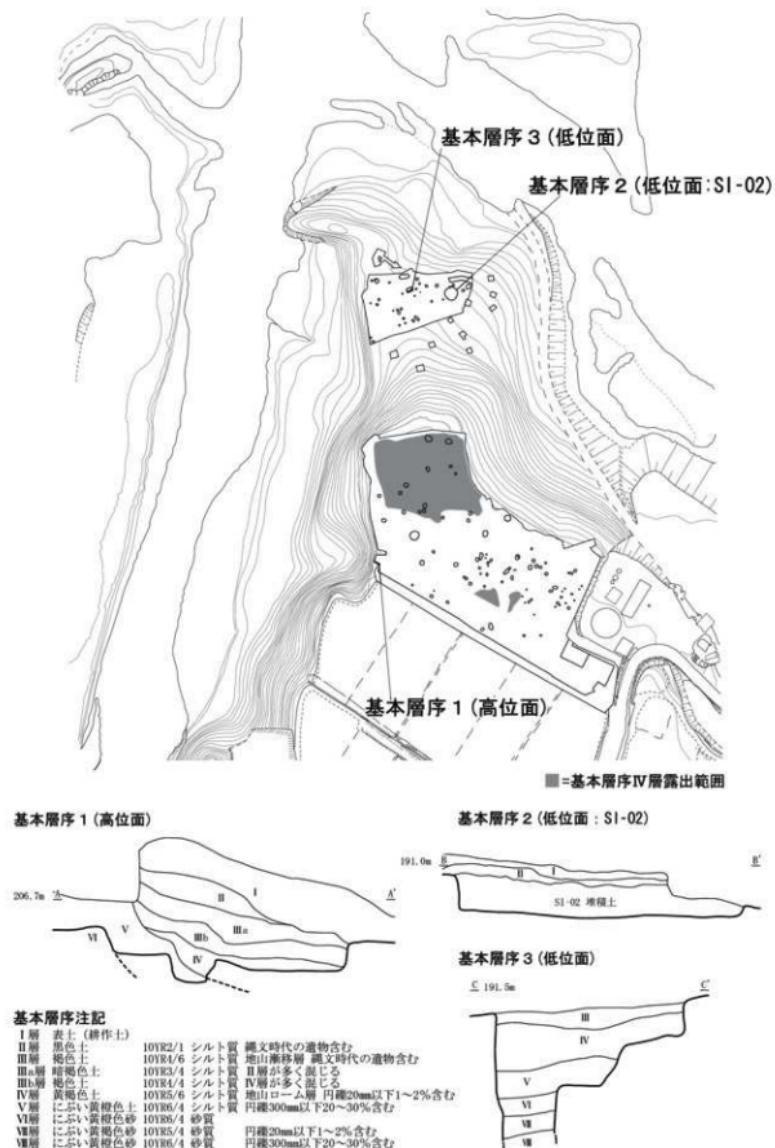


図3 基本層序

いては、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎又は堆積土一括で取り上げたが、床面・底面及び炉の出土遺物については、トータルステーションや簡易造り方測量により、必要に応じて縮尺1/10・1/20のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

#### (5)写真撮影

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1790万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託して行った。

## 2 整理・報告書作成作業の方法

平成21・22年度の調査の結果、縄文時代の堅穴住居跡2軒、土坑83基、焼土跡2基、ビット32基が検出され、土器・石器等の遺物が段ボール箱で42箱出土した。縄文時代の集落の時期・構造等を解明するため、堅穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の様相等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

#### (1)図面類の整理

遺構の平面図は、主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易造り方測量で作成した堆積土層断面図や炉の実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

#### (2)写真類の整理

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

#### (3)遺物の洗浄・注記と接合・復元

縄文時代の遺構出土遺物及び包含層遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

#### (4)報告書掲載遺物の選別

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄(放置)された資料、遺構の構築・廃棄時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代(時期)・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

#### (5)遺物の観察・図化

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

#### (6)理化学的分析

遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定、同じく種実・炭化種実の同定、特殊な構造をもつ土坑のリン・カルシウム分析を、業者に委託して行った。

## (7) 遺構・遺物のトレース・版下作成

遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、手作業と「トレースくん」(株式会社CUBIC)を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、手作業とデジタル機器による作業を併用した。

## (8) 遺構の検討・分類・整理

遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。また、発掘調査後の整理作業に伴い、発掘調査時に付した遺構名に変更が生じたため、第3節第1項「検出遺構」の対応表に示した。

## (9) 遺物の検討・分類・整理

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

## (10) 調査成果の検討

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の集落の時期・構造について検討・整理した。

## 第2節 調査と整理の経過

### 1 発掘作業の経過

(平成21年度)

- 5月7日 高位面(図4参照)の調査を開始した。あらかじめ重機で掘削したトレーニングの清掃・検出作業を行う。
  - 5月下旬 トレーニングによる遺構検出作業の結果、高位面全体にわたって遺構が確認されたため、調査区全面の本調査を行うこととなった。
  - 6月上旬～ 調査区高位面全体の表土剥ぎを重機によって進めた。表土剥ぎが済んだ区域から作業員を投入して遺構検出作業を進めた。作業は、調査区北西部から南東部へ向けて進めた。検出された遺構は、検出順に遺構番号を付して精査を進めた。高位面の遺物は、土器・石器等が段ボール箱で29箱分出土した。
  - 7月上旬～ 低位面(図4参照)の調査を高位面の調査と同時進行で開始した。調査区は立木があるため、木と木の間をぬってトレーニング掘りを行った。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡が検出されたが、木の伐採は、来年度実施されるということから、本格的調査は来年度へ持ち越しとなった。低位面の遺物は、土器・石器等が段ボール箱で2箱分出土した。
  - 8月28日 高位面の発掘調査を終了した。
  - 9月17日 調査員島口氏による、地形・地質に関する現地指導を受けた。
  - 10月20日 調査員葛西氏・関根氏による、考古学に関する現地指導を受けた。
  - 10月22日 株式会社シン技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域全体の空中撮影を行った。
- (平成22年度)
- 9月27日～ 業者により低位面の木の伐採が行われる。
  - 9月29日～ 重機による表土掘削が行われる。
  - 10月5日～ 低位面の調査を開始した。作業員を投入して遺構検出作業から行った。作業は、西から東に向いて進めた。検出された遺構は、検出順に遺構番号を付して精査を進めた。低

位面の遺物は、土器・石器等が段ボール箱で11箱分出土した。

- 10月20日 株式会社シン技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域全体の空中撮影を行った。  
10月21日 調査員島口氏による、地形・地質に関する現地指導を受けた。  
10月28日 低位面の発掘調査を終了し、2カ年にわたった大川添(1)遺跡全ての調査を終了した

## 2 整理・報告書作成作業の経過

(平成21年度)

- 11月上旬～ 写真類の整理作業、図面類の整理作業、遺物の洗浄・注記作業を行った。  
12月中旬 炭化物のサンプル等を整理して、株式会社加速器分析研究所へ理化学的分析を委託した。  
(平成22年度)  
4月上旬～ 遺物は洗浄・注記作業が終了した遺構・地区から、順次接合・復元作業を進めた。併せて、遺構の検討・整理作業を開始した。また、遺構図面の修正作業も開始した。  
5月上旬～ 遺物の接合・復元作業を集中的に行なった。この間に、土器・石器の報告書掲載遺物の選別作業を行なった。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表の作成を開始した。  
6月上旬～ 選別した報告書掲載遺物（土器）の実測・拓本等の図化作業を行なった。また、地形・地質の原稿依頼及びリン・カルシウム分析委託依頼を行なった。  
8月上旬～ 選別した報告書掲載遺物（石器）の実測作業を行なった。  
10月上旬～ 土壌サンプルのフローテーション・種実選別を行なった。選別した種実は、業者に同定委託した。  
11月中旬～ 22年度調査区（低位面）から出土した遺物の洗浄・注記を行い、順次接合・復元作業を進めた。併せて、遺構の整理作業（遺構図面の修正作業含む）を行なった。  
12月上旬～ 図化作業が完了した遺物のトレースを行なった。また、シルバーフォト・スタジオエイトに委託して、報告書掲載遺物の写真撮影を行なった。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。  
1月下旬～ 原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。  
3回の校正を経て、報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納をした。

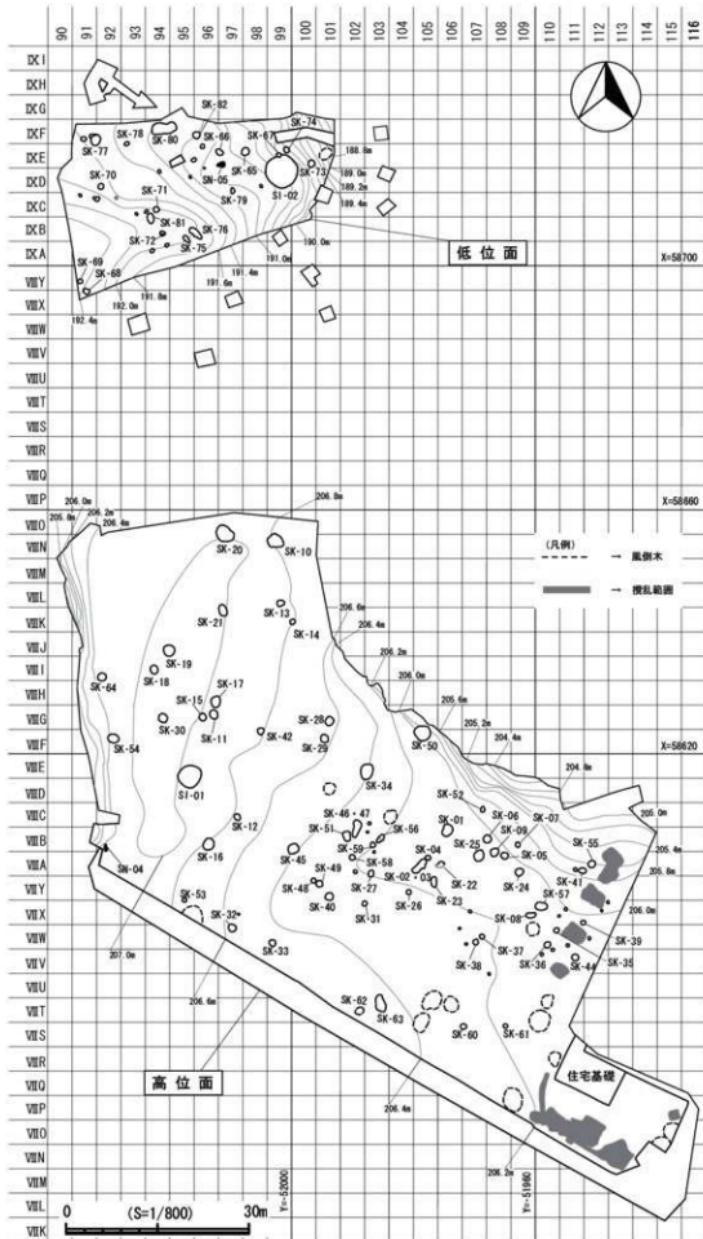


図4 遺構配置図

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 第1項 検出遺構

平成21・22年度の2年間の発掘調査で検出した遺構を報告するため、22年度に調査した遺構については発掘調査時と遺構番号を変更して、21年度からの通し番号で報告する。よって、22年度の遺構番号は下表の通り変更する。なお、基本的には、平成21年度に「高位面」、平成22年度に「低位面」の発掘調査を行っており（図4：遺構配置図参照）、本節の記載の際にも、便宜上「高位面・低位面」という表現を用いる。

表1 遺構番号変更表

旧遺構番号(発掘調査時)	新遺構番号(略号)	旧遺構番号(発掘調査時)	新遺構番号(略号)
低SI-01	第2号堅穴住居跡(SI-02)	低SK-18	第82号土坑(SK-82)
低SK-01	第65号土坑(SK-65)	低SN-02	第5号焼土跡(SN-05)
低SK-02	第66号土坑(SK-66)	低PIT-01	PIT-20
低SK-03	第67号土坑(SK-67)	低PIT-02	PIT-21
低SK-04	第68号土坑(SK-68)	低PIT-03	PIT-22
低SK-05	第69号土坑(SK-69)	低PIT-04	PIT-23
低SK-06	第70号土坑(SK-70)	低PIT-05	PIT-24
低SK-07	第71号土坑(SK-71)	低PIT-06	PIT-25
低SK-08	第72号土坑(SK-72)	低PIT-07	PIT-26
低SK-09	第73号土坑(SK-73)	低PIT-08	PIT-27
低SK-10	第74号土坑(SK-74)	低PIT-09	PIT-28
低SK-11	第75号土坑(SK-75)	低PIT-10	PIT-29
低SK-12	第76号土坑(SK-76)	低PIT-11	PIT-30
低SK-13	第77号土坑(SK-77)	低PIT-12	PIT-31
低SK-14	第78号土坑(SK-78)	低PIT-13	欠番
低SK-15	第79号土坑(SK-79)	低PIT-14	PIT-32
低SK-16	第80号土坑(SK-80)	低PIT-15	PIT-33
低SK-17	第81号土坑(SK-81)		

#### 1 堅穴住居跡

堅穴住居跡は、高位面から1軒、低位面から1軒、計2軒検出した。

第1号堅穴住居跡(SI-01：図5、写真2)

[位置・確認]高位面ⅧD-95グリッドに位置している。ほぼ平坦地のⅢ層下面で確認した。

[重複]遺構との重複はない。

[平面形・規模]平面形は、長軸3.9m、短軸3.6mのほぼ円形である。床面積は10.2m<sup>2</sup>である。

[壁・床面]焼土(炉)は出土遺物の位置などから、床面は確認面付近である可能性が高い。よって掘削した部分は、堅穴住居跡の堀り方部分であると考えられる。

[焼土(炉)]中央部からやや北東により、底面からやや浮いた状態の焼土の痕跡を確認した。近年の耕作により、本遺構自体が床面近くまで壊されていることから、この焼土も攪拌されている可能性が高い。

[ピット]確認されなかった。

[堆積土]2層に分層した。近年の耕作により、遺構の上半部は壊されている可能性が高く、底面(堀り方)近くの堆積土しか残存していない状態であると考えられる。第1層は暗褐色土中心で、第2層は黄褐色土中心である。

[出土遺物]第2層及び底面(堀り方)から遺物が出土した。土器は、第2層から縄文時代後期初頭の

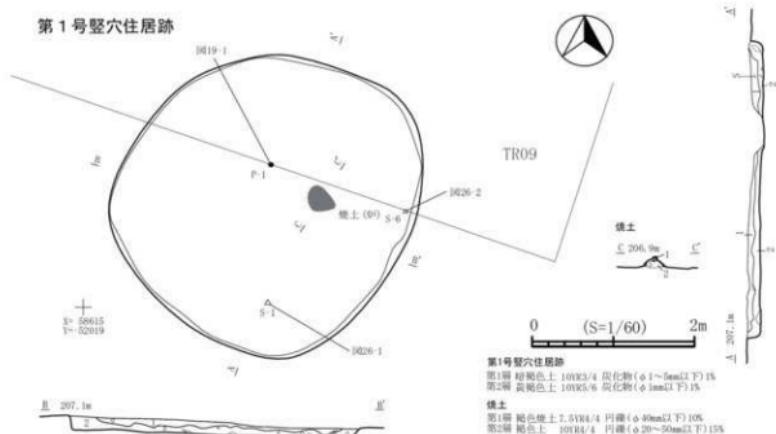


図5 第1号堅穴住居跡

鉢と思われる底部破片が出土した(図19-1)。これは、本遺構が検出された第9号トレンチ(TR-09:図18参照)から出土した一括資料と接合した。石器は、底面から石核(図26-2)、1層から微細剥離痕を有する剥片(図26-1)が出土した。

〔時期〕出土した遺物から、縦文時代後期初頭以前に屬する遺構であると考えられる。

### 第2号竪穴住居跡(SI-02:図6、写真3)

[位置・確認] 低位面IX D-99~100、IX E-99~100 グリッドに位置している。北東方向に緩やかに傾斜するⅢ層下面で確認した。

〔重複〕第67号土坑と重複し、これより新1-3。

〔平面形・規模〕平面形は、長軸5.5m、短軸5.2mのほぼ円形である。床面積は19.3m<sup>2</sup>である。

【壁・床面】地形により壁高には差があり、南西側が約64cm、北東側が約20cmである。床面はほぼ平坦で全体的に硬化しており、IV層をそのまま床にしている。

[炉] ほぼ中央部から楕円形の焼土跡を検出した。規模は、長軸49cm、短軸44cm、厚さ約8cmである。また、焼土跡の周囲にはやや広めの楕円形の掘方を確認した。規模は、長軸118cm、短軸105cm、深さ約20cmである。この掘方は、焼土より約25~45cm幅広く掘られていることや、掘方底面に凹凸が見られること、竪穴住居跡床面や周囲に大きめの礫が散在していること(S-2他)から、もともとは石窯炉であり、炉石が抜き取られた可能性がある。

[ピット]床面で20基のピットを検出した。配置や規模からすると、主柱穴はPit5・6の2基と考えられる。Pit12・14・15・16・17は壁柱穴の可能性が高い。南西壁付近のみで検出され、他の壁付近では検出できなかった。Pit1・2・4・8は、台形状に組まれる可能性がある(第6章第1節参照)。

## 第2号竪穴住居跡

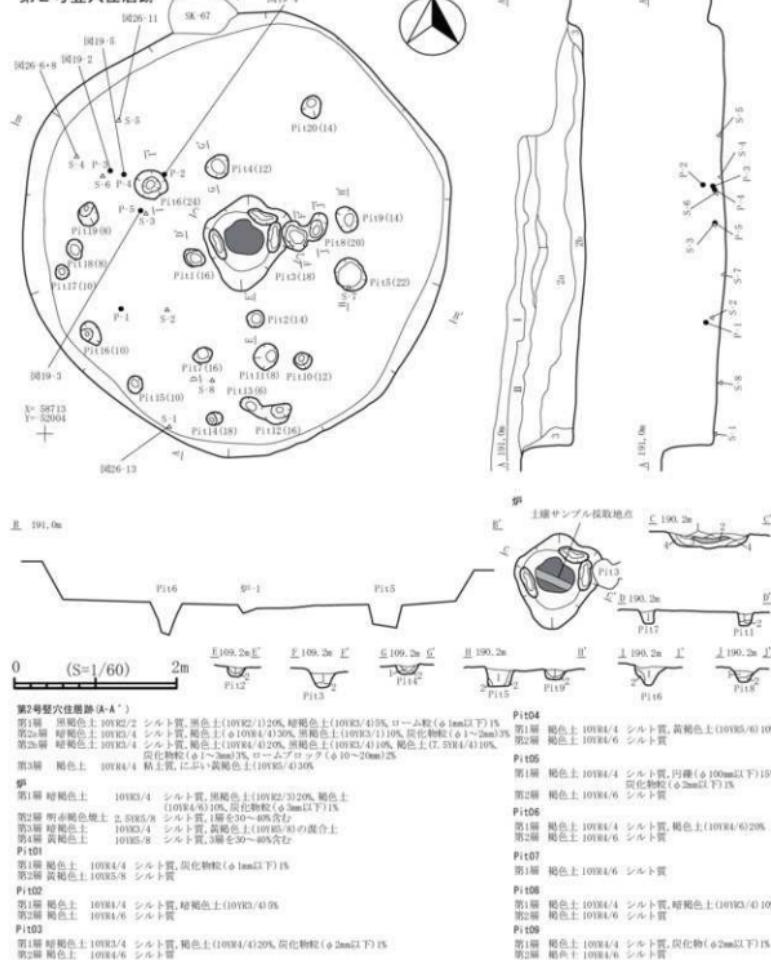


図6 第2号竪穴住居跡

【堆積土】3層に分層した。第1～2層は黒・暗褐色土である。第2層は含有物により第2a・2b層に細分した。いずれの層からも遺物が多く出土している。第3層は褐色土で、壁の崩落土を中心とした自然堆積土であると考えられる。

〔出土遺物〕堆積土(覆土)及び床面付近から縄文時代の遺物が出土した。土器は91点出土した。

堆積土上層から出土した縄文時代後期後葉の注口土器と、第2b層から出土した破片(P-3)が接合した(図19-2)。その他、注口土器破片(図19-16)や無文で同一個体と思われる深鉢破片(図19-3・4・5・6)が出土した。石器は、36点出土した。内訳は、削器10点、石匙3点、二次加工剥片6点、微細剥離痕のある剥片7点、石核5点、くさび形石器・石錐・石鎌がそれぞれ1点、敲き石2点で、その内の15点を図示した。Pit5からは石鎌(図26-14)、石匙(図26-15)、敲磨器類2点(図26-16・17)が出土した。

[その他]堆積土観察用ベルト第2b層及び炉第1層から土壤を採取し、水洗選別して確認された炭化物が種実かどうか同定分析したが、炭化種実は得られなかった(第5章第2節参照)。

[時期]出土した遺物から、縄文時代後期後葉以前に帰属する遺構であると考えられる。

## 2 土坑

土坑は、高位面から64基、低位面から19基、計83基検出された。遺構の略号は( )内に記し、土坑と断定できずに削除したり、他の遺構に変更したりした遺構番号は欠番扱いとした。なお、土坑の位置・平面形・規模・断面形・底面などの基礎データについては、表2にまとめ、ここでは土坑の形態による分類を行い、その分類毎に記述することとする。分類は、平面形と断面形の組み合わせによって行うこととする。分類は以下の通りである。

平面形	A類：円形 底面形の長径：短径が10:10~7の範囲内で、極めて円形に近いもの
	B類：楕円形 底面形の長径：短径が10:7未満で、円形を長伸したような形状のもの
	C類：不整形 形状が円形から崩れているものや、重複等で全体形がはっきりしないもの
断面形	I類：フラスコ形 開口部より底面の最大形が大きい、フラスコ状・袋状・台形状のもの (開口部崩落により、箱状の形狀になったと考えられるものも含める)
	II類：深箱形 底面から開口部に向かって壁がほぼ垂直に立ち上がり、底径：深さが10:4以上のもの
	III類：浅箱形 底面から開口部に向かって壁がほぼ垂直に立ち上がり、底径：深さが10:4未満のもの
	IV類：不整形 I~III類に含まれない不整形のものや、重複等で全体形がはっきりしないもの

上記した分類を組み合わせると、本遺跡で検出された土坑は10種類ということになる。

A類-A I類・A II類・A III類・A IV類

B類-B II類・B III類・B IV類

C類-C II類・C III類・C IV類

また、分類した土坑を数量的な観点で見てみると、平面形では、A類が55基と一番多く、B類・C類はそれぞれ14基である。断面形では、III類が44基と一番多く、次いでII類22基、IV類が11基、I類が6基である。

なお、本節の記載は、土坑の分類順に行うこととし、検出状況・重複・規模・堆積状況・その他特徴的な事項を中心にまとめることとする。出土遺物・帰属時期等の記載については、表2にまとめることとする。また、遺構・遺物図版は、それぞれ遺構番号順にまとめて掲載している。

### A類 円形

A類に分類された土坑は55基であり、高位面から45基、低位面から10基検出した。以下、断面形の形態で4種類に細分した。

#### A I類(円形-フラスコ形)

高位面から第1a・5・30・50・54号土坑の5基、低位面から第77号土坑の1基、計6基が検出された。

[検出状況]調査区全体にわたって検出されているが、調査区東西の縁辺部に位置するものが多い。確認面は、基本層序第Ⅲ層下面から第Ⅳ層上面である。

[重複]第1a号土坑と第1b号土坑(C III類)が重複しており、第1a号土坑の方が新しい。

[規模]開口部は、全て崩落していると思われ、開口部の規模は不明である。底面の規模は、最大径が120~160cmの範囲内に収まるタイプのものであるが、第50号土坑だけは、最大径が206cmと大きめである。深さは約40~90cmの範囲に収まる。

[堆積状況]ほとんどが人為的に埋め戻されたような状況である。なお、ほとんどの遺構上半部は、近年の耕作により壊されている可能性があるため、記録できた堆積土は、遺構の下半部である可能性が高い。

[その他]第30号土坑の底面近くからは、直径20cm程度の円礫が底面全体にわたって出土している。自然に混入したものか、意図的に入れられたものは不明であるが、他の遺構には見られない状況であった。第5号土坑堆積土上層から出土した炭化材の炭素年代測定を行った結果、 $1\sigma$  1219BC-1191BC(23.1%)、 $2\sigma$  1269BC-1123BC(95.4%)を示した(第5章第1節参照)。

#### A II類(円形-深箱形)

高位面から第6・7・9・12・14・15・26・29・32・38・41・52・53・55号土坑の14基、低位面から第69・76a・78・82号土坑の4基、計18基が検出された。

[検出状況]調査区全体にわたって検出されているが、調査区高位面東側に位置するものが多い。確認面は、基本層序第Ⅲ層下面から第Ⅳ層上面がほとんどであるが、基本層序V層(礫ローム層)の範囲内から検出された土坑が2基ある(第14・15号土坑)。

[重複]第76a号土坑と第76b号土坑(B II類)が重複しており、第76a号土坑の方が古い。

[規模]底面の規模は、直径40~90cm程度であるが、第32号土坑だけは、最大径が100cmを超えていて大きめである。深さは約20~50cm程度であり、第12・52・53・69・78号土坑はピット状(柱穴状)である。

[堆積状況]第6・7・14・15・69号土坑は自然堆積の様相であるが、その他はほとんどが人為的に埋め戻されたような状況である。なお、ほとんどの遺構上半部は、近年の耕作により壊されている可能性が高い。

[その他]第32号土坑第1層から出土した炭化材の炭素年代測定を行った結果、 $1\sigma$  639BC-593BC(27.7%)、 $2\sigma$  646BC-550BC(47.0%)を示した(第5章第1節参照)。

#### A III類(円形-浅箱形)

高位面から第4・11・16・18・19・24・25・28・31・33・34・35・36・37・40・42・48・49・58・59・60・61・62・64号土坑の24基、低位面から第65・71・74号土坑の3基、計27基が検出された。

[検出状況]調査区全体にわたって検出されているが、調査区高位面中央部に位置するものが多い。確認面は、基本層序第Ⅲ層下面から第Ⅳ層上面がほとんどであるが、基本層序V層(礫ローム層)の範

開内から検出された土坑が3基ある(第11・18・19号土坑)。

[規模]底面の規模は、底面径が100cm以下のタイプ、100cmから200cmの範囲内のタイプ、200cmを超えるタイプの3種類に大きく分けられる。深さは約10~40cmの範囲内に収まり、第11・18・24・25・34・49・71号土坑は、浅い皿状の断面形である。

[堆積状況]第28・42・58・61・62号土坑は人為的に埋め戻されたような状況であるが、その他はほとんどが自然堆積的様相である。第11・18・65号土坑では、炭化物層が確認される。

[その他]第11号土坑第1層(炭化物層)から出土した炭化材の炭素年代測定を行った結果、 $1\sigma$  1777 AD~1798 AD (27.5%)、 $2\sigma$  1761 AD~1804 AD (42.5%)を示した(第5章第1節参照)。第18号土坑は、第11号土坑と形状や堆積土が似ていることから、これらの土坑は、17世紀後半以降の遺構である可能性が高い。また、第33号土坑から出土した土器片に付着した炭化物の炭素年代測定を行った結果、 $1\sigma$  1394 calBC~1370 calBC (25.8%)、 $2\sigma$  1411 calBC~1295 calBC (95.4%)を示した(第5章第1節参照)。

#### A IV類(円形-不整形)

高位面から第39・46号土坑の2基、低位面から第66・68号土坑の2基、計4基が検出された。

[検出状況]調査区全体にわたって検出されている。確認面は、基本層序第Ⅲ層下面から第Ⅳ層上面である。

[規模]底面の規模は、30~80cm程度である。第39・66・68号土坑はピット状(柱穴状)で、第46号土坑は、丸底状の断面形である。深さは20~60cmの範囲内である。

[堆積状況]第39号土坑以外は自然堆積的様相であるが、第39号土坑のみ人為的に埋め戻されたような状況である。

#### B類 楕円形

B類に分類された土坑は14基であり、高位面から10基、低位面から4基検出されている。以下、断面形の形態で3種類に細分した。なお、B I類に分類されるものはなかった。

#### B II類(楕円形-深箱形)

高位面から第8・47号土坑の2基、低位面から第76b号土坑の1基、計3基が検出された。

[検出状況]調査区高位面中央部から東側、低位面南側に位置する。確認面は、基本層序第Ⅲ層下面から第Ⅳ層上面である。

[重複]第76a号土坑(A II類)と第76b号土坑が重複しており、第76b号土坑の方が新しい。

[規模]底面の規模は、長軸径約100~150cm、短軸径約30~60cmである。深さは30~50cmの範囲内である。

[堆積状況]第47号土坑は自然堆積的様相であるが、その他はほとんどが人為的に埋め戻されたような状況である。

[その他]第8号土坑第1層から出土した炭化材の炭素年代測定を行った結果、 $1\sigma$  644BC~590BC (37.9%)、 $2\sigma$  651BC~543BC (61.5%)を示した(第5章第1節参照)。

#### B III類(楕円形-浅箱形)

高位面から第3・17・21・23・27・56・57・63号土坑の8基、低位面から第75・81号土坑の2基、計10基

が検出された。

[検出状況] 調査区高位面では中央部北側・中央部・南側の3箇所に分かれて検出され、低位面では、南側に集中して検出された。確認面は、基本層序第Ⅲ層下面から第Ⅳ層上面がほとんどであるが、基本層序V層(礫ローム層)の範囲内から検出された土坑が2基ある(第17・21号土坑)。

[重複] 第2号土坑(CⅣ類)と第3号土坑が重複しており、第3号土坑の方が古い。

[規模] 底面の規模は、底面径が100cm以下のタイプ、100cmから200cmの範囲内のタイプ、200cmを超えるタイプの3種類に大きく分けられる。第11・18・24・25・34・49・71号土坑は、皿状の断面形である。

[堆積状況] 第28・42・58・61・62号土坑は人為的に埋め戻されたような状況であるが、その他はほとんどが自然堆積的様相である。第11・18・65号土坑は、炭化物層が確認される。

[その他] 第57・81号土坑底面からピットが検出された。第57号土坑ピットは、底面中央部から南東側に位置し、開口部径約32cm、土坑底面からの深さ約34cmである。第81号土坑ピットは、底面中央部から西側に位置し、開口部長軸径約60cm、短軸径32cmの長円形を呈し、土坑底面からの深さ約10cmの浅いピットである。また、第63号土坑堆積土観察用ベルト第2層から土壤を採取し、水洗選別して確認された炭化種子を同定分析したところ、不明炭化種実の破片が1点確認された(第5章第2節参照)。

#### BⅣ類(橢円形-不整形)

低位面から第80号土坑1基が検出された。

[検出状況] 低位面調査区北端で検出された。確認面は、基本層序第Ⅲ層下面である。

[規模] 底面の規模は、長軸径250cmを超える大型な土坑である。深さは72cmである。

[堆積状況] 自然堆積的様相である。

### C類 不整形

C類に分類された土坑は14基であり、高位面から9基、低位面から5基検出されている。以下、断面形の形態で3種類に細分した。なお、CⅠ類に分類されるものはなかった。

#### CⅡ類(不整形-深箱形)

高位面から第10号土坑1基が検出された。

[検出状況] 調査区高位面北端に位置する。確認面は、基本層序第Ⅲ層下面である。

[規模] 底面の規模は、長軸径236cm、短軸径190cmと大型である。深さは32cmである。

[堆積状況] 自然堆積的様相である。堆積土第1・2層から遺物が出土している。

[その他] 底面中央部からやや大きめのピットが検出された。ピット開口部の規模は、長軸径144cm、短軸径81cmの長円形状で、土坑底面からの深さは約20cmである。特殊な構造である本土坑については、次の3つの分析を実施した。(1)放射性炭素年代測定-第2層から出土した炭化材の年代測定を行った結果、 $1\sigma$  2178BC-2143BC (40.0%)、 $2\sigma$  2234BC-2137BC (73.2%)を示した(第5章第1節参照)。(2)種実同定-本土坑確認面及び底面、付属ピット底面から土壤を採取し、水洗選別して確認された種実(炭化種実)を同定分析したところ、同定不能炭化種実が1点確認された(第5章第2節参照)。(3)リン・カルシウム分析-付属ピット底面から土壤を採取し、リン・カルシウムの含有量の分析を行ったところ、リン・カルシウム成分が多く含まれる箇所は見出せなかつたとの結果が得られた(第5

章第3節参照)。

#### C III類(不整形-浅箱形)

高位面から第1・b・20・22・44・45・51号土坑の6基、低位面から第73号土坑の1基、計7基が検出された。

[検出状況] 調査区高位面では北側・中央部・南側の3箇所で検出され、中央部に集中する。低位面では東側で検出された。確認面は、基本層序第III層下面から第IV層上面がほとんどであるが、基本層序V層(疊ローム層)の範囲内から検出された土坑が1基ある(第20号土坑)。

[規模] 底面の規模は、底面径が70~170cmに収まるものがほとんどで、50cm以下の小さいタイプ(第22号土坑)、200cm以上の大きいタイプ(第20号土坑)がある。深さは10~40cmである。

[堆積状況] 第44号土坑は人為的に埋め戻されたような状況であるが、その他はほとんどが自然堆積的な様相である。

[その他] 第20号土坑は、底面中央部からやや大きめのピットが検出された。断面形の規模により違う分類となつたが、第10号土坑(C II類)と類似する点が多い。ピット開口部の規模は、長軸径100cm、短軸径76cmのほぼ円形、土坑底面からの深さは約20cmである。特殊な構造である本土坑については、次の2つの分析を実施した。(1)種実同定-本土坑確認面及び底面から土壤を採取し、水洗選別して確認された炭化物を同定分析したが、種実は確認されなかつた(第5章第2節参照)。(2)リン・カルシウム分析-付属ピット底面から土壤を採取し、リン・カルシウムの含有量の分析を行つたところ、リン・カルシウム成分が多く含まれる箇所は見出せなかつたとの結果が得られた(第5章第3節参照)。

#### C IV類(不整形-不整形)

高位面から第2・13号土坑の2基、低位面から第67・70・72・79号土坑の4基、計6基が検出された。

[検出状況] 調査区高位面では中央部・北側の2箇所で検出され、低位面では全体にわたって検出された。確認面は、基本層序第III層下面から第IV層上面がほとんどであるが、基本層序V層(疊ローム層)の範囲内から検出された土坑が1基ある(第13号土坑)。

[重複] 第2号土坑と第3号土坑(B III類)が重複しており、第2号土坑の方が新しい。また、第67号土坑と第2号竪穴住居跡が重複しており、第67号土坑の方が古い。

[規模] 底面の規模は、直径が17~78cmの範囲内に収まり、深さは28~40cmである。第70・79号土坑はピット状(柱穴状)である。

[堆積状況] 第2号土坑は人為的に埋め戻されたような状況であるが、その他はほとんどが自然堆積的な様相である。

[その他] 第2号土坑第1層から出土した炭化材の炭素年代測定を行つた結果、 $1\sigma$  927BC~894BC(48.1%)、 $2\sigma$  941BC~839BC(87.3%)を示した(第5章第1節参照)。

表2 土坑属性表

造営名	分類	計測値			遺物出土状況			造営	造物	写真	新旧関係	帰属時期
		横口部(cm)	奥面部(cm)	深さ(cm)	グリッド	土器	石器					
第1号土坑 AⅠ	152×114	124×114	52	Ⅸ-B-106				国7	—	写真4	SK-01bより新	
第1号土坑 CⅡ	168×150	170×136	10	Ⅸ-B-106				国7	—	—	SK-01aより古	
第2号土坑 CⅣ	97×73	69×34	31	Ⅸ-A-105				国7	国27	—	SK-03より新	縄文
第3号土坑 CⅤ	23×97	23×69	48	Ⅸ-A-105				国7	—	—	SK-02より古	
第4号土坑 AⅥ	86×82	66×54	20	Ⅸ-A-105				国7	—	—		
第5号土坑 AⅠ	116×112	136×108	42	Ⅸ-A-108	■土から後期後業他の破片 56点			国7	国19	写真4	—	縄文後期後業
第6号土坑 AⅢ	130×124	70×46	26	Ⅸ-E-108				国7	—	—		
第7号土坑 AⅢ	80×72	46×36	24	Ⅸ-E-109	■土上層から後期後業他の 破片6点			国7	国19	写真5	—	縄文後期後業
第8号土坑 EⅡ	170×78	198×48	39	Ⅸ-X-109				国7	—	写真10		
第9号土坑 EⅢ	148×121	90×86	59	Ⅸ-A-108	■土から土内式の破片 20点			国7	国19-22	—	—	縄文後期後業
第10号土坑 CⅡ	280×192	236×196	24	Ⅸ-N-99	■土上から土内式の破片 5点			国7	19-20-22	写真12	—	縄文後期後業
第11号土坑 AⅢ	154×130	134×108	19	Ⅸ-G-96				国8	—	—		
第12号土坑 AⅢ	107×95	54×44	36	Ⅸ-C-97	■土から土内式・晚期の 破片			国8	国20	写真5	—	縄文晚期
第13号土坑 CⅣ	121×101	78×46	31	Ⅸ-L-99				国8	—	写真13	—	
第14号土坑 AⅢ	85×84	64×62	36	Ⅸ-K-100				国8	—	—		
第15号土坑 BⅢ	127×109	94×88	49	Ⅸ-G-96				国8	—	写真5	—	
第16号土坑 AⅢ	200×172	180×144	36	Ⅸ-B-96	■土から上層式の破片 青土から石器			国8	国20	写真7	—	縄文中期中葉
第17号土坑 BⅢ	187×147	148×88	33	Ⅸ-H-96				国8	—	—	—	縄文
第18号土坑 AⅢ	142×120	114×94	23	Ⅸ-L-94				国8	—	写真10	—	
第19号土坑 AⅢ	187×179	134×122	37	Ⅸ-L-94				国8	—	写真7	—	
第20号土坑 CⅢ	368×228	218×160	36	Ⅸ-N-97				国8	—	写真12	—	
第21号土坑 BⅢ	209×160	136×94	32	Ⅸ-K-97	■土から土内式の破片 青土から石器			国9	国20	写真10	—	縄文後期前葉
第22号土坑 CⅢ	110×98	34×30	24	Ⅸ-A-106				国9	—	—		
第23号土坑 CⅢ	120×108	105×80	24	Ⅸ-L-105				国9	—	—		
第24号土坑 AⅢ	198×160	164×116	24	Ⅸ-A-107				国9	—	—		
第25号土坑 AⅢ	198×160	164×116	24	Ⅸ-A-107				国9	—	—		
第26号土坑 AⅢ	84×86	46×44	38	Ⅸ-Y-104				国9	—	—		
第27号土坑 BⅢ	118×88	102×54	18	Ⅸ-A-103				国9	—	—		
第28号土坑 AⅢ	150×130	108×68	22	Ⅸ-G-101				国9	—	—		
第29号土坑 AⅢ	144×138	94×82	40	Ⅸ-F-101				国9	—	—		
第30号土坑 AⅠ	153×140	136×124	91	Ⅸ-G-94				国9	—	写真4	—	
第31号土坑 AⅢ	86×26	36×30	20	Ⅸ-X-102				国9	—	—		
第32号土坑 AⅢ	131×123	118×110	43	Ⅸ-W-92				国10	国22	写真5	—	縄文
第33号土坑 AⅢ	116×100	80×68	28	Ⅸ-W-99	■土から后期後業他の 破片77点			国10	国20-22	写真7	—	縄文後期前葉
第34号土坑 AⅢ	264×202	226×166	24	Ⅸ-D-103				国10	—	—		
第35号土坑 CⅢ	92×84	58×56	20	Ⅸ-W-110				国10	—	—		
第36号土坑 AⅢ	84×80	60×56	20	Ⅸ-W-109				国10	—	—		
第37号土坑 AⅢ	84×86	68×52	20	Ⅸ-W-107				国10	—	写真7	—	
第38号土坑 AⅢ	98×90	65×60	26	Ⅸ-W-107				国10	—	写真6	—	
第39号土坑 AⅢ	98×20	40×30	24	Ⅸ-X-111				国10	—	写真9	—	
第40号土坑 AⅢ	136×130	102×82	29	Ⅸ-Y-101				国10	—	写真8	—	縄文
第41号土坑 AⅢ	126×92	76×60	30	Ⅸ-A-111	■土から二次加工の 破片4点			国10	国20	—	—	縄文晚期前葉
第42号土坑 AⅢ	114×108	78×66	18	Ⅸ-P-98				国10	—	写真8	—	
<b>第43号土坑 大量</b>												
第43号土坑 CⅢ	114×110	78×70	18	Ⅸ-V-111				国11	—	—		
第45号土坑 CⅢ	160×160	152×118	22	Ⅸ-B-100				国11	国27	写真12	—	縄文
第46号土坑 BⅢ	292×138	84×62	38	Ⅸ-K-102				国11	—	写真9	—	
第47号土坑 CⅢ	292×96	98×56	54	Ⅸ-H-102				国11	—	—		
第48号土坑 AⅢ	82×79	50×46	16	Ⅸ-Y-100				国11	—	—		
第49号土坑 AⅢ	116×113	76×64	14	Ⅸ-Y-101				国11	—	—		
第50号土坑 AⅠ	233×236	206×174	60	Ⅸ-P-105	■土から後期後業他の 破片13点			国11	—	—		
第51号土坑 CⅢ	166×110	138×98	20	Ⅸ-B-102				国11	—	写真12	—	縄文
第52号土坑 AⅢ	98×66	64×44	27	Ⅸ-C-102				国11	—	—		
第53号土坑 AⅢ	72×70	44×32	26	Ⅸ-X-105	■土から後期後業他の土 破片5点			国11	国20	写真6	—	縄文後期前葉
第54号土坑 AⅠ	182×150	162×110	94	Ⅸ-F-92	■土上層から後期後業他の 破片8点			国11	国20-22	—	—	縄文後期前葉
第55号土坑 AⅢ	124×120	70×59	28	Ⅸ-A-112				国12	—	—		
第56号土坑 AⅢ	130×144	72×59	22	Ⅸ-E-101				国12	—	—		
第57号土坑 AⅢ	200×124	164×130	17	Ⅸ-X-100				国12	—	—		
第58号土坑 AⅢ	100×96	66×58	22	Ⅸ-A-102				国12	—	—		
第59号土坑 AⅢ	90×86	58×58	22	Ⅸ-B-103				国12	—	—		
第60号土坑 AⅢ	104×94	84×70	18	Ⅸ-S-107				国12	—	—		
第61号土坑 AⅢ	76×70	34×24	18	Ⅸ-S-108				国12	—	—		
第62号土坑 AⅢ	152×118	96×66	30	Ⅸ-T-102				国12	—	—		
第63号土坑 BⅢ	284×164	230×100	26	Ⅸ-T-103				国12	—	写真11	—	縄文
第64号土坑 AⅢ	124×120	70×59	24	Ⅸ-E-101				国12	—	写真8	—	
第65号土坑 AⅢ	134×124	110×109	25	Ⅸ-E-98	■土から後期後業他の 破片6点			国12	国20	—	—	縄文後期前葉
第66号土坑 AⅢ	128×86	41×29	60	Ⅸ-B-102	■土上層から後期後業他の 破片2点			国12	国20	写真9	—	縄文後期前葉
第67号土坑 AⅢ	78×70	66×37	27	Ⅸ-E-99				国12	—	写真13	S-142より古	
第68号土坑 AⅢ	108×74	37×28	41	Ⅸ-X-91				国12	—	—		
第69号土坑 AⅢ	75×77	50×39	19	Ⅸ-Y-91				国12	—	写真6	—	
第70号土坑 CⅢ	98×86	41×21	36	Ⅸ-D-92				国13	—	—		
第71号土坑 AⅢ	96×83	70×78	19	Ⅸ-E-93				国13	—	—		
第72号土坑 AⅢ	124×109	103×86	28	Ⅸ-E-94				国13	—	写真13	—	
第73号土坑 AⅢ	183×148	135×111	29	Ⅸ-F-91	■土から後期後業他の 破片			国13	—	写真4	—	縄文後期前葉
第74号土坑 AⅢ	89×57	65×48	22	Ⅸ-E-93				国13	—	—		
第75号土坑 CⅢ	99×112	83×118	41	Ⅸ-E-94				国13	—	写真11	—	
第76号土坑 AⅢ	145×52	129×44	24	Ⅸ-B-95				国13	—	—		
第77号土坑 AⅢ	246×90	66×58	41	Ⅸ-B-95				国13	—	写真10	—	
第78号土坑 AⅢ	146×90	154×52	48	Ⅸ-B-96				国13	—	写真4	—	
第79号土坑 AⅢ	149×105	136×89	57	Ⅸ-B-94				国13	—	—		
第80号土坑 AⅢ	117×112	89×71	43	Ⅸ-F-96				国13	—	写真6	—	

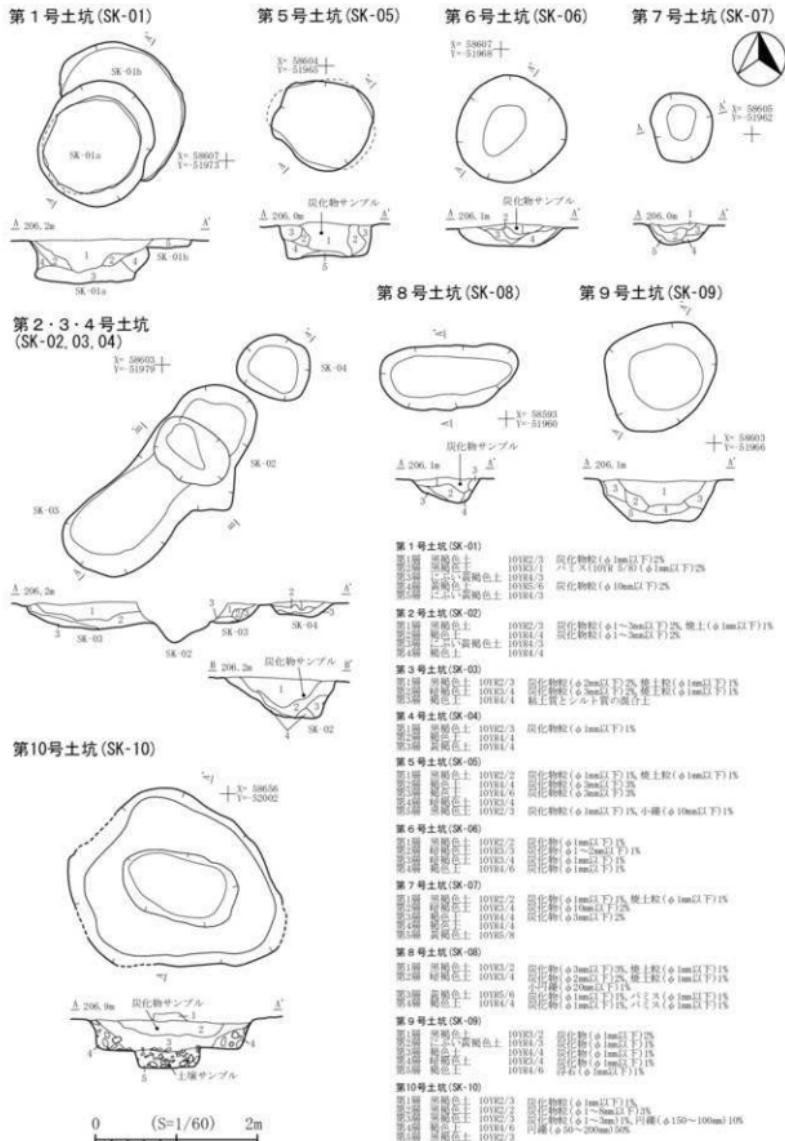


図7 土坑(1)

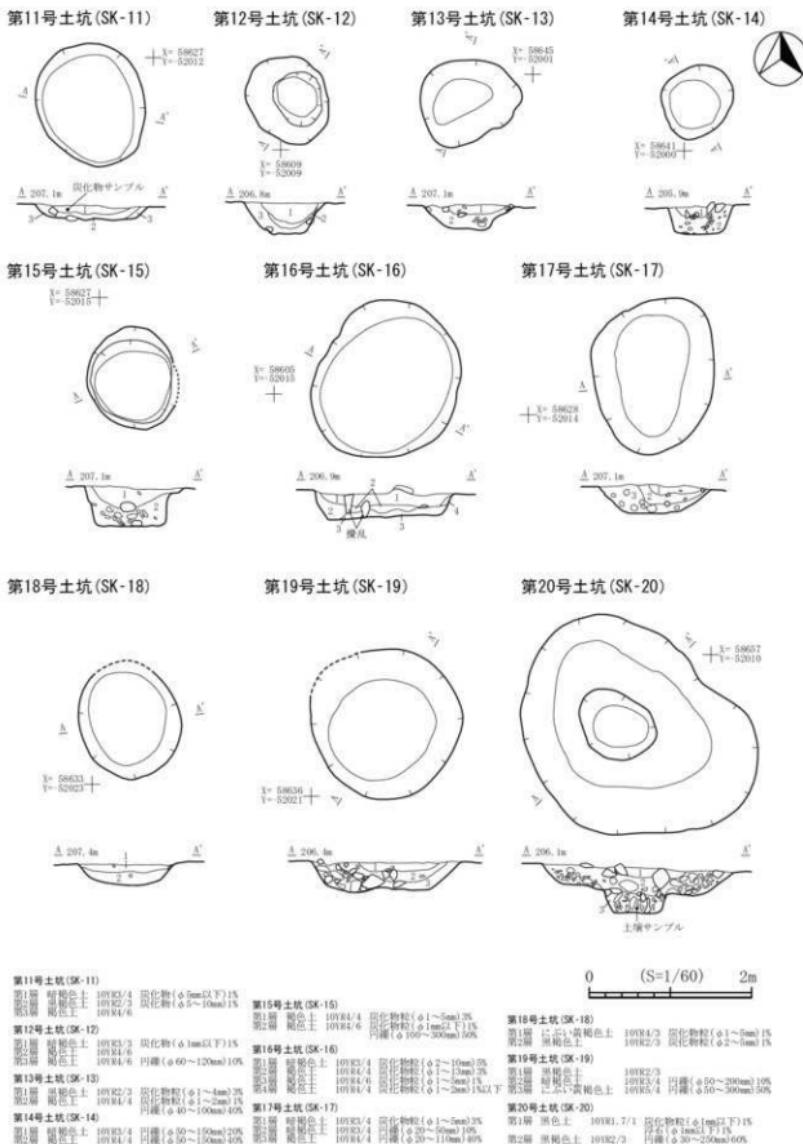


図8 土坑(2)

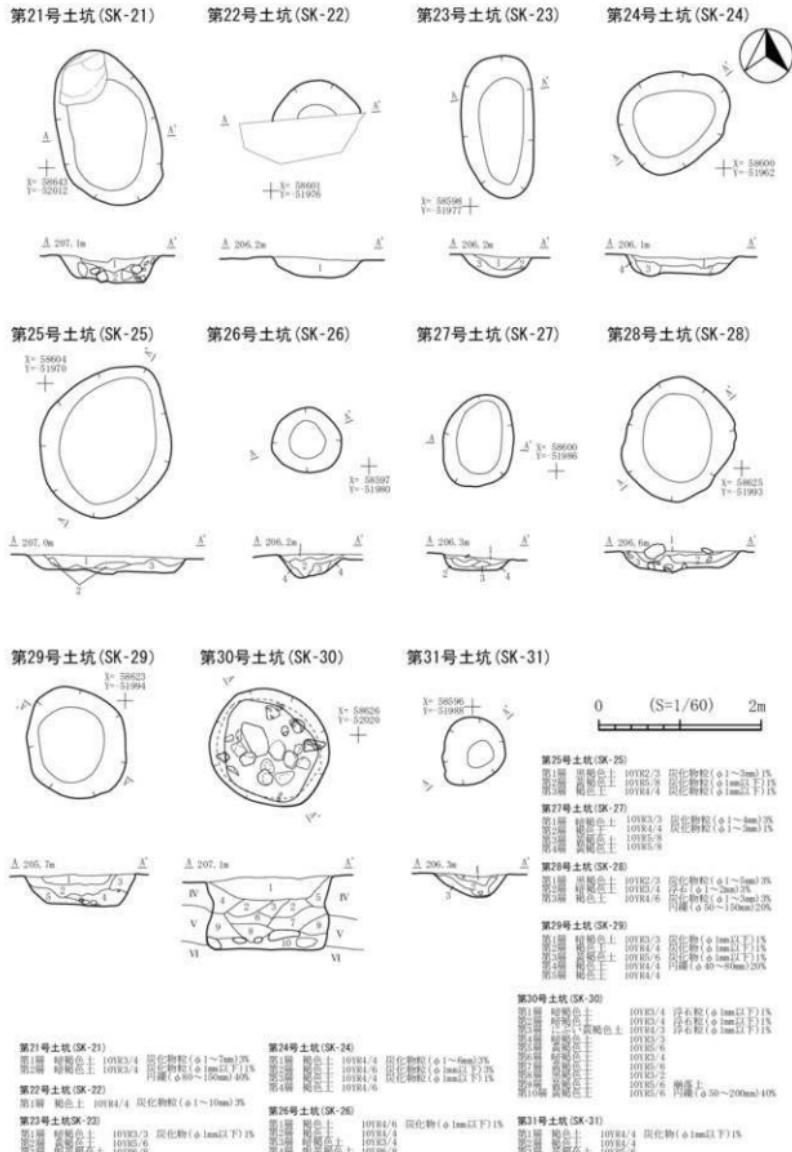


图9 土坑(3)

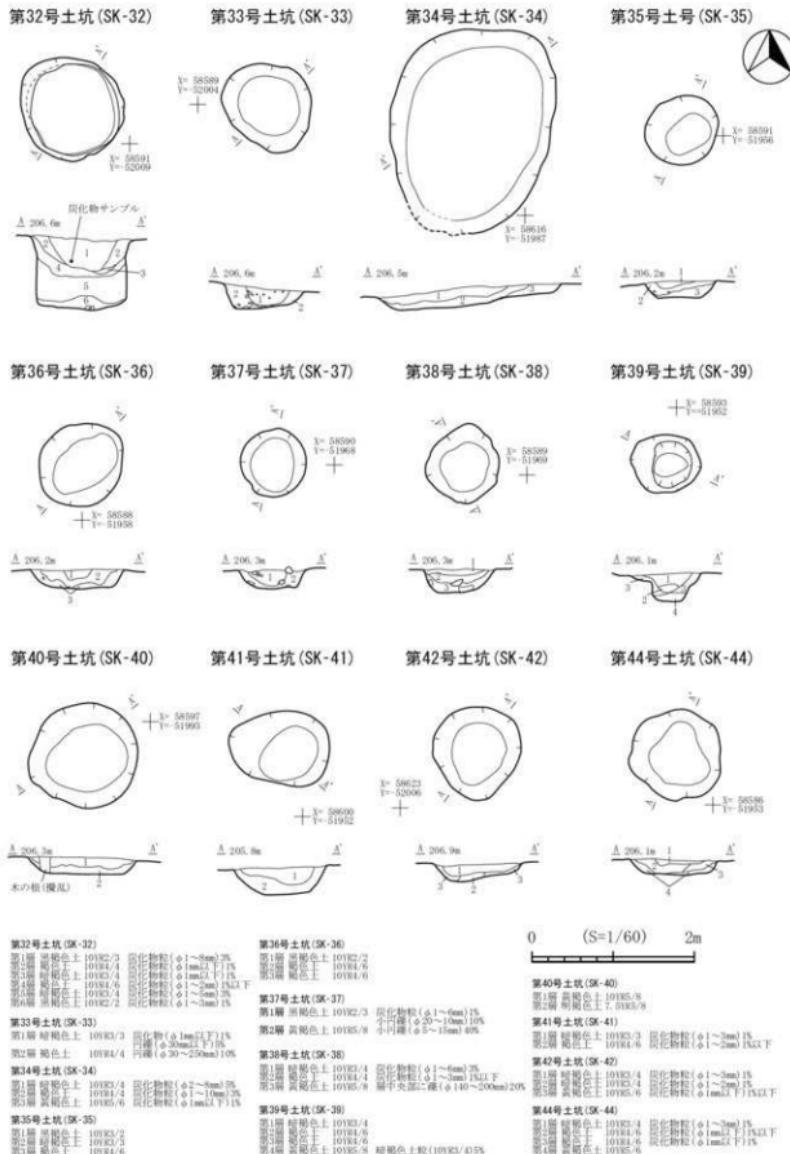


図10 土坑(4)

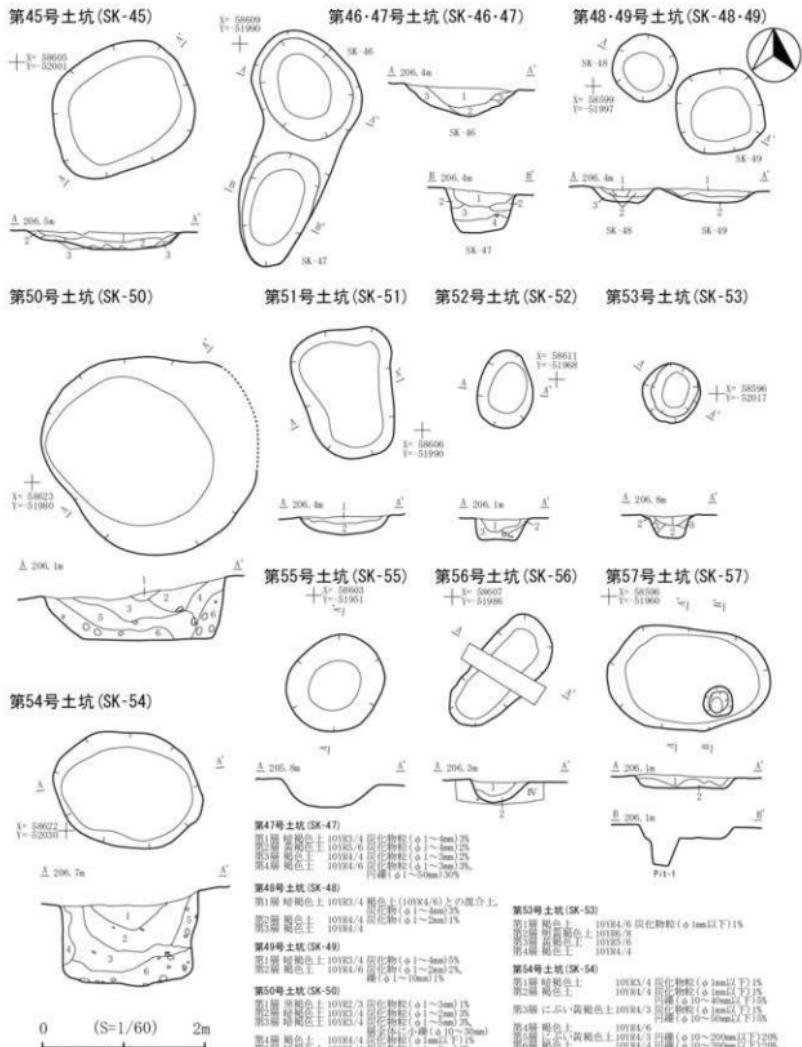


图11 土坑(5)

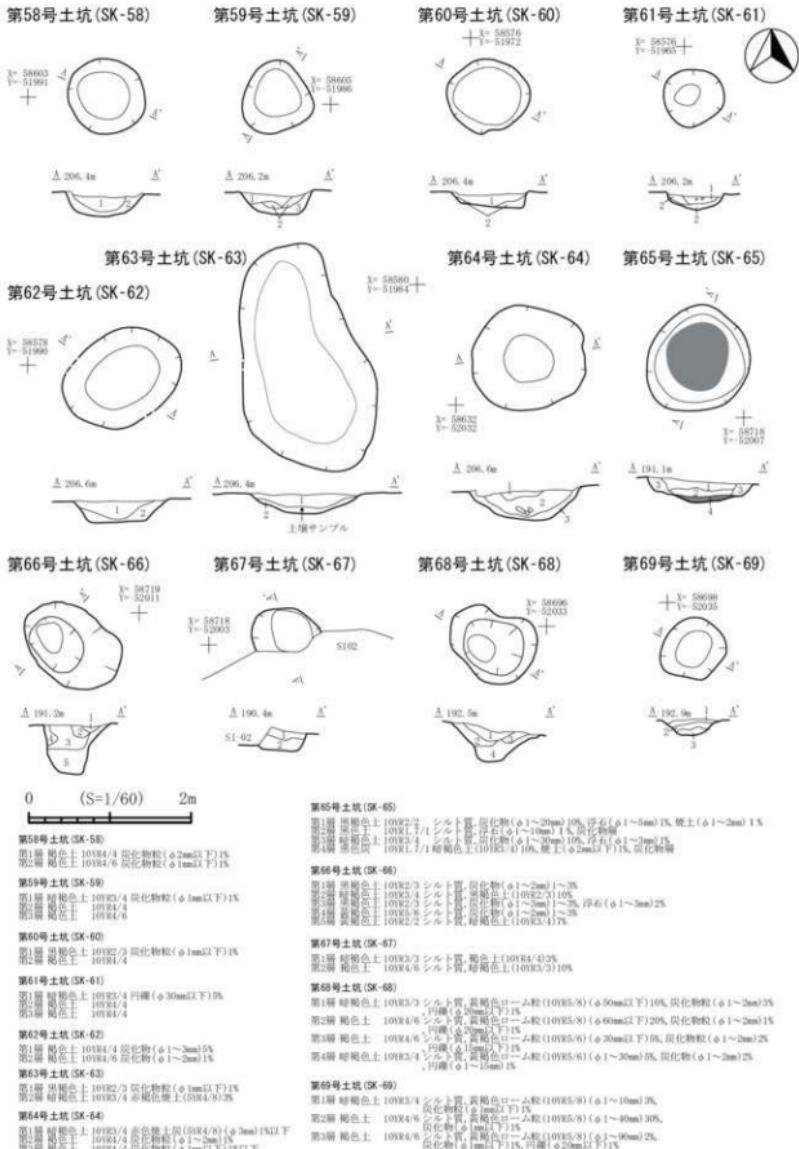


図12 土坑(6)



### 3 その他の遺構

その他の遺構として、ピット・焼土遺構が検出された。ピットは、高位面で18基、低位面で14基、計32基検出された。焼土遺構は、高位面・低位面それぞれ1基検出された。その他の遺構の分布が広範囲にわたるため、便宜上4つのブロック(図14)に分けて記述していくこととする。

#### ピット(図15～17)

ピットは第1・2・3ブロックに含まれる。高位面では、中央部からやや東側の第1ブロック、ほぼ中央の第2ブロック、低位面の第3ブロックにそれぞれピットが集中する。ブロック毎に詳細を記載していく。

#### 第1ブロック(図15)

高位面調査区東側ラインにピットが集中する。調査区東側の先にはもともとコンクリート工場があつたらしく、大きく削平されている。PIT01～04は、平面径が40～50cmでほぼ直線上に並ぶ。PIT05・06・17堆積土からは、縄文時代の土器片(図20-75・76)や石製品(図34-1)が出土している。堆積土は、黒褐色土や暗褐色土の単層のものがほとんどである。

#### 第2ブロック(図16)

第2ブロックの北東側に土坑群の間を縫うようにピットが集中する。PIT10・12は平面径が50～70cmとやや大きめである。PIT15は深さが50cmを超える深めのピットである。堆積土は、黒褐色土や暗褐色土の単層のものが

ほとんどである。

#### 第3ブロック(図17)

低位面全体にわたってピットが散在している。PIT20堆積土からは、縄文時代後期初頭の土器片が12点出土したうち1点を図示した(図20-55)。PIT23・24は重複しており、PIT23の方が古い。また、等間隔ではないが、PIT32・33・34が直線上に並ぶ。堆積土は、PIT20・21・22・25・26・29・30・31が複数

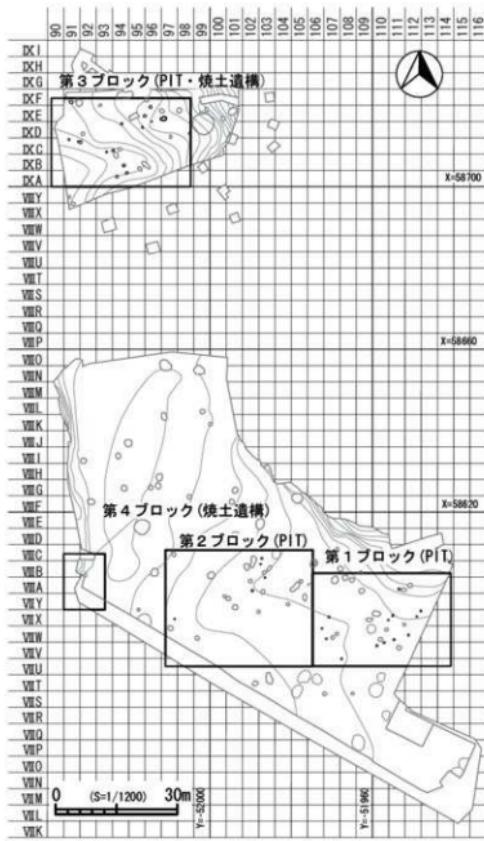


図14 ブロック図

表3 ピット属性表

遺構名	旧遺構名	調査区	グリット	平面径(cm)	深さ(cm)	備考
PIT01	PIT01	高位面	VII V-110	55 × 53	30	
PIT02	PIT02	高位面	VII V-110	57 × 49	28	
PIT03	PIT03	高位面	VII W-111	57 × 54	42	
PIT04	PIT04	高位面	VII W-112	52 × 46	13	
PIT05	PIT05	高位面	VII X-112	40 × 38	30	堆積土1層から後期後葉土器片
PIT06	PIT06	高位面	VII X-112	51 × 33	14	堆積土から円盤状石製品
PIT07	PIT07	高位面	VII A-111	70 × 54	20	
PIT08	PIT08	高位面	VII X-110	38 × 36	38	
PIT09	PIT09	高位面	VII X-111	56 × 50	41	
PIT10	PIT10	高位面	VII A-102	62 × 55	40	
PIT11	PIT11	高位面	VII A-103	42 × 38	29	
PIT12	PIT12	高位面	VII C-103	70 × 58	31	
PIT13	<b>坑PIT13→矢番</b>					
PIT14	PIT14	高位面	VII B-103	37 × 36	40	
PIT15	PIT15	高位面	VII X-97	38 × 35	58	
PIT16	PIT16	高位面	VII W-106	74 × 66	50	
PIT17	PIT17	高位面	VII W-107	40 × 39	53	堆積土から後期後葉他の土器片2点
PIT18	PIT18	高位面	VII U-108	43 × 38	35	
PIT19	PIT19	高位面	VII X-107	51 × 49	30	
PIT20	PIT20	低位面	IX F-91	101 × 84	44	堆積土から後期初頭他の土器片12点
PIT21	PIT21	低位面	IX D-98	60 × 43	40	
PIT22	PIT22	低位面	IX C-91	60 × 38	17	
PIT23	PIT23	低位面	IX C-91	49 × 45	29	PIT24より古い
PIT24	PIT24	低位面	IX C-92	80 × 56	30	PIT23より新しい
PIT25	PIT25	低位面	IX E-96	72 × 63	29	
PIT26	PIT26	低位面	IX A-94	73 × 66	30	
PIT27	PIT27	低位面	IX A-94	74 × 59	36	
PIT28	PIT28	低位面	IX D-94	93 × 53	29	
PIT29	PIT29	低位面	IX D-95	56 × 42	22	
PIT30	PIT30	低位面	IX D-96	33 × 29	18	
PIT31	PIT31	低位面	IX E-95	82 × 62	26	
-	<b>坑PIT13→矢番</b>					
PIT32	PIT32	低位面	IX C-93	53 × 43	42	
PIT33	PIT33	低位面	IX C-94	74 × 46	17	

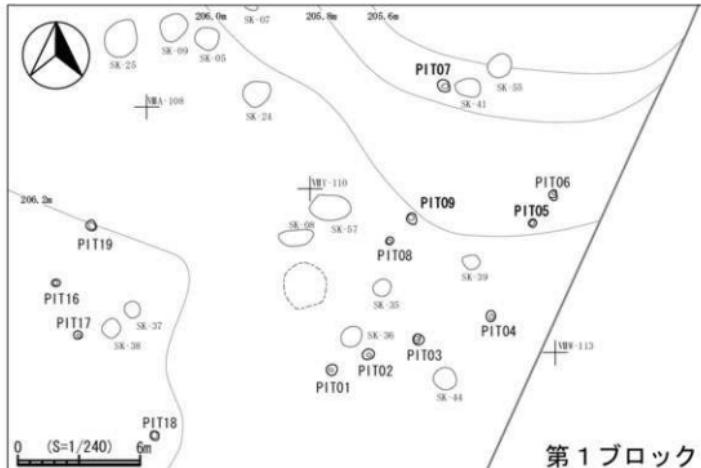


図15 第1ブロック図

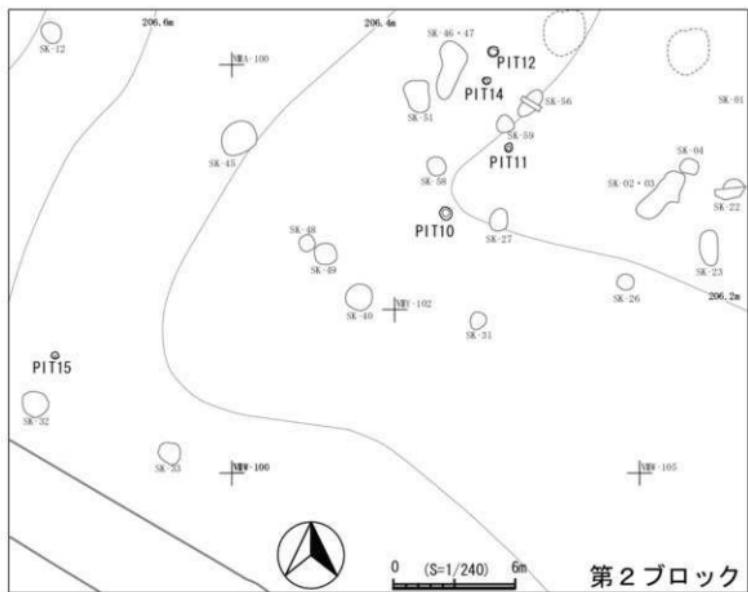


図16 第2ブロック図

に分層され、その他は黒・暗褐色土中心の単層である。

#### 焼土遺構(図17)

焼土遺構は、第3・4ブロックに含まれる。高位面では、調査区南西側の第4ブロック、低位面の第3ブロックにそれぞれ1基ずつ検出された。なお、高位面からは、調査時にSN-01～03が検出されたが欠番扱いとした。よって、ここでは第4・5号焼土遺構の2基について記載する。

#### 第3ブロック

高位面調査区南西端に、第4号焼土遺構(SN-04)を検出した。長さ30cm、幅14cm程度の不整形範囲で被熱している。基本土層IV層が被熱しており、被熱の深さは3cm程度である。周囲には遺物集中範囲(調査時は捨て場遺構)があり、同時期に使用されていた可能性がある。

#### 第4ブロック

第66号土坑のすぐ南側に、第5号焼土遺構(SN-05)を検出した。長さ35cm、幅18cm程度の不整形で、割と大きな範囲で被熱している。基本土層III層途中まで被熱しておりIV層には達していない。被熱の深さは3cm程度である。すぐ近くに大きめの礫が出土したが、焼土の周囲に掘り込みは確認されず、石開いをしていた可能性は低いものと考えられる。

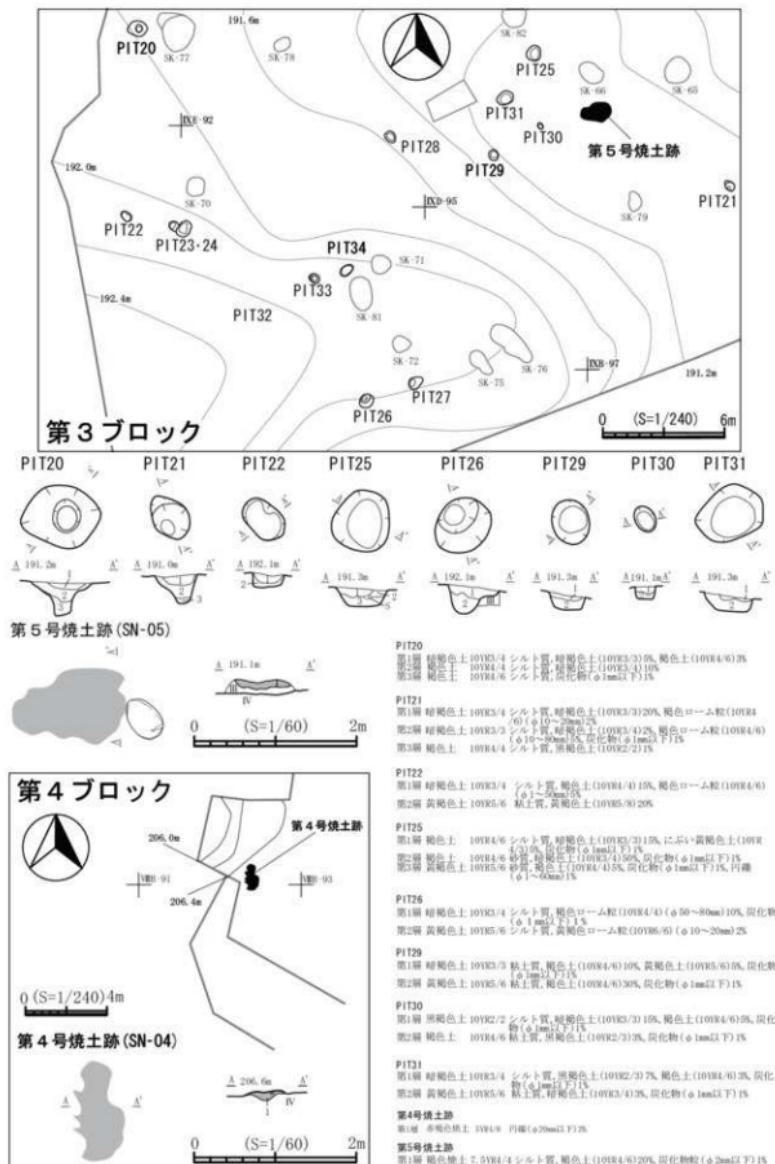


図17 第3・4ブロック図

## 第2項 出土遺物

平成21・22年度の発掘調査により出土した遺物を、土器・石器・その他の中の遺物を分けて報告する。文章は、それぞれの遺物について分類した順に記述し、図版は、遺構内・遺構外に分けて掲載するようにした。写真は、遺物の図版番号と同じ番号で示したが、全ての遺物について掲載しているわけではない。出土地点については、遺構内出土遺物は遺構番号で示し、遺構外出土遺物は、グリッドやトレンチ番号、遺物集中範囲などで出土地点を示した。なお、調査時において、「捨て場」として遺物を取り上げた範囲についても遺物集中範囲の一つとして報告することとする。

詳細については、巻末の遺物観察表にまとめた。トレンチ・遺物集中範囲の位置については、図18のトレンチ等配置図に示した。

### 1. 土器(図20~図25)

調査の結果、合計3,456点・総重量33,157 g の土器破片が出土し、その内訳は遺構内出土が合計307点・総重量2,471 g、第1層から第3層に



図18 トレンチ等配置図

至る包含層出土が合計3,149点・総重量30,157 gである。出土重量に基づく型式別の比率は、中期中葉の円筒上層d・e式(25.9%)、中期末葉の大木10式(15.6%)、後期後葉から末葉の十腰内V群土器(縫付土器第II段階~第IV段階)(15.9%)が高い割合を占める。多寡の変動を反復しながら変遷する経過が窺え(第6章第1節参照)、遺構には反映されない活動の形跡と時間的動態、遺跡規模の変動を間接的に提示する。以下に包含層を構成する時間的要素と型式学的特徴を提示する目的で細別編年を基軸に総括する。

**早稲田6類土器(図20~30)** 口唇部端部の形態が角頭状を呈し、胎土に纖維を混入する。内面は平滑なミガキによる器面調整が施され、上下の粘土帯の接合面が外傾する製作技法上の特徴と、器面が軟質な乾燥の度合で施文が実施された工程が看取される。同時に、末端還付の繩を層状施文する点に特

徵があり、早稲田6類土器C類への編年的位置付けが可能な資料として理解される。

**円筒下層c式**(図20-31・32) 文様要素に貝殻腹縁の外側施文による貝殻条痕が併用される特徴が異質である。31の胴部には単軸絡条体第1類の縱位施文を下地に縱位の貝殻条痕を、32の口頭部には横位の貝殻条痕を下地に単節LRの側面圧痕を横位に重複して施す。異なる性質の施文具による文様構成と施文の方向性が相関するあり方からは、貝殻条痕により繩の側面押圧と同質の文様効果を意図した表出手法として解釈することも可能である。

**円筒上層c式**(図20-33・34) 隆帶で区画された口頭部文様帯に、繩の側面圧痕と馬蹄形の刺突文を並列多段に構成する文様に特徴がある。34は二又状突きを付加する例である。

**円筒上層d式**(図21-1・2) 口唇部端部が尖頭状を呈し、外面が肥厚する。斜行縄文を下地に幅狭の隆帶により胸骨文を表出する文様構成に特徴がある。1・2は胸骨文の形骸化により直線的な文様構図へと転化する例である。

**円筒上層e式**(図21-3～12・13～16) 前段階における幅狭の隆帶による文様表出手法が、竹管状施文具による沈線文へと置換される点に顕著な特徴があり、文様構成には両者間で共有する要素が随所に窺える。胸骨文の形骸化により直線的な文様構図へと転化する例が多く(4・5・6・8・1)、劣戦竹管による断面形態が箱形を呈する沈線を2条1対で施す。一方、11は半截竹管による断面形態が「U」字形の沈線を3条1対で同時施文し、新期の様相を示す。なお、13～16は口縁部の装飾に対して胴部文様が地文的な要素に減退し、編年的位置が円筒上層d式と円筒上層e式に共存する。

**楓林式**(図21-17・18) 口唇部形態が前段階の要素を継承して外端部が肥厚し、凹線による装飾を加える点に特徴がある。胴部文様帶には弧線文、渦巻曲線文(17)、渦巻懸垂文が展開し、18に条が横走する繩文で構成する施文手法上の特徴を顕著に示す。

**大木8b式**(図21-19) キャリバー形の器形を大きな特徴とし、口縁部文様帶に横位の単節LRを下地に「S」字状の細隆帶を充填的に展開する。器形とともに口縁部文様帶に斜行縄文を横位施文する手法に、大木8b式の施文手法に同調する関係が窺えるものの、主文様の表出手法には相異点が指摘され、地域的に変容する様態として理解される。

**最花式**(図21-20～22) 先行する渦巻曲線文・渦巻懸垂文が形骸化し、文様要素が「U」字状文、逆「U」字状文、楕円形区画文へと集約される。21・22には斜行縄文を下地に逆「U」字状文を加え、22は半截竹管の内側施文により2条1対の沈線を描出する。20もこの段階に編入される資料で、青森市近野遺跡(青森県教育委員会 2003)に逆「U」字状態垂文を加えた比較事例がある。

**大木10式**(図22-1～9) 「J」「C」「N」を基調とするアルファベット状の文様構成に特徴があり(1・2)、胴部文様帶の下端が波状文・波頭文で表出される例が多い。7～9は繩文原体を縱位施文する間隔に空白があり、縱位の無文帶を形成する施文手法上の技術的特徴が看取される。特に9のあり方は顕著であり、これにより原体の施文幅が規定される。その長さは2.0cmを計測する。

**牛ヶ沢式**(図22-10～13) 10は隆帶による横帶を形成する点に特徴があり、隆帶に竪状施文具による縱位の刻目を施す。11・12は口唇部直下に繩の側面圧痕により平行する2条の区画帯を形成し、平行沈線による区画帯と同質の文様効果を演出する。13は口唇部直下に1.5cm程の幅で施文領域を強調する斜行縄文を施し、12と同様の意図が窺える。

**馬立式**(鈴木克彦1998)(図23-1～20) 葛西勲による「螢沢3群」(葛西1979)、成田滋彦・本間宏によ

る「螢沢式」(成田 1981、本間 1987・1988)に相当し、後に成田は螢沢式を「弥栄平(2)式」・「沖附(2)式」と改め(成田1989)、鈴木克彦が「馬立式」を提唱した(鈴木1998)。系統の異なる三角形区画文、方形区画文、曲線文を主要な文様構図とし、従属的な文様を組み合わせて幾何学的な文様を表出する点に大きな特徴がある。三角形区画文系列の占める割合が高く、2・6・8・9が典型例で、三角形区画文の内側に波頭文(2・6・8)・巴文(9)を左右対称あるいは上下対称に配置する。一方、16には方形区画文系列の長方形文を、13には曲線文系列の波状入組文を採用する。

**十腰内I式**(図23-21~28) 主要な文様構図に従属的な文様を組み合わせる手法により、幾何学的な文様を表出する点に特徴がある。馬立式の文様構成を継承して三角形区画文、方形区画文、曲線文を典型に、多様な文様要素を生成しながら変容する。系統の異なる文様が同一個体内で複合・共存する例も存在し、文様の複雑性をより強調する。23-25には曲線文の系統から変容した入組波状文が展開する。

**十腰内2式**(鈴木克彦1996)(図23-29) 鈴木克彦の十腰内2式に相当する(鈴木克彦1996)。図23-41は口唇部端部に単節RLを回転施し、口頭部文様帶を無文で構成する。頸部が「く」字状に屈曲する特徴的な器形が多い。

**十腰内V群土器・瘤付土器第II段階**(小林圭一 1999)(図23-30~38、図24-1~3・10~18)

編年の位置が十腰内V群土器に編入され、鈴木克彦による「十腰内5c式」から「風張式」(鈴木1998)、小林圭一による「瘤付土器第II段階」(小林 1999)、関根達人による「中屋敷段階(第3期)」から「滝端段階(第4期)」(関根 2005)の細別編年に相当する。貼瘤手法が盛行する段階で、貼瘤文が口縁部・頸部・屈曲部・胴部の文様帶に多用され、貼瘤文の形態が直径5~10mm程度の小粒を呈する特徴も看取され(図23-30・33~38、図24-2)、口縁部の繩文帶に円錐形に突出する形態の貼瘤文を貼瘤帶に規則的間隔で加える例も窺える(図23-37)。文様帶には入組帶状文(図23-30・32・35)と弧線文(図23-34・36・38)を展開する例が多く、連結弧線文の変形である上下で線対称の弧線文も特徴的である(図23-36)。文様の幅が減少して幅狭の帶状文に変容し、同様に、幅狭の繩文帶とともに無文帶と交互に多段化する文様構成が顕著である(図23-37・38)。文様は細沈線により表出する手法に集約され、2条1対で描出する施文手法も看取される(図23-33・36)。口縁部の繩文帶に貼瘤文に加えて円形の刺突列を施す例(図23-33)が窺え、その刺突の形態と径から細沈線の施文具が幅2mmの円形竹管であることが指摘される。図24-3・10~18・29は口唇部端部の形態が内側に傾く成形手法が看取され、胎土の質性とともに、図23-31・33・37と時間的同時性を示唆する共通要素として抽出される。また、図24-14・15・29に横位の繊細な櫛齒状条痕文を加える点が注意され、秋田県北部の米代川流域との関連性が予測される。なお、図24-16に横位の貝殻条痕文が施され、進出の様相を呈するが、この段階以降から後期末葉までの編年の位置に編入される可能性もある。

**十腰内V群土器・瘤付土器第III段階**(小林圭一 1999)(図24-4・6)

鈴木克彦による「大湊近川式」(鈴木 1998)小林圭一による「瘤付土器第III段階」(小林 1999)、関根達人による「未命名段階(第5期)」(関根 2005)の細別編年に相当する。4は上下2段の区画内に籠状工具による細密な刻目が充填され、この段階の型式学的特徴を備える。6は変形木葉状帶状文の変容形態と把握され、編年の位置を十腰内V群の範疇に求める。横位区画帶への刻目手法と貼瘤手法が採用されていない点において、この段階以降への位置付けを考慮する必要がある。

### 十腰内V群土器・瘤付土器第IV段階(小林圭一 1999) (図24-5・7~9)

鈴木克彦による「駒板式」「家ノ後式」「十腰内6式」(鈴木 1998)、小林圭一による「瘤付土器第IV段階」(小林 1999)、関根達人による「駒板段階(第6期)」(関根 2005)の細別編年に相当する。頸部文様帯に2段の入組帶状文を描出する文様構成、副次的に三叉文を沈刻する表出手法に、この段階の型式学的特徴が窺える。5は頸部文様帯に2段の右傾する入組帶状文が展開し、入組帶状文の咬合部が三叉状に彫去される。7は口頸部が外反する器形を呈し、緩く連続した波状線に耳状突起が配される。口縁部文様帯は縄文帯で構成され、頸部文様帯に縦位に連繋する入組帶状文が展開する。これと同一個体の8からは、屈曲部に断続した短沈線が回繞され、体部に斜行縄文を施す文様構成が窺れる。瘤付土器第IV段階～大洞B1式に編入される。9は断続した短沈線が回繞され、頸部文様帯に2段の右傾する入組帶状文が展開する文様構成が窺える。

### 十腰内V群土器・瘤付土器第II段階以降の粗製土器(図24-19~28・30~32)

口縁部が内湾あるいは直立する器形を特徴とし、口唇部端部が角頭状の形態を呈する点で新出の様相を示す。19~26は胎土に径2~5mm程度の粗粒砂を多く混入する質性と、条方向の異なる縄文を組み合わせる施文手法上の特徴が看取される。瘤付土器第II段階との併行関係を示唆する事例が第2号堅穴住居跡、第33号土坑、砂子瀬遺跡E区第2号堅穴住居跡等に散見され、瘤付土器第II段階以降に編入される出土資料が希少な点を加えて考慮すると、この一群の初現を瘤付土器第II段階に求め見る方も可能であるが、形式学的要素には大きな相異が認められ、なお慎重に検討すべき問題である。**大洞B<sub>2</sub>式**(図25-1~7) 1・2の口頸部文様帯には咬合部に接点の存在しない入組三叉文が、4には主軸の長い三叉文の両端が共に開く入組三叉文を加える。3は口頸部文様帯下限の横位区画沈線文が窺え、赤漆で塗彩する。5の壺形は頸部と肩部の交点に隆帯が回繞され、6は平行沈線文により区画帯を構成する。

**大洞BC式**(図25-8~10) 8は口唇部端部に刻目を充填し、口唇部直下に斜位の短沈線により菱状刻目帯を形成する。その下位には平行沈線を介在して入組三叉文の形跡が窺える。9は口唇部端部が刻目により小波状口縁を形成し、波頂部直下に下位の平行沈線に連絡する「ノ」字状刻目を施し、末端が咬み合わない左傾の羊齒状文が展開する。内面に連続山形沈線文を施し、口縁部の波長に連動する。10にも同様に末端が咬み合わない左傾の羊齒状文を施す。

**大洞C式**(図25-11~18) 11は平滑な雲形文で裝飾され、漆を下地に赤色顔料により朱彩し、12も同様に内外面を赤色顔料により朱彩する。13~17は頸部直下が内折し、頸部が内傾して立ち上がる器形を呈する。14・15・17の口唇部端部は短く外折し、無文帯に平行沈線が回繞される裝飾性の乏しい口頸部文様帯に特徴がある。18は節の細かな単節LRを施し、漆を下地に赤色顔料により朱彩する。

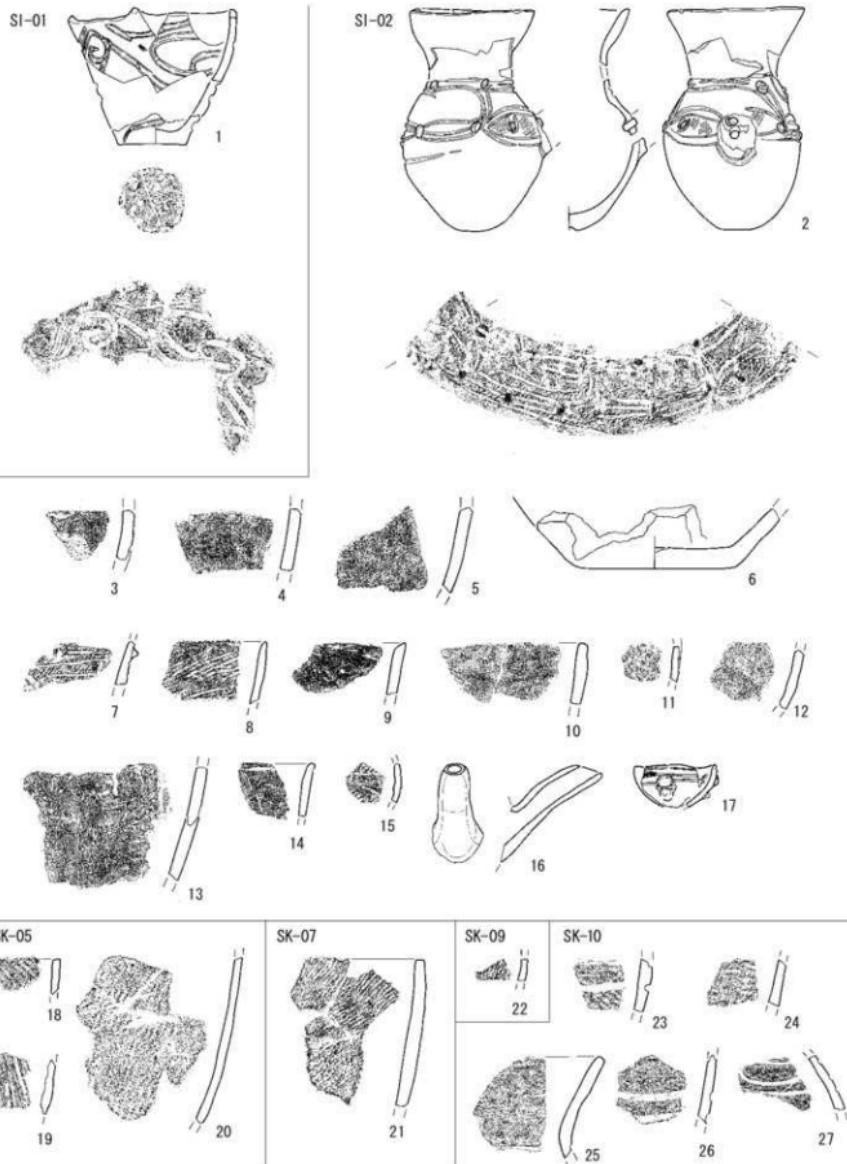


図19 遺構内出土土器(1)

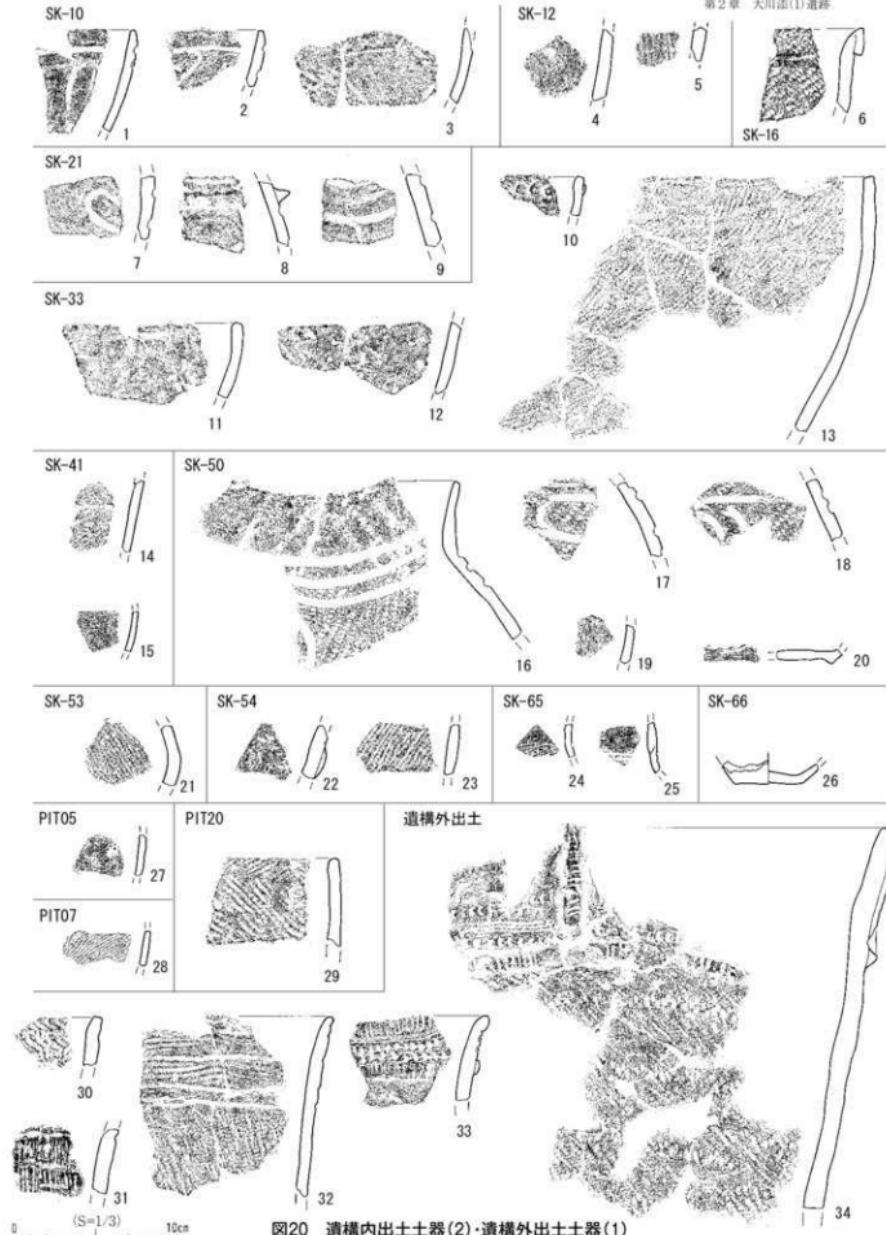


図20 遺構内出土土器(2)・遺構外出土土器(1)

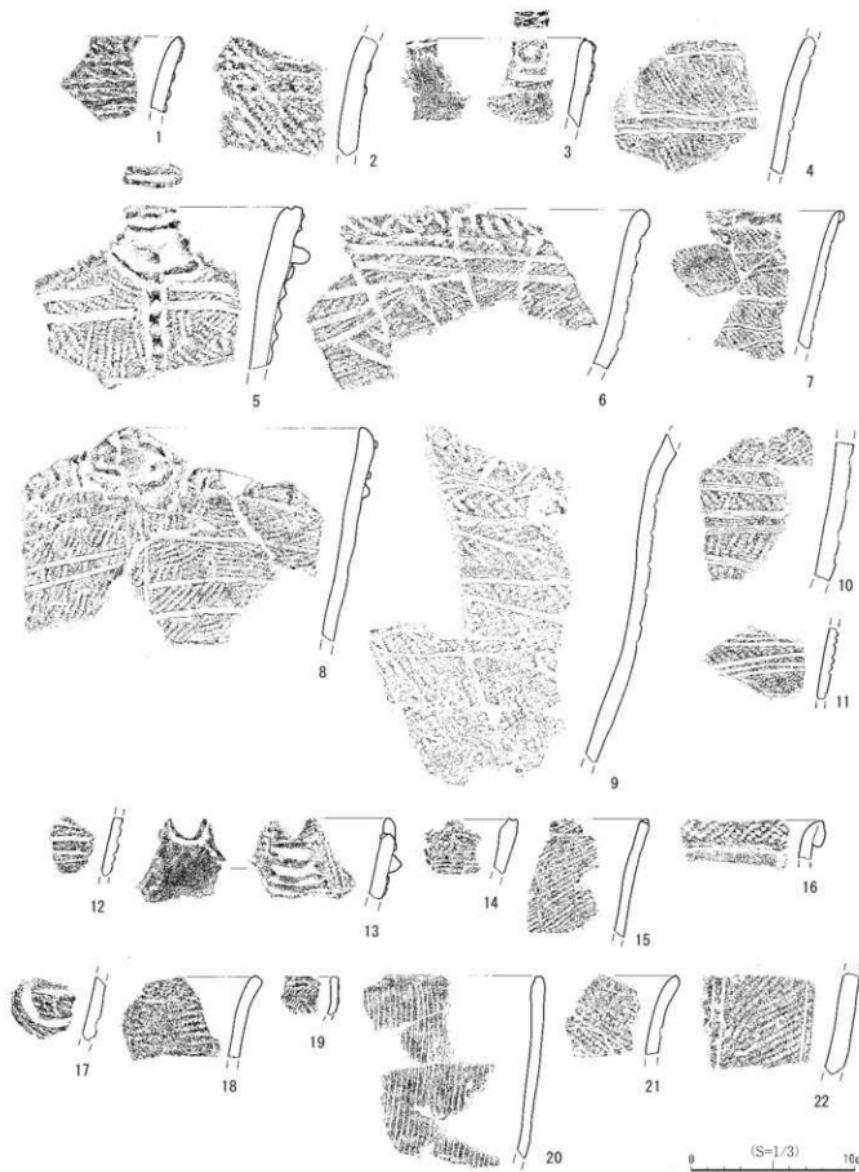


図21 遺構外出土土器(2)

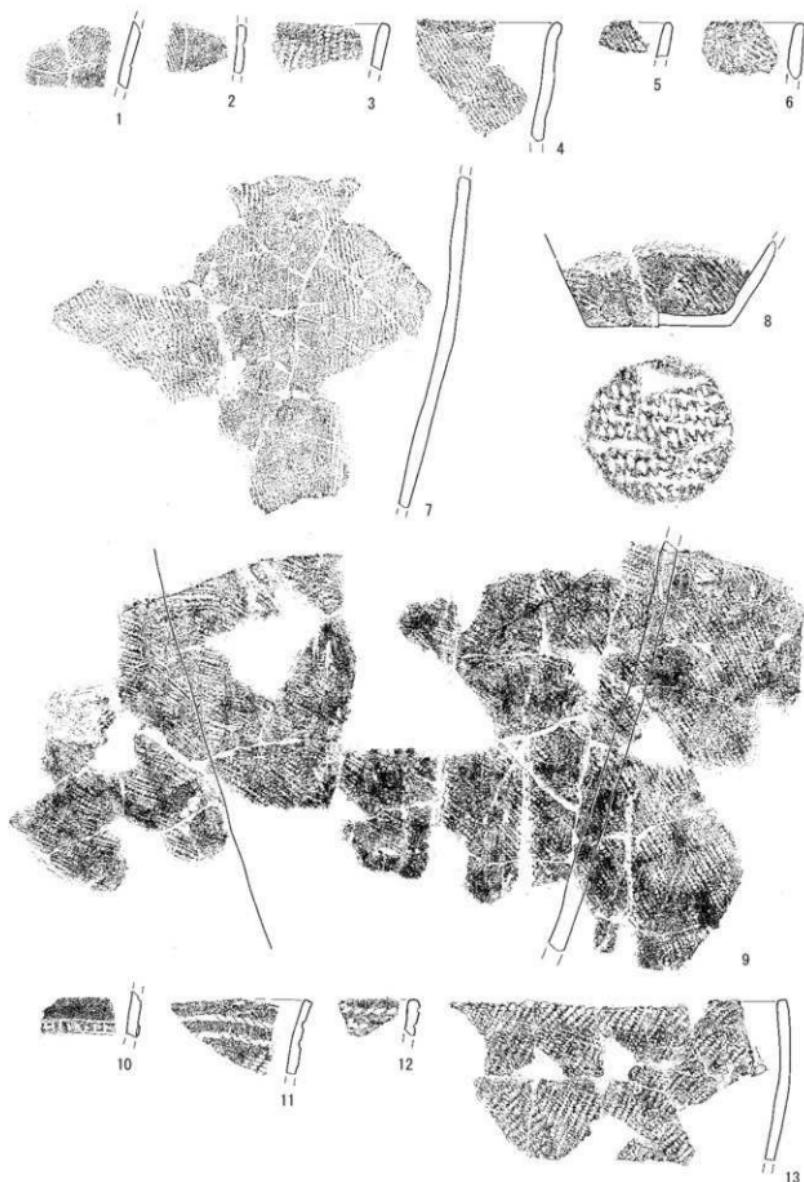


図22 遺構外出土土器(3)

0 10cm  
(S=1/3)

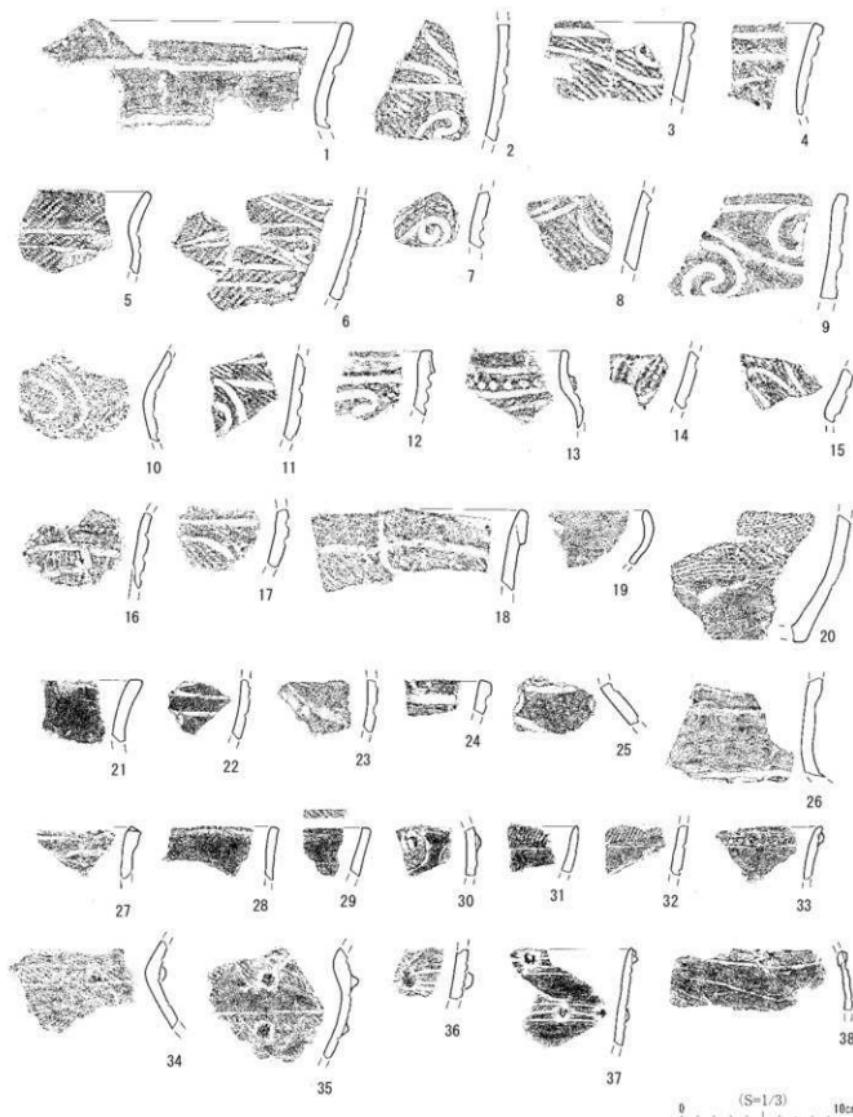


図23 遺構外出土土器(4)

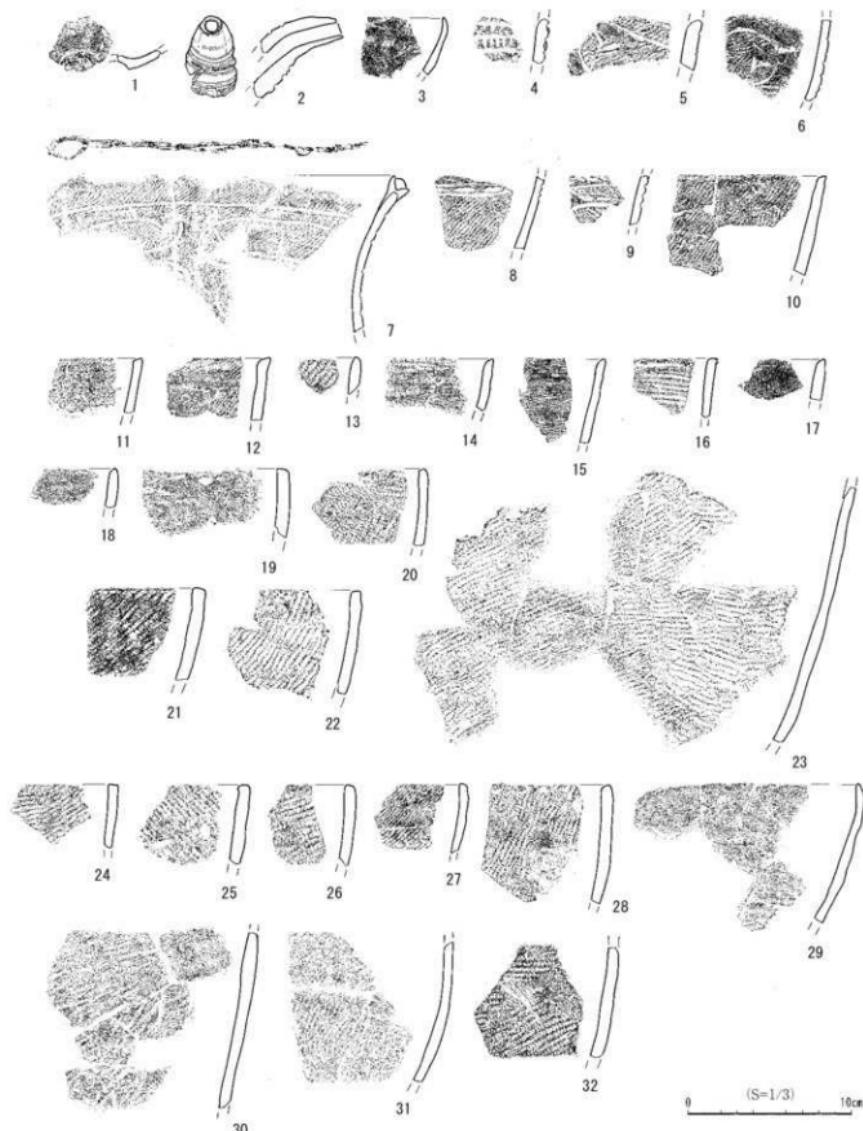


図24 遺構外出土土器(5)

大川遺(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路

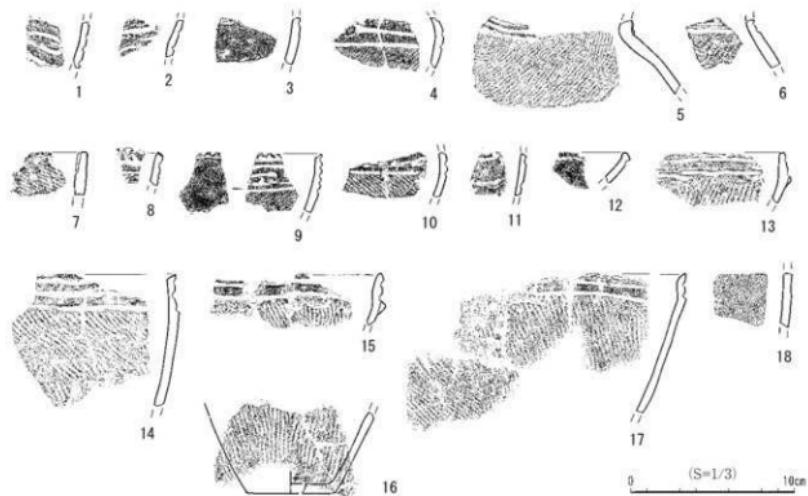


図25 遺構外出土土器(6)

## 2. 石器(図26~図33)

平成21・22年度の調査を通じて、合計640点が出土し、うち100点を図示した。その内訳は、石錐6点、石錐24点、石椎1点、石箇10点、石匙7点、搔器10点、削器169点、楔形石器4点、二次加工剥片116点、微細な剥離痕が認められる剥片164点、石核111点、敲磨器類12点、石皿4点、砥石1点、礫器1点である。組成の特徴としては、削器・微細な剥離痕が認められる剥片・二次加工剥片・石核の占める割合が高く、他の定型的な剥片石器や礫石器の占める割合が低い傾向があることが挙げられる。

### 剥片石器

#### 石錐(図26-14、図27-16~20)

石材は全て珪質頁岩である。有茎錐が4点、無茎錐が2点であり、前者は尖基有茎錐が3点(図26-14・図27-18、19)、凹基有茎錐が1点(図27-20)に、後者は凹基無茎錐が1点(図27-16)、円基無茎錐が1点(図27-17)に分類される。なお、これらの形態的特徴には明確な分類が困難な事例もある。図27-18は尖基有茎錐で、茎部を中程から欠損する。図27-17は円基無茎錐である。先端部側縁に屈曲が認められ、全体の形態が五角形状を呈する点が特徴として窺われる。なお、側縁部の屈曲は、図27-20にも一部認められる。また、図27-17及び18は、ともに裏面に主要剥離面を多く残す例である。

#### 石錐(図26-3、図27-21、図28-1~6)

石材は全て珪質頁岩である。大きく分けて、錐部のみ二次加工を施したもの(図26-3、図28-1・4)、側縁に二次加工を施し成形しているもの(図28-2~3、5)、両面調整により棒状に成形するもの(図27-21、図28-6)がある。図28-2を除き、錐部と基部の間に明瞭な抉りを持たせている例はない。また、図28-3は、両面調整を施された不定形剥片の一端を錐部としている。更に、錐部の形態に着目した場合、厚みのある形態を作出する例(図28-5、6)と、細身の形態を作出する例(図26-3、図27-21、図28-1~4)が看取される。図28-6は、厚みのある剥片に背腹両面から二次加工を施し棒状に成形した例で、末端部に背腹両面から細かく調整を施していることから石錐に分類したものである。

#### 石椎(図28-7)

石材は珪質頁岩で、比較的大きさ・形がそろった斜状平行剥離により表裏両面を調整している。平面形はほぼ左右対称で、断面形は凸レンズ状を呈する。先端部が折損しており、本来は先端部が細身となる対称形の柳葉形状を呈すると考えられる。

#### 石箇(図28-8~9)

いずれも石材は珪質頁岩で、素材となる縦型剥片の両側縁を背腹両面から、基部を片面から調整し、左右対称の形態を作出する。図28-8は全体が長方形に近く、刃部は片面調整の直刃形を呈する。図28-9は全体が擬型で、刃部の中央が抉入を呈する。なお、刃部の一端を欠損する。いずれの刃部も急斜度の刃部を形成する。

#### 石匙(図26-4~5・15、図27-11、図28-10~12)

石材は1点を除き全て珪質頁岩である。横形石匙が3点、縦形石匙が4点であり、直線状または外湾する刃部を作出する例が多い。図28-10は赤鉄鉱製の縦型石匙で、両面に火ハジケ痕がみられる。図28-12は打瘤を大きく残す大型の剥片を素材としており、主に腹面側に二次加工を施し成形しているものの、刃部の調整は粗い。使用に伴う剥離痕である可能性が考慮される。

#### 搔器(図27-4、図28-13～15、図29-1～4)

石材は1点を除き全て珪質頁岩である。刃部の角度に差異が認められ、刃部の断面形が刃厚の厚い急斜度を呈する資料と、刃厚の薄い緩斜度を呈する資料とがある。また、いずれの資料も素材剥片の背面側に刃部を作出する。図28-13は黒曜石の小型剥片を素材とし、弧状を呈する急斜度の刃部に加え、基部に錐部を作出する複合石器である。図29-1は左右両側縁及び末端に二次加工を施し、左右両側縁が削器の刃部に近似する。また、基部側を折損する。

#### 削器(図26-6～8、図27-1～2・5・10・12～13・15、図29-5～12、図30-1～11、図31-1～6)

石材は全て珪質頁岩である。刃部の形態や素材剥片に対する二次加工の位置、素材剥片の形態にバリエーションが認められる。

図26-6、図27-1・13、図29-5～12、図30-1～2は、縦型剥片の一側縁に二次加工を施す例である。図27-1、図30-2の刃部は鋸歯状を呈する。

図26-7～8、図27-2・12、図30-3～6は主として縦型剥片(図27-2のみ矩形剥片)の両側縁に二次加工を施す例である。図30-5は厚みのある縦型剥片の両側縁に鋸歯状の刃部を呈する例であり、左側縁は直線状の刃部を、右側縁は外湾する刃部を作出する。

図27-10、図30-7～9は、素材剥片の側縁と末端に二次加工を施す例である。図30-7は側縁が鋸歯状の刃部形状を呈する。また図30-8は右側縁及び末端に急角度の刃部を作出する例で、刃部が搔器の刃部に近似する。

図27-5・15、図30-10～11、図31-1～3は素材剥片の側縁から二次加工を施し末端まで達する例である。末端の形態は緩やかな弧状を呈するものと、尖頭状を呈するものとがある。

図31-4は矩形剥片の側縁と末端に二次加工を施す例であり、末端は外湾する弧状の刃部形状を呈する。また、末端の刃部中央に、周囲より新しい大形の連続した剥離が施されていることから、刃部再生の可能性がある。なお新たな剥離により形成された刃部は急角度をなし、搔器の刃部に近似する。

図31-5は、両極加工により成形した後に側縁に刃部を形成した例である。

図31-6は削器を素材とし、素材の折損部に二次加工を加える例である。

#### 模形石器(図27-6、図31-7)

いずれも小型で石材は珪質頁岩である。図27-6は相対する上下両端の縁辺に剥離痕を形成する例で、剥離痕とともに剪断面を形成する。図31-7は一部玉髓質が混入した石材を使用し、相対する上下両端の縁辺に剥離痕を形成する例である。

#### 二次加工剥片(図26-9～12、図27-7・9・14)

石材は全て珪質頁岩で、小型剥片がほとんどである。二次加工による剥離痕の連続性・規則性が乏しい一群を分類の基準にする。図26-9は背面両側縁及び末端に連続する二次加工が施されており、石錐の錐部もしくは削器の末端部が折損したものである可能性がある。

#### 微細な剥離痕を形成する剥片(図26-1・13、図27-3、図31-8)

素材となる剥片は、縦長剥片が2点、横長剥片が1点、矩形剥片が1点で、1点を除き石材は珪質頁岩である。いずれも鋭利な側縁を機能部位に選択している。図27-3は黒曜石製で、縦長剥片の背面側左側縁の一部に微細な剥離痕を有する。

#### 石核(図26-2、図27-8、図31-9～10)

全て石材は珪質頁岩で、原石の一部に原礫面を存置する。また、いずれも打面と剥離作業面の位置関係が固定化されず、打面の転移を繰り返しながら正面・左右側面・裏面などで剥離作業が行われている。

### 礫石器

分類は「2009『砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡』 青森県教育委員会第466集」に準拠する。  
敲磨器類

使用痕の組み合わせにより、以下のように分類した。石材の内訳は、珪質頁岩3点、凝灰岩2点、花崗岩1点、砂岩5点である。

**I類** 使用痕がスリのもの(図32-1~5)

礫全体を機能面とするもの(図32-3・4)、柱状礫の正面・側面を機能面とするもの(図32-1・2)、扁平な円形礫の広い部分を機能面とするもの(図32-5)がある。

**IV類** 使用痕がスリ+タタキ+凹みのもの(図26-17)

楕円礫の表裏平坦面中央に凹部及び敲打痕が、その周間に磨痕が形成される。

**V類** 使用痕がタタキのもの(図26-16、図32-6、図33-1)

全て珪質頁岩製の小型礫を使用している。いずれも石核を敲石に転用したものである。

**VI類** 使用痕がタタキ+凹みのもの(図33-2・3)

扁平な長楕円様の砂岩礫を使用し、いずれも表裏両平坦面の中央上端部寄り、ほぼ表裏対称の位置に、敲打痕及び凹部が形成される。また図33-3は、前述の敲打痕・凹部の他、中央下端部寄りの位置に、表裏対称に敲打痕が形成される。

**石皿(図33-4~7)**

石材はそれぞれ溶結凝灰岩、花崗岩、デイサイト、凝灰質砂岩で、全て無縫・完形品である。基本的に機能面は平坦だが、図33-4は湾曲した機能面を呈する。また、図33-6のみ、機能面を敲打により整形する。

**砥石(図33-8)**

石材は凝灰岩で、扁平な素材の表面に研磨面を形成する。

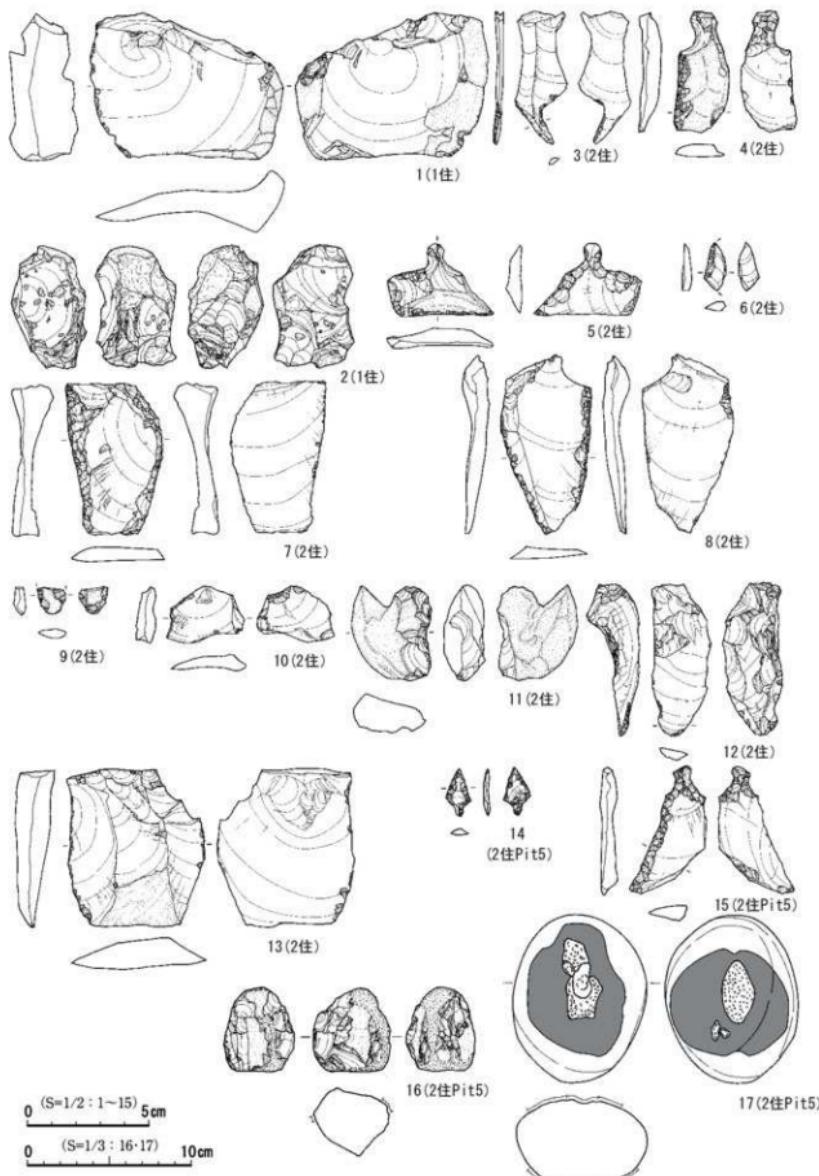


図26 遺構内出土石器(1)

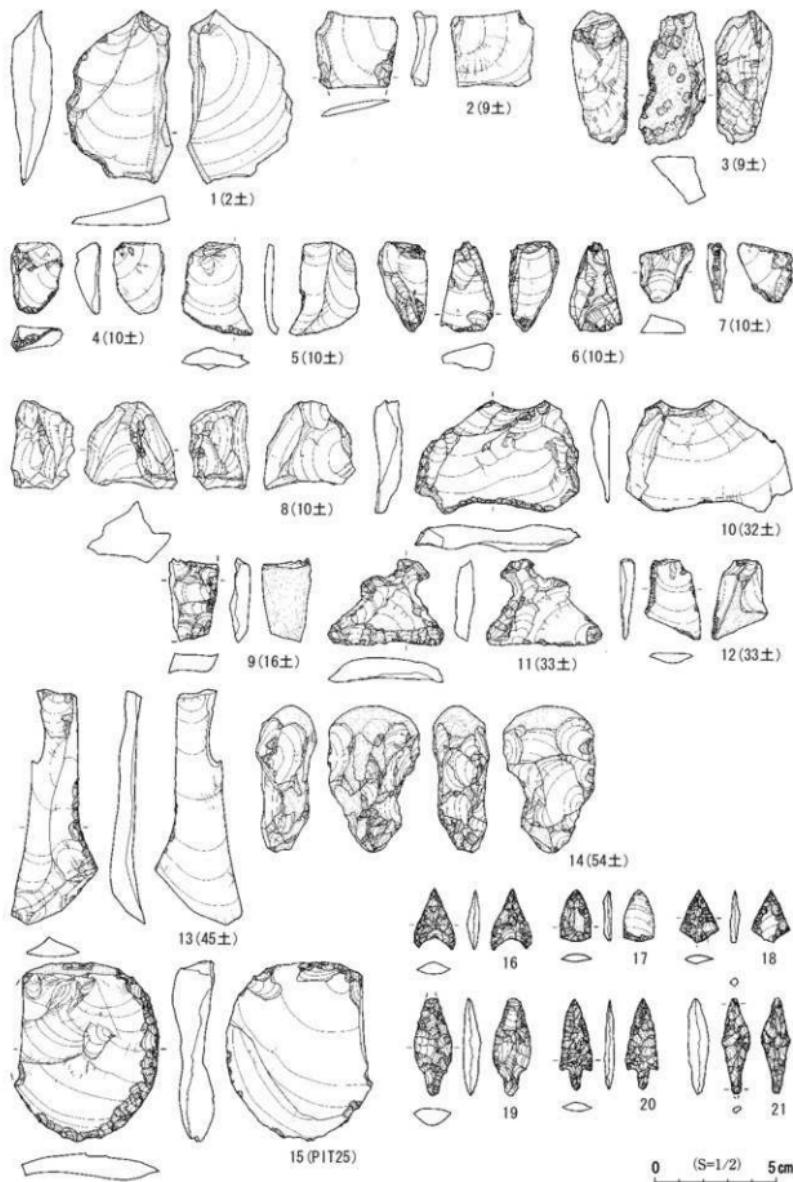


図27 遺構内出土石器(2)・遺構外出土石器(1)

大川遺(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

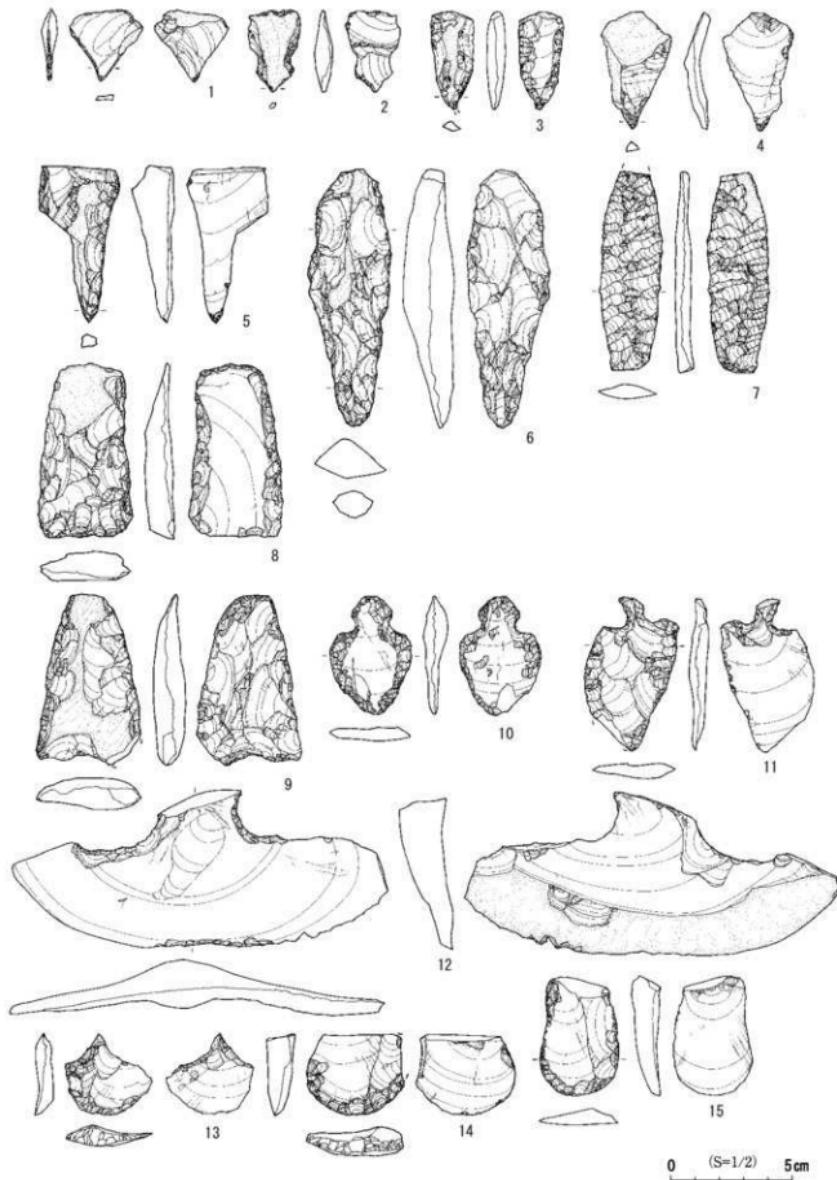


図28 遺構外出土石器(2)

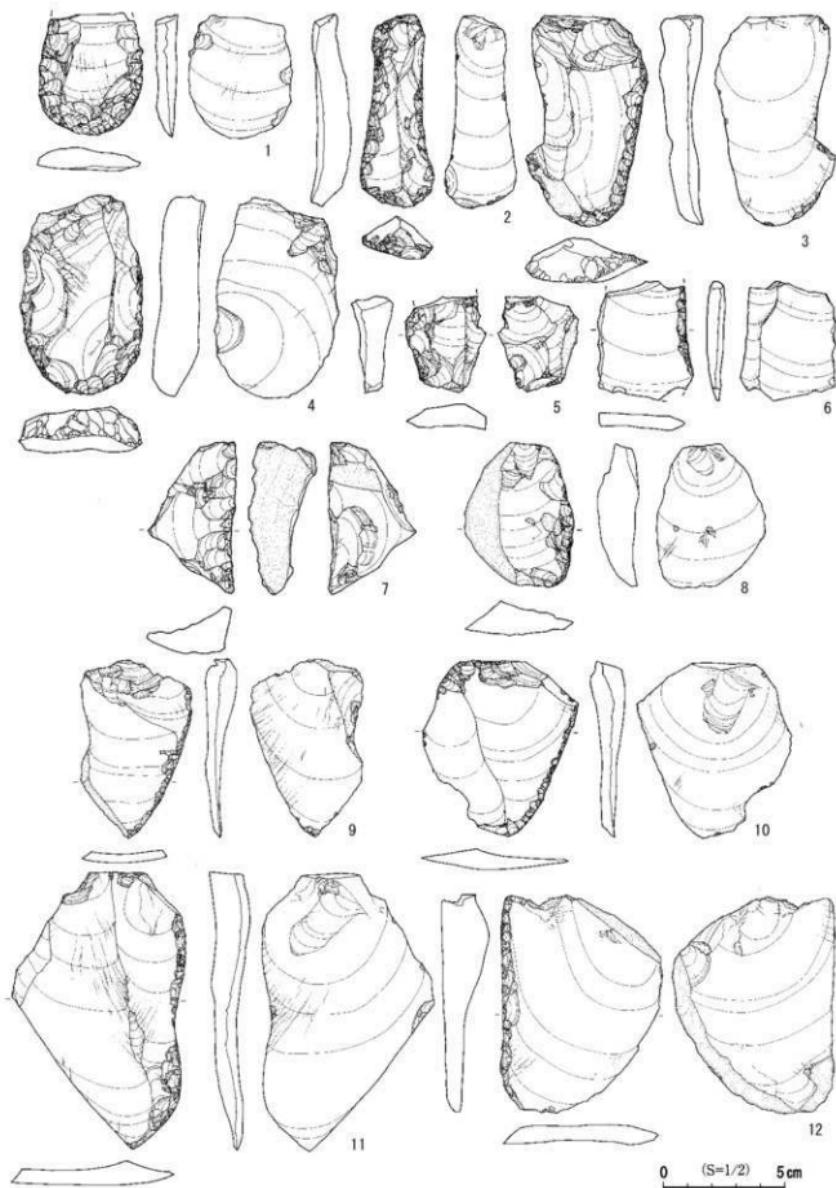


図29 遺構外出土石器(3)

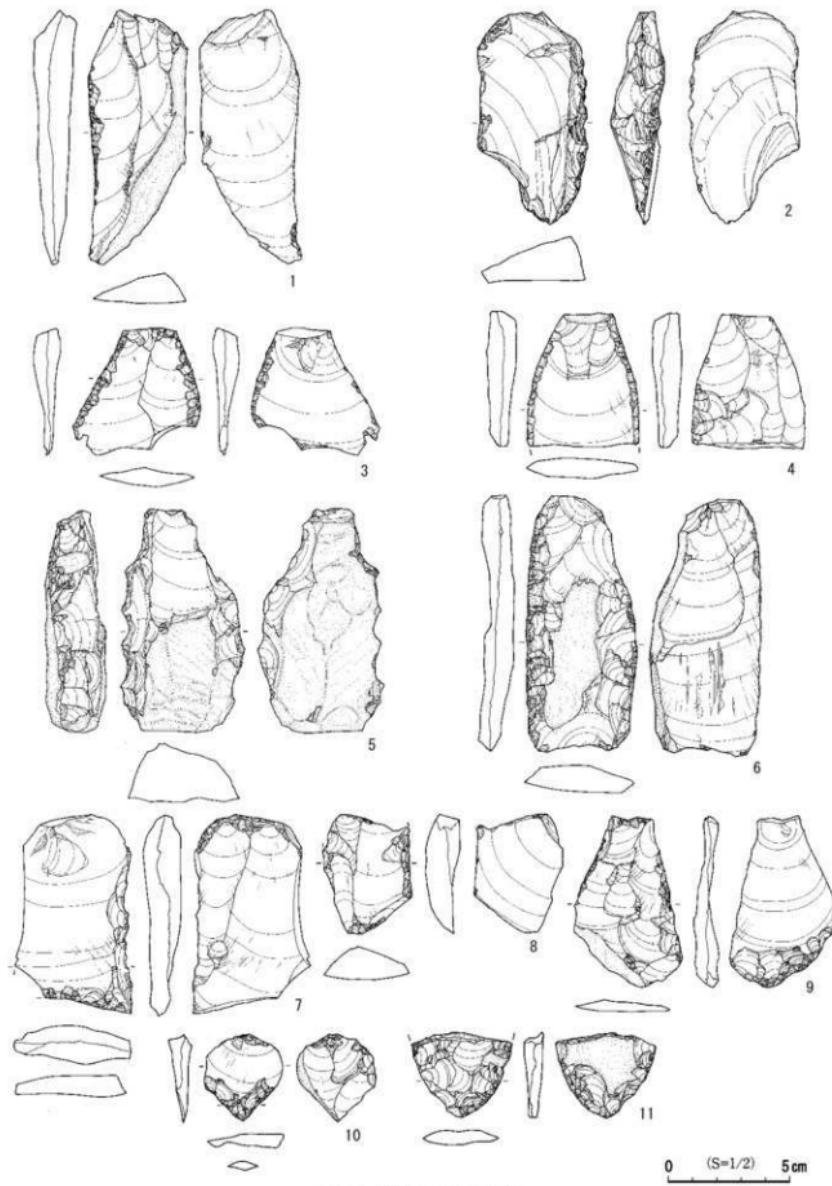


図30 遺構外出土石器(4)

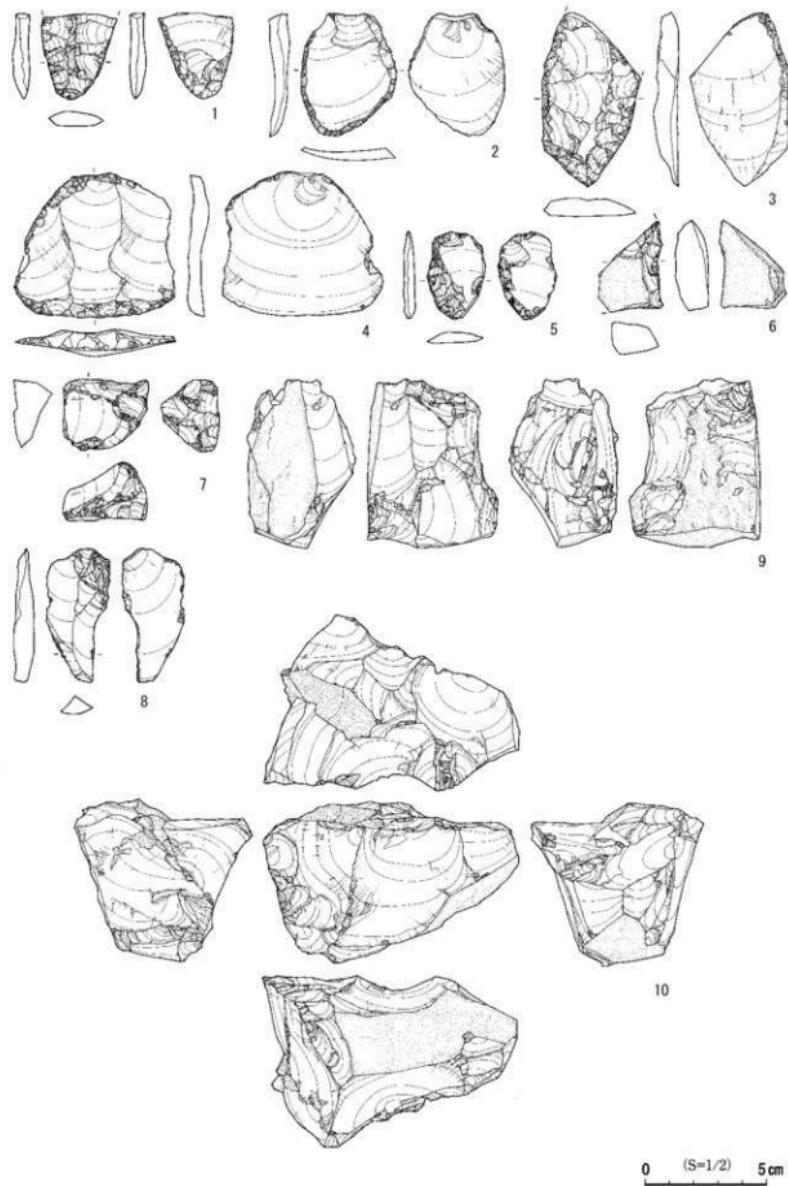


図31 遺構外出土石器(5)

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路

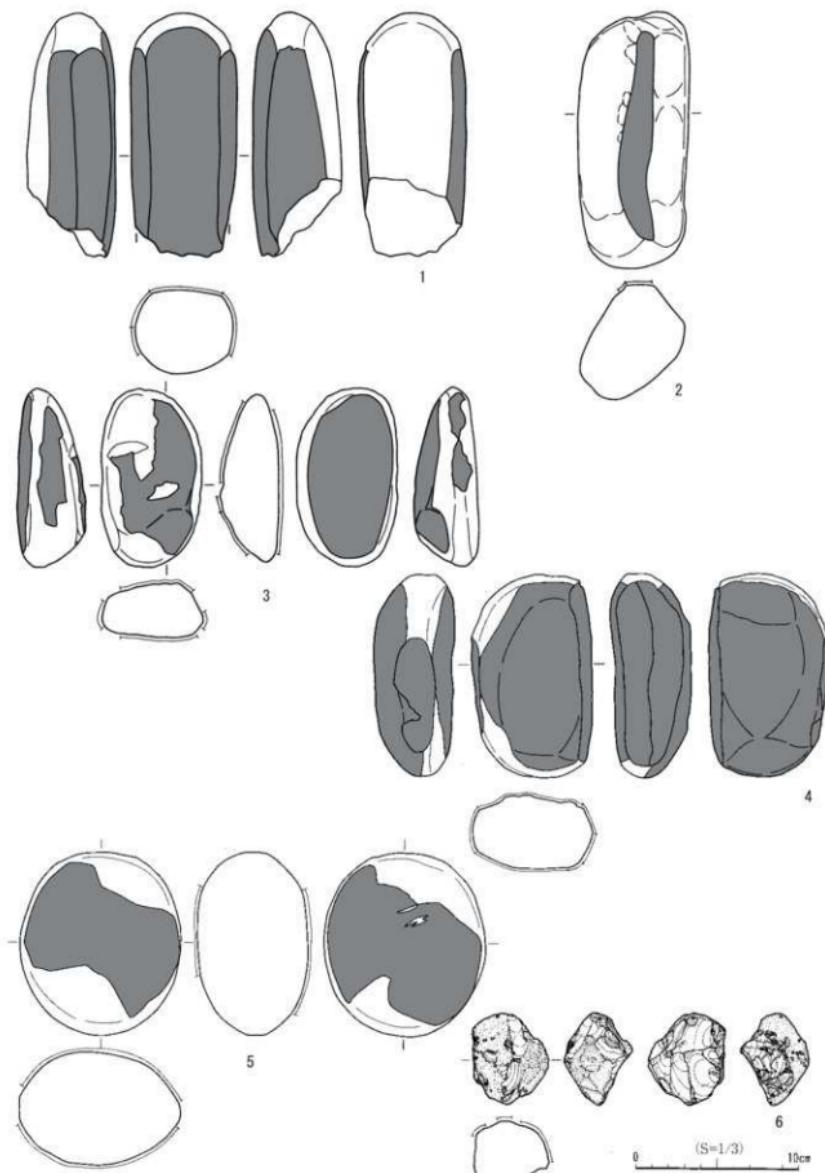


図32 遺構外出土石器(6)

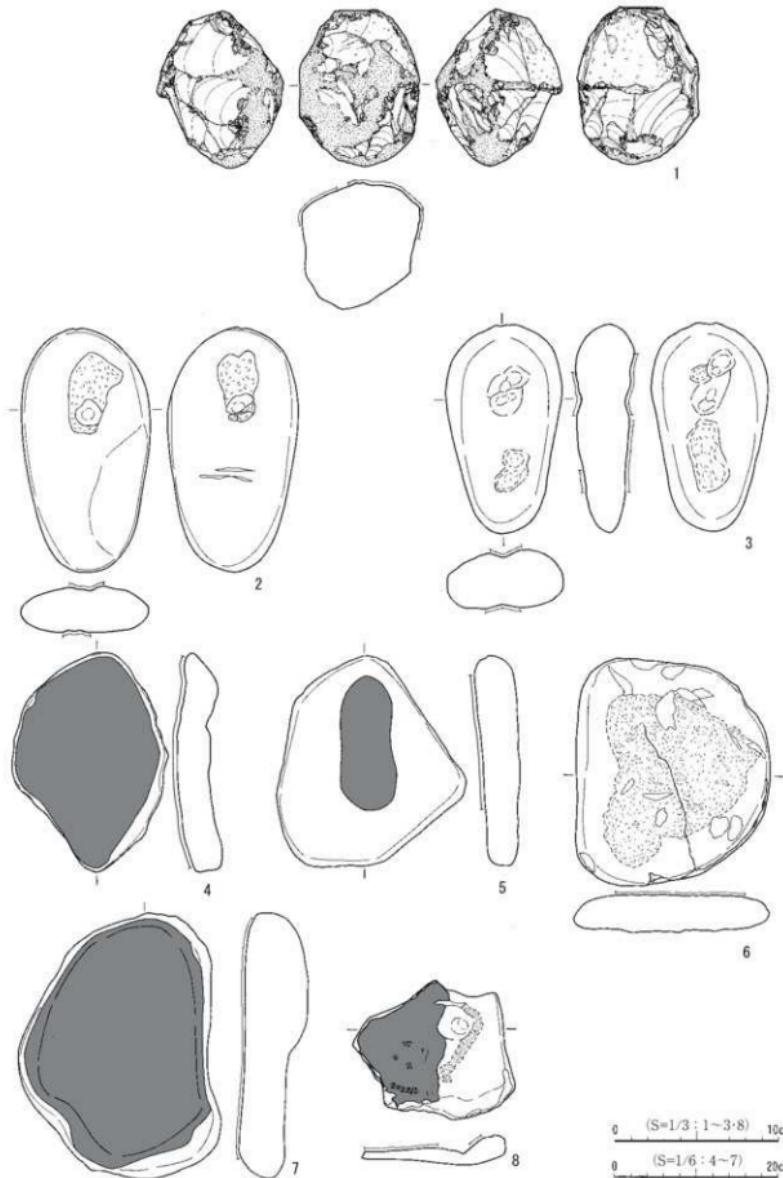


図33 遺構外出土石器(7)

### 3. その他の遺物(図34)

#### 石製品

##### 円盤状石製品(図34-1)

図34-1は砂岩製で、円形の扁平碟の表裏面を研磨している。両面に擦痕が残存し、側面は敲打後研磨により成形しているが、敲打により生じた深い抉り部分は残存している。

##### 石棒(図34-3)

流紋岩製の四角柱状の礫を素材とした自然石棒で、接合資料である。上面を構成する一辺に剥離を施し、側面形が台形状を呈する。上下端部を除く四面に研磨範囲及び縦方向の擦痕が確認できるほか、稜線部を中心に敲打痕及び剥離痕が看取される。また、正面に溝状の明瞭な研磨痕を有することから、砥石として使用された可能性もある。

#### 自然礫

##### 搬入礫(図34-2)

図34-2は瑪瑙製で、表裏両面ともに、縁辺部から1cm前後離れた当該礫中央部に深さ1mm程度の弧状の溝を有し、凸レンズ状の中央部を存置する。石質鑑定の結果、自然作用による生成には否定的な見解が得られたが、考古学的所見からは、成形に関わる痕跡は認められないため、搬入礫の一例として掲載した。

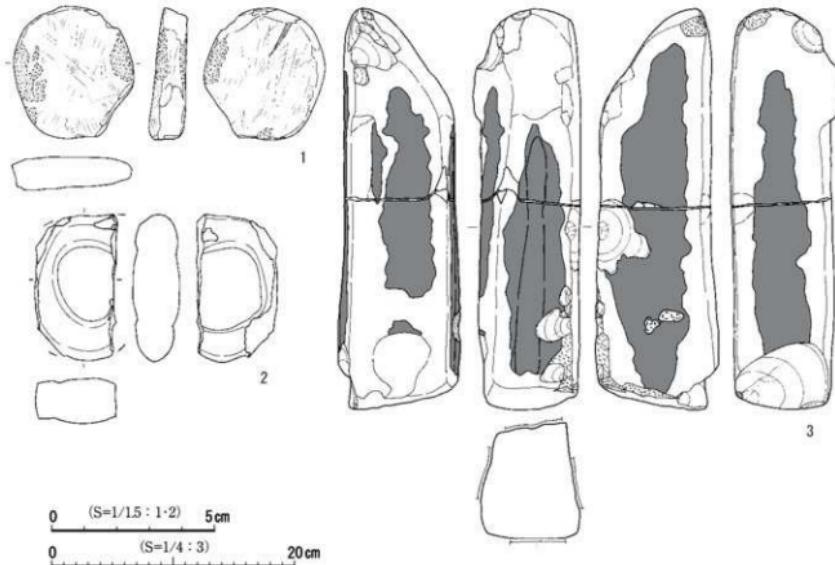


図34 遺構内外出土石製品

## 第3章

### 水上(4) 遺跡



埋没沢作業風景(東から)

## 第3章 水上(4)遺跡

### 第1節 調査方法と整理方法

#### 1 発掘作業の方法

平成19年度に実施した第1次調査で、埋没沢に形成された遺物包含層（捨て場）が検出されており、これについて未調査区域の北側を対象に調査するとともに、形成過程と形成時期の変遷を把握することを主眼に進めた。

##### (1)測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定

国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が建設事業に係る基準点に設置した基準杭を基点に、調査区内に4m×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、南から北にローマ数字とアルファベット(A～Y)、西から東に算用数字を付して、その南西隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土地標（旧日本測地系）は、I A-0 グリッドがX=57900.000・Y=-52400.000、II A-25 グリッドがX=58000.000・Y=-52300.000、III A-50 グリッドがX=58100.000・Y=-52200.000となる。測量原点には、津軽ダム建設事業に係る3級基準点KBM1(X=59618.091・Y=-48897.338)、3級基準点T81(X=59622.015・Y=-48897.338)を使用した。レベル原点も同様に、KBM.1(標高194.136m)から原点移動して設置した。

##### (2)基本土層

遺跡の基本土層は第1次調査に準拠して分層し、表土から順にローマ数字を付して呼称した。また、埋没沢の層序については上層から算用数字を付して呼称した。なお、基本土層第IV層以下の堆積状況には第一次調査区とは異なるあり方が看取され、対応関係には若干の問題が残るもの、第2次調査において第8層として細別した層準は、遺物を包含する状況から第IV層下部相当に同定される。

##### (3)表土等の調査

遺跡範囲内の表土等の調査は、第1次調査により遺物が希薄な状況が確認されており、また、調査区に広く草等の植物が群生していることから、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は適宜グリッド・層準単位で取り上げたが、埋没沢の遺物については、グリッドの設置に期間を要した理由から、任意に区分けして設定した調査区(A区・B区・C区)を基準に層準単位で取り上げた。

##### (4)埋没沢の調査

埋没沢の範囲と規模について平面的な把握が困難な理由から、斜面上方から下方へと平行するトレーナーを約8mの間隔で3箇所に設定し、堆積土の観察により埋没沢の両端と基底部を把握した。さらに観察地点により堆積状況に差異が認められることから、これらの層序について相互の対応関係を把握し、対応する層準を基準に調査を進めた。また、湧水の対策と地層に含まれる豊富な水分を排出する目的で、重機により導水路を設置して調査環境の改善化を図った。埋没沢の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。平面図は、主に「遺構実測支援システム」(株式会社CUBIC)を用いてトータルステーションによる測量で作成した。埋没沢の堆積土層断面図は、簡易造り方測量等で縮尺1/20の実測図を作成した。また、出土遺物については層準単位で取り上げたが、主要な出土遺物あるいは遺物の分布範囲については、トータルステーションにより測量した。

##### (5)写真撮影

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラー・リバーサルの各フィルム及び1790万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託して行った。

## 2 整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、埋没沢とその左岸に形成された縄文時代の遺物包含層が検出され、土器・石器等の遺物が段ボール箱で16箱出土した。遺物包含層の形成過程と層準の形成時期等を解明するため、層準単位に土器型式の構成を把握するとともに、層準の時間的序列との相関関係の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

### (1)図面類の整理

調査区および埋没沢の平面図は、主にトータルステーションにより測量したことから、整理作業では第1次調査区配置図との合成した配置図を作成するとともに、簡易造り方測量で作成した堆積土層断面図との図面調整を行った。

### (2)写真類の整理

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラー・リバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、埋没沢の精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラー・リバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

### (3)遺物の洗浄・注記と接合・復元

埋没沢および、その左岸の包含層遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したボリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

### (4)報告書掲載遺物の選別

遺物全体の分類を適切に行った上で、細別層準の時期等を示す資料、遺存状態が良好で同類の中で代表的な資料、所属時代(時期)・型式・器種、遺跡の普遍性や変異等を提示できる資料等を主として選別した。

### (5)遺物の観察・図化

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

### (6)理化学的分析

遺物包含層出土の土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定分析を、業者に委託して行った。

### (7)調査区配置図・遺物のトレース・版下作成

調査区配置図・遺物実測図やその他挿図のトレースは、手作業と「トレースくん」(株式会社CUBIC)を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、手作業とデジタル機器による作業を併用した。

### (8)埋没沢の検討・分類・整理

遺物包含層の形成過程と層準の形成時期等を解明するため、層準単位に土器型式の構成を把握するとともに、堆積過程の時間的序列と土器型式の変遷との相関関係について検討を加えた。

(9) 遺物の検討・分類・整理

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

(10) 調査成果の検討

埋没沢の層序・遺物の検討結果を踏まえて、埋没沢の形成過程や产出層準単位の形成時期について検討・整理した。

## 第2節 調査と整理の経過

### 1 発掘作業の経過

9月3日～ 重機による表土掘削を開始する。

9月15日 調査器材等を現地に搬入し、環境整備等を行った後、調査区の東側から西側へと遺構の検出作業を開始した。

9月17日 調査員島口氏による、地形・地質に関する現地指導を受けた。

9月下旬～ 埋没沢に遺物が分布する状況が確認され、埋没沢の範囲について検出作業を進める。しかし、平面的な把握が困難な理由から、斜面上方から下方へと平行するトレーナーを設定し、堆積土の観察により埋没沢の両端と基底部を把握しながら精査を進める。

10月13日～ 溝水の対策と地層に含まれる豊富な水分を排出する目的で、重機により導水路の掘削を開始し、調査環境の改善化を図った。

10月中旬～ A区とB区より遺物が集中して出土するとともに、埋没沢の右岸にあたる東側でも多量の遺物が出土し、重層的に遺物包含層が形成されている状況が確認された。

10月22日 株式会社シン技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域全体の空中撮影を行った。

10月30日 埋没沢と右岸の遺物包含層の調査を終了し、すべての調査器材等を撤収した。これで水上(4)遺跡に関する全ての調査を終了した

### 2 整理・報告書作成作業の経過

4月上旬～ 遺物は洗浄・注記作業が終了した地区と層序から、順次接合・復元作業を進めた。

5月上旬～ 遺物の接合・復元作業を中心に行い、併せて、土器・石器の報告書掲載遺物の選別作業と、遺物の検討・分類作業を進めた。

6月上旬～ 選別した報告書掲載遺物(土器)の実測・拓本等の図化作業を行った。

8月上旬～ 選別した報告書掲載遺物(石器)の実測図作成を開始した。

12月上旬～ 図化作業が完了した遺物のトレイスを行った。また、シルバーフォト・スタジオエイトに委託して、報告書掲載遺物の写真撮影を行った。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。

1月下旬～ 原稿・版下等の作成が完了し、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。

3回の校正を経て、報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納をした。

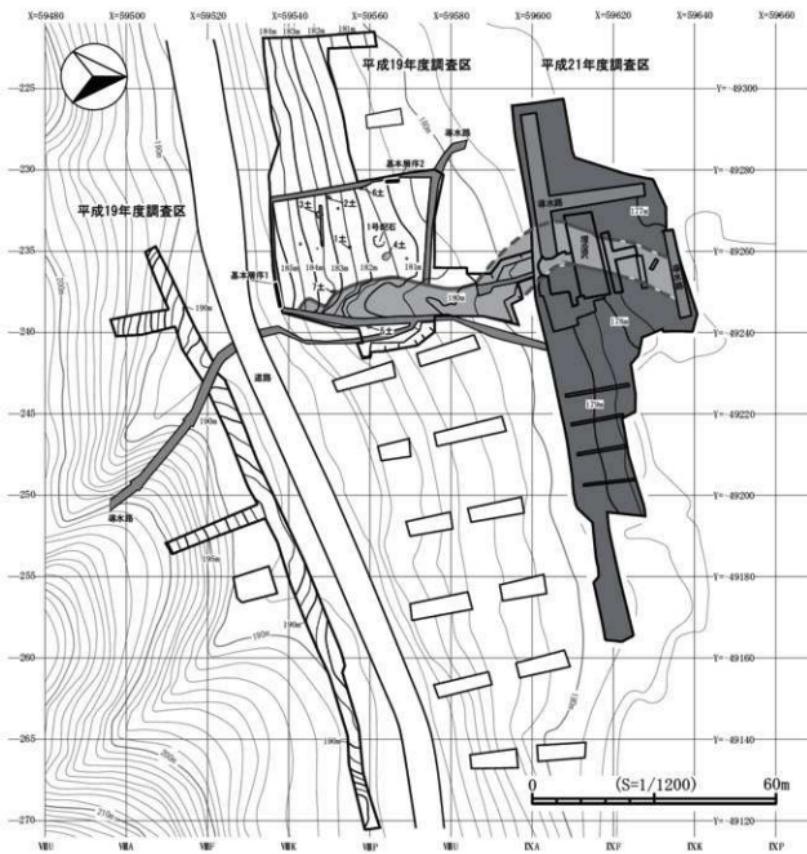


図35 調査区と座標系

### 第3節 遺物包含層と出土遺物

#### 第1項 遺物包含層(図35・36)

平成19年度の第1次調査において、埋没沢とその東側に形成された遺物包含層について調査を実施しており、この経緯を踏まえて、第1次調査区の斜面下方に位置するIX Aライン以北の未調査区域を対象に第2次調査を継続して実施した。

埋没沢に形成された遺物包含層(捨て場)は、細別層位により遺物の総数や分布状態に多寡・粗密が示されるものの、重層的な包含層を形成し、特にA区の第2層から第4層に濃集部を形成する方が看取される。これと同時に第6層から第9層の下層に至るに従い、遺物の総数が減少する傾向も窺える。

図36に示す通り、これらの分布状態にはIX CラインとIX Dラインの境界まで顯著な集中が認められ、これより北側は遺物の分布状態が漸移的に希薄となる傾向を示すことから、第1次調査で検出された遺物包含層(捨て場)の北端として把握される。

しかし、重層的な包含層を形成しているものの、層位の時間的序列に相関する土器型式の変遷は示しておらず、第6層までの細別層に瘤付土器第IV段階(小林圭一 1999)以降及び大洞C<sub>2</sub>式の土器破片が混在する状況が窺われ、遺物の原位置性を維持する安定した様相とは相異点が指摘される。

また、埋没沢の堆積状況は黄褐色の粘質土と小礫層が交互に帶状に堆積し、特に第6層以下ではこれらの堆積物が薄い層厚で縞状に堆積する様相を示す。下層から上層へと漸移的に小礫から粗砂、粘質土の順に粒径が縮小する一連の水成堆積の過程が累積した状況として解釈される。以上の事象からは、上流域を供給源とする急激な土砂の堆積を伴う流水により、前過程において堆積した土層が大きく攪拌を受ける現象を繰り返し、滞水と流水が交互に進行した二次的な堆積の経過が想定される。

一方、第9層及び基本層序第IV層相当の第8層・10層直下には5~15cm程度の一定した層厚で未分解の泥炭層が形成され、さらにその下層の基底部は青灰色の粘質土と小礫層が互層を成して基盤の砂子瀬層まで厚く堆積しており、岩木川本流を主要な供給源とする堆積層と把握される。

さらに、埋没沢の東側にあるIX A 235~237からIX D 235~237の範囲には、埋没沢の遺物包含層に相関を示して重層的な遺物包含層が形成され、両者の分布には連続性が窺える。A区のIX A 235~237・IX B 235~237の基本層序第IV層に相当する第8層の上部では遺物の分布が特に濃密で、第8層上部から中部に完形率の高い個体資料が偏在しており、埋没沢の分布傾向とも相関する。第1次調査の「右岸捨て場」においても同様の分布傾向が指摘されており、同様の性格を備えた遺物包含層として理解される。

A区東端の基本層序第IV層相当する第8層においては、最花式、大木10式、十腰内I式へと変遷する層位の時間的序列に相関した土器型式の変遷を示す出土状況が確認された。しかし、第8層の上層から下層に包含される遺物は、総体的に土器型式の時間的序列を正確に反映する出土状況を示唆していない点に加えて、異なる粒径で構成される小礫層が交互に重層する堆積状況を考慮し、この層準も同様に、上流域を供給源とする急激な土砂の堆積を伴う流水により、攪拌を受けながら二次的に堆積した経過が想定される。



## 第2項 出土遺物

### 1. 遺物包含層出土土器(図37～図43)

調査の結果、総重量74,653 gの土器破片が出土し、第1次調査との総計は8,239,157 gである。第2次調査における出土重量に基づく型式別の比率は、中期末葉の大木10式と後期前葉の十腰内I式を中心とし、これに中期中葉の円筒上層d・e式、後期後葉から末葉の十腰内V群土器(瘤付土器第II段階～第IV段階)が続く。埋没沢およびその右岸には重層的な遺物包含層が形成されているものの、層序の時間的序列に相関する土器型式の変遷は示しておらず、遺物の原位置性を維持する安定した様相とは相違点が指摘されることから、包含層を構成する時間的要素と型式学的特徴を提示する目的で細別編年を基軸に総括する。

**円筒下層d式**(図37-12) 胎土に纖維を混入し、内面に平滑なミガキによる器面調整が施す。口頭部文様帶に並列する縄の側面圧痕を表す点に文様構成上の特徴があり、円筒下層d式への編年的位置付けが可能な資料として理解される。

**円筒上層c式**(図37-1・図38-19・20) 隆帶で区画された口頭部文様帶に、弧状の隆帶で表す文様に縄の側面圧痕と馬蹄形の刺突文を並列多段に加える点に特徴がある。図37-1は押引手法、図38-19・20は連続刺突手法により刺突文を施し、施文手法上の相異点が指摘される。

**円筒上層d式**(図42-14) 斜行縄文を下地に幅狭の隆帶により胸骨文を表す文様構成に特徴がある。図42-14の縦位区画帶および胸骨文に箋状工具による刻目を加える。

**円筒上層e式**(図37-2・13、図38-21～23、図41-24、図42-15) 口唇部端部が尖頭状を呈し、外側が肥厚する。前段階の隆帶による文様表手法が、沈線文へと置換される点に顯著な特徴があり、両者間で共有する文様構成が随所に窺える。胸骨文の形骸化により直線的な文様構図へと転化する例が多く(図37-2、図38-22)、2条1対及び3条1対の沈線で文様を描出する。施文具と扱い方には多様性が窺われ、流動的で規制が緩やかな様相が指摘される。なお、図37-2、図38-22、図41-24は断面形態が「U」字形を呈する半截竹管を採用する。一方、図37-13、図38-21・23、図42-15は胴部文様が地文的な要素に減退し、編年的位置が円筒上層d式と円筒上層e式に共存する例である。

**樅林式**(図38-24・25) 口唇部形態が前段階の要素を継承して外端部が肥厚し、凹線により装飾を加える新出の要素が特徴的である(図38-24)。胴部文様帶には斜行縄文と横走縄文を下地に、弧線文、渦巻曲線文、渦巻懸垂文(図38-25)を表す文様構成を特徴とする。

**最花式**(図37-3・25、図38-26～29、図39-88、図41-25～30、図42-12、図43-1)

先行する渦巻曲線文・渦巻懸垂文が形骸化し、文様要素が「U」字状文、逆「U」字状懸垂文、梢円形区画文へと集約される。図37-3、図41-25・26は口唇部直下に横位沈線文および刺突列による幅狭の文様帶を形成し、胴部文様帶に逆「U」字状懸垂文および垂下文を表す。図37-3、図41-26は斜行縄文を、図41-25は縦位の条痕文を下地にする。図42-12は口縁部文様帶と同一幅の折返口縁を形成し、文様帶と同質の効果を演出する。図38-26・27、図41-28、図42-12は幅広で無文の口頭部文様帶を形成し、頸部下端に刺突列と逆「U」字状懸垂文を表す点に文様構成上の特徴がある。図38-26・27は図41-25・図42-12を典型例とする器面に対して斜行する角度で押圧する刺突文を加える類型で、図41-28の施文角度とは相異点が指摘される。図38-28・29もこの段階に編年的位置が求められ、青森市近野遺跡(青森県教育委員会 2003)に口唇部の形態や口唇部直下の無文帶等の型式学的特徴につい

て比較可能な好例がある。

**大木10式**(図37-14・24・26、図39-2～11、図41-30、図42-1～6) 「J」「C」「N」を基調とするアルファベット状の文様構成に特徴があり(図37-14・24、図39-2・6・9・10、図41-30)、胴部文様帯の下端を波状文・波頭文(図42-3)・錨状文(図39-9)で表出す特徴もある。図42-1は波状口縁の波頂部に楕円文が接続し、口縁部内面に鱗状隆起帯を垂下させる。口縁部文様帯の横位区画文が弧状区画文へと転化し、新期の様相を示す。図39-4・11は口縁部が内溝する器形に大きな特徴があり、図39-11の波頂部直下にボタン状貼付文を、波底部直下に鱗状隆起帯を加える。口縁部形態の特徴が次段階への連続性を端的に示す新出の要素として理解される。また、器面を縄文で覆う例(図37-26、図39-4・5・7・11、図42-2)には、縄文原体を縦位施文する間隔に空白が生じ、縦位の狭い無文帯を形成する施文手法上の特徴が看取される。特に図42-2のあり方が顕著であり、これにより原体の施文幅が規定される。その長さは2.2cmを計測する。

**葦塚式**(本間宏 1988)(図39-12・13、図42-4) 断面三角形の隆帯が盛行し、隆帯による区画文様や文様要素を表出す点に特徴がある。図39-12は口頭部文様帯の下端を刺突を施す横位の隆帯で区画し、図39-13は口頭部文様帯に縦に長い楕円形の隆帯文を表出す。図42-4は波状口縁に耳状突起を配し、直下に縦位の弧状隆帯を垂下する。横位の隆帯で区画する口頭部文様帯に縦位の並列する弧状隆帯を表出す。

**馬立式**(鈴木克彦 1998)(図37-27、図39-14・15、図43-7～10) 葛西勲による「螢沢3群」(葛西 1979)、成田滋彦・本間宏による「螢沢式」(成田 1981、本間 1987・1988)に相当し、後に成田は螢沢式を「弥栄平(2)式」「沖附(2)式」と改め(成田1989)、鈴木克彦が「馬立式」を提唱した(鈴木1998)。系統の異なる三角形区画文、方形区画文、曲線文を主要な文様構図とし、従属的な文様を組み合わせて幾何学的な文様を表出す点に大きな特徴がある。図37-27、図43-9・10は方形区画文系列に編入され、図37-27、図43-9は単節RLを下地に方形文を表出し、沈線の断面形が「V」字状を呈する形状から、竪状の施文具を採用するあり方が指摘される。図43-7・8は弧線文系列に編入され、図43-7は下方が開口する横位の弧線文を、図43-8は右方が開口する横位の弧線文を表出す文様構成に特徴がある。図39-14・15はともに口唇部形態が角頭状を呈する成形手法上の特徴が看取される。図39-14は純文帯と無文帯を多段に構成し、図39-15は幅狭の折返口縁下端を幅広の横位沈線で縁取り、頭部を無文帯に構成する。

**十腰内I式**(図37-3～5・16・17・28～30、図39-16～24、図40-1～11、図43-11～13)

馬立式の文様構成を継承して三角形区画文、方形区画文、曲線文を典型に、多様な文様要素を生成しながら変容する。図37-16、図39-17～19・21・22、図43-11・12は平行線文系列に編入され、口頭部文様帯に平行する数条の横位沈線文を構成する点に特徴がある。横位沈線文は2～3条1対で同時施文する例が多く、上下の横位沈線文で施文の始点と終点が連動するあり方や、施文の歪みが呼応して同じ軌跡を辿るあり方が看取される。図37-16は多条沈線文を採用し、新期のI b式新段階に出現する新出の要素である。図39-17～19・21は横帯による文様構成に特徴あり、横帯を上下に二段の単位あるいは多段に構成する例(図43-12)もある。図37-28、図39-16・20は区切幾何学文系列に編入され、条間に区切り文を配置する点に特徴がある。弧状区切り文は「」(丶)字状の線対称に配置される例(図37-28)、条間に長楕円形の構図を表出す例(図39-16・20)が窺える。なお、図37-28の器形は口縁部が

内傾する器形を特徴とする深鉢形で、青森市中平遺跡（青森県教育委員会 2009）に典型例がある。図37-4、図39-24、図40-2・4、図43-13は三角形区画文系列に編入される。図37-4は波状文を表出する例であり、三角形区画文系列の中でも新出の要素として窺える。三角形文の形骸化が生じて三角形の頂点が緩やかに曲線的になり、波状文へと変容する。図39-24、図43-13は斜行文により三角形を基調とする構図を表出する点に特徴があり、頂点で交差する斜行文により鋸歯状の構図を構成する例である。三角文が形骸化して簡易的な表出手法に転化した現象と理解される。図40-2～4は斜行文により三角形の区画文様を形成する例で、三角形を基調とする区画文様の内側に従属的な文様を配置する文様構成に特徴がある。図40-2は斜行文を、図40-3は弧線文を付加する例である。図40-1・7は方形区画文系列に編入され、方形区画文には数条の縦位沈線文により表出する例のほか、区切り弧状文を附加する例、長方形文や長楕円形文で表出する例（図40-1・7）などの表出手法上の変異が抽出される。一方、方形区画文系列の文様は方形の区画文を基本として、異系列の文様が同一個体内で共存する多様で複雑な様相が窺われる。図40-1は方形区画文の内側に三角形区画文系列の文様が共存する例である。方形区画文の内側に、多条沈線による縦位の鋸歯状文を線対称の関係に配置し、「V」字状の従属的文様を多重に充填する手法より菱形と三角形の構図を構成する。図40-1・7は方形区画文の内側に曲線文系列の文様が共存する例であり、巴状入組文を表出する。図37-5・17・29、図40-5・6は曲線文系列に編入される。曲線文系列の文様には特に多様で複雑な様相が認められ、二者の異なる文様描出手法が窺われる。一方は波状文様を基本的な構図に横位に連続して展開する描出手法であり、他方は独立する波状文の単位文様を連携させて展開する手法である。図37-5・17・29、図40-5・6は前者の描出手法により波状入組文が表出され、図37-17は付加する文様要素に弧状文を採用する。図37-30、図39-23は弧線文系列に編入され、従属的な文様要素として他の文様に付加される場合も多く、その一方で主要な文様としての独自性も維持する。図37-30、図39-23は上方が開口する横位の弧線文を多重に表出する文様構成に特徴がある。図40-11、図42-5は単軸絡条体の異方向施文により格子目文を表出する点に特徴がある。一方、図40-7は脣部文様帶に縦位の平行線文を表出する。脣部最大径を施文領域の下限とし、施文領域の構成に文様帶構成との相関関係が示されると同時に、同一の原理に基づいた型式構造が看取される。

**十腰内2式**（鈴木克彦 1996）（図37-3・7・21、図40-12・13、図43-14） 鈴木克彦の十腰内2式に相当する（鈴木克彦1996）。図37-3は広義の磨消繩文手法による区画繩文帶で入組曲線文を表出する点に特徴があり、入組曲線文の軌跡に付随して連続刺突文を加える。図40-12、図43-14は頸部が屈折する器形に特徴があり、幅広の口頭部文様帶を形成する。図40-12は繩文帶と無文帶を多段に、図43-14は無文に構成し、図43-14は屈折する頸部に幅狭の繩文帶が回繞される。図40-13は口唇部端部に繩を回転施文し、口縁部文様帶に繩文帶を形成する例であり、口唇部直下と繩文帶に条方向の異なる繩文を表出する特徴が看取される。図37-7は口縁部が内済して聞く器形と口唇部内面の肥厚が突出する点に特徴があり、この段階に編年の位置が求められる。

**十腰内V群土器** 鈴木克彦は共伴事例と型式学的検討に基づいた十腰内編年の細別階梯を提示するとともに、十腰内V群土器について「十腰内5a式」「十腰内5b式」「十腰内5c式」の細別案を示し、十腰内5式に後続する型式に「風張式」「大湊近川式」「十腰内6式」の変遷過程を提倡した。これに対し、関根達人は十腰内V群土器について5階梯の細別変遷（第2期～第6期）を提示し、仙台湾周辺

の編年との対比を視野に「馬場瀬段階(第2期)」「中屋敷段階(第3期)」「滝端段階(第4期)」「未命名段階(第5期)」「駒板段階(第6期)」の階級設定を提起すると同時に、十腰内V群土器に型式名称を準用する立場に批判的な見解を主張する。一方、小林圭一は仙台湾周辺の研究史を整理する中で瘤付土器について4階級の細別変遷を提唱し、田柄貝塚の層位的事例に準拠した田柄編年を追認した。このうち瘤付土器第II段階から瘤付土器第IV段階が十腰内V群土器に対比される見解を提示しつつも、関根の見解と同様に十腰内V群土器に型式名称を準用する姿勢は示していない。さらに、鈴木克彦と関根達人・小林圭一の見解には十腰内V群土器の時間的位置付けと型式内容に異同があり、統一的見解が得られていない。型式名称が未確定のままに議論が進行している現状において、型式構造を広域的空间で通時的あるいは共時的に明示する小林圭一の細別編年に準拠する。

**瘤付土器第II段階**(小林圭一 1999)(図37-6、図40-14、図41-3・4、図42-6・7、図43-15・16)(図37-20・34、図38-1～3・5、図41-5～9、図42-9、図43-21～24) 編年の位置が十腰内V群土器に編入され、鈴木克彦による「十腰内5式」から「風張式」(鈴木 1998)、関根達人による「中屋敷段階」から「滝端段階」(関根 2005)の細別編年に相当する。図37-6・図42-6は弧状の帶状文による櫛掛状文の構図が窺われ、貼瘤手法が低調である点を加えて考慮すると、編年の位置が古段階に求められ、「十腰内5b式」「十腰内5c式」に編入される。図43-15は波状口縁の波頂部に鋭角的な突起を配し、内面が肥厚する。突起直下に弧状線文を表出し、古段階に特徴的な要素である。また、この段階は貼瘤手法が盛行する型式学的特徴があり、貼瘤文が口縁部・頸部・屈曲部・胴部の文様帶に多用され、貼瘤文の形態が直径5～10mm程度の小粒を呈する特徴も看取される(図40-14、図42-7)。文様帶には入組帶状文と弧線文を表す例が多く、文様の幅が減少して幅狭の帶状文に転化し、同様に、幅狭の繩文帶とともに無文帶と交互に多段化する文様構成が顕著になる。図41-3、図43-16は繩文帶が開続される例であり、図41-3の繩文帶に羽状繩文を施す。図41-4は器面を斜行繩文で覆う壺形の胴部で、この段階以降に編入される。図37-20・34、図41-5・6・9、図42-9、図43-21・22・24は口縁部が内湾する器形を呈し、口唇部端部の形態が内側に傾き、内面が肥厚する成形手法上の特徴が看取される。古期に特徴的な要素を端的に示し、編年の位置が「十腰内5式」段階に編入される。一方、図38-1～3・5、図41-7、図43-23は口唇部端部の形態が内側に傾き、内面の肥厚が減退する特徴が看取される点において新相を示す。胎土の質性とともに、図23-31・33・37と時間的同時性を示唆する型式学的特徴として理解される。大川添(1)遺跡第2号堅穴住居跡出土土器が瘤付土器第II段階の好例となる(第2章第3節第2項参照)。

**瘤付土器第III段階**(小林圭一 1999)(図40-15、図42-1) 鈴木克彦による「大湊近川式」「小井田4式」(鈴木 1998)、関根達人による「未命名段階(第5期)」(関根 2005)の細別編年が併行する階級に相当するが、型式を構成する要素に地域的な異同があり、東北地方での広域な対比と実態の解明に課題を残す。図42-1は口頸部が外反する器形を呈し、連続した波状縁に二山状の台形突起が配され、波頂部直下にボタン状貼付文と円錐形貼瘤文が付加される。口縁部文様帶に2段の刻目帯を設け、頸部文様帶には単段の右傾する入組帶状文と縦位に連繋する入組帶状文とが結合し、入組帶状文の咬合部が三叉状に彫去される。屈曲部の刻目帯には横長の貼瘤文が付加され、体部を無文に構成する。図40-15は屈曲部の刻目帯に短沈線を施す横長の貼瘤文を付加する例である。

**瘤付土器第IV段階**(小林圭一 1999)(図37-9・22・32・33、図38-11・12、図40-16～19、図41-14・15、

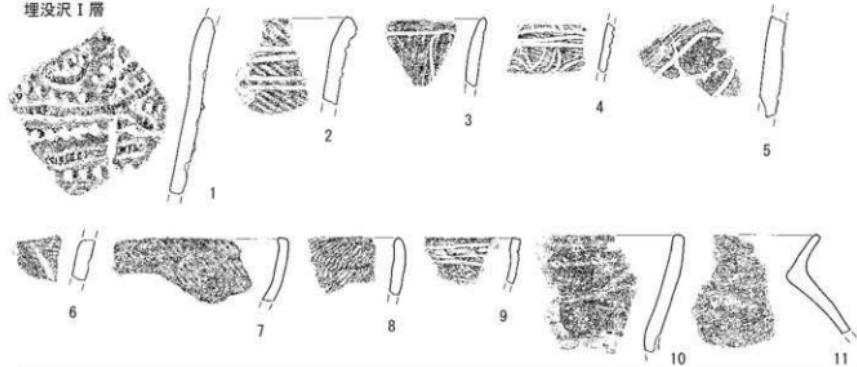
図42-13、図43-17～20 鈴木克彦による「駒板式」・「家ノ後式」・「十腰内6式」(鈴木 1998)、関根達人による「駒板段階(第6期)」(関根 2005)の細別編年に相当する。図37-9・32・33、図40-16、図43-17・20は入組帶状文が展開する例である。図37-9は口縁部文様帯に断続した短沈線が圍繞され、頸部文様帯に右傾の入組帶状文が展開する例で、瘤付土器第IV段階～大洞B1式に編入される。図37-33は波状口縁の波頂部に台形突起を配し、深い刻目により二山状の頂部を呈する。口縁部文様帯に繩文帯が圍繞され、頸部文様帯には右傾の入組帶状文と縦位に連繋する入組帶状文とが結合する。図43-17は口唇部直下に右傾する入組帶状文の起点が連絡する。図43-20は屈曲部に断続した短沈線が圍繞され、右傾の入組帶状文の起点を僅かに残置する。また、図40-17は下方が閉じる半月状の弧状線文を表出する例で、文様帯に連続して展開する文様構成が想定される。図41-14・15は波状口縁に台形突起を配し、左右の両端を「八」字状区画により縫取る。台形突起の直下には、14に三叉状彫去を、15に玉抱三叉文を施し、瘤付土器第IV段階～大洞B1式に編入される。図37-22は口縁部が横位沈線で区画され無文帯を構成する例で、図40-18、図43-18は頸部文様帯が繩文帯で区画される文様帯構成が窺える例である。一方、瘤付土器第III段階には無文化の現象が現れ、特に台付浅鉢形や注口土器に顕著に窺われる。図42-13は口頭部文様帯が無文化され、図37-19、図41-19の口縁部形態の型式学的特徴に同一性が窺われ、編年の位置付けに同時性が求められ、瘤付土器第IV段階～大洞B1式に編入される。図38-11・12、図43-19は台付浅鉢形で、図38-12は凸脣部が球状に緩く張り出し、裾部が外傾して底面に接する。この段階への編入が可能であろう。

#### 瘤付土器第II段階以降の粗製土器(図38-4・6、図41-10～13、図42-8・10・11、図43-25～27)

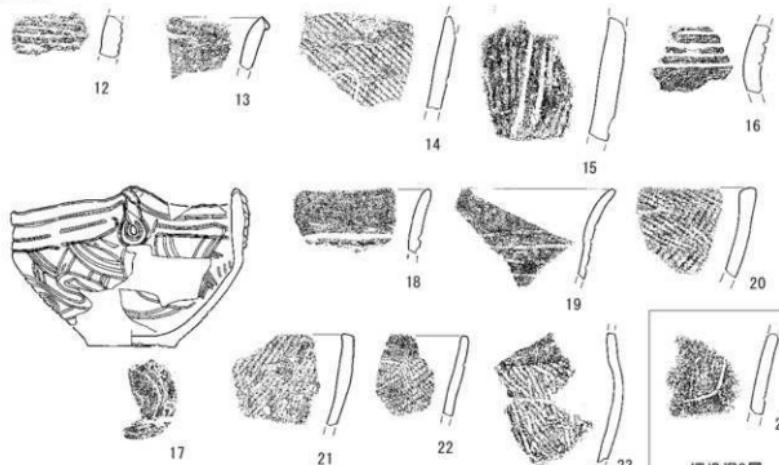
口唇部端部の形態が角頭状に変容する様相から新出の要素として窺え、胎土に径2～5mm程度の粗粒砂を多く混入する質性を備え、条方向を逆えて施文する特徴的な例も看取される。口縁部の形状や器形、胎土の質性には変異が看取され、異なる階梯に細別される変遷序列が予測され、型式学的特徴に基づく分析と同時に、層位的事例と共伴事例に準拠した編年の位置付けの確定が重要な課題である。大洞B式(図37-10・11・19、図38-13～17、図41-16～22、図43-28) 図41-17・18は口縁部が小波状を呈し、図41-17の口縁部文様帯には断続した短沈線が圍繞され、図41-18には入組帶状文が展開し、古期の様相を示す。図38-13・15、図41-16は口頭部文様帯に魚眼状三叉文を表出する例で、魚眼状三叉文の構成に変異が窺える。図38-13は中心文様の円文を三叉文が、図38-15は中心文様の円文を長い主軸の両端が共に開く三叉文が、図41-16は下閉じの半円文を三叉文が開う例である。図37-10、図38-16、図41-19は口頭部文様帯に入組三叉文を表出する例であり、図37-10は咬合部に接点の存在しない入組三叉文を加える。また、図41-19は口頭部文様帯に3条の平行沈線が圍繞された平行線文を表出し、直下に咬合部に接点の存在しない入組三叉文が展開し、図37-19の文様構成に類似する。図38-14三山状突起の直下に三叉状彫去を配し、下位に平行沈線が圍繞される例である。図38-17、図41-20～22、図43-28は粗製の深鉢形で、図38-17に刻目による三山状突起を、図41-20に小山形突起を配する。

**大洞C式**(図37-23、図38-18、図41-23) 図37-23、図38-18は頭部直下が内折し、無文帯を構成する装飾性の乏しい口頭部文様帯に特徴があり、図41-23は底部直上を横位沈線で画す。ともに大洞C<sub>2</sub>式に編年の位置が求められる。

## 埋没沢1層



## 埋没沢6層



## 埋没沢9層

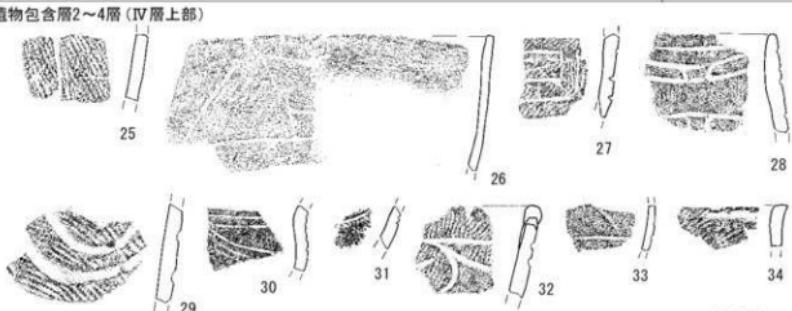


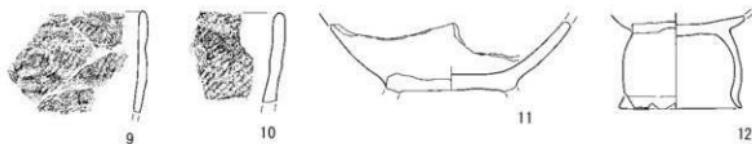
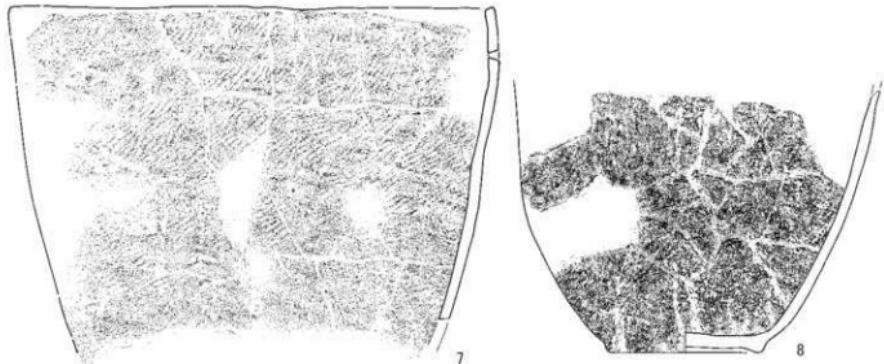
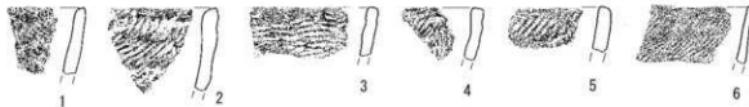
図37 遺物包含層出土土器(1)

(S=1/3)  
10cm

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路

遺物包含層2~4層

(IV層上部)



遺物包含層8層上部 (IV層下部)

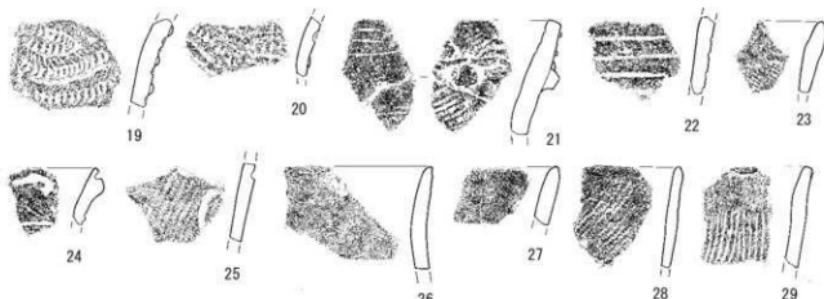


図38 遺物包含層出土土器(2)

0 (S=1/3) 10cm

遺物包含層8層上部(IV層下部)

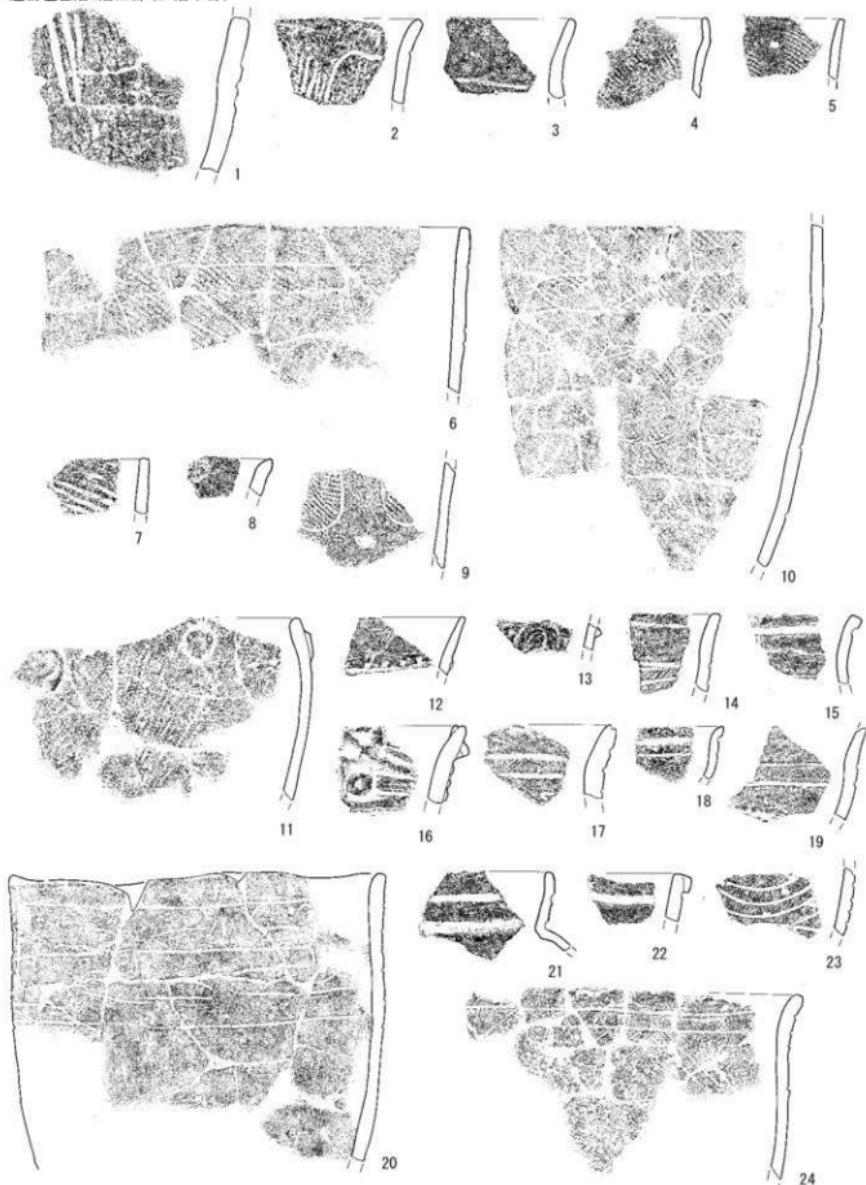


図39 遺物包含層出土土器(3)

0 (S=1/3) 10cm

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路

遺物包含層8層上部 (IV層下部)

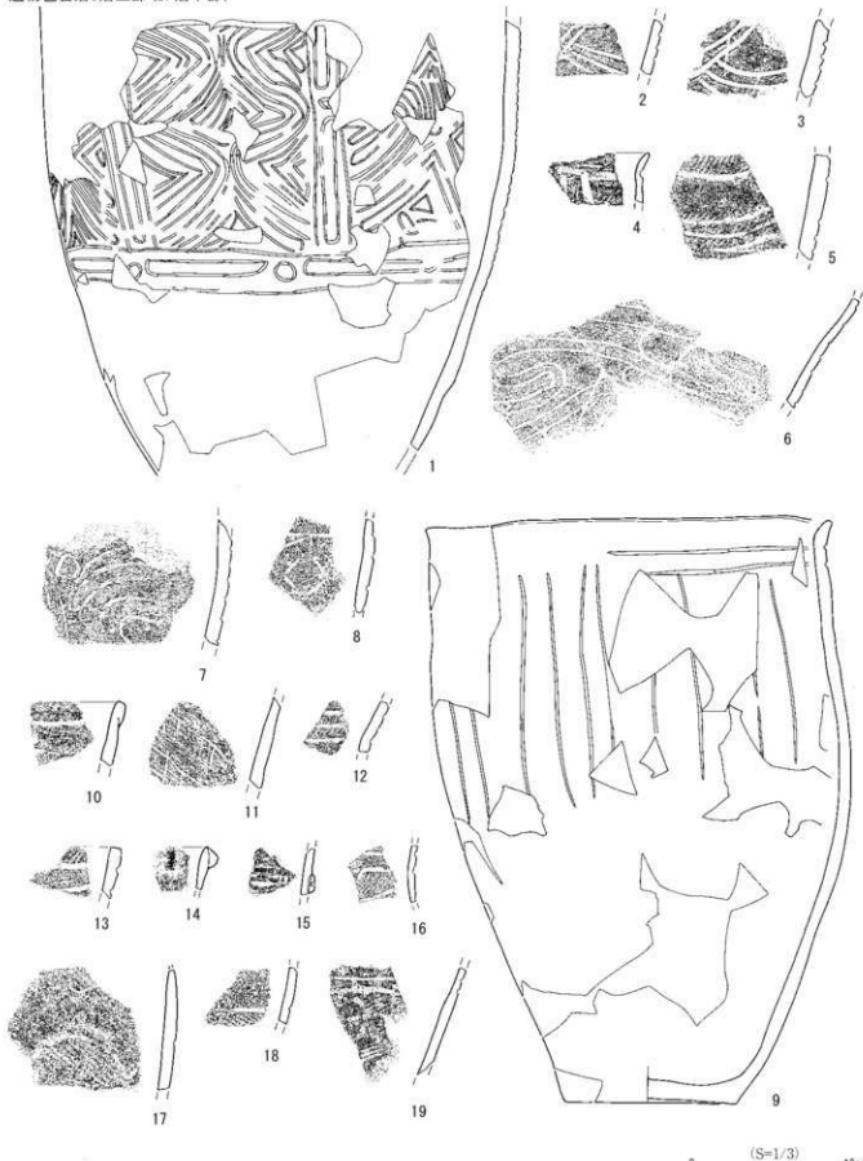


図40 遺物包含層出土土器(4)

0 (S=1/3) 10cm

遺物包含層8層上部(IV層下部)

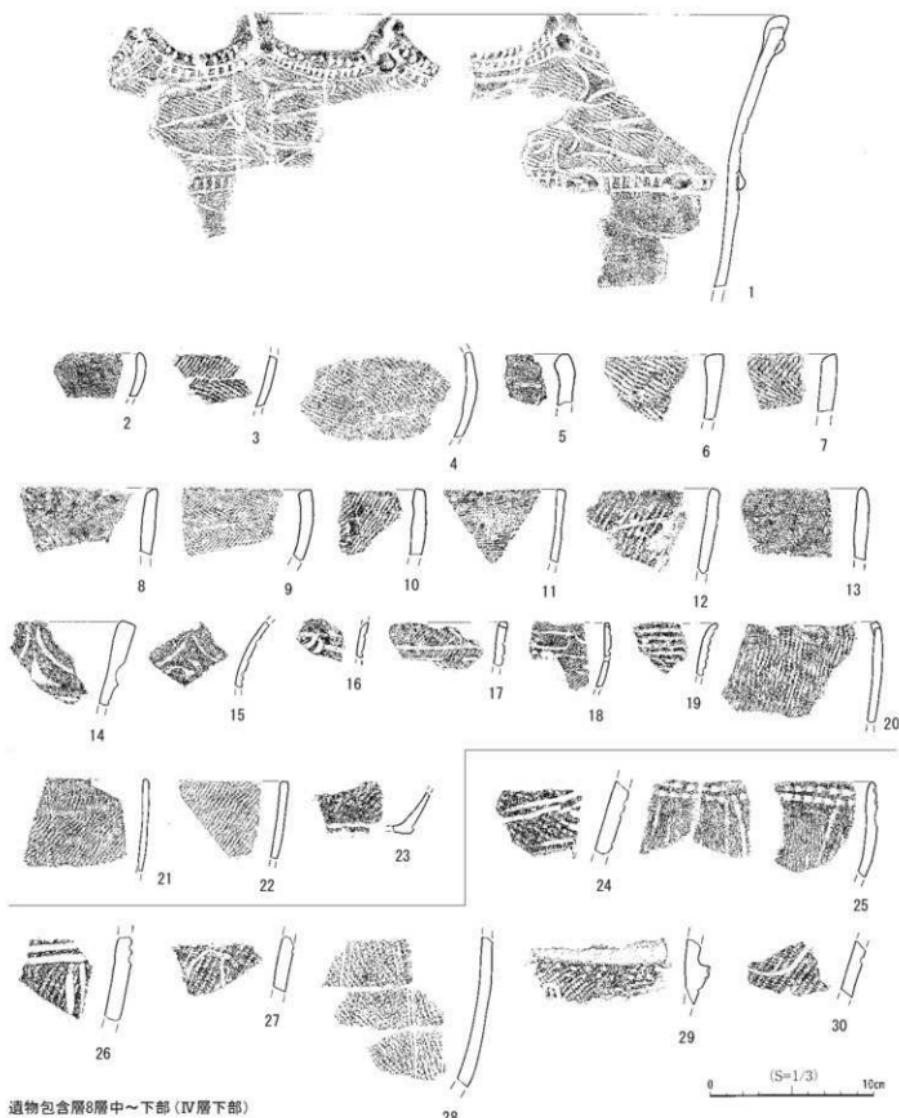
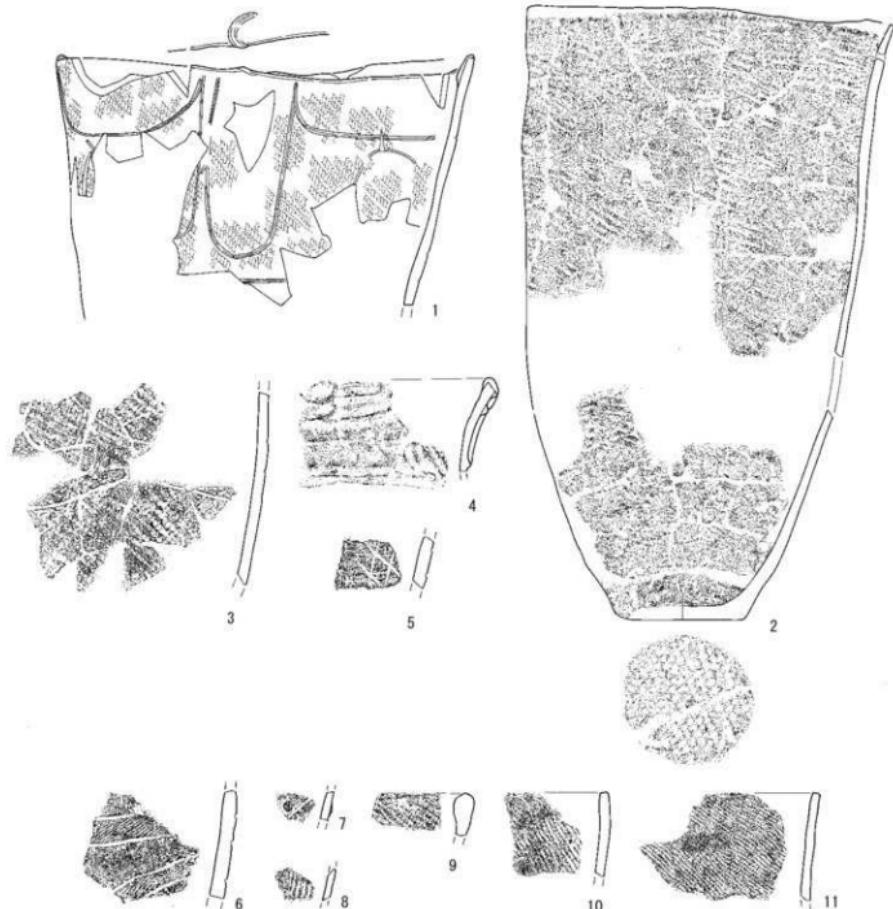
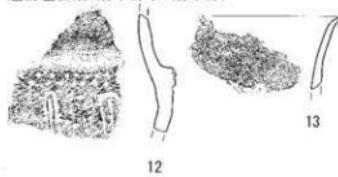


図41 遺物包含層出土土器(5)

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路  
遺物包含層8層中～下部(IV層下部)



遺物包含層8層下部(IV層下部)



遺物包含層8層(IV層下部)



0 (S=1/3) 10cm

図42 遺物包含層出土土器(6)

遺物包含層8層(IV層下部)

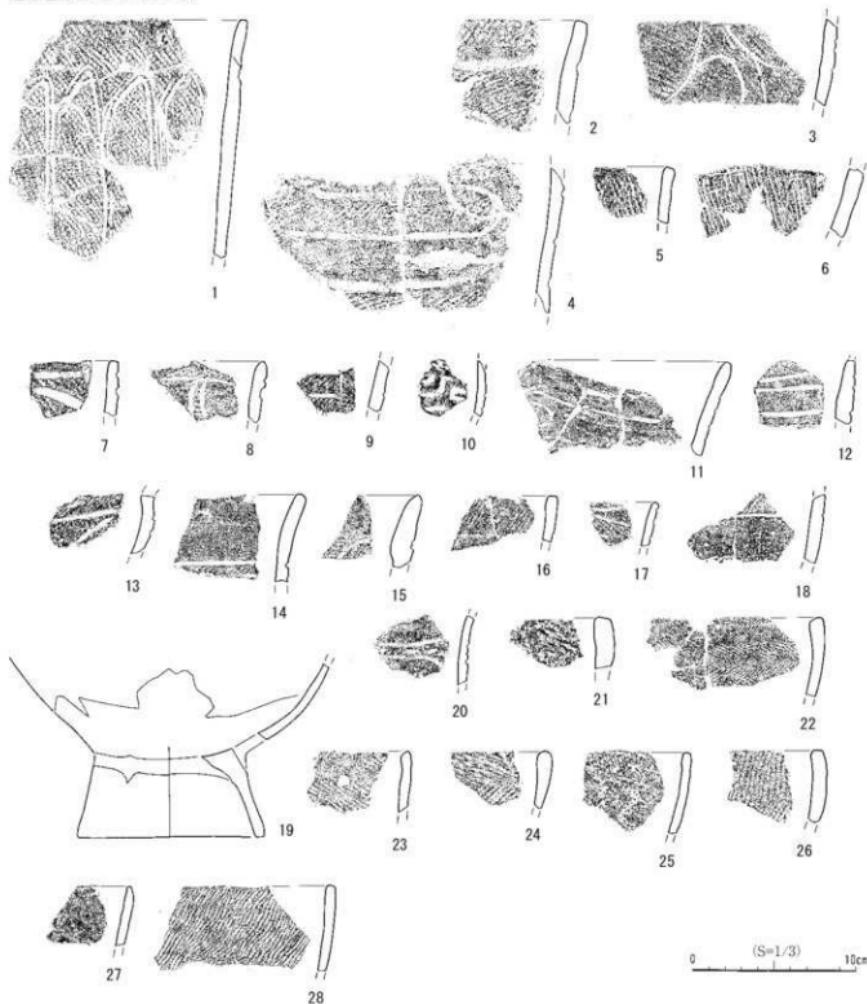


図43 遺物包含層出土土器(7)

## 2. 遺物包含層出土石器 (図44~図46)

調査の結果、埋没沢及びその右岸の遺物包含層から出土した石器は合計164点であり、その器種組成の内訳は、石錐14点、石籠1点、搔器1点、削器15点、二次加工剥片19点、微細剥離痕を形成する剥片11点、石核8点、剥片84点、敲石9点、磨石1点、石皿1点である。層位別の出土点数は、基本層序第I層7点、第IV層上部相当の第3・4層11点、第IV層下部相当の第8層上部111点、同層中部29点、同層下部2点、埋没沢第6層4点と、第8層上部が主要な割合を占め、土器の出土傾向とも相関する。しかし、出土層準の二次的な形成過程を考慮すると、編年的位置付けの提示には限界がある。また、器種組成に関して楔形石器とその関係資料が不在な点が特に注意され、技術的諸属性に両極打法による剥片剥離、二次加工等が普遍的に内在する技術的基盤において、異質な様相を示す。これと同質の様相は周辺遺跡においても同様に看取され、珪質頁岩の入手と運用に適した石材環境下での近傍地石材の性状に適応した石材消費過程の側面を反映する事象として解釈される。

### 石錐(図44-1・2)

石錐は合計14点の出土で、未製品2点が含まれる。石材はいずれも珪質頁岩を選択する。1・2は二次加工の主要な目的が錐部の作出に特定され、素材剥片の一端に錐部を作出する点を特徴とする。1は折損する長横剥片を素材に左側縁の一端に錐部を細身の形態に作出す典型的な例で、2は矩形剥片の点打面を呈する打面側を錐部に選択する。

### 石籠(図44-3)

石籠は合計1点の出土で、石材に珪質頁岩製を選択する。裏面に素材剥片の腹面を僅かに留めており、横長剥片を素材に選択する製作工程が窺える。両面調整により左右対称となる楔形の形態を呈し、表面側の二次加工は右側縁に特定される。求心的な二次加工により低弧形の刃部を形成し、側面の形態が嘴状を呈する。

### 搔器(図44-4)

搔器は合計1点の出土で、石材に珪質頁岩を選択する。矩形剥片を素材とし、素材剥片の末端に刃厚の薄い緩斜度の刃部を形成し、刃部の平面形は低弧形を呈する。

### 削器(図44-5~10)

削器は合計15点の出土であり、選択される石材は珪質頁岩の占める割合が圧倒的に高く、カルセドニーが僅かに1点含まれる。刃部を構成する二次加工の進行度合い及び刃部の強度により、製作過程の形態と完成形態の識別が困難な場合が多く、素刃の刃部を形成する例もあり、刃部再生や維持管理を含めた変形過程の分析とともに今後の課題となる。削器は刃部の形態や素材剥片に施す二次加工の位置等に変異が認められ、この属性を分類の基準にする。図44-5~8は素材剥片の一側縁に刃部を形成する点を特徴とする。図44-5は縦長剥片を素材とし、その左側縁に直線的な刃部を、図44-7は矩形剥片を素材に、その末端縁腹面側に湾曲する刃部を作出する。なお、図44-5の打面に接する上端に石核の頭部調整が認められる。図44-6は矩形剥片を素材とし、右側縁に背面側と腹面側で交互に錯交する緩やかに湾曲する刃部を作出する。図44-8は矩形剥片を素材に、左側縁の背面側と腹面側に二次加工を交互に施し、凸形の刃部を作出する。左側縁及び末端縁には、背面側と腹面側からの断続的な二次加工が認められる。図44-9・10は左右二側縁に刃部を作出する複式削器である。図44-9は矩形剥片を素材とし、その左右二側縁に湾曲する刃部を、図44-10は左右二側縁の腹面側に

湾曲する刃部を作出する。なお、図44-10は下半部を折損する。

#### 二次加工剥片(図44-11・12)

二次加工剥片は合計19点の出土で、石材はいずれも珪質頁岩を選択する。二次加工の頻度、規格性及び連続性が低く、明確な刃部を形成していない点を特徴とし、これを器種の分類基準とする。二次加工剥片の多くは、二次加工の部位や剥離の構成から削器の製作途上に位置付けられる可能性が高い。図44-11は部厚い矩形剥片を素材とし、末端に求心的な二次加工を施す。搔器の製作途上とも考えられる。図44-12は左右二側縁に抉状の二次加工を施し、左側縁の下半に微細な剥離痕を形成する。

#### 微細な剥離痕を形成する剥片(図44-13・14)

微細な剥離痕を形成する剥片は合計11点の出土で、石材はいずれも珪質頁岩製である。銳利な縁辺を付帯する剥片を素材に選択し、機能部位における剥離痕の形成密度や度合に差異がある。図44-13は左側縁に、図44-14は左右二側縁に微細な剥離痕を形成する。図44-13の背面に剥片剥離工程において稜形成調整が実施された工程が看取され、剥片剥離技術を考察する上で注目される。

#### 石核(図45-1・2)

石核は合計8点の出土であり、いずれも珪質頁岩を石材に選択する。図45-1は剥片素材の両設打面石核で、素材剥片の縁辺を打面に設定する。素材剥片の背面側と腹面側の両面において並列に剥片剥離作業が進行し、小形の矩形剥片を主要に剥離生産する。図45-2は多打面石核である。六面体状の形態を呈し、打面と剥片剥離作業面の位置関係が固定化されず、石核と剥片剥離作業面の形態に応じて打面を設定し、90度あるいは180度に打面の転移を反復して剥片剥離作業が進行する。剥片剥離作業面にはヒンジフラクチャーを呈する剥離面が最終的な剥離面となる場合が多く、これが打面と剥片剥離作業面の転移、並びに石核の廃棄に大きな要因として関与している可能性が示唆される。

#### 敲石(図45-3～7、図46-1～3)

敲石は合計9点の出土であり、選択される石材は凝灰岩が6点と主要な割合を占め、これに砂質凝灰岩1点、流紋岩1点、珪質頁岩1点が続く。素材礫の形態、敲打の機能部位、敲打痕の度合いと状態を分類の基準にする。図45-3は珪質頁岩の亜角礫を素材とし、素材礫の棱に帶状の敲打痕が形成される例であり、敲打の衝撃に伴う大きな剥離痕を形成する点にも特徴が窺える。図45-4、図46-2・3は球形礫を素材とする例であり、敲打痕が素材礫の広い領域に形成される特徴がある。図45-5～7、図46-1・5は扁平な梢円礫、棒状礫を素材とし、主要な機能部位を石材の表裏両面に選択する例である。機能部位が局所的で、敲打痕を表裏両面に形成する点に特徴があり、局所的な敲打により敲打痕が凹部を形成する場合が多く、素材礫の側縁も機能部位に選択する例(図45-6、図46-1・5)も窺える。

#### 磨石(図46-4)

磨石は合計1点の出土であり、石材に緑色凝灰岩を選択する。円形を呈する扁平な礫を素材とし、その平坦な表裏両面を機能部位に設定し、磨痕に付随して敲打痕を形成する。同時に側面の棱を敲打の機能部位に設定する。

#### 石皿(図46-6)

石皿は合計1点が出土した。図46-6は緑色凝灰岩製の大形の無縁石皿で、石材の備える平坦な形態を利用し、敲打整形により機能部位を形成する。「場所備え付け道具」の性格が想定される。

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路

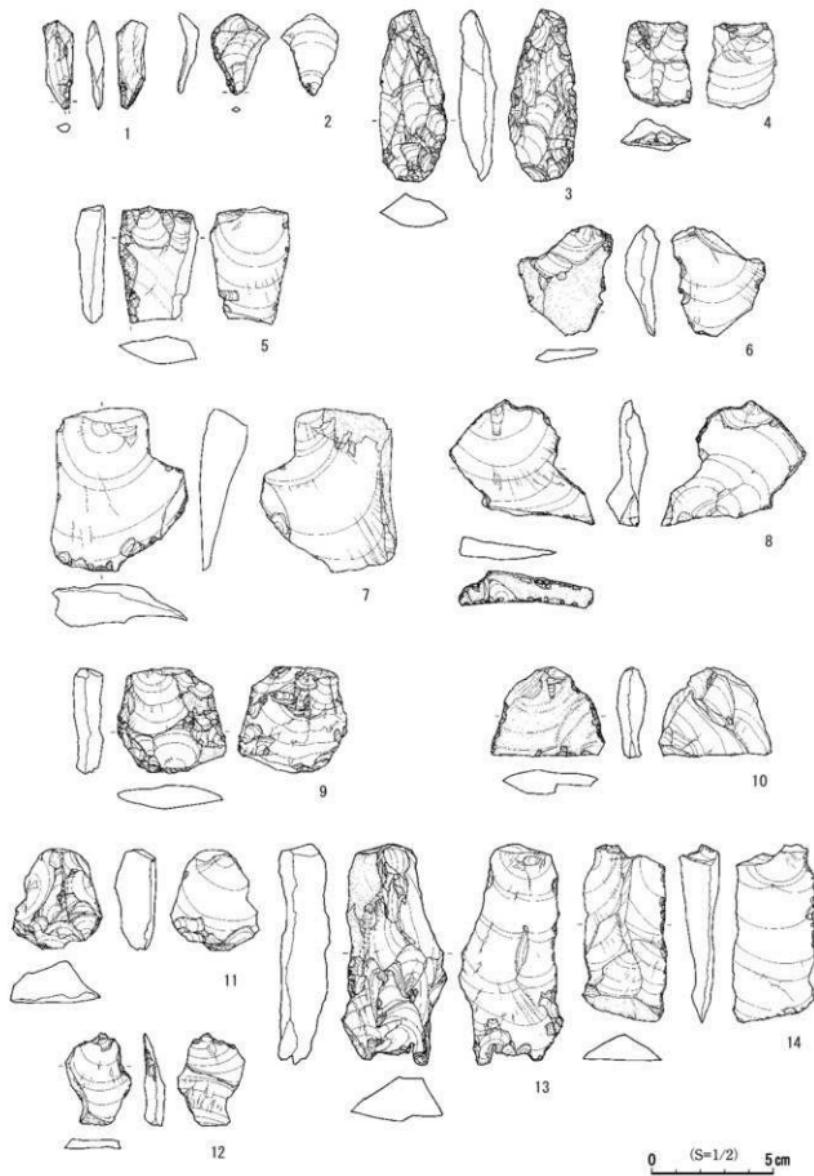


図44 遺物包含層出土石器(1)

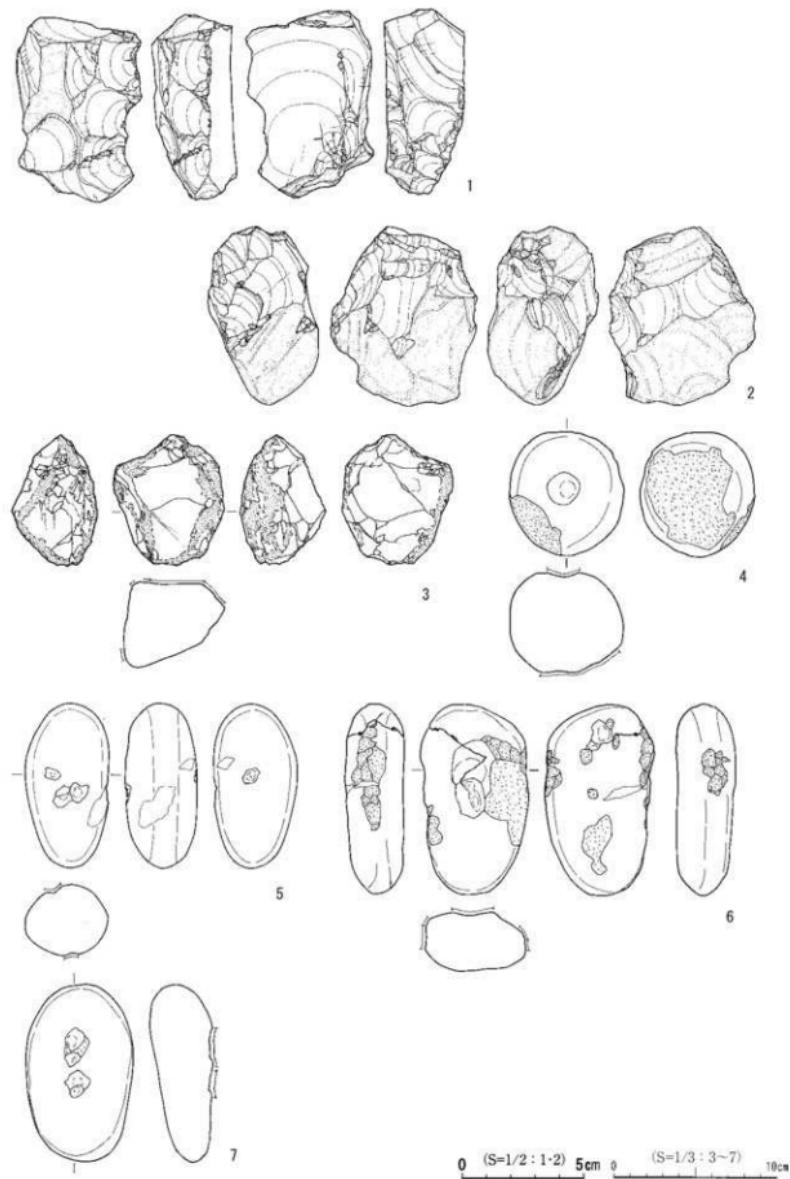
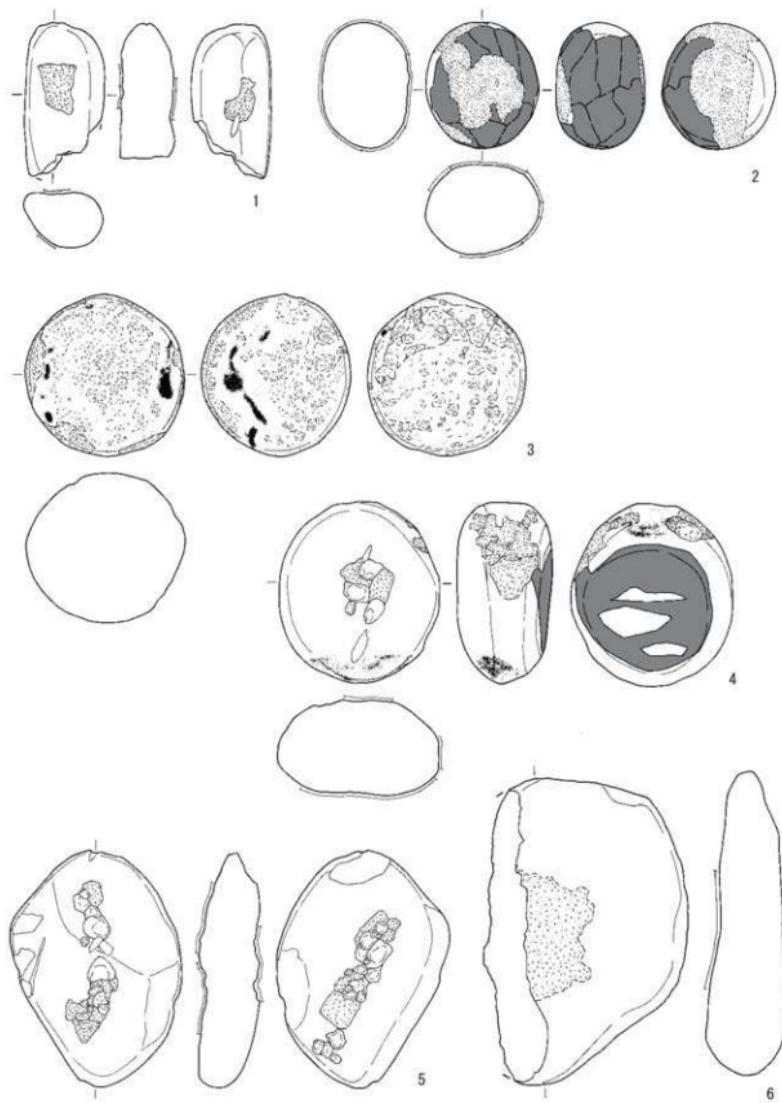


図45 遺物包含層出土石器(2)

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路



0 (S=1/3 : 1~5) 10cm 0 (S=1/6 : 6) 20cm

図46 遺物包含層出土石器(3)

## 第4章

# 芦沢(1) 遺跡



トレンチ作業風景(南西から)

## 第4章 芦沢(1)遺跡

### 第1節 調査方法と整理方法

#### 1 発掘作業の方法

平成21年度当初、5月から調査を開始する予定であった水上(2)遺跡が、美山湖の水位の上昇に伴い調査ができなくなったことから、急遽6月から8月までの間と11月に芦沢(1)遺跡の確認調査を実施した。

平成22年度は、未調査範囲の確認調査と遺物が出土した区域を拡張し発掘調査を行った。発掘作業の方法については、平成21年度を基本として平成22年度も同様に行った。

##### (1)測量基準点・水準点の設置

測量基準点は、津軽ダム工事事務所の津軽ダム貯水池用地実測図から、現存する用地杭K381(X=58572.083・Y=-50121.336)と067(X=58560.558・Y=-50127.703)を基準として座標を設定した。レベル原点は、津軽ダム工事事務所が設置した水準点BM.3(地盤高194.165m)を与点として設置し、必要に応じ実測基準点から移動して使用した。平成22年度も基準点及び水準点は継続して使用した。

調査終了後、基準点として使用した用地杭と津軽ダム工事事務所の3級基準点H12 NO.6(X=58612.522・Y=-50549.407)の間で、Xが北に310.940・Yが西に302.145の誤差があることが判明し各測量基準点の訂正を行った。

##### (2)基本土層

遺跡の基本土層については、表土から順にローマ数字を付けて呼称している。なお、田畠の造成や住宅基礎の撤去などにより一部削平や盛り土が行われており、欠落する層が見られる。

##### (3)確認調査トレンチの設定・調査

平成21年度の確認調査トレンチは、規模を任意に決め、調査区全体にわたって調査ができるよう設定した。表土からの掘り下げは人力を主体としたが、遺構・遺物に支障がない部分は、重機を併用して省力化を図った。また、出土した遺物は、適宜トレンチ単位で層位毎に取り上げた。トレンチ配置図等の平面図は、主に「遺構実測支援システム」(株式会社CUBIC)を用いてトータルステーションによる測量で作成した。基本土層等の断面図は、簡易造り方測量等で縮尺1/20で作成した。

平成22年度は、終了できなかった区域に確認調査トレンチを設定し、遺物が出土した区域は範囲を拡張して行った。

##### (4)写真撮影

写真撮影は、35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及びデジタルカメラを併用し、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託し行った。

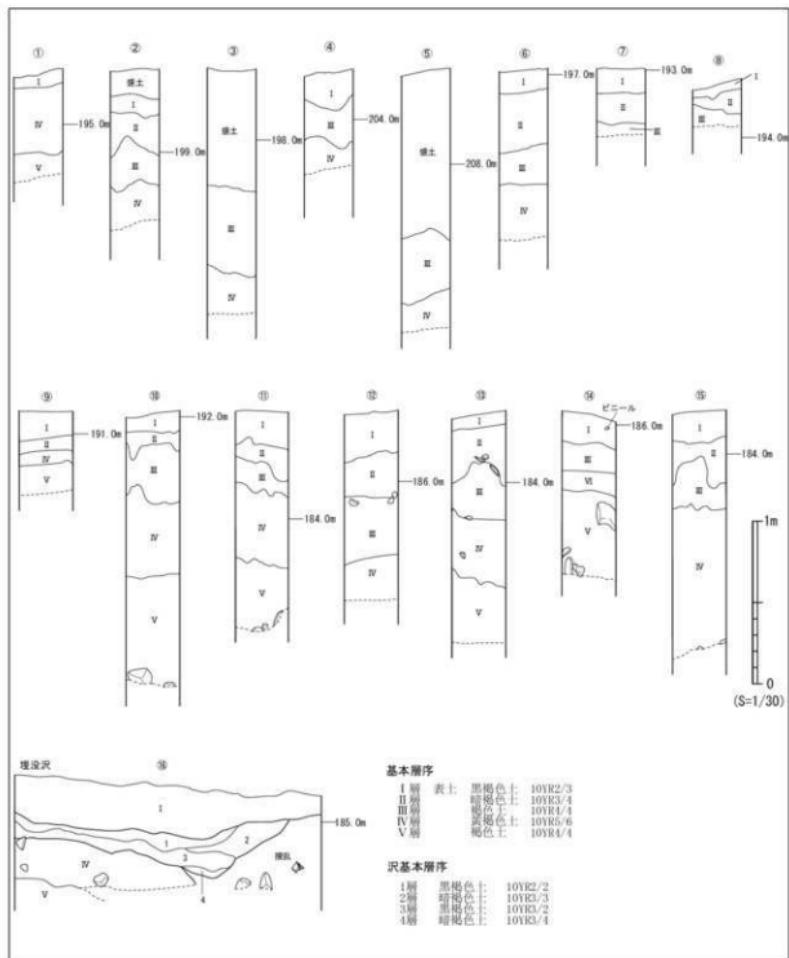


図47 基本層序

## 2 整理・報告書作成作業の方法

平成21年度整理作業は、確認調査の結果を踏まえて、今後の調査や周辺の遺跡との関連性などに重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。平成22年度の発掘調査が終了した時点で、関係者と協議し、今年度の調査成果を、平成21年度の調査に含め埋蔵文化財調査報告書として刊行することになった。

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路

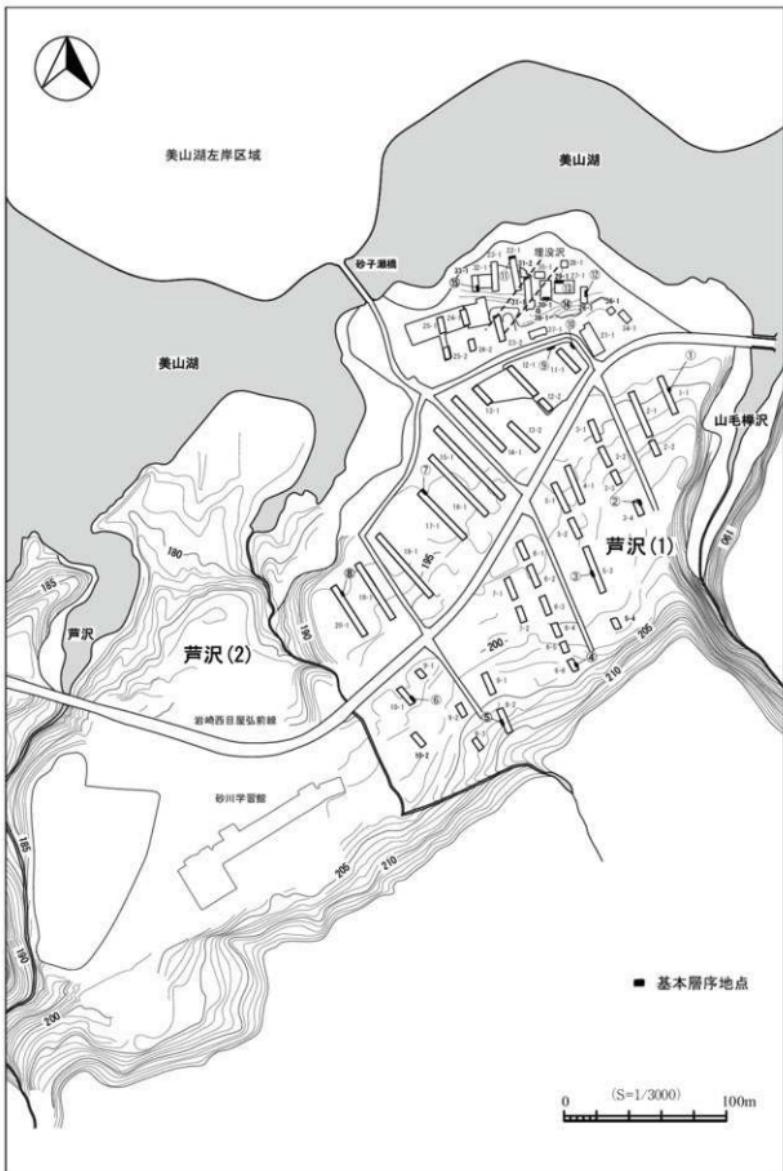


図48 トレンチ配置図

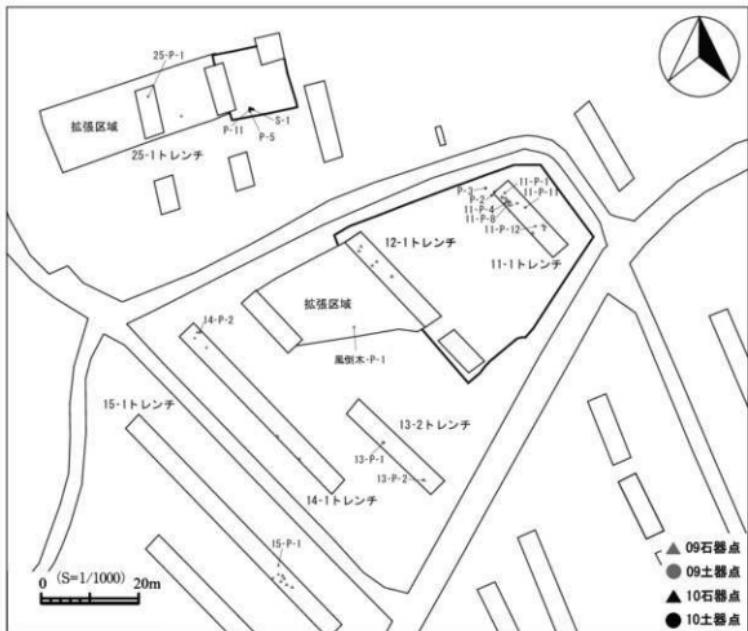


図49 遺物出土状況

#### (1) 図面類の整理

トレンチ配置図等の平面図は、主にトータルステーションによる測量で作成したので、原図や地形測量図と合成するなどの図面調整を行った。また、基本土層図等の断面図は、各区において土層番号が異なる不具合があったため、整合性を持たせながら柱状図を作成するなどの図面調整を行った。

#### (2) 写真類の整理

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは、トレンチ番号順、遺物出土状況、作業状況などに整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

#### (3) 遺物の洗浄・注記と接合・復元

洗浄・注記を行った後、トレンチ配置図をもとにしながら接合・復元作業を行った。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。

#### (4) 報告書掲載遺物の選別

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺存状態が良く、同類の中で代表的な資料、所属時代・時期・型式・器種等の分かれる資料等を主として選別した。

#### (5) 遺物の観察・図化

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

#### (6) 遺構・遺物のトレース・版下作成

遺物の実測図やその他挿図のトレースは、手作業と「トレースくん」(株式会社CUBIC)を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、手作業とデジタル機器による作業を併用した。

## 第2節 調査と整理の経過

### 1 発掘作業の経過

(平成21年度)

- 5月21日 津軽ダム関連打ち合わせ会議において、美山湖の増水によって水没した水上(2)遺跡の調査体制を6月から芦沢(1)遺跡の確認調査を移行して実施することになった。
- 6月3日～5日 芦沢(1)遺跡の県道南側区域に確認調査トレンチの設定を行う。
- 6月9日～16日 芦沢(1)遺跡の県道南側区域を重機による表土処理を行う。
- 6月19日 調査用ブレハブ等を設置する。
- 6月23日～ 調査機材等を砂子灘遺跡から搬入し確認調査を開始する。
- 7月17日 ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施する。
- 7月30日・31日 芦沢(1)遺跡の県道北側部分の草刈りと共に確認調査トレンチを設定する。
- 8月4日 芦沢(1)遺跡の県道北側を重機による表土処理を行うが、5日午後に水道管を破損したため、後重機を使用せず人力による確認調査を実施することとなった。
- 9月4日 水上(4)遺跡の調査が開始されるため、その準備で芦沢(1)遺跡の確認調査を一時中断する。
- 9月18日 調査用ブレハブ等を撤去する。
- 10月22日 芦沢(1)遺跡の県道北側の調査を11月から再開するため、午後から重機による表土処理を行う。
- 10月29日 調査用ブレハブ等を設置する。
- 11月4日～ 調査機材等を砂子灘遺跡から搬入し確認調査を再開する。
- 11月13日 発掘器材等をセンターに搬出し、今年度の調査を終了した。

(平成22年度)

- 5月6日 現場開始日、調査器材等を搬入し周辺の整備を行った。
- 5月11日 前年度調査したトレントを拡張して、人力による粗掘りと遺構確認作業を開始した。前年度遺物が出土し、遺構の可能性のある落ち込みが確認されていた調査区域は、工事用の雪捨て場とされ、雪と土砂により泥化していた。重機による除去を試みたが、無駄に掘り返すこととなるため、改善されるまで調査を延期することとした。
- 6月8日～11日 遺構の可能性のある調査区域に重機が作業できる状態になったことから、表土処理作業を開始した。

- 6月15日 重機による表土処理区域の遺構確認作業を行うが、遺構は検出されなかった。
- 7月29日 調査器材を水上(2)遺跡に搬出した。
- 7月31日 ブレハブ等を撤去し、芦沢(1)遺跡の発掘調査を終了した。

## 2 整理・報告書作成作業の経過(平成21年11月～23年3月)

- 21年11月～ 写真類の整理作業、図面類の整理作業、遺物の洗浄・注記作業を行った。
- 22年4月～ 遺物の接合・復元作業を行った。同時に報告書掲載遺物の選別作業を行い、遺物観察表の作業も併せて行った。
- 10月～ 報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。
- 11月～ 遺構図や図化作業が終了した遺物から順次トレースを行った。
- 12月～ 遺構・遺物は、印刷用の版下を作成した。同時に写真図版の作成も行った。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。
- 21年11月～ 写真類の整理作業、図面類の整理作業、遺物の洗浄・注記作業を行った。
- 22年4月～ 遺物の接合・復元作業を行った。同時に報告書掲載遺物の選別作業を行い、遺物観察表の作業も併せて行った。
- 8月～ 平成21年度の報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。
- 10月～ 報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進め、平成22年度出土遺物を搬入し、遺物の洗浄・注記作業を行った。
- 11月～ 遺構図や図化作業が終了した遺物から順次トレースを行い、平成22年度出土遺物の接合作業や報告書の掲載遺物の選別作業を行い、図化・観察を行った。
- 12月～ 遺構・遺物は、印刷用の版下を作成した。同時に写真図版の作成も行った。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。
- 23年1月～ 原稿・版下が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者へ入稿した。
- 3回の校正を経て、報告書を刊行した。最後に記録類・出土品の収納をした。



作業風景(北から)

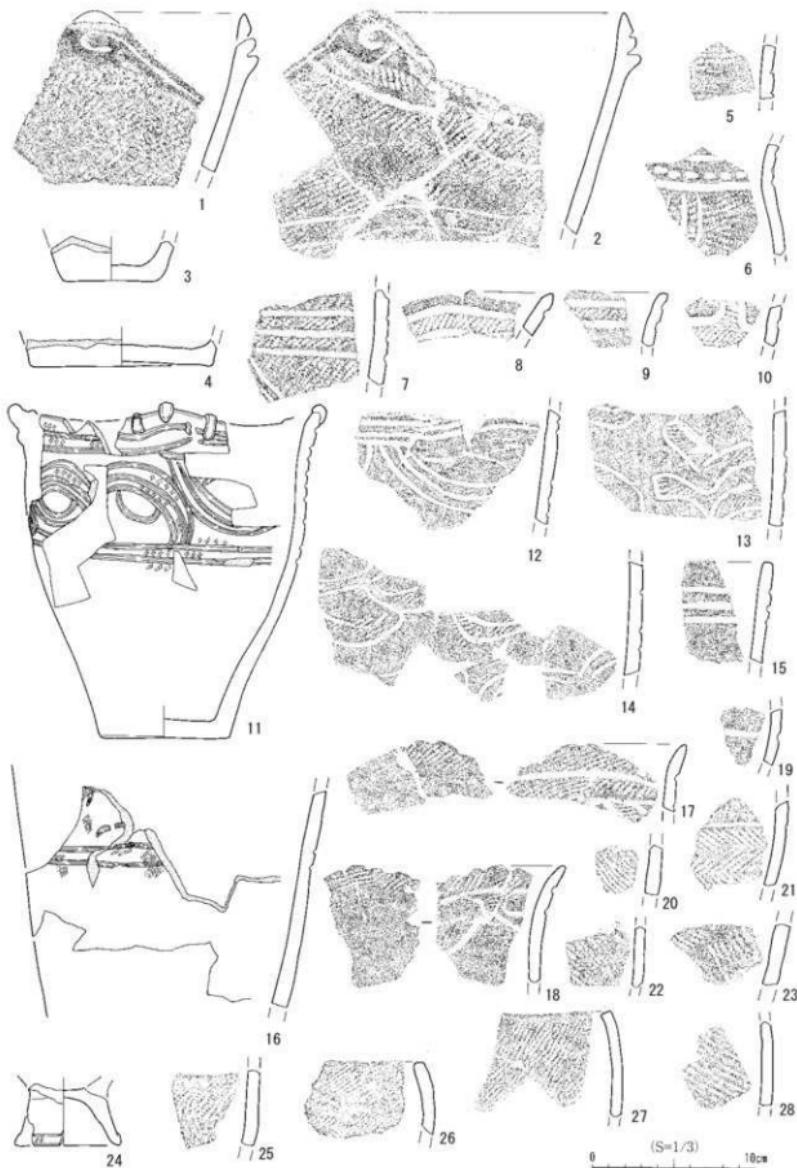


図50 遺構外出土土器(1)

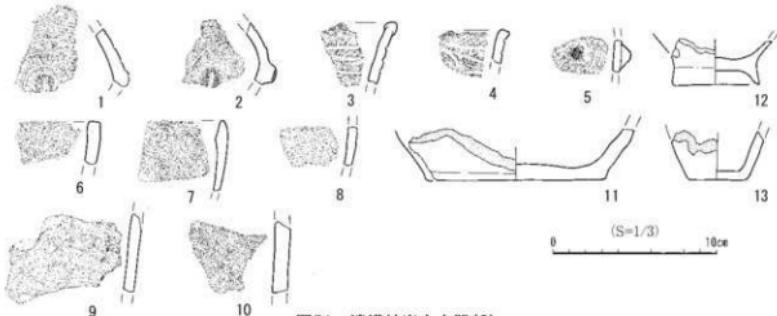


図51 遺構外出土土器(2)

### 第3節 出土遺物

遺物は、主に確認調査トレンチから出土したもので、平成21年度と平成22年度を合わせて4箱である。縄文時代中期から後期のものである。埋没沢からの遺物は出土していない。また、各トレンチでの遺物出土層位はⅡ層を中心で、Ⅰ層やⅢ層からも少数だが出土している。

#### 1. 土器(図50-51)

段ボール箱で2箱分(平成21年度1箱、平成22年度1箱)と少なく、その大半が土器破片である。遺物が出土する区域は限られており、土器の年代は概ね縄文時代中期中葉、後期前葉と後葉の土器が大半を占めている。

縄文土器の分類にあたっては、砂子瀬遺跡(青森県教委第482集: 第2章第3節第3項参照)に準拠している。第I群 縄文時代早期、第II群 縄文時代前期、第V群 縄文時代晚期の土器は出土していない。

#### 第III群 縄文中期の土器(図50-1~7)

##### 2類 中期後半の土器

複林式(50-1・2)や最花式(50-6)に相当するものの他に、地文が縄文で沈線を施した中期後半に相当すると思われる土器も出土している。

#### 第IV群 縄文後期の土器(図50-8~28、図51-1~13)

##### 1類 後期初頭から前葉の土器

深鉢土器(50-11)は、沈線文に充填文を施すものが多く、口縁部裏面に縄文を施文するもの(50-17・18)もみられる。粗製(地文が縄文)の深鉢はやや薄手でその形状は口縁部内側に内湾するものと思われる。図50-21は鉢形土器で胴部にLRとRLの縄文を施文することにより羽状縄文としているものである。また、出土量は少ないものの高台を持つ土器(50-24)も存在する。いずれも後期前葉の十腰内I式とみられる。

##### 3類 後期後葉の土器

鉢形土器や壺形土器と思われる器形に沈線が施され交点などに粘土瘤が貼付けられるもの(50-1~5)で、後期後葉の十腰内V式に相当すると考えられる。

## 2. 石器(図52)

平成21・22年度の調査で出土した石器は剥片石器76点、礫石器3点の計79点であり、大半が39-1トレンチ付近とその下位面の26・29・31トレンチなどから出土している。

**剥片石器** すべて珪質頁岩製である。

### 石鎚(図52-1)

凹基無茎鎚が1点出土した。先端と基部の一部を欠損する。

### 石錐(図52-2・3)

4点出土している。2は剥片の一端を両面から加工して錐部を作出している。3は両面を剥離加工した剥片の一端に錐部を作出する。

### 石匙(図52-4~6)

3点出土している。このうち5のみが横型石匙である。4は縦長剥片の周縁を加工し、平面形がハート型を呈する。6は全長2.5cmと小型で、表皮を残しつつ摘み部と刃部を作出している。

### 削器(図52-7~11)

不定形剥片に連続性・規格性の高い剥離加工を施し刃部を作出した一群で、6点出土している。7は素材剥片のバルブを持つ面の周縁を加工している。下端部の刃部角度がやや急斜度になっている。8は折損した削器の先端部と思われる。10は縦長剥片の一側縁に刃部を作出しているが、形態から先端が欠損した石錐の可能性もある。11は二辺を折損した剥片の一側縁を両面から加工している。

### 搔器(図52-12)

1点出土している。縦長剥片の下端部に急斜度の剥離加工を施している。

### 二次加工剥片(図52-13・14)

削器より剥離痕の連続性・規格性が低く、刃部の作出が明確でない一群で、9点出土している。13は腹面の左側縁の一部を加工する。14は縦長剥片の腹面の2側縁を一部加工している。

### 微細剥離痕を形成する剥片

使用痕と見られるが連続性・規格性が低い微細な剥離痕を有する一群である。49点出土した。

### 石核

3点中2点は同一母岩由来で剥離の頻度は少ない。1点は扁平礫に一方向からの剥離を数回行う。

**礫石器** 『砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡』(2009)での分類に準拠する。

### I類 使用痕が擦りのみのもの(図52-15)

残存する使用痕は上面と右側面の擦りのみであるが、一応この類とした。砂質凝灰岩製である。

### VI類 使用痕が叩き+凹みのもの(図52-16・18)

18は破損しているが、元來は16と同様、扁平な小判型礫の中央からやや上端寄りが使用箇所と思われる。いずれも両面を使用している。16は砂岩製、18は凝灰岩製である。

## 3. その他の遺物

### 石製品(図52-17)

小型の長楕円礫が縁を残して丸くくぼめられており、底面長軸方向に使用痕と思われる長い擦痕が残ることから、球状のものがこすりつけられたのではないかと思われる。

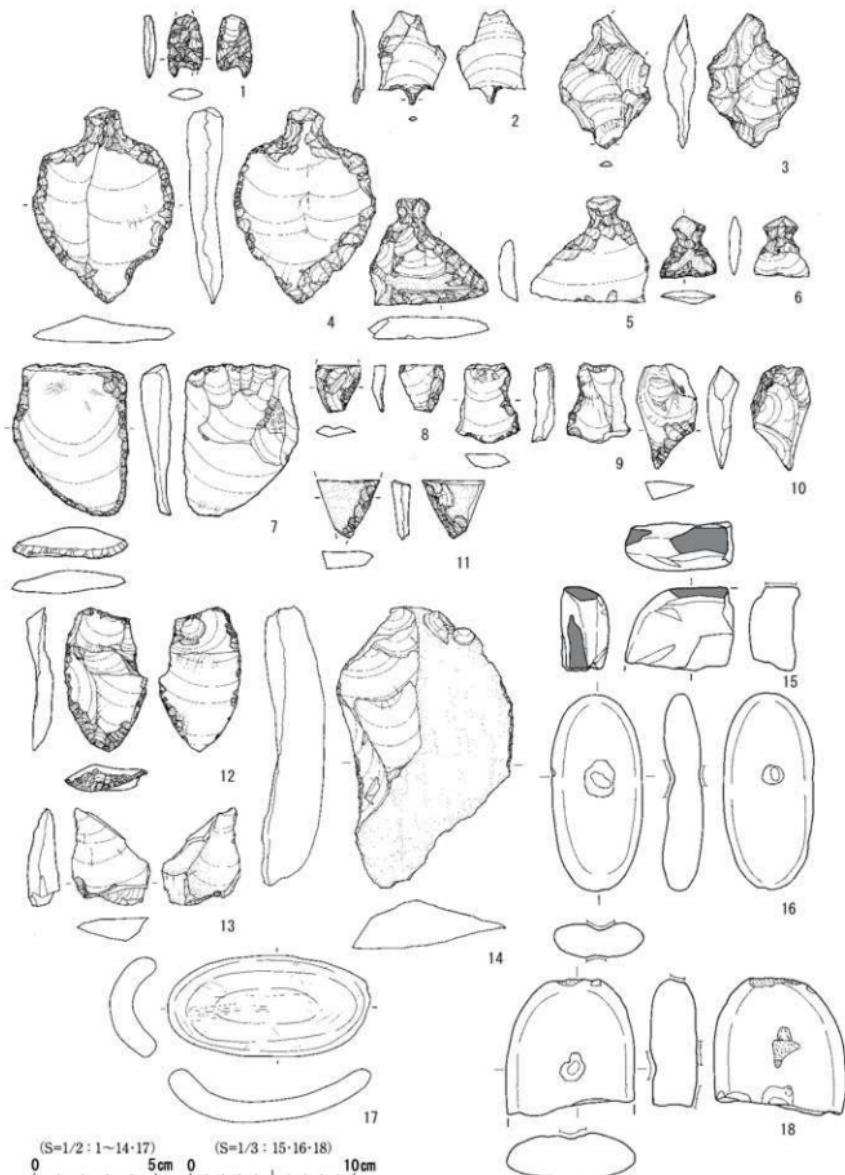


図52 遺構外出土石器・石製品

## 第5章 理化学的分析

### 第1節 放射性炭素年代測定結果について(抄)

(株)加速器分析研究所

#### 第1項 土坑年代の測定

##### 1 測定対象試料

大川添(1)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字大川添(北緯 $40^{\circ} 31' 34''$ 、東経 $140^{\circ} 13' 11''$ )に所在する。測定対象試料は、SK-02出土木炭(OOKAWA(1)-01 : IAAA-92218)、SK-05出土木炭(OOKAWA(1)-02 : IAAA-92219)、SK-06出土木炭(OOKAWA(1)-03 : IAAA-92220)、SK-08出土木炭(OOKAWA(1)-04 : IAAA-92221)、SK-10出土木炭(OOKAWA(1)-05 : IAAA-92222)、SK-11出土木炭(OOKAWA(1)-06 : IAAA-92223)、SK-32出土木炭(OOKAWA(1)-07 : IAAA-92224)、合計7点である(表1)。

##### 2 測定の意義

炭化物が出土した土坑の年代を明らかにする。

##### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除き、必要量の試料を採取、秤量する(付表「処理前試料量」)。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA : Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、遠心分離機を使用して超純水で中性になるまで希釈する。希釈後の試料を90°Cで乾燥し、秤量する(付表「処理後試料量」)。
- (3) 必要量を採取、秤量(付表「燃焼量」)した試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する(付表「精製炭素量」)。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

##### 4 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

##### 5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950

年を基準年(0yrBP)として測る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一行を四捨五入しない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al. 2004)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 1995; Bronk Ramsey 2001; Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

## 6 測定結果

$^{14}\text{C}$ 年代は、SK-02出土木炭OOKAWA(1)-01が $2760 \pm 20$ yrBP、SK-05出土木炭OOKAWA(1)-02が $2970 \pm 20$ yrBP、SK-06出土木炭OOKAWA(1)-03が $4170 \pm 20$ yrBP、SK-08出土木炭OOKAWA(1)-04が $2510 \pm 20$ yrBP、SK-10出土木炭OOKAWA(1)-05が $3780 \pm 20$ yrBP、SK-11出土木炭OOKAWA(1)-06が $200 \pm 20$ yrBP、SK-32出土木炭OOKAWA(1)-07が $2520 \pm 20$ yrBPである。OOKAWA(1)-01は縄文時代晚期中葉頃、OOKAWA(1)-02は縄文時代後期末から晚期前葉頃、OOKAWA(1)-03は縄文時代中期後葉頃、OOKAWA(1)-04とOOKAWA(1)-07は縄文時代晚期後葉頃、OOKAWA(1)-05は縄文時代後期前葉頃に相当する年代値である。OOKAWA(1)-06は、历年較正年代( $1\sigma$ )で17世紀後半以降の範囲となっている。炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 第2項 土器年代の測定

### ① 大川添(1)遺跡

#### 1 測定対象試料

大川添(1)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字大川添(北緯 $40^{\circ} 31' 28''$ 、東経 $140^{\circ} 13' 19''$ )に所在する。測定対象試料は、土坑SK-33より出土した土器片の表面に付着した炭化物OOKAWA(1)-08(IAAA-101009・図20-13)1点である(表1)。

#### 2 測定の意義

土器の年代を明らかにする。

3～5は第1項と同様であるため、省略する。ただし、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した点のみ異なる。

## 6 測定結果

OOKAWA(1)-08の<sup>14</sup>C年代は3070±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は1394~1316cal BCの間に2つの範囲で示される。縄文時代後期末から晩期初頭頃に相当する。

試料の炭素含有率は50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

### ② 水上(4)遺跡

#### 1 測定対象試料

水上(4)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上(北緯40° 32' 7"、東経140° 15' 0")に所在する。測定対象試料は、遺物包含層から出土した土器の表面に付着した炭化物(MIZUKAMI(4)-01:IAAA-101012・図38-7、MIZUKAMI(4)-02:IAAA-101013・図41-1)2点である(表1)。

2~5は、①と同様であるため、省略する。

#### 6 測定結果

<sup>14</sup>C年代は、MIZUKAMI(4)-01が3420±20yrBP、MIZUKAMI(4)-02が3110±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、MIZUKAMI(4)-01が1741~1691cal BC、MIZUKAMI(4)-02が1417~1326cal BCの間に各々2つの範囲で示される。MIZUKAMI(4)-01は縄文時代後期中葉頃、MIZUKAMI(4)-02は縄文時代後期末から晩期初頭頃に相当する値となっている。

試料の炭素含有率は、MIZUKAMI(4)-01が約23%、MIZUKAMI(4)-02が約15%と、やや低い値を示した。土器胎土に由来すると見られる炭化物以外の物質を完全に除去できなかったため、試料に占める炭素量の比率が低く見積もられる結果となった。年代値の解釈に当たっても、この点に注意する必要がある。

#### 付表

試料名	測定機関番号	取扱場所	取扱方法	取扱期間	取扱試料 質量(g)	取扱試料 性質	取扱試料 形状(g)	測定試料 質量(g)	測定試料 性質	測定試料 形状(g)	δ <sup>14</sup> C (‰)	Δ <sup>14</sup> C (‰)	L： <sup>14</sup> C Age (yrBP)	t <sup>14</sup> C (yrBP)	測定対象年代 (1σ暦年較正年代)	測定対象年代 (2σ暦年較正年代)
OOKAWA(1)-01	IAAA-82219	AAA	47.70	23.34	4.60	3.08	13	22213	1.2228	-23.76 ± 0.18	2,760 ± 20	2,736 ± 18	2,710BC - 2190BC (23.0‰)	303BC - 2190BC (17.2‰)		
														3290BC - 1230BC (23.0‰)	303BC - 1230BC (17.2‰)	
														3170BC - 1160BC (23.0‰)	303BC - 1160BC (17.2‰)	
														3290BC - 1120BC (23.0‰)	303BC - 1120BC (17.2‰)	
														3170BC - 1100BC (23.0‰)	303BC - 1100BC (17.2‰)	
														3140BC - 1130BC (23.0‰)	303BC - 1130BC (17.2‰)	
OOKAWA(1)-02	IAAA-82220	AAA	58.00	41.09	4.62	3.25	13	180246	1.0193	-28.86 ± 0.20	4,170 ± 20	4,171 ± 20	2,670BC - 2690BC (18.0‰)	2879BC - 2690BC (18.0‰)		
														2,720BC - 2700BC (18.0‰)	2879BC - 2700BC (18.0‰)	
														2,730BC - 2710BC (18.0‰)	2879BC - 2710BC (18.0‰)	
														2,740BC - 2740BC (18.0‰)	2879BC - 2740BC (18.0‰)	
														2,750BC - 2750BC (18.0‰)	2879BC - 2750BC (18.0‰)	
OOKAWA(1)-03	IAAA-82221	AAA	48.93	35.33	4.84	3.20	13	229901	1.2118	-26.58 ± 0.22	2,536 ± 20	2,535 ± 18	735BC - 749BC (10.5‰)	772BC - 791BC (10.5‰)		
														877BC - 899BC (4.7‰)	919BC - 960BC (15.5‰)	
														844BC - 998BC (17.9‰)	891BC - 945BC (17.9‰)	
														795BC - 860BC (17.9‰)	891BC - 945BC (17.9‰)	
														722BC - 751BC (17.9‰)	891BC - 945BC (17.9‰)	
														732BC - 751BC (17.9‰)	891BC - 945BC (17.9‰)	
OOKAWA(1)-05	IAAA-82222	AAA	84.74	21.11	4.54	3.30	14	205647	1.2228	-23.76 ± 0.23	3,790 ± 20	3,775 ± 19	2,230BC - 2190BC (15.0‰)	2300BC - 2190BC (12.2‰)		
														2170BC - 2140BC (16.0‰)	2300BC - 2140BC (12.2‰)	
														1860AD - 1860AD (2.7‰)	1775AD - 1775AD (2.7‰)	
														1775AD - 1775AD (2.7‰)	1775AD - 1775AD (2.7‰)	
														1780AD - 1860AD (2.7‰)	1775AD - 1860AD (2.7‰)	
														1910AD - 1910AD (2.7‰)	1860AD - 1910AD (2.7‰)	
														1910AD - 1910AD (2.7‰)	1860AD - 1910AD (2.7‰)	
OOKAWA(1)-07	IAAA-82224	AAA	34.32	21.39	4.59	3.04	14	252689	1.2243	-24.39 ± 0.23	2,536 ± 20	2,532 ± 17	799BC - 867BC (10.5‰)	844BC - 867BC (10.5‰)		
														887BC - 867BC (10.5‰)	844BC - 867BC (10.5‰)	
														838BC - 910BC (12.7‰)	844BC - 910BC (12.7‰)	
OOKAWA(1)-08	IAAA-10009	AAA	281.03	13.73	6.03	3.34	14	220099	1.1003	-23.32 ± 0.24	3,070 ± 20	3,073 ± 18	1394BC - 1394BC (10.5‰)	1417BC - 1394BC (10.5‰)		
														1394BC - 1394BC (10.5‰)	1417BC - 1394BC (10.5‰)	
MIZUKAMI(4)-03	IAAA-100912	AAA	297.68	9.65	5.45	1.27	14	226036	1.1178	-28.83 ± 0.23	3,420 ± 20	3,410 ± 18	1710BC - 1710BC (17.2‰)	1696BC - 1696BC (16.5‰)		
MIZUKAMI(4)-02	IAAA-100913	AAA	290.37	40.05	5.98	0.89	13	240316	1.1203	-28.36 ± 0.24	3,330 ± 20	3,300 ± 17	1432BC - 1432BC (17.2‰)	1447BC - 1432BC (17.2‰)		

表2

七

van der Valk, A.J., van der Valk, C. & Polak, H. 1997. Bioturbation. Reporting of 'W. Wata'. *Bioturbation* 19(4), 355-365.

van der Valk, A.J. & Polak, H. 1998. Bioturbation on lithiation and analysis of stratigraphic: the 'W. Wata' Project. *Intercat* 37(2), 425-430.

van der Valk, A.J. & Polak, H. 2001. Development of the radiotracers calibration program. *Bioturbation* 20(1), 365-363.

van der Valk, A.J., van der Velde, J. & Polak, H. 2001. *Waigele* radiotracer dates. *Bioturbation* 20(1), 365-363.

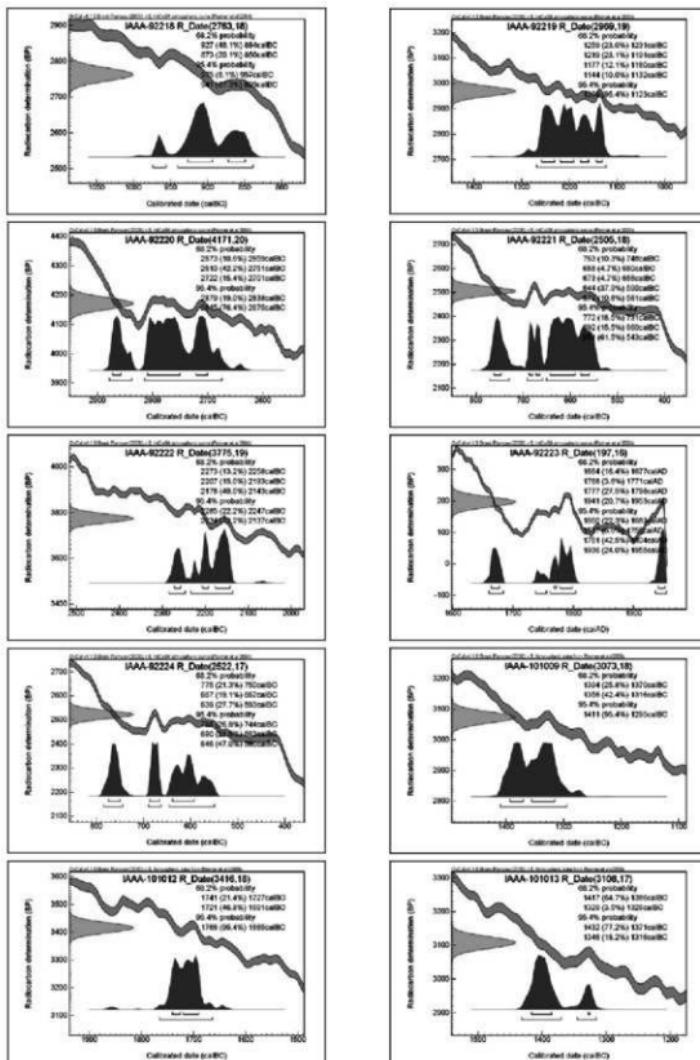
van der Valk, A.J., van der Valk, C. & Polak, H. 2004. Intercat terrestrial radiotracer age calibration. 0-250 kyr. *Bioturbation* 46(3), 1029-1038.

van der Valk, A.J., van der Valk, C. & Polak, H. 2009. Bayesian analysis of radiotracer dates. *Bioturbation* 51(1), 337-339.

van der Valk, A.J., van der Valk, C. & Polak, H. 2009. Intercat and Waigele radiotracer age calibration curves. 0-300,000 years old. *BP*.

JOURNAL OF POLYMER SCIENCE: PART A

[参考] 历年校正年代グラフ



## 第2節 種実同定分析

大川添(1) 遺跡から出土した炭化種実

佐々木由香・パンダリ・スダルシャン(バレオ・ラボ)

### 1. はじめに

大川添(1) 遺跡は青森県中津軽郡西目屋村大字川原平に位置し、岩木川右岸の河岸段丘上に広がる川原平地北西部に立地する。川原平地は、標高および現河川の開析状態から高位面・低位面に区分される。標高は高位面で約205～210m、低位面で約190～195mである。遺跡は、縄文時代後期の集落跡である。ここでは縄文時代の竪穴住居跡と焼土遺構、土坑から産出した炭化種実の同定を行い、当時の植生や植物の利用状況を明らかとする一端とした。

### 2. 試料と方法

試料は高位面から検出された土坑(SK)、低位面から検出された竪穴住居跡(SI)と焼土遺構(SN)から出土した11試料である。試料の内訳は、高位面のSK-10(確認面、底面、Pit底面)とSK-20(確認面、底面、Pit底面)、SK-63(2層)の7試料と、低位面のSI-02(炉の1層、2層)、SN-05(1層)の4試料、計11試料である。遺構の時期は出土土器型式から、SK-10とSK-20が縄文時代後期初頭、SI-02が後期後葉、SN-05とSK-63は遺物が出土していないが、遺構覆土の堆積状況や周囲から出土している遺物等から縄文時代と考えられている。

試料は水洗選別後、種実などが抽出済みの試料で、層ごとにある程度分類されてフィルムケース内に乾燥保管されていた。試料の採取と、水洗、分類までの作業は青森県埋蔵文化財調査センターによつて行われた。水洗前の土壤重量は表1を参照されたい。水洗は最小0.5mm目の籠を用いて行われた。

種実の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として1点と数えた。同定された試料は青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、未炭化種実と炭化種実、炭化した子囊菌が見いだされた。しかし、遺跡の立地条件を考慮すると、縄文時代の種実が未炭化のまま遺存するとは考えにくく、未炭化種実は後世の混入である可能性が高いと判断される。したがって本報告では、表1のみにすべての産出数を示し、記載には炭化したもののみを扱う。

表1 大川添(1)遺跡出土の炭化種実(括弧内は破片を示す)

遺構名	高位面				低位面			
	SK-10	Pit	SK-20	Pit	SK-63	Pit-1	SI-02	SN-05
量	確認面 底面 底面	底面 底面 底面	確認面 底面 底面	底面 底面 底面	2層 2層 2層	1層 1層 1層	2層 2層 1層	1層 1層 1層
水洗量(g)	1,300 1,750	1,750 1,700	1,350 1,550	1,600 1,600	1,650 1,650	1,000 1,000	1,450 1,450	600 600
分類群 組立・時期	初期 初期初頭				縄文	後期後葉		縄文
キブシ	種子	1						
タデ属	葉束		1(1)					
不明	炭化種実				(1)			
同定不能	炭化種実	1						
子囊菌	炭化子囊	10	3	1	8(7)	4	3(4)	6(3)
								2(1)

炭化種実で科以下の同定ができたものはなかった。科以下の同定ができない不明炭化種実と、識別点が遺存していない一群である同定不能炭化種実があった。種実以外には炭化した子囊菌が得られた。未炭化ではキブシ種子とタデ属果実が得られた。

遺構別にみると、SK-63から不明炭化種実の破片1点、SK-10の底面から同定不能炭化種実が1点得られた。SK-20とSI-02、SN-05からは炭化種実が得られなかった。

以下に炭化種実の記載を行い、また図版1に写真を示して同定の根拠とする。

(1) 不明 Unknown 炭化種実

上面観は楕円形、側面観は破片であるが本来は円形か。科以下の同定はできなかった。残存長2.2mm、幅3.0mm。

(2) 子囊菌 Ascomycota 炭化子囊

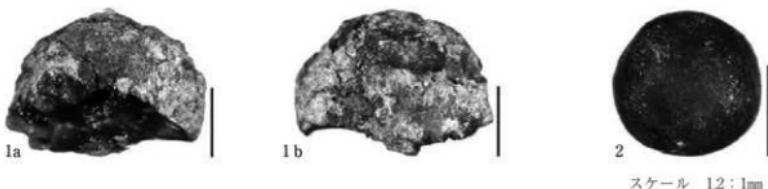
球形で、表面には微細な模様がある。長さ1.6mm、幅1.6mm程度。

#### 4. 考察

縄文時代の遺構から出土した炭化種実を同定した結果、縄文時代の土坑であるSK-63から不明炭化種実の破片1点、後期初頭の土坑であるSK-10の底面から同定不能炭化種実が1点得られたのみで、科以下の同定が可能な種実は含まれていなかった。後期初頭の土坑であるSK-20と後期後葉の堅穴住居跡であるSI-02、縄文時代の焼土遺構であるSN-05からは炭化種実が全く得られなかった。

後期初頭の土坑であるSK-10とSK-20は、遺構の形状から墓であることが推定され。Pit底面において骨質物の検討のために元素マッピング法によるリン・カルシウム分析が行われているが、骨質物は検出できなかった（リン・カルシウム分析の項参照）。炭化種実の検討でも、遺構の機能を推定できる種実は得られなかった。堅穴住居跡や焼土遺構から炭化種実が得られなかった理由としては、採取位置が炉や焼土のため熱により灰となった可能性、当時の種実が生の状態であったため残存しなかつた可能性、最初から炭化種実が含まれていなかった可能性、検討量が1試料あたり約1.5kg未満と少なかつたため、検討した試料中には含まれなかった可能性などが考えられる。

子囊菌は、土壤中や炭化材に付着していたものが出土したと考えられるが、その由来は不明である。



図版1 大川添(1) 遺跡出土の炭化種実

1. 不明炭化種実 (SK-63, 2層), 2. 子囊菌炭化子囊 (SK-10, 確認面)

### 第3節 リン・カルシウム分析

#### 大川添(1)遺跡遺構内土壌のリン・カルシウム分析

竹原弘展(パレオ・ラボ)

##### 1. はじめに

大川添(1)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村に所在する。大川添(1)遺跡で検出された縄文時代の土坑内土壌について蛍光X線分析によるリン・カルシウム分析を行い、遺構中に骨が存在した可能性を検討した。

##### 2. 試料と方法

試料は、SK-10およびSK-20の両土坑の底面中央部に検出されたビット底面より採取した土壌2点である(表1)。出土土器より遺構の時期は縄文時代後期前半である。

分析は藤根ほか(2008)の方法に従って行った。測定試料は、土壤約5~6gを乾燥後、極軽く粉碎して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20t・1分間プレスしたものを作製、使用した。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である株堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000 Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)で、検出可能元素はナトリウム(Na)~ウラン(U)である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い元素の分布図を得て、その結果を基にリン(P)のマッピング図の輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。また、ポイントを選ぶ際には、ジルコニウム(Zr)のL<sub>α</sub>線がリンのK<sub>α</sub>線のピークに近いため、ジルコニウム(元素マッピングはK<sub>α</sub>線で測定)の輝度の高い箇所は避けるよう留意した。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1.00mA、ビーム径100μm、測定時間2000sを5回走査、パルス処理時間P3に、ポイント分析では50kV、0.10~0.30mA(自動設定)、ビーム径100μm、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。

##### 3. 結果

各試料の元素マッピング図およびポイント分析箇所5点を図1に、ポイント分析の結果より酸化物の形で表した半定量値を表2に示す。分析の結果、試料No.1(SK-10Pit底面)のリン(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)が0.33~1.10%、カルシウム(CaO)が0.38~14.03%、試料No.2(SK-10Pit底面)のリン(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)が0.03~2.44%、カルシウム(CaO)が0.15~10.32%の値を示した。

##### 4. 考察

ヒトを含む動物の骨や歯は、ハイドロキシアバタイトCa<sub>5</sub>(PO<sub>4</sub>)<sub>3</sub>OHが主成分であり、すなわち蛍光X線分析ではリン(P)とカルシウム(Ca)が共に高く検出される。ただし、鉱物由来の可能性も考慮

表1 分析試料

試料No	採取地
1	SK-10Pit底面
2	SK-20Pit底面

表2 半定量分析結果

試料	ポイント	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>
No.1	a	0.79	22.24	67.01	1.10	0.45	2.16	0.38	1.40	0.09	4.29	0.01	0.03	0.01	0.04
	b	0.00	24.79	56.46	0.33	0.29	0.89	14.03	0.49	0.03	2.41	0.00	0.27	0.00	0.01
	c	1.09	9.97	81.62	0.57	0.19	1.30	0.31	0.40	0.07	4.42	0.00	0.02	0.01	0.03
	d	1.03	11.64	77.71	0.37	0.13	1.38	1.04	0.93	0.48	5.18	0.01	0.03	0.01	0.06
	e	0.95	16.64	78.15	0.53	0.30	0.36	0.80	0.54	0.06	1.58	0.00	0.03	0.01	0.05
No.2	a	1.44	9.50	79.74	0.33	0.12	1.57	0.15	0.51	0.02	6.55	0.03	0.02	0.01	0.03
	b	1.09	12.88	81.19	0.50	0.37	0.85	0.64	0.57	0.03	1.83	0.00	0.02	0.00	0.02
	c	0.86	21.60	63.86	0.03	0.20	0.70	10.32	0.21	0.02	2.06	0.00	0.14	0.00	0.00
	d	0.60	13.02	29.20	1.66	1.22	1.71	0.16	0.99	0.08	51.21	0.02	0.05	0.01	0.08
	e	0.47	32.88	39.10	2.44	0.96	1.49	0.28	2.22	0.43	19.52	0.02	0.13	0.01	0.04

する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素である。カルシウムのみの検出では骨由来であるか判断し難いため、分析ではリンを中心に検討し、かつカルシウムも高く検出される箇所に着目してポイント分析を行った。また、本来は骨が存在していたが、堆積・埋没過程で分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されないという可能性もある。

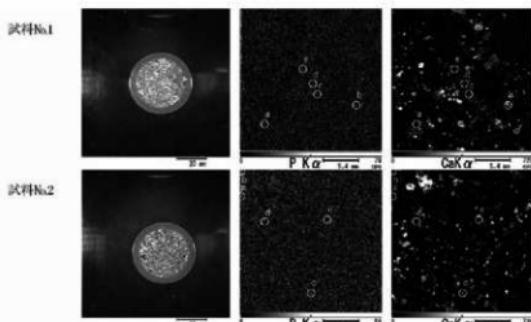
分析の結果、2点とも明らかにリンの含有量が多い箇所ではなく、約1~2%と若干多く含まれる箇所は存在するものの、そのいずれもカルシウムの含有量が少なく、リン・カルシウム共に明らかに多く含まれる箇所は見出せなかった。

## 5. おわりに

土坑内ピット底面の土壤について、蛍光X線分析した結果、いずれの試料からもリン・カルシウム共に明らかに多く含む箇所は見出せなかった。以上、自然科学的見地から、骨・歯などの存在している可能性を検討したものの、存在を積極的に肯定できるデータは得られなかった。

## 引用文献

- 藤根 久・佐々木由香・中村賢太郎(2008) 蛍光X線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析. 日本国文化財科学会第25回大会研究発表要旨集, 108-109.



図版1 プレス試料および元素マッピング図

## 第6章 まとめ

### 第1節 大川添(1) 遺跡

#### 1 遺跡の立地

大川添(1) 遺跡は、岩木川右岸の河岸段丘上に広がる川原台地北西部に位置する。川原台地は岩木川および支流の暗門川・大沢川・大川沿いに分布する砂礫台地である。遺跡が所在する河川沿い部分は、標高差約10mの段差があり、標高値は高位面で約205~210m、低位面で約190~195mのそれぞれ平坦面に立地している。高位面は畑地として利用され、低位面は植林された杉林である。

#### 2 検出遺構

検出された遺構は、高位面・低位面合わせて、竪穴住居跡2軒・土坑81基・ピット33基・焼土遺構2基・捨て場遺構1カ所である。時期については、竪穴住居跡は2軒とも縄文時代後期後葉以前に帰属する遺構であると考えられる。土坑は、ほとんどが縄文時代に帰属する遺構であると考えられ、遺構覆土より出土した遺物から、縄文時代後期初頭~前葉・後期後葉~終末・晚期前葉の大きく3時期に分かれ構築されたものと考えられる。ピット・焼土遺構・捨て場遺構も、土坑と同時期の範囲内に構築された遺構であると考えられる。ただし、第11・18号土坑は非常に浅く、覆土全体が炭化物で覆われているという共通の特徴をもつ遺構である。第11号土坑の炭化物を放射性炭素年代測定したところ、17世紀後半以降との結果が得られた(第5章第1節参照)。遺構の特徴や年代測定の結果から、この地域特有の狩猟者集団「マタギ」関連の遺構である可能性も考えられる。

ここで、第2号竪穴住居跡の柱穴配置について若干考えてみたいと思う。まず、主柱穴の配置であるが、第3章の記載で述べた通り、Pit5・6の2本柱と考えられる。また壁柱穴は、壁高が高くなる住居跡南西側のPit12・14・15・16・17であると考えられる。壁高が低くなる住居跡北東側については、

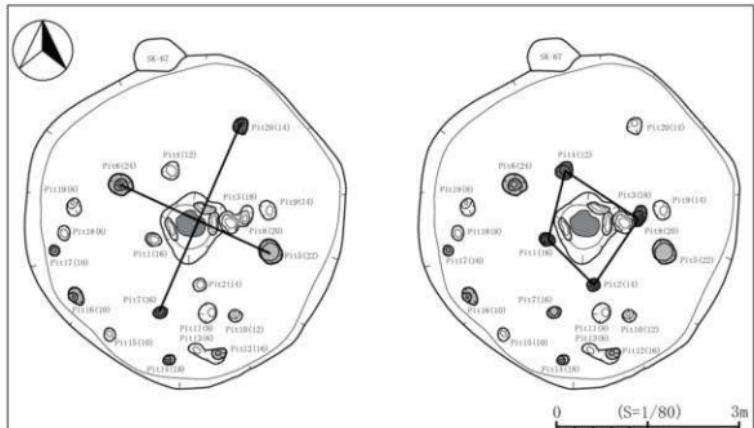


図53 第2号竪穴住居跡柱穴配置

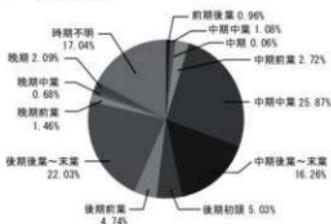
何度も柱穴を探ってみたが検出されなかった。また主柱穴・壁柱穴以外のピット(柱穴)について組み方を2通り考えてみた。まず第1案(図53左)であるが、主柱穴ラインをもとに補助的な柱穴の組み合わせである。Pit7・20は主柱穴ラインと垂直かつ等間隔に配置されるピットである。また、Pit4・9は、主柱穴に平行に、やや主柱穴からの距離に違いはあるものの、規則的に配置されたピットである。深さは12~16cmと主柱穴に比べるとやや浅い。いずれも主柱穴を支える補助的役割の柱穴であった可能性がある。次に第2案(図53右)は、炉を中心に台形状に巡るPit1・2・3・4の配置である。深さは、12~16cmと主柱穴に比べるとやや浅い。不整形な配置ではあるが、炉に伴う施設であった可能性が考えられる。

### 3 出土遺物

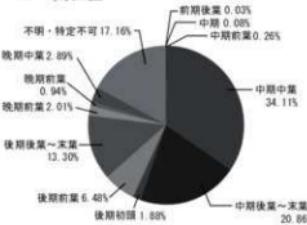
出土した遺物は土器・石器を中心で段ボール42箱分である。

土器は、遺構内から307点、遺構外から3,114点、合計3,421点、総重量33,157 gである。器種別でみると深鉢が一番多く、壺・注口土器・鉢・浅鉢・皿なども出土している。土器の時期については、時期別の比率を遺跡全体及び高位面・低位面に分けて出してみた(図54)。遺跡全体では、縄文時代前期前葉～晩期中葉までと幅広い時期にわたるが、比率的に多いのが縄文時代中期中葉、中期後葉～末葉、後期後葉～末葉の3時期に集

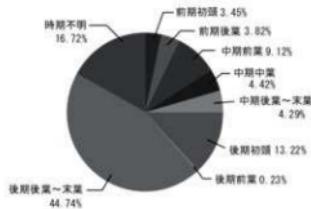
### 1 遺跡全体



### 2 高位面



### 3 低位面



全体		前期初期～中期前葉		中期前葉		中期中葉		中期後葉～末葉		後期初期～中期前葉		中期前葉～中期中葉		中期中葉～中期後葉		中期後葉～末葉	
(件)	(%)	2,114	60.73	19.23	73.5	2,109	59.21	2,039	59.00	1,031	27.82	731	20.00	713	19.71	713	19.71
(kg)	(%)	0.42%	1.05%	0.00%	0.02%	0.43%	0.98%	0.50%	0.50%	0.22%	0.05%	0.03%	0.00%	0.03%	0.03%	0.03%	0.03%

遺構別		前期初期～中期前葉		中期前葉		中期中葉		中期後葉～末葉		後期初期～中期前葉		中期前葉～中期中葉		中期中葉～中期後葉		中期後葉～末葉	
(件)	(%)	1,151	52.1	92.25	71.08	1,151	52.1	414	35.1	713	32.7	500	11.1	500	11.1	500	11.1
(kg)	(%)	0.22%	0.00%	0.25%	0.03%	3.39%	31.47%	0.18%	0.00%	0.32%	0.00%	0.03%	0.00%	0.03%	0.00%	0.03%	0.00%

縄文特定でないと土器 - 27,500.3 (g)  
縄文特定でないと土器 - 5,845.5 (g)  
出土土器総重量 - 33,357.8 (g)

高位面		前期初期～中期前葉		中期前葉		中期中葉		中期後葉～末葉		後期初期～中期前葉		中期前葉～中期中葉		中期中葉～中期後葉		中期後葉～末葉	
(件)	(%)	1,056	51.9	1,372.3	2,023.4	5,279.5	492.6	224.6	693.4	59.5	589.9	33,357.8	—	—	—	—	—
(kg)	(%)	4.69%	0.01%	4.12%	6.10%	15.82%	1.48%	0.68%	2.09%	0.12%	18.85%	100.00%	—	—	—	—	—

遺構別		前期初期～中期前葉		中期前葉		中期中葉		中期後葉～末葉		後期初期～中期前葉		中期前葉～中期中葉		中期中葉～中期後葉		中期後葉～末葉	
(件)	(%)	1,056	51.9	1,372.3	2,023.4	5,279.5	492.6	224.6	693.4	59.5	589.9	33,357.8	—	—	—	—	—
(kg)	(%)	4.69%	0.01%	4.12%	6.10%	15.82%	1.48%	0.68%	2.09%	0.12%	18.85%	100.00%	—	—	—	—	—

縄文特定でないと土器 - 18,488.9 (g)  
縄文特定でないと土器 - 4,116.1 (g)  
出土土器総重量 - 23,597.0 (g)

低位面		前期初期～中期前葉		中期前葉		中期中葉		中期後葉～末葉		後期初期～中期前葉		中期前葉～中期中葉		中期中葉～中期後葉		中期後葉～末葉	
(件)	(%)	2,114	51.7	75	81.7	2,037	51.7	31.3	10.6	1,031	27.82	52	81.9	11.1	1,339.4	3,000.0	—
(kg)	(%)	0.42%	1.05%	0.00%	0.02%	0.43%	0.98%	0.50%	0.50%	0.22%	0.05%	0.03%	0.00%	0.03%	0.03%	0.03%	—

縄文特定でないと土器 - 7,882.4 (g)  
縄文特定でないと土器 - 1,538.4 (g)  
出土土器総重量 - 9,200.8 (g)

図54 出土土器時期別比率

中しているのがわかる(図54-1)。高位面・低位面それぞれ見てみると、高位面では縄文時代前期後葉～晚期中葉(図54-2・4)にかけての土器が出土しているが、低位面では縄文時代前期前葉～後期末葉(図54-3・4)にかけてと時期の範囲に若干の違いがあることがわかる。特に低位面では、晩期の遺物は出土していないという特徴をもつ。比率で見ると、高位面では縄文時代中期中葉と中期末葉の時期が高く、低位面では縄文時代後期初頭と後期後葉～末葉の時期に集中することがわかる。

石器は、遺構内から139点、遺構外から501点、合計640点である。うち剥片石器が622点と大多数を占める。器種別でみると、削器が169点、微細剥離痕を有する剥片が164点、二次加工剥片が116点、石核が111点と突出して多く、以下石錐、石笠、搔器、石匙、石鏃、楔形石器、石槍と続く。一方礫石器は主に敲磨器類で構成され、石皿等が若干含まれる。このように石器類を概観すると、剥片石器のなかでも削器・微細剥離痕を有する剥片・二次加工剥片・石核で石器全体の約9割を占め、その他の器種が占める割合が著しく低い点が特徴として指摘できる。

#### 4　まとめ

調査の結果、大川添(1)遺跡の種別としては、竪穴住居跡を含む土坑やピットなど、縄文時代中期中葉から晩期にかけての生活痕跡が確認されたことから、小規模ながら集落跡であると言えよう。特に第2号竪穴住居跡は、縄文時代後期後葉の生活様式を考える上で好資料となり得る発見である。遺物は、遺構の構築時期よりやや幅広くなるが、縄文時代前期後葉から晩期中葉にかけての土器・石器が出土している。出土土器を時期比率で見ると、縄文時代中期中葉、中期後葉～末葉、後期後葉～末葉の3時期に多く出土していることがわかった。

なお、大川添(1)遺跡の調査は、調査不可能な急斜面や施設跡地、作業用道路などの部分を除き、全ての調査を終了した。

(新山・菅原)

## 第2節　水上(4)遺跡

### 1 検出遺構総括

平成19年度の第1次調査において、埋没沢とその東側に形成された遺物包含層について調査を実施しており、この結果を受けて、未調査区域を対象に第2次調査を継続して実施した。第1次調査と第2次調査を通じて検出された遺構は、配石遺構1基、土坑7基、ピット4基、埋没沢とその東側に形成された遺物包含層(捨て場)1箇所であり、遺物の供給源となる居住域が不在な点が遺跡の構造上の問題として残り、周辺遺跡の調査の進展に伴い、この地域におけるセトルメント・システムを通時的に再考する必要がある。

第2次調査の結果、埋没沢とその東側に形成された遺物包含層(捨て場)は、相互の分布域が連続する重層的な包含層を形成し、細別層準の分布状態に多寡・粗密を示す傾向と、特定の地点に濃集部を形成するあり方が看取された(図36)。また、IXCラインとIXDラインより北側は遺物の分布状態が漸移的に希薄になる傾向から、遺物包含層(捨て場)の北端として認定した。両者は重層的な包含層を形成する一方で、総体的に層位の時間的序列に相關した土器型式の変遷は見えず、遺物の原位置性を維持する安定した様相とは相異点が指摘される。また、これらの堆積状況は一連の水成堆積が累積

した結果として解釈することが可能であり、上流域を供給源とする急激な土砂の堆積を伴う流水により、前過程において堆積した土層が大きく攪拌を受ける現象を繰り返し、滞水と流水が交互に進行した経過が復元される。

## 2 出土土器総括

第2次調査で出土した土器は総重量74,653 gであり、第1次調査との総計は8,239,157 gである。第2次調査における出土重量に基づく型式別の比率は、第1次調査の結果を反映して大木10式と十腰内1式を中心とし、これに円筒上層d・e式、後瘤付土器第II段階～第IV段階が続く。特に第1次調査と第2次調査を通じて得られた瘤付土器第II段階～第IV段階及び大洞B式の資料は、同段階の土器群を出土する傾向が高い周辺遺跡とともに、当該地域における型式構成を提示する好例となる。川原平(1)遺跡では同段階の大規模で良好な遺物包含層が確認されており、今後の調査で型式学的内容や変遷過程が明確にされ、東北地方での広域な対比と実態の解明に寄与することが期待される。同時に、型式学的特徴に基づく分析と層位的事例及び共伴事例に準拠した粗製土器の細別編年の確立も、小単位の地域相を抽出する上で重要な課題となる。さらに、形態の同一性に対する技術形態的観点に基づく分析を通じた遺跡間の変異に関する考察も、社会的関係の実態を解釈する上で重要となる。

## 3 出土石器総括

第2次調査で出土した石器は合計164点であり、石器組成と特質が把握された。石器組成の内訳は、石錐14点、石窓1点、搔、器1点、削器15点、二次加工剥片19点、微細剥離痕を形成する剥片11点、石核8点、剥片84点、敲石9点、磨石1点、石皿1点である。珪質頁岩を多用する点に大きな特質があり、水上(2)遺跡などの存在から前期前葉の段階には近傍地石材の開発が本格的に整備されたと理解される。さらに、大川添(2)遺跡、水上(2)遺跡における黒曜石の搬入事例は、受給システムと連動する珪質頁岩の供給システムの確立を示唆する事象として評価される。同時に、器種組成に関して楔形石器とその関係資料が不在な点が看過できない大きな特質として注意される。技術的諸属性に両極打法による剥片剥離、二次加工等が普遍的に内在する技術的基盤において、特異な様相を示す。これと同質の様相は周辺遺跡においても同様に看取され、珪質頁岩の入手と運用に適した石材環境下での近傍地石材の性状に適応した石材消費過程の側面を反映する事象として解釈される。遺跡単位での原材料の入手、石器のデザイン、遺棄・廃棄に至る技術的構造組織(田村隆 1992)の分析が重要となる。

なお、水上(4)遺跡に関する調査は、第2次調査をもって全て終了した。

(佐々木)

## 第3節 芦沢(1)遺跡

### 1 遺跡の立地

芦沢(1)遺跡は隣接する芦沢(2)遺跡と共に、津軽地域の西部、岩木川右岸の河岸段丘上に広がる川原平台地北西部の砂子瀬地区と川原平地区をそれぞれ芦沢と山毛桜沢で区切られた地域に位置する。

現況の標高は、約185～210mの緩斜面に立地しているが、目屋ダムが建設された際、集落の移転により、宅地や畠地に造成されたため盛り土や削平区域が見られることから、当時の地形とはかなり

違うものと思われる。

## 2 検出遺構

発掘調査により検出された遺構はなかった。

## 3 出土遺物

出土した遺物は土器・石器を中心で、段ボール箱で4箱分（平成21年度2箱、平成22年度2箱）である。時期的には、縄文時代中期中葉から後期にかけての遺物で、後期は前葉と後葉に分けられ、その大半が土器破片である。石器は全部で79点出土し、うち9割以上が調査区北側の低位面からのものである。剥片石器では不定型石器が大半であり、なかでも微細剥離痕を有する剥片が7割を占める。定型石器では8点の内4点が石錐、3点が石匙、残り1点が石鏃である。礫石器は擦り石1点、敲き石2点の3点のみであった。また、凝灰岩の小樽円礫を擦りでくはませたと見られる石製品が1点出土している。

## 4 まとめ

平成21年度の確認調査で、遺構が存在する可能性がある区域とその面積を確定し、平成22年度に発掘調査を実施した。調査結果は、前述した通りであるが、宅地や畠地の造成が予想以上の規模のため、仮に遺構があったとしてもほとんど壊されている可能性が高い。

遺物は、縄文時代中期後半と後期前半、後期後葉の土器が出土しているものの、当該時期の遺構を確認できなかった。今後の調査で集落の動きが確認されることを期待したい。

平成21年度と22年度の2ヶ年に渡る発掘調査により芦沢(1)遺跡の発掘調査は終了した。

（中嶋・佐藤）

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 2006 「川原平(1)・(4)遺跡 大川添(2)遺跡 水上遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第409集
- 青森県教育委員会 2006 「近野遺跡Ⅸ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第418集
- 青森県教育委員会 2008 「水上遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第452集
- 青森県教育委員会 2009 「砂子瀬遺跡 水上(3)遺跡 水上(4)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第466集
- 青森県教育委員会 2009 「中平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第474集
- 青森県教育委員会 2010 「砂子瀬遺跡Ⅱ 大川添(2)遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第482集
- 岩手県文化復興事 1983 「馬立Ⅰ遺跡・太田发掘調査報告書」岩手県文化復興事業団埋蔵文化財調査報告書 第123集
- 業団埋蔵文化財センター
- 安孫子昭二 1989 「瘤付土器様式」「縄文土器大観」4
- 今井富士雄 1968 「十腰内遺跡」「岩木山」弘前教育委員会
- ・磯崎正彦
- 今村啓爾 1993 「土器・土製品の分析」「考古学調査研究ハンドブックス」2 雄山閣
- 葛西 勲 1979 「十腰内Ⅰ式土器の編年年の細分」「北奥古代文化」第11号
- 葛西 勲 1987 「十腰内Ⅰ式土器文化の研究(2)」「撫系文」15
- 小林圭一 1999 「東北地方 後期(瘤付土器)」「縄文時代」10
- 小林圭一 2010 「亀岡遺跡式土器成立期の研究 - 東北地方における縄文時代晚期前葉の土器様式 - 」早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所
- 小林達雄 1994 「縄文土器の研究」小学校
- 鈴木克彦 1996 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究」「考古学雑誌」81-4
- 鈴木克彦 1997 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・3」「北奥古代文化」26
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(上)」「考古学雑誌」83-2
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(下)」「考古学雑誌」83-3
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・4」「縄文時代」9
- 2001 「北日本の縄文期土器編年」雄山閣出版
- 須藤 隆 1984 「北上川流域における晚期前葉の縄文土器」「考古学雑誌」69-3
- 須藤 隆 1992 「東北地方における晚期縄文土器の成立過程」「東北文化論のための先史学歴史学論集」
- 閔根達人 1993 「西ノ浜式とその周辺」「歴史」81
- 閔根達人 2005 「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今日的理解」「北奥の考古学」葛西勲先生還暉記念論文刊行会
- 高柳圭一 1988 「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晚期初頭にかけての編年動向」「古代」85
- 竹岡俊樹 1989 「石器研究法」言叢社
- 田村 隆 1992 「遠い山・黒い石—武藏野Ⅱ期の社会生態学の一考察—」「先史考古学論集」2
- 成田滋彦 1981 「青森県の土器」「縄文文化の研究」4 雄山閣
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」「縄文土器大観」4 小学校
- 本間 安 1985 「東北地方に北部における縄文時代後期前葉土器群の実態」「よねしろ考古」第1号
- 本間 安 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」「よねしろ考古」第3号
- 本間 宏 1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」「よねしろ考古」第4号
- 柳田俊雄 1981 「瀬戸内技法と石刀技法-調整技術のもつ意味-」「旧石器考古学」23
- 藤原紀敏
- 山内清男 1979 「日本先史土器の縄紋」先史考古学会
- 山中一朗 1994 「石器研究のダイナミズム」大阪文化研究会
- 山本典幸 2000 「縄文時代の地域生活史」ミュゼ
- 山本典幸 2002 「異形列文様・文様帶の同一個体内共存と社会的機能に関する試論 - 縄文時代中期初頭 - 」「國學院大學考古學資料紀要」18 國學院大學考古學資料館

## 土器観察表

## 大川添(1)遺跡

遺物番号	出土位置	層位	基様	部位	文様等の属性	時期	備考
国19-1	SI-01	3層・覆土	鉢形	口縁～底部	山形突起 横位弧状文 入組曲線文 底部に木葉紙	馬立式	口径10.4cm、器高(8.3)cm、底径(4.1)cm
国19-2	SI-02 LTR-01-1	2b層・覆土上部	江口土器	口縁～底部	口頭部無文帶 線彫 連続粘弾形 文 運び弧線文 弧状文 平行沈窓 LR充填施文 底部上口底	垂付土器第Ⅱ段階	口沿に丸孔を有し横位弧状文で構成。器高(13.5)cm、底径(5.8)cm
国19-3	SI-02	2b層	壺形	肩部	無文帶	十層内Ⅰ式	国19-1～6と同一個体
国19-4	SI-02	2b層	壺形	肩部	無文帶	十層内Ⅰ式	国19-1～6、国19-3と同一個体
国19-5	SI-02	2b層	壺形	肩部	無文帶	十層内Ⅰ式	国19-1～6と同一個体
国19-6	SI-02	覆土上部	壺形	底部	無文帶 底部の調代痕を察り出す	十層内Ⅰ式	国19-1～6、国19-3と同一個体、器高(3.8)cm、底径9.5cm
国19-7	SI-02P5	覆土	深鉢形	頸部	貼面 平行沈窓 売酒施文(LR充填)	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-8	SI-02	2b層	深鉢形	口縁部	LR充填施文	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-9	SI-02P5	覆土	深鉢形	口縁部	無文	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-10	SI-02	覆土下部	深鉢形	口縁部	無文	垂付土器第Ⅱ段階	国19-1～13、国20-10～12と同一個体
国19-11	SI-01	覆土下部	深鉢形	肩部	LR横位施文? 細密に重ねる刻痕	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-12	SI-02	覆土下部	深鉢形	肩部	無文	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-13	SI-02	2b層	深鉢形	肩部	無文 壁外の乳頭状の凝打	垂付土器第Ⅱ段階	国19-10、国20-10～12と同一個体
国19-14	SI-02	覆土上部	壺形	日輪形	横位弦紋 無文帶	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-15	SI-02	床面直上	壺形	日輪形	人面像状文(LR充填)	垂付土器第Ⅱ段階	国20-7～8と同一個体
国19-16	SI-02	2b層	往口上層	口沿	無文	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-17	SI-02	覆土下部	深鉢形	口縁部	貼面 平行沈窓(3件) 販賣(縦位三対)	垂付土器第Ⅱ段階	口径5.0cm、器高(2.2)cm
国19-18	SK-05	覆土	深鉢形	口縁部	LR横位施文	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-19	SK-05	覆土	深鉢形	肩部	目紋施文(外周輪文)	大崩式	
国19-20	SK-05	覆土	深鉢形	肩部	LR横位施文	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-21	SK-02	覆土上部	深鉢形	口縁部	上口部に異なる2種のLR横位施文	垂付土器第Ⅱ段階	
国19-22	SK-09	覆土	深鉢形	肩部	無文	大崩式	
国19-23	SK-10	覆土	深鉢形	肩部	平行沈窓 LR横位施文	馬立式	
国19-24	SK-10	覆土	深鉢形	肩部	無文	馬立式	
国19-25	SK-10	覆土	壺形	口縁部	目紋施文 横位弦紋	十層内Ⅰ式	
国19-26	SK-10	覆土	深鉢形	肩部	横位弦紋 片状文	十層内Ⅰ式	
国19-27	SK-10	覆土	壺形	肩部	平行沈窓 此構別的文	十層内Ⅰ式	
国20-1	SK-10	覆土	深鉢形	口縁部	横位弦紋 複位弦紋	十層内Ⅰ式	国20-2～3と同一個体
国20-2	SK-10	覆土	深鉢形	口縁部	横位弦紋 クランク状文?	十層内Ⅰ式	国20-2～3と同一個体
国20-3	SK-10	覆土	深鉢形	口縁部	横位弦紋(外周輪文?)	十層内Ⅰ式	国20-2～3と同一個体
国20-4	SK-12	覆土	深鉢形	口縁部	無文	十層内Ⅰ式	国20-2～3と同一個体
国20-5	SK-12	覆土	深鉢形	肩部	無文	十層内Ⅰ式	大崩式
国20-6	SK-16	覆土	深鉢形	口縁部	折れ口縁 LR横位施文 LR横位施文(肩部)	円筒上層d式	
国20-7	SK-21	覆土	壺形	肩部	斜位斜面形	十層内Ⅰ式	国20-8～9と同一個体
国20-8	植物集中軽井3	田面	壺形	肩部	斜位斜面 斜面凹文	十層内Ⅰ式	国20-7～9と同一個体
国20-9	植物集中軽井3	田面	壺形	肩部	人面像施文(外周輪文)	十層内Ⅰ式	国20-7～9と同一個体
国20-10	SK-33	覆土	深鉢形	口縁部	貼面帯	垂付土器第Ⅱ段階	II-1～2と同一個体
国20-11	SK-33	1層	深鉢形	口縁部	無文	垂付土器第Ⅱ段階	国19-10、国19-13、国20-10～12と同一個体
国20-12	P-163	Ⅲ層	深鉢形	肩部	無文	垂付土器第Ⅱ段階	国19-10、国19-13、国20-10～11と同一個体
国20-13	SK-33	1・2層	深鉢形	口縁部	LR横位施文	垂付土器第Ⅱ段階	國20-17～18と同一個体
国20-14	SK-41	覆土	深鉢形	肩部	LR横位施文	垂付土器第Ⅱ段階	國20-17～18と同一個体
国20-15	SK-41	覆土	壺形	肩部	LR横位施文	大崩式	
国20-16	SK-50	覆土	壺形	口縁～肩部	口頭部無文 垂平行沈窓 入組波状文 地文LR横位施文	垂付土器第Ⅱ段階	氏代・荒・定・武 OORAKA(1) - 08
国20-17	VRP-163	Ⅲ層	壺形	肩部	平行沈窓 弧状区切文 入組波状文? 地文LR横位施文	十層内Ⅰ式	国20-17～18と同一個体
国20-18	VRG-106	田面	壺形	肩部	入組波状文 地文LR横位施文	十層内Ⅰ式	国20-16～18と同一個体
国20-19	SK-50	覆土	壺形	肩部	圓蓋半圓蓋	十層内Ⅰ式	国20-16～17と同一個体
国20-20	SK-50	覆土	壺形	底部	口底	大崩式?	
国20-21	SK-53	覆土	深鉢形	肩部	LR横位施文	円筒上層式	
国20-22	SK-54	覆土下部	深鉢形	肩部	斜位弦紋 倒鉢	円筒上層式	
国20-23	SK-54	(覆土上部)	深鉢形	肩部	LR横位施文	付土器第Ⅱ段階	
国20-24	SK-54	2層	壺形	肩部	文様施文 地文波状文(平行沈窓 LR充填)	付土器第Ⅱ段階	國19-15と同一個体
国20-25	SK-63	2層	壺形	肩部	斜位斜面形	付土器第Ⅱ段階	國19-15と同一個体
国20-26	SK-66	覆土	深鉢形	肩部	内面に斜面帯	十層内Ⅰ式	器高(1.4)cm、底径4.1cm
国20-27	PT105	1層	深鉢形	肩部	横位斜面(横位)	垂付土器第Ⅱ段階	
国20-28	PT117	覆土	深鉢形	肩部	横位斜面(横位)	垂付土器第Ⅱ段階	
国20-29	PT120	覆土	深鉢形	口縁部	口頭部直口 地文波状文(横位)	馬立式	
国20-30	IXC-90	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	地文波状文 地文波状文(横位)	円筒上層c式	
国20-31	TR-33	Ⅲa層	深鉢形	肩部	口頭部直口 地文波状文(横位)	円筒上層c式	
国20-32	IXC-96	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	地文波状文(横位)	円筒上層c式	
国20-33	VRP-163	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	地文波状文(横位)	円筒上層c式	
国20-34	TR-30	Ⅲa層	深鉢形	口縁～肩部	地文波状文(横位) 地文波状文(横位)	円筒上層c式	
国21-1	VRD-94	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	口頭部直口 地文波状文(横位)	円筒上層d式	
国21-2	VRD-94	Ⅲ層	深鉢形	肩部	地文波状文(横位)	円筒上層d式	
国21-3	遺物集中軽井(焼成2回)	5層	深鉢形(突起)	口縁部	燒成粘合带(突起) 地文・弧状彫文(地文)	円筒上層式	国21-4と同一個体
国21-4	遺物集中軽井(焼成2回)	5層	深鉢形	肩部	骨文 地文 LR横位施文	円筒上層e式	国21-3と同一個体

地図番号	出土位置	層位	器種	部位	文様等の属性	時期	備考
国21-5	VII-B-94	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	吉野穴器(櫻落・L型)口部正面肥厚・横位疊唇・胸齊外輪文(内側竹管)・手形文(内側竹管)	円筒上層e式	国21-6と同一個体
国21-6	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	口部外側肥厚(LR側面圧痕) 平行沈線・胸齊文	円筒上層e式	国21-5と同一個体
国21-7	遺物集中範囲(捨て場2) ▼A-93	Ⅲa層・Ⅲb層	深鉢形	口縁部	口部外側肥厚・口部背面肥厚・横位疊唇・LR横位無文	円筒上層e式	
国21-8	遺物集中範囲(捨て場3) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	口部外側肥厚・胸齊文・尾文・LR横位無文	円筒上層e式	
国21-9	遺物集中範囲2	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	平行沈線・地文(地文結束第1種(LR+RL)横位施文)	円筒上層e式	
国21-10	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	-	深鉢形	胸部	胸齊文 地文LR・RL横位施文	円筒上層e式	
国21-11	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	胸部	胸齊文 地文LR横位施文	円筒上層e式	
国21-12	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	胸部	胸齊文 地文LR横位施文	円筒上層e式	
国21-13	遺物集中範囲(捨て場1) (地文2重)	Ⅲ層	深鉢形	口縁部(突起)	堆積状況(横状) 口部背面肥厚(LR側面圧痕) 三山状秋葉(地文結束第1種) LR横位・斜位施文	円筒上層d-e式	
国21-14	捨て場2	Ⅲa層	深鉢形	口縁部(突起)	堆積状況(横状) 三山状秋葉(地文結束第1種) LR横位・斜位施文	円筒上層d-e式	
国21-15	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲa層	深鉢形	口縁部	口部(LR側面圧痕) 胸齊文(地文LR横位施文)	円筒上層d-e式	
国21-16	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	折衷口縫(地文LR横位施文) LR横位施文(脚部LR横位施文)	円筒上層d-e式	
国21-17	TR-16	撲士	深鉢形	胸部	高麗文(地文) LR横位施文	複林式	
国21-18	TR-98	撲士	深鉢形	口縁部	折衷口縫 LR横位施文	複林式	
国21-19	遺物集中範囲(捨て場1)	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	折衷口縫 横位疊唇 滴垂形	大木rb式	
国21-20	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	脚部各部(第1種) LR横位施文	最花式	
国21-21	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	高麗口縫 沖田式(横状) 地文LR横位施文	最花式	
国21-22	TR-33	Ⅲ層	深鉢形	胸部	地文LR横位施文	最花式	
国22-1	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	胸部	「J」字文 LR充填施文	大木10式	
国22-2	遺物集中範囲(捨て場1) ▼A-93	Ⅲ層	深鉢形	胸部	「J」字文 LR充填施文	大木10式	
国22-3	遺物集中範囲3	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	大木10式	
国22-4	VII-E-104	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	大木10式	
国22-5	遺物集中範囲5	Ⅲ層	深鉢形	脚部各部(第1種)LR	斜位施文	大木10式	国22-6・7と同一個体
国22-6	遺物集中範囲5	Ⅲ層	深鉢形	脚部各部(第1種)LR	斜位施文	大木10式	国22-5・7と同一個体
国22-7	遺物集中範囲5	Ⅲ層	深鉢形	脚部各部(第1種)LR	斜位施文	大木10式	国22-6・7と同一個体
国22-8	TR-5	撲士	深鉢形	脚部各部(第1種)LR	斜位施文	大木10式	国22-6・7と同一個体
国22-9	TR-33	撲士	深鉢形	脚部各部(第1種)LR	斜位施文	大木10式	国22-6・7と同一個体
国22-10	遺物集中範囲(捨て場1)	Ⅲ層	深鉢形	胸部	前後足跡(「J」-LR)横位施文 個体の範囲幅は約2.0cm	大木10式	高さ(1.9)cm、底径約3.0cm
国22-11	VII-Y-93	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	牛立式	
国22-12	IDN-95	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	牛立式	
国22-13	TR-5	撲士	深鉢形	口縁部	KL横位施文	牛立式	
国22-14	IDN-95・96	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	牛立式	
国22-15	IDN-96	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	牛立式	
国22-16	TR-30	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	牛立式	
国22-17	TR-33	Ⅲa層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	馬立式	
国22-18	VII-B-99	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	平行状態 地文LR横位施文	馬立式	国22-6・7と同一個体
国22-19	VII-B-99	Ⅲ層	深鉢形	胸部	平行状態 地文LR横位施文	馬立式	国22-6・7と同一個体
国22-20	IDN-95	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	馬立式	
国22-21	TR-5	撲士	深鉢形	口縁部	KL横位施文	馬立式	
国22-22	IDN-95・96	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	馬立式	
国22-23	IDN-96	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	馬立式	
国22-24	TR-30	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	馬立式	
国22-25	TR-33	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	KL横位施文	馬立式	
国22-26	VII-B-101	Ⅲ層	深鉢形	胸部	平行状態 地文LR横位施文	馬立式	
国22-27	VII-B-104	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	口部外部肥厚 横位疊唇 大組波状	馬立式	
国22-28	VII-E-106	Ⅲ層	漆器	口縁部	口部外部肥厚(横位疊唇)(内側突起) 横位疊唇	馬立式	
国22-29	LTR-01	Ⅲ層	深鉢形	胸部	地文LR横位施文	馬立式	
国22-30	VII-E-98	Ⅲ層	漆器	胸部	地文LR横位施文	馬立式	
国22-31	TR-01	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	地文LR横位施文	馬立式	
国22-32	TR-30	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	地文LR横位施文	馬立式	
国22-33	遺物集中範囲1	Ⅲ層	深鉢形	胸部	平行状態 弧状引文	十腰内1式	
国22-34	遺物集中範囲3	Ⅲ層	漆器	口縁部	内側化粧 弧状引文	十腰内1式	
国22-35	TR-01	Ⅲ層	漆器	口縁部	内側化粧 弧状引文	十腰内1式	
国22-36	VII-E-98	Ⅲ層	漆器	胸部	内側化粧 弧状引文	十腰内1式	
国22-37	TR-01	Ⅲ層	漆器	口縁部	内側化粧 弧状引文	十腰内1式	
国22-38	TR-01	Ⅲa・層	注口	口縁部	山形突起 口部外部肥厚 口部無文帯	十腰内1式	国22-26と同一個体
国22-39	カクラン	漆器	口縁部	無文帯		十腰内1式	
国22-40	TR-20	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	口部外部施文(LR横位施文) 無文帯	十腰内2式	
国22-41	TR-15	Ⅲ層	漆器	胸部	入組無文帯(地文) 横位(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-42	IDN-01	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-43	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-44	TR-10	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-45	TR-20	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-46	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-47	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-48	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-49	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-50	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-51	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-52	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-53	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-54	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-55	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-56	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-57	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-58	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-59	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-60	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-61	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-62	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-63	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-64	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-65	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-66	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-67	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-68	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-69	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-70	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-71	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-72	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-73	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-74	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-75	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-76	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-77	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-78	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-79	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-80	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-81	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-82	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-83	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-84	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-85	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-86	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-87	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-88	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-89	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-90	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-91	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-92	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-93	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-94	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-95	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-96	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-97	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-98	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-99	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-100	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-101	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-102	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-103	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-104	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-105	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-106	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-107	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-108	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-109	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-110	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-111	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-112	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-113	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-114	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-115	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-116	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-117	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-118	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-119	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-120	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-121	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-122	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-123	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-124	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-125	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-126	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-127	IDN-01	Ⅲ層	漆器	胸部	地文(被削引目) LR充填施文	十腰内2式	
国22-128	TR-01	カグラ	漆器	口縁部	無文帯	十腰内2式	
国22-129	TR-20	カグラ	漆器	口縁部			

遺物觀察表

水上(4)遺跡

因版番号	出土位置	層位	器種	部位	文様等の属性	時期	備考
III-37-1	理沢武	I層	深鉢形	頭部	横幅・張抜縄目(第1行) 縦突文	円筒上巻式	
III-37-2	A区埋没沢	I層	深鉢形	口縁部	口唇部外側肥厚(草目) 平行沈澱(脣骨文・2条1対) 地文・輪郭文	円筒上巻式	
III-37-3	A区埋没沢	I層	深鉢形	口縁部	口縁部内側無文 追いU字状斜垂文(RL支填)	最花式	
III-37-4	理沢武	I層	深鉢形	頭部	平行比翼文 波状文 弧状文	十巻内 I式	
III-37-5	理沢武	I層	深鉢形	頭部	波状文入文 楠先丸埴輪文	十巻内 I式	
III-37-6	理沢武	I層	深鉢形	頭部	難解・状文? LR光痕充填	輪付II式	
III-37-7	理沢武	I層	深鉢形	口縁部	羽状網文(LR・RL)	十巻内 I式	
III-37-8	A区埋没沢	I層	深鉢形	口縁部	U字状斜垂文	輪付I・II式	
III-37-9	理沢武	I層	深鉢形	口縁部	平行比翼文 削底沈澱充填 入組帶状文	輪付I・II式	輪付I・II式
III-37-10	A区埋没沢	I層	深鉢形	口縁部	横幅沈澱 入組三叉文	大柄H式	
III-37-11	理沢武	I層	頭部	口縫～肩部	無文	大柄H式	
III-37-12	A区理沢沢	6層	深鉢形	頭部	頭頂圧痕 斜ヒンに纏織乱入	円筒下巻式	
III-37-13	A区理沢沢	6層	深鉢形	口縁部	波状口縫(突起) 口唇部外側肥厚 無文	円筒上巻 d・e式	
III-37-14	A区理沢沢	6層	深鉢形	頭部	「J」字文 入組三叉位旋文	大柄10式	
III-37-15	C区理沢沢	6層	深鉢形	頭部	垂垂文 地文斜位旋文	最花式	図39-11と同じ個体
III-37-16	C区理沢沢	6層	深鉢形	頭部	平行比翼(多足沈澱)	十巻内 I式	
III-37-17	A区木物包合層	8層上層	深鉢形	口縫～底部	波状口縫(2連) 頭部・強垂垂 平行沈澱(3条) 弧状文 切込文 入組三叉文 弧状文 波状文 底部(引形文・柳井形文)	十巻内 I式	口径14.7cm、器高9.8cm 底径5.3cm

図版番号	出土位置	層位	器種	部位	文様等の属性	時期	備考
第37-18	A区埋没沢	6層	深鉢形	口縁部	口唇部直下無文帯 平行沈澱	十層内上式	
第37-19	A区埋没沢	6層	深鉢形	口頭部	口頭部直下無文帯 平行沈澱	縦付土器第IV段階~	
第37-20	A区埋没沢	6層	深鉢形	口縁部	口縁部内面厚壁 幽羽彌文(L.R・RL)	大洞II式	
第37-21	A区埋没沢	6層	深鉢形	口縁部	口縁部内面厚壁 L.R横(捺文)	十層内上式	
第37-22	A区埋没沢	6層	深鉢形	口縁部	口縁部直下無文帯 横位沈澱 L.R横位施文	縦付土器第III段階	
第37-23	C区埋没沢	6層	鉢形	腹~胴部	口縁部直下無文帯 横位沈澱 L.R横位施文	大洞C2式	
第37-24	A区埋没沢	9層	深鉢形	胴部	「」字文 RL先痕施文	大木10式	
第37-25	A区遺物包含層	2~4層	深鉢形	胴部	波U字形重文 波文RL横位施文	蓮花式	
第37-26	A区遺物包含層	2~4層	深鉢形	口縁部	波U字形重文 波文RL横位施文	大木10式	
第37-27	A区遺物包含層	2~4層	深鉢形	胴部	方形文 地文RL・Y施文	馬立式	
第37-28	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	横位沈澱 平行沈澱 弧状区切文	十層内I式	
第37-29	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	胴部	波狀入組文 L.R充填施文	十層内I式	
第37-30	B区遺物包含層	2~4層	深鉢形	腹~胴部	平行沈澱 幽状文	十層内I式	
第37-31	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	胴部	人面文 刻划文	十層内I式	
第37-32	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	右側突起(頂部削除) 縦位沈澱 (L.R充填施文) 左側削立ち(L.R充填施文)	縦付土器第VI段階	
第37-33	B区遺物包含層	2~4層上部	鉢形	胴部	無文 壁面 横位沈澱 入組荷状文 羽状縫文施文(L.R・RL)	縦付土器第IV段階	
第37-34	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	L.R横位施文	縦付土器第V段階	
第38-1	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	楕円形施文	縦付土器第VI段階	
第38-2	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	楕円形施文	縦付土器第VI段階	
第38-3	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	L.R横位施文	縦付土器第II段階以降	
第38-4	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	L.R横位施文	縦付土器第II段階以降	
第38-5	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	L.R横位施文	縦付土器第II段階以降	
第38-6	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	L.R横位施文	縦付土器第II段階以降	
第38-7	A区遺物包含層	2~4層	深鉢形	口縫~胴部	L.R横位施文(胴部上半) 無文部(胴部下半) 補修孔	縦付土器第II段階以降	口径30.1cm、器高(21.1)cm 年代未確定 斧科 MD21_KAN_04-01
第38-8	A区遺物包含層	2~4層	深鉢形	胴~底部	無文	縦付土器第II段階以降	器高(16.0)cm、底径9.4cm
第38-9	A区遺物包含層	2~4層	深鉢形	口縁部	L.R横位施文	縦付土器第II段階以降	
第38-10	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	L.R横位施文	縦付土器第II段階以降	
第38-11	B区遺物包含層	2~4層上部	台形鉢形	底部	無文 台脚欠損	縦付土器第VI段階	
第38-12	A区遺物包含層	2~4層上部	台形鉢形	台部	無文	縦付土器第IV段階	器高(5.7)cm、底径(11.5)cm
第38-13	B区遺物包含層	2~4層上部	深鉢形	口縁部	楕位沈澱 犬眼状三文 平行沈澱	大洞B2式	
第38-14	B区遺物包含層	2~4層上部	鉢形	三足状突起	三足状突起 平行沈澱	大洞B2式	
第38-15	A区遺物包含層	2~4層	深鉢形	頸部	魚眼状三文	大洞B2式	
第38-16	A区遺物包含層	2~4層	台形鉢形	「」字形	犬眼状三文? 平行沈澱	大洞B2式	
第38-17	A区遺物包含層	2~4層	深鉢形	口縁部	三山状突起(劍目) 縦位施文	大洞B式	
第38-18	B区遺物包含層	2~4層上部	鉢形	口縫~胴部	山形口縫 口縫部無文部 条帆	大洞B2式	
第38-19	A区遺物包含層	5層上部	深鉢形	頸部	張口縫帶(L.R横位雍孔) 刃突列	円頭上巻式	
第38-20	A区遺物包含層	5層上部	深鉢形	頸部	楕位・斜縫帶 刀背文	円頭上巻式	
第38-21	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	口縁部(突起)	圓錐陰溝 扇平状底足 頸位・斜縫・横位沈澱 地文L.R横位施文	円頭上巻式	
第38-22	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	胴部	平行沈澱(刀背文)	円頭上巻e式	
第38-23	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	口縫部(突起)	口縫部肥厚 RL横位施文	円頭上巻d-e式	
第38-24	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	口縁部	複数口縫 口縫部前面肥厚 口唇部凹縫による溝文	複式	
第38-25	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	胴部	椭文文 LR横位施文	複式	
第38-26	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	口縫部	無文	最花式	
第38-27	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	口縁部	無文	最花式	
第38-28	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	口縫部	楕位施文	最花式	
第38-29	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	複数口縫 無文部 単輪略条体第1脳(L)施文	最花式	
第39-1	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	椭文文 地文RL横位施文	最花式	図37-15と同一個体
第39-2	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	横位沈澱 「」字形 LR充填施文	大木10式	
第39-3	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口縫部無文部 壁位沈澱	大木10式	
第39-4	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口縫部無文部 壁位沈澱	大木10式	
第39-5	B区遺物包含層	5層上部	深鉢形	口縫部	口縫部	大木10式	
第39-6	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口縫部	大木10式	
第39-7	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口縫部	大木10式	
第39-8	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口縫部無文部	大木10式	
第39-9	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	椭文文 LR充填施文	大木10式	
第39-10	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	椭位沈澱 「」字形 地文LR横位	大木10式	
第39-11	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	波狀口縫 波狀底足 牽狀底座带 RL横位施文	大木10式	
第39-12	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口縫部無文部 横位雍孔帶(剝突)	剖剥式	
第39-13	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	長形円形縫帶	剖剥式	
第39-14	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	椭位沈澱 「」字形 地文LR充填施文	馬立式	
第39-15	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	折返口縫 横位沈澱 無文帯	馬立式	
第39-16	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	折返口縫 横位沈澱 無文帯	馬立式	
第39-17	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	渡狀口縫(剝突側) 平行沈澱 L.R充填施文	十層内I式	
第39-18	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	渡狀口縫 平行沈澱	十層内I式	
第39-19	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	腹~胴部	小度状口縫 平行沈澱(L.R充填施文) 舟形円形縫(地文行)	十層内I式	
第39-20	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	度状口縫 平行沈澱(L.R充填施文)	十層内I式	口径23.2cm、器高(17.5)cm
第39-21	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	度状口縫 平行沈澱	十層内I式	
第39-22	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	度状口縫 折返口縫(下端に沈澱)	十層内I式	

遺物番号	出土位置	部位	種類	部位	文様等の属性	時期	備考
段39-23	A区遺物包含層	6層上部	深鉢形	胴部	横位沈縫 弧状文	十額内 I式	
段39-24	A区遺物包含層	6層上部	深鉢形	口縫～胴部	平行沈縫 斜行沈縫(三角形区画)	十額内 I式	
段40-1	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	方型区画文(頭・横位平行沈縫、長幅円形文・円形文) (6分割) 縱位沈縫 弧状文	十額内 I式	段39-16と同一個体,器高 (26.7)cm
段40-2	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	横位沈縫 斜行沈縫(三角形区画)	十額内 I式	
段40-3	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	波状文 弧状文	十額内 I式	
段40-4	B区遺物包含層	8層上部	浅鉢形	口縫部	山形口縫 橫位北縫 斜位平行文	十額内 I式	
段40-5	B区遺物包含層	8層上位	深鉢形	胴部	人頭波状文 L.R充填施文	十額内 I式	
段40-6	A区遺物包含層	8層上部	浅鉢形	胴部	波狀入組文 波状文 弧状区切文	十額内 I式	
段40-7	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	巴狀入組文 圓形文 弧状区画文	十額内 I式	
段40-8	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	横位沈縫 弧形文	十額内 I式	
段40-9	A区遺物包含層	5層上部	深鉢形	口縫～底部	横位平行沈縫 縱位平行沈縫	十額内 I式	口径25.0cm,器高36.0cm,底 径10.6cm
段40-10	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	折返口縫 無文	十額内 I式	
段40-11	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	網目状燃文(單軸条帶体第1頭R)	十額内 I式	
段40-12	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	平行沈縫 RL充填施文 無文施	十額内 II式	
段40-13	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口唇部(内側)波状文 口唇部底直LR横位施文 平行沈縫(L.R斜位施文)	十額内 II式	
段40-14	A区遺物包含層	8層上部	浅鉢形	口縫部	波狀口縫 贼點	龜付土器第Ⅱ段階	
段40-15	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	刻目帯(平行沈縫・刻目) 虹彫(横割り彫・刻目)	龜付土器第Ⅱ段階	
段40-16	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	平行沈縫 入組状文 L.R充填施文	龜付土器第Ⅱ段階	
段40-17	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	連續弧状波文 半月状文 LR充填施文	龜付土器第Ⅱ段階	
段40-18	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	胴部	刻文帯 横位沈縫 RL充填施文	龜付土器第Ⅱ段階	
段40-19	A区遺物包含層	5層上部	深鉢形	胴部	平行沈縫 RL横位施文	龜付土器第Ⅱ段階	
段41-1	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫～底部	波狀口縫(波狀底部) 刻目帯(平行沈縫・刻目) 虹彫(突起部) 横位沈縫(入組施文 RL充填) 虹彫無文施	龜付土器第Ⅲ段階	年代測定試料 MIZUKAMI#0 - 02
段41-2	A区遺物包含層	8層上部	鉢形	口縫部	無文	龜付土器第Ⅲ段階	
段41-3	B区遺物包含層	5層上部	盞形	胴部	網目文 弓状燃文(10段多)LR・RL充填施文	龜付土器第Ⅲ段階	
段41-4	A区遺物包含層	8層上部	盞形	胴部	横位施文	龜付土器第Ⅲ段階	砂粒多
段41-5	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口唇部内面肥厚 無文	龜付土器第Ⅲ段階	
段41-6	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口唇部内面肥厚 RL横位施文	龜付土器第Ⅲ段階	
段41-7	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	羽状燃文(10段多)LR・RL	龜付土器第Ⅲ段階	
段41-8	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	無文	龜付土器第Ⅲ段階	
段41-9	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	口唇部内面肥厚 彩虹彫文(RL・RL)	龜付土器第Ⅲ段階	
段41-10	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	小山形突起? LR横位施文	龜付土器第Ⅲ段階以降	
段41-11	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	状波文(10段斜位施文) 鋸齿状文(L.R横位施文)	龜付土器第Ⅲ段階以降	
段41-12	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	LR横位施文 沈痕?	龜付土器第Ⅲ段階以降	
段41-13	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	無文	龜付土器第Ⅲ段階以降	
段41-14	A区遺物包含層	8層上部	口縫部(突起)	舌形突起(8字)状斜波文 LR充填施文 3交叉形去 横位沈縫	龜付土器第Ⅲ段階 大柄B1式		
段41-15	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	舌形突起(8字)状斜波文 LR充填施文? 玉抱三爻 横位沈縫	龜付土器第Ⅲ段階 大柄B1式	
段41-16	A区遺物包含層	8層上部	鉢形	頭部	横位沈縫 魚眼状三文(半円文・三叉文)	大柄B2式	
段41-17	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	小山伏口縫 横位沈縫 横位沈縫充填	大柄B1式	
段41-18	A区遺物包含層	8層上部	鉢形	口縫部	小波状口縫 横位沈縫 入組帶文? LR横位施文	大柄B1式	
段41-19	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	平行沈縫(平行線文) 入組三叉文	補修孔	
段41-20	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	小山形突起 LR横位施文	大柄B3式	
段41-21	B区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	LR横位施文	大柄B3式	
段41-22	A区遺物包含層	8層上部	深鉢形	口縫部	LR横位施文	大柄B3式	
段41-23	B区遺物包含層	8層上部	鉢形	頭部	LR横位施文 横位沈縫	大柄C2式?	
段41-24	B区遺物包含層	8層中部	深鉢形	胴部	剪骨文 地文RL横位	円筒上刷式	
段41-25	B区遺物包含層	8層中部	深鉢形	口縫部	波狀口縫 横位沈縫 斜行沈縫 条痕	最高式	
段41-26	B区遺物包含層	8層中部	深鉢形	胴部	平行沈縫 黑垂文 地文RL縱位	最高式	
段41-27	A区遺物包含層	8層中部	深鉢形	胴部	唐U字状斜波文 波文 RL横位施文	最高式	
段41-28	B区遺物包含層	8層中～下部	深鉢形	胴部	唐U字状斜波文 波文 RL横位施文	最高式	
段41-29	B区遺物包含層	8層中～下部	深鉢形	頭部	口縫部無文 倒突 黑垂文 地文LR横位	最高式	
段41-30	B区遺物包含層	8層中～下部	深鉢形	頭部	口J字 文地RL横位施文	大木10式	
段42-1	A区遺物包含層	8層～下部	深鉢形	口縫～胴部	蝶形隆起 弧状区画 柄状縫文 楊弓文 地文RL縫位施文	大木10式	段42-3と同一個体,口徑 25.7cm,器高(15.1)cm
段42-2	A区遺物包含層	8層下部・8 中～下部	深鉢形	口縫～胴部	LR縫位施文 締修孔 地底(崩底)	大木10式	口径22.6cm,器高(37.6) cm,底径3.3cm
段42-3	A区遺物包含層	8層～下部	深鉢形	胴部	波瀾文 地文RL縫位施文	大木10式	段42-1と同一個体:
段42-4	A区遺物包含層	8層中～下部	深鉢形	口縫部	波狀口縫(波狀突起) 横位沈縫 弧状縫文	蓋置式	
段42-5	A区遺物包含層	8層中～下部	深鉢形	胴部	網目状燃文(單軸條帶体第1頭R)	十額内 I式	
段42-6	B区遺物包含層	8層中～下部	深鉢形	胴部	波狀文 横位沈縫 LR充填施文	龜付土器第Ⅱ段階	
段42-7	A区遺物包含層	8層中～下部	深鉢形	胴部	貼文 帶狀文	龜付土器第Ⅱ段階	
段42-8	A区遺物包含層	8層中～下部	深鉢形	胴部	朱痕文	龜付土器第Ⅱ段階	
段42-9	A区遺物包含層	8層中部	深鉢形	口縫部	口唇部内面肥厚 RL横位施文	龜付土器第Ⅱ段階	
段42-10	B区遺物包含層	8層中部	深鉢形	口縫部	横位施文	龜付土器第Ⅱ段階	
段42-11	B区遺物包含層	8層中部	深鉢形	口縫部	口縫部無文 地文	龜付土器第Ⅱ段階	
段42-12	A区遺物包含層	8層下部	深鉢形	頭部	口縫部無文 倒突 黑垂文	最高式	
段42-13	A区遺物包含層	8層下部	深鉢形	口縫部	無文	龜付土器第Ⅱ段階	
段42-14	B区遺物包含層	8層	深鉢形	胴部	縱位沈縫(刻目) 薩摩による脚骨文(刻目) 地文RL横位施文	円筒上刷式	
段42-15	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縫部(突起)	縱位沈縫 弧狀縫 口唇部外面肥厚(RL脚部正直)	円筒上刷d-e式	
段42-16	B区遺物包含層	8層	深鉢形	胴部	平行沈縫 弧形文	梗林式	

図版番号	出土位置	層位	器種	部位	文様等の属性	時期	備考
43-1	B区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁～胴部	折衷口縁 漢U字状撲垂文 地文R縦横巻文	最古式	
43-2	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	模様沈籠 アルファベット文 LR充填施文	大木10式	図43-3と同一個体
43-3	A区遺物包含層	8層	深鉢形	胴部	アルファベット文 LR充填施文	大木10式	図43-2と同一個体
43-4	B区遺物包含層	8層	深鉢形	胴部	「」字文 LR充填施文	大木10式	
43-5	B区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	單輪轍条体第1類(L)	大木10式	
43-6	B区遺物包含層	8層	深鉢形	胴部	單輪轍条体第1類(R)	大木10式	
43-7	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	横位沈籠 弧状文 地文LR縦位施文	馬立式	
43-8	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	横位沈籠 弧状文	馬立文	
43-9	B区遺物包含層	8層	深鉢形	胴部	方彌形画文(?)字文? RL充填施文?	馬立式	
43-10	B区遺物包含層	8層	浅鉢形	胴部	模様沈籠 波頭文 長方形文	馬立式	
43-11	B区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	波狀口縁 橫位沈籠 円形文 長椭円形文	十輪内I式	
43-12	B区遺物包含層	8層	深鉢形	頭部	平行沈籠(2条1対)	十輪内I式	
43-13	B区遺物包含層	8層	浅鉢形	頭部～胴部	模様沈籠 LR充填施文 斜行沈籠(三角区画文)	十輪内I式	
43-14	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	口縁部無文 平行沈籠(LR充填施文)	十輪内I式	
43-15	B区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	口縁部無文 張状模様	細付土器第Ⅳ段階	
43-16	B区遺物包含層	8層	鉢	口縁部	纏文帯(LR横位施文) 模位沈籠 無文帯	細付土器第Ⅳ段階	
43-17	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	入瓶状模様 RQ多条(RQ) 光澤施文	細付土器第Ⅳ段階	
43-18	A区遺物包含層	8層	深鉢形	胴部	入瓶状文? 羽状模様? (LR = RL)	細付土器第Ⅳ段階	
43-19	A区遺物包含層	2~4層+8層	台付鉢?	脇～台部	羽状? 台部無文	細付土器第Ⅳ段階	器高(10.5)cm,底径11.5cm
43-20	B区遺物包含層	8層	深鉢形	唇部	平行沈籠 細沈籠充填 入瓶状文? 平行沈籠 垂	細付土器第Ⅳ段階	
43-21	B区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	RL横位施文	細付土器第Ⅳ段階	
43-22	B区遺物包含層	6層上部	深鉢形	口縁部	口部内面肥厚 羽状模様(LR + RL)	細付土器第Ⅳ段階	
43-23	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	RL横位施文	細付土器第Ⅳ段階	
43-24	B区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	口縁部内面肥厚 弓状模様(LR + RL)	細付土器第Ⅳ段階	
43-25	B区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	口部底付下: RL横位施文	細付土器第Ⅱ段階以降	
43-26	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	Q頭多条(RL) 横位施文	細付土器第Ⅱ段階以降	
43-27	B区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	無文	細付土器第Ⅱ段階以降	
43-28	A区遺物包含層	8層	深鉢形	口縁部	LR横位施文	大洞B式	

## 声沢(1)遺跡

図版番号	出土位置	層位	器種	部位	外面文様	内面模様	時期	分類	備考
50-1	トレンド1-1 層	深鉢	口縁部	口部脇～脇部	沈籠	ミガキ	中期後半	III-2	P=8
50-2	トレンド1-1 層	深鉢	口縁部	口部脇～脇部	沈籠	ミガキ	中期後半	III-2	P=4 + 8
50-3	トレンド2-1 層	鉢	底部	摩擦	ミガキ	中期	III		
50-4	トレンド2-3 層	深鉢	底部	一	ミガキ	中期	III	P=2	
50-5	トレンド2-3 層	深鉢	口縁部	突刺	ミガキ	中期	III	P=2	スヌ状模様付着
50-6	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	胴部	沈籠 摩擦 RL縦文	ミガキ	中期後半	III-2		
50-7	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	胴部	沈籠	ミガキ	中期後半	III-2	P=4	
50-8	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 織文 小突起	ミガキ	後期	IV		
50-9	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 織文	ミガキ	後期	IV		
50-10	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 織文	ミガキ	後期	IV		
50-11	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 皺付 LR縦文	ミガキ	後期前半	IV-1		
50-12	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠	ミガキ	後期	IV		又ス状模様付着
50-13	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 LR縦文	ミガキ	後期	IV		又ス状模様付着
50-14	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 LR縦文	ミガキ	後期	IV		又ス状模様付着
50-15	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠	ミガキ	後期	IV		又ス状模様付着
50-16	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠	ミガキ	後期	IV		又ス状模様付着
50-17	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 RL縦文	ミガキ	後期	IV	P=5 - 外面摩擦	スヌ状模様付着
50-18	中段調査区 風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 LR縦文 口縁部裏(LR縦文)	ミガキ	後期	IV	P=7 - 外面摩擦	スヌ状模様付着
50-19	トレンド24-1 層	深鉢	胴部	沈籠	ミガキ	後期	IV	P=1	
50-20	トレンド25-1 層	深鉢	胴部	沈籠 LR縦文(縦)	ミガキ	後期	IV	P=1	
50-21	トレンド14-1 層	深鉢	胴部	沈籠 LR + RL縦文(羽状)	ミガキ	後期前半	IV-1		
50-22	トレンド2-2 層	深鉢?	胴部	RL縦文	ミガキ	後期	IV	P=1	
50-23	トレンド18-1 层	深鉢	胴部	RL縦文	ミガキ	後期	IV		
50-24	トレンド2-1 层	深鉢	底部	沈籠 RL縦文	ミガキ	後期前半	IV-1	P=1	
50-25	トレンド11-1 层	深鉢	口縁部	沈籠 LR縦文	ミガキ	後期	IV	P=11	スヌ状模様付着
50-26	トレンド11-1 层	深鉢	口縁部	沈籠 LR縦文	ミガキ	後期	IV	P=11	スヌ状模様付着
50-27	風呂木 II層	深鉢	口縁部	沈籠 LR縦文	ミガキ	後期	IV		
50-28	トレンド24-1 层	深鉢	胴部	RL縦文	ミガキ	後期	IV		
50-1	トレンド11-1 层	深鉢	脇?	沈籠	脂子 脊子 勝付 RL縦文	脂ナダ	後期前半	IV-3	P=12 + 十輪内V
50-2	トレンド11-1 层	深鉢	脇?	沈籠	脂子 勝付 勝付 RL縦文	脂ナダ	後期前半	IV-3	P=12 + 十輪内V
50-3	トレンド15-1 层	鉢	口縁部	沈籠 LR縦文	ミガキ	後期前半	IV-3	P=1 - 十輪内V	
50-4	トレンド15-1 层	鉢	口縁部	沈籠 LR縦文	ミガキ	後期前半	IV-3	P=1 - 十輪内V	
50-5	トレンド15-1 层	鉢	胴部	脂子 勝付	ミガキ	後期前半	IV-3	P=1 - 十輪内V	
50-6	トレンド11-1 层	深鉢	底部	沈籠	無文(ミガキ)	ミガキ	後期	IV	P=1
50-7	トレンド14-1 层	深鉢	口縁部	沈籠	無文(ミガキ)	ミガキ	後期	IV	P=2
50-8	トレンド11-1 层	深鉢	口縁部	沈籠	無文(ミガキ)	ミガキ	後期	IV	P=1
50-9	トレンド12-1 层	深鉢	脇?	胴部	摩擦(不明)	ミガキ	後期	IV	
50-10	トレンド11-1 层	深鉢	底部	沈籠	無文(ミガキ)	ミガキ	後期	IV	
50-11	中段調査区 B層	小型土器	胴部～底部	無文	脂ナダ	後期	IV		スヌ状模様付着
50-12	トレンド25-1 层	鉢?	胴部	無文(ミガキ)	ミガキ	後期	IV		
50-13	トレンド24-1 层	深鉢	胴部	無文(ミガキ)	ミガキ	後期	IV		

## 石器観察表

## 大川添(1)遺跡

遺物番号	出土位置	層位	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
226-1	SI-01	I層	燕形剥離石を形成する断片	珪質頁岩	6.0	7.95	2.85	92.6	S-6 次ハジケあり 打面を90°。180°に転換しない刃削
226-2	SI-01	床面	石核	珪質頁岩	4.8	3.2	3.0	49.5	226-3 石核
226-3	SI-02	覆土下層	石核	珪質頁岩	5.55	2.15	0.4	2.5	226-4 複土下層
226-4	SI-02	覆土上層	石核	珪質頁岩	4.9	2.25	0.75	8.7	226-5 複土上層
226-5	SI-02	覆土上層	石核	珪質頁岩	2.95	4.4	0.8	6.4	226-6 複土上層
226-6	SI-02	3層	削器	珪質頁岩	1.9	0.90	0.3	0.5	226-7 削器
226-7	SI-02	覆土下層	削器	珪質頁岩	6.2	4.95	1.8	30.4	226-8 3層
226-8	SI-02	削器	珪質頁岩	7.3	3.75	0.85	18.4	S-4	
226-9	SI-02	床面加工剥片	珪質頁岩	(1.1)	1.2	0.4	0.6	226-10 床面加工剥片	
226-10	SI-02	覆土下層	床面加工剥片	珪質頁岩	2.3	3.15	0.7	4.3	226-11 床面の一部
226-11	SI-02	床面直上	二次加工剥片	珪質頁岩	3.9	3.25	1.7	18.4	S-5 より不規則な複合化しており、正面右側面部の一部に集中する二次加工痕がみられる。裏面は大部分が自然面であり、明瞭な二次加工痕はみられない。
226-12	SI-02	床面直上	二次加工剥片	珪質頁岩	6.2	2.4	2.15	20.9	226-13 SI-02
226-13	SI-02	床面直上	燕形剥離石を形成する断片	珪質頁岩	6.5	5.6	1.15	53.9	S-1
226-14	SI-02	覆土直上	石核	珪質頁岩	1.95	0.9	0.3	1.8	226-15 覆土直上
226-15	SI-02	覆土直上	石核	珪質頁岩	5.2	3.15	0.7	8.1	226-16 覆土直上
226-16	SI-02	覆土直上	敲き石	珪質頁岩	5.1	4.8	1.2	114.1	石核の転用
226-17	SI-02	覆土直上	敲き石	珪質頁岩	10.3	8.3	5.3	662.6	227-1 覆土直上
227-1	SK-02	覆土直上	削器	珪質頁岩	7.1	4.4	1.9	40.7	227-2 覆土直上
227-2	SK-09	覆土直上	削器	珪質頁岩	(3.0)	3.35	0.4	0.84	227-3 覆土直上
227-3	SK-09	覆土直上	燕形剥離石を形成する断片	珪藻石	6.1	2.4	2.2	26.1	227-4 覆土直上
227-4	SK-10	覆土直上	削器	珪質頁岩	2.9	2.1	1.85	6.0	227-5 覆土直上
227-5	SK-10	覆土直上	削器	珪質頁岩	3.8	2.1	0.6	6.1	227-6 覆土直上
227-6	SK-10	覆土直上	削器	珪質頁岩	2.5	2.18	0.75	11.3	227-7 覆土直上
227-7	SK-10	覆土直上	二次加工剥片	珪質頁岩	2.45	2.2	0.6	4.1	227-8 覆土直上
227-8	SK-10	覆土直上	石核	珪質頁岩	3.6	2.5	2.5	25.9	227-9 覆土直上
227-9	SK-16	覆土直上	二次加工剥片	珪質頁岩	3.4	(2.0)	0.8	26.1	227-10 SK-32
227-10	SK-32	覆土直上	削器	珪質頁岩	4.6	6.75	1.1	26.7	227-11 SK-33
227-11	SK-33	I層	石核	珪質頁岩	3.55	4.7	0.85	12.8	227-12 SK-33
227-12	SK-33	I層	削器	珪質頁岩	3.25	2.3	0.55	3.4	227-13 SK-33
227-13	SK-33	I層	削器	珪質頁岩	0.65	3.5	1.1	22.9	227-14 SK-34
227-14	SK-34	I層	二次加工剥片	珪質頁岩	6.6	4.9	2.3	49.2	227-15 PIT-95
PIT-95	覆土	所附	珪質頁岩	7.4	(6.0)	1.75	(62.9)	227-16 TR-8	
227-16	TR-8	I層	石核	珪質頁岩	2.5	1.65	0.5	1.5	227-17 VBG-94
227-17	VBG-94	II層	石核	珪質頁岩	2.1	1.3	0.8	6.8	227-18 LTR-1
227-18	LTR-1	II層	石核	珪質頁岩	(3.15)	1.55	0.4	(0.8)	227-19 遺物集中剥離(地て塙2面)
227-19	遺物集中剥離(地て塙2面)	II層	石核	珪質頁岩	(3.95)	1.55	0.7	3.5	227-20 先端欠損 真に破損あり 尖基有茎型
227-20	VIE-96	II層	石核	珪質頁岩	3.7	1.3	0.4	1.4	227-21 VIE-103
227-21	VIE-103	II層	石核	珪質頁岩	3.90	1.15	0.9	0.90	228-1 遺物集中剥離(地て塙2面)
228-1	遺物集中剥離(地て塙2面)	II層	石核	珪質頁岩	2.95	3.0	0.7	3.0	228-2 遺物集中剥離(地て塙2面)
228-2	遺物集中剥離(地て塙2面)	II層	石核	珪質頁岩	3.3	2.2	0.8	4.2	228-3 VIE-95
228-3	VIE-95	I層	石核	珪質頁岩	(4.0)	1.8	0.75	(5.3)	228-4 TR-9
228-4	TR-9	II層	石核	珪質頁岩	4.8	2.9	1.1	6.2	228-5 VIE-107
228-5	VIE-107	II層	石核	珪質頁岩	6.4	3.8	1.8	21.6	228-6 VIE-94
228-6	VIE-94	I層	石核	珪質頁岩	10.6	3.4	2.1	60.1	228-7 IV-99
228-7	IV-99	I層	石核	珪質頁岩	(8.2)	2.1	0.6	(13.9)	228-8 VIE-97
228-8	VIE-97	I層	石核	珪質頁岩	3.0	2.2	0.8	10.0	228-9 VIE-97
228-9	VIE-97	I層	石核	珪質頁岩	(7.0)	4.3	1.3	(39.1)	228-10 LTR-1
228-10	LTR-1	II層	石核	珪質頁岩	4.85	3.3	1.0	12.0	228-11 VIE-99
228-11	VIE-99	II層	石核	珪質頁岩	(6.30)	3.85	0.6	(14.4)	228-12 LTR-1
228-12	LTR-1	II層	石核	珪質頁岩	15.4	5.5	2.3	162.0	228-13 TR-12
228-13	TR-12	II層	石核	無縫石	3.3	3.55	0.8	6.1	228-14 IV-100
228-14	IV-100	II層	石核	珪質頁岩	3.3	4.1	1.2	16.4	228-15 VIE-98
228-15	VIE-98	II層	石核	珪質頁岩	4.9	3.5	1.2	16.2	228-16 VIE-92
228-16	VIE-92	II層	石核	珪質頁岩	(5.6)	4.35	0.75	62.7	228-17 VIE-92
228-17	VIE-92	II層	石核	珪質頁岩	5.9	2.9	1.1	10.0	228-18 VIE-92
228-18	VIE-92	II層	石核	珪質頁岩	8.6	4.95	1.8	58.9	228-19 高西
228-19	高西	II層	石核	珪質頁岩	8.6	4.95	1.8	58.9	228-20 高西
228-20	高西	II層	石核	珪質頁岩	8.2	5.1	1.9	81.2	228-21 VIE-93
228-21	VIE-93	II層	石核	珪質頁岩	(3.95)	3.3	1.25	(16.8)	228-22 遺物集中剥離2
228-22	遺物集中剥離2	II層	石核	珪質頁岩	(4.9)	4.0	0.35	(14.4)	228-23 VIE-97
228-23	VIE-97	II層	石核	珪質頁岩	6.2	3.7	2.0	39.8	228-24 遺物集中剥離3
228-24	遺物集中剥離3	II層	石核	珪質頁岩	6.5	5.0	0.13	30.3	228-25 LTR-1
228-25	LTR-1	II層	石核	珪質頁岩	7.0	4.8	1.2	32.7	228-26 LTR-1
228-26	LTR-1	II層	石核	珪質頁岩	7.15	6.4	1.4	34.3	228-27 VIE-99
228-27	VIE-99	II層	石核	珪質頁岩	11.35	7.1	1.35	80.2	228-28 SI-01付近
228-28	SI-01付近	II層	石核	珪質頁岩	8.9	6.6	0.8	66.9	228-29 LTR-1-1
228-29	LTR-1-1	II層	石核	珪質頁岩	(9.8)	6.0	1.3	(58.6)	228-30 I-100
228-30	I-100	II層	石核	珪質頁岩	8.52	4.5	2.2	69.0	228-31 遺物集中剥離2
228-31	遺物集中剥離2	II層	石核	珪質頁岩	5.2	5.25	1.0	17.7	228-32 VIE-97
228-32	VIE-97	II層	石核	珪質頁岩	(5.45)	4.5	1.2	(18.0)	228-33 VIE-97
228-33	VIE-97	II層	石核	珪質頁岩	5.6	2.8	2.1	13.3	228-34 LTR-1
228-34	LTR-1	II層	石核	珪質頁岩	10.5	4.6	1.1	75.4	228-35 LTR-1-3
228-35	LTR-1-3	II層	石核	珪質頁岩	(8.2)	(4.8)	1.4	(58.5)	228-36 遺物集中剥離5
228-36	遺物集中剥離5	II層	石核	珪質頁岩	(4.9)	3.7	1.5	(22.9)	228-37 IV-99
228-37	IV-99	II層	石核	珪質頁岩	7.1	4.4	1.0	19.7	228-38 VIE-96
228-38	VIE-96	II層	石核	珪質頁岩	3.6	3.3	0.7	7.0	228-39 LTR-12
228-39	LTR-12	II層	石核	珪質頁岩	3.9	4.1	0.6	(10.5)	228-40 VIE-12
228-40	VIE-12	II層	石核	珪質頁岩	3.9	4.1	0.6	(10.5)	228-41 VIE-96
228-41	VIE-96	II層	石核	珪質頁岩	3.9	4.1	0.6	(10.5)	228-42 遺物集中剥離1
228-42	遺物集中剥離1	II層	石核	珪質頁岩	5.6	3.9	0.45	12.0	228-43 VIE-97
228-43	VIE-97	II層	石核	珪質頁岩	(7.0)	4.1	0.6	(23.8)	228-44 VIE-94
228-44	VIE-94	II層	石核	珪質頁岩	5.9	6.6	1.1	34.7	228-45 TR-12
228-45	TR-12	II層	石核	珪質頁岩	3.55	2.4	0.45	4.4	-

### 大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅲ・芦沢(1)道路

地盤番号	出土位置	層位	種類	石材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
331-6	橋下-103	田原	削り石	珪質頁岩	3.7	6.7	1.1	13.4	
331-7	高岡中	田原	複数石製	珪質頁岩	2.9	3.45	2.4	22.9	
331-8	輝A-97	田原	複数剥離削り成土石造形	珪質頁岩	5.5	2.5	0.8	9.8	
331-9	TR-7	覆土	石積	珪質頁岩	6.9	5.35	4.45	189.3	
331-10	IXB-93	田原	石積	珪質頁岩	6.6	10.5	7.5	387.4	複数打面 打面調整をせず打ち抜かなかった時点で終了
332-1	IXC-95	田原	削り石	砂岩	14.9	6.5	5.4	81.2	
332-2	遺物集中帯(削り石集)	田原	削り石	砂岩	5.7	6.9	2.0	26.8	
332-3	IXF-95	田原	削り石	砂岩	16.9	6.4	4.4	246.3	
332-4	IXD-97	田原	削り石	砂岩	12.4	7.5	4.5	57.7	
332-5	IXE-98	田原	削り石	花崗岩	12.0	9.9	6.9	1094.4	
332-6	VIC-C-97	田原	敲き石	珪質頁岩	6.6	4.65	4.1	93.2	右移の軸用
333-1	VEG-104	田原	敲き石	珪質頁岩	9.55	7.4	7.7	271.0	右移の軸用
333-2	VIC-C-96	田原	敲き石	砂岩	14.95	8.0	3.2	465.3	
333-3	IXC-101	田原	敲き石	砂岩	12.8	6.4	3.2	34.1	
333-4	IXC-110	田原	石積	ダラサイト	29.8	19.4	3.1	3000.0	
333-5	IXB-99	田原	石積	花崗岩	26.3	23.6	5.8	6000.0	
333-6	IXC-98	田原	石積	珪質頁岩	29.25	24.2	4.9	4000.0	
333-7	遺物集中帯(削り石集)	田原	石積	花崗岩	25.3	33.2	8.4	8000.0	
333-8	IXC-102	田原	石積	花崗岩	8.2	9.2	1.4	102.4	複打痕が残る
334-2	TR-29	田原	自然端(輪入端)	花崗岩	4.5	(2.5)	1.4	(24.1)	

### 水上(4)遺跡

地盤番号	出土位置	層位	種類	石材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
344-1	B区 遺物包含層	8層	石堆	珪質頁岩	(3.6)	1.3	0.6	(2.7)	
344-2	A区 遺物包含層	2~4層	石堆	珪質頁岩	3.35	2.4	0.8	3.4	
344-3	4層	石堆	珪質頁岩	7.0	2.75	1.35	25.0		
344-4	A区 遺物包含層	2~4層	削り石	珪質頁岩	2.9	2.1	0.7	1.1	
344-5	A区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩	(4.65)	1.85	1.85	(18.9)	
344-6	A区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩	(4.55)	(3.85)	(1.4)	15.1	
344-7	A区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩	6.65	5.6	1.75	48.5	
344-8	B区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩	5.15	5.9	1.7	22.8	
344-9	A区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩	4.3	4.45	1.1	22.9	
344-10	B区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩	3.7	4.6	1.1	17.8	
344-11	A区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩	4.1	3.7	1.1	21.6	
344-12	A区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩	3.8	2.7	0.85	6.2	
344-13	A区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩と十日町片岩	9.6	3.5	0.6	9.6	
344-14	A区 遺物包含層	8層	削り石	珪質頁岩と十日町片岩	7.3	3.5	1.5	31.1	
345-1	B区 遺物反復層	8層	石積	珪質頁岩	7.3	5.3	3.6	134.3	
345-2	B区 遺物包含層	8層	石積	珪質頁岩	7.3	6.0	4.3	193.3	
345-3	A区 遺物包含層	8層	敲き石	珪質頁岩	7.9	5.2	5.2	291.5	
345-4	A区 遺物包含層	8層	敲き石	硅灰岩	7.6	6.9	6.8	347.5	
345-5	A区 遺物包含層	8層	敲き石	硅灰岩	7.1	6.1	4.4	265.3	
345-6	A区 遺物包含層	8層	敲き石	硅灰岩	11.6	6.6	3.6	276.7	
345-7	A区 遺物包含層	8層	敲き石	硅灰岩	10.9	6.6	3.95	27.2	
346-1	A区 遺物反復層	8層	敲き石	硅灰岩	(9.45)	4.9	3.4	(187.8)	
346-2	A区 遺物包含層	8層	敲き石	硅灰岩	7.7	7.0	5.5	341.5	
346-3	裸段	I層	敲き石	硅灰岩	0.9	9.8	9.2	776.1	
346-4	C区 植木段	6層	削り石	珪質頁岩	11.1	9.9	5.9	747.8	
346-5	C区 植木段	6層	敲き石	珪質頁岩	14.5	10.6	3.8	338.3	
346-6	B区 遺物包含層	8層	石積	珪質頁岩	(38.1)	25.7	9.8	211000.0	

### 芦沢(1)遺跡

地盤番号	出土位置	層位	種類	石材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
352-1	レンチ37-3	Ⅰ層	削り石	珪質頁岩	(2.55)	1.45	0.5	(1.8)	
352-2	レンチ37-3付近	Ⅱ層	石堆	珪質頁岩	3.8	2.75	0.3	2.8	
352-3	レンチ37付近	Ⅱ層	石堆	珪質頁岩	(4.30)	3.8	1.2	(16.8)	
352-4	ビンチ10-2	Ⅰ層	削り石	石	8.0	5.75	4.75	47.5	
352-5	ビンチ10-2付近	Ⅰ層	削り石	石	8.0	5.75	4.75	47.5	
352-6	レンチ37-1	Ⅰ・Ⅱ層	石堆	珪質頁岩	2.5	2.3	0.55	2.5	
352-7	レンチ79-1	Ⅰ・Ⅱ層	石堆	珪質頁岩	6.7	4.75	1.25	33.9	背面は打面からの数回の剥離がみられる
352-8	レンチ79-1付近	Ⅰ・Ⅱ層	石堆	珪質頁岩	(2.0)	2.0	0.4	(1.6)	
352-9	レンチ13-2	Ⅰ・Ⅱ層	石堆	珪質頁岩	3.2	2.6	0.6	6.5	S-2 一側縁を両面5cm加工
352-10	レンチ26-1	Ⅰ・Ⅱ層	石堆	珪質頁岩	4.25	2.45	1.1	9.2	
352-11	レンチ37付近	Ⅰ層	削り石	珪質頁岩	(2.4)	2.55	0.7	(3.8)	
352-12	レンチ37付近	Ⅰ・Ⅱ層	削り石	珪質頁岩	3.0	3.35	0.65	5.1	
352-13	レンチ37付近	Ⅰ・Ⅱ層	石堆	珪質頁岩	4.6	3.1	1.1	11.0	S-1
352-14	レンチ2-1	Ⅰ・Ⅱ層	一次加工削片	珪質頁岩	11.5	7.3	2.2	156.3	
352-15	レンチ30-1付近	Ⅰ・Ⅱ層	削り石	珪質頁岩	(5.6)	(5.1)	3.9	(128.9)	
352-16	レンチ37付近	Ⅰ・Ⅱ層	敲き石	砂岩	12	5.5	2.4	194.8	
352-18	レンチ13付近	Ⅱ層	敲き石	砂灰岩	(7.8)	7.8	2.8	(232.8)	

### 石製品観察表

#### 大川添(1)遺跡

地盤番号	出土位置	層位	種類	石材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
344-1	PT-25	覆土	円錐状石製品	砂岩	4.05	3.7	1.1	22.5	
344-3	IXD-92-93	田原	石棒	砂岩	33.0	8.9	10.0	4500.0	適合資料

#### 芦沢(1)遺跡

地盤番号	出土位置	層位	種類	石材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
345-17	レンチ13付近	田原	石製品	砂灰岩	9.35	4.15	2.2	51.3	

大川添(1) 遺跡



遺跡遠景（北から）



低位面俯瞰撮影（写真上が北）

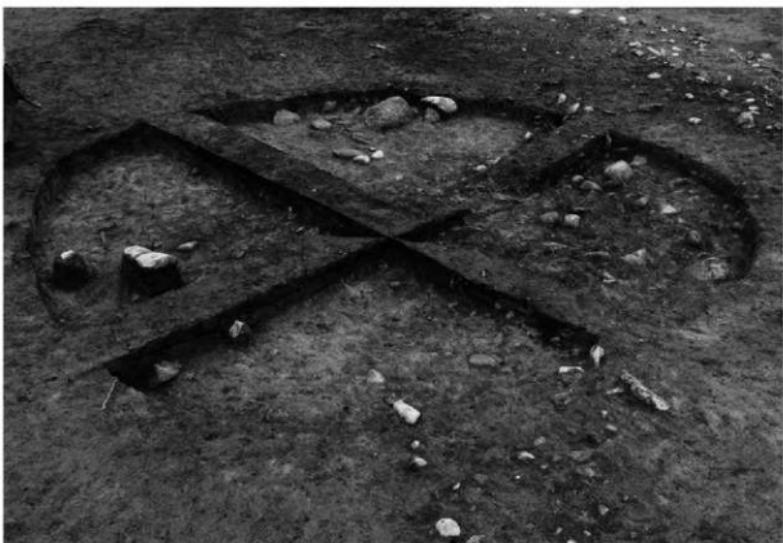
写真1 空中写真

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 大川添(1) 遺跡



第1号堅穴住居跡、焼土、遺物出土状況（南東から）



第1号堅穴住居跡土層断面（南東から）

### 写真2 第1号堅穴住居跡

大川添(1) 遺跡



第2号堅穴住居完掘（北東から）



第2号堅穴住居跡土層断面（北東から）



第2号堅穴住居跡土層断面（北から）



第2号堅穴住居跡周辺PIT土層断面（東から）

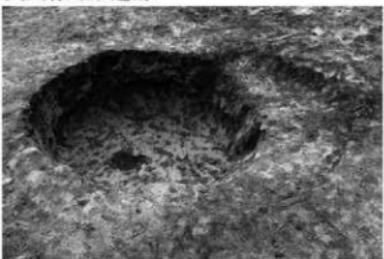


第2号堅穴住居跡遺物出土状況（北西から）

写真3 第2号堅穴住居跡

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 大川添(1) 遺跡



第1号土坑完掘（東から）



第1号土坑土層断面（東から）



第5号土坑完掘（南東から）



第5号土坑土層断面（東から）



第30号土坑完掘（北東から）



第30号土坑土層断面（北東から）



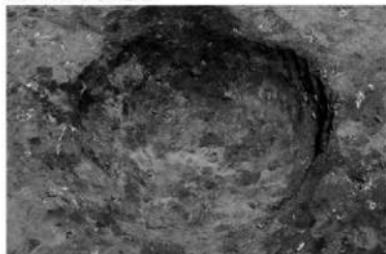
第77号土坑完掘（南から）



第77号土坑土層断面（西から）

写真4 土坑(A I類)

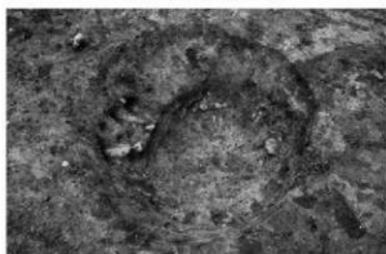
大川添(1) 遺跡



第7号土坑完掘（東から）



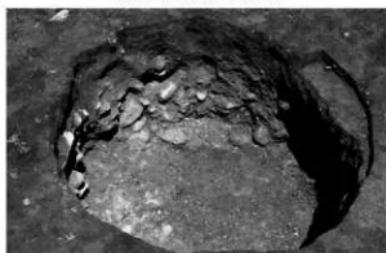
第7号土坑土層断面（東から）



第12号土坑完掘（東から）



第12号土坑土層断面（東から）



第15号土坑完掘（南東から）



第15号土坑土層断面（南東から）



第32号土坑完掘（東から）



第32号土坑土層断面（東から）

写真5 土坑(A II類①)

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 大川添(1) 遺跡



第38号土坑完掘（東から）



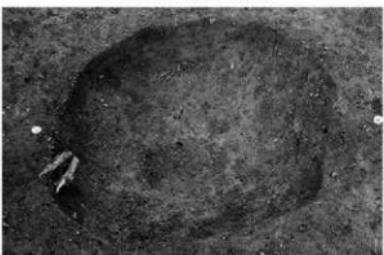
第38号土坑土層断面（東から）



第53号土坑完掘（南から）



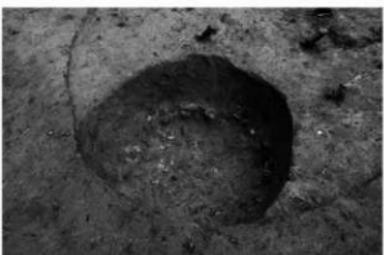
第53号土坑土層断面（南から）



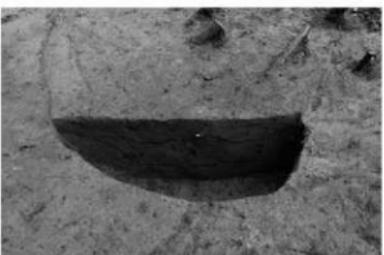
第69号土坑完掘（南から）



第69号土坑土層断面（南から）



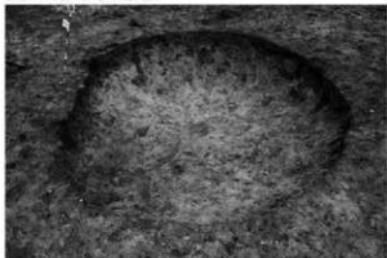
第82号土坑完掘（西から）



第82号土坑土層断面（西から）

写真6 土坑(A II類②)

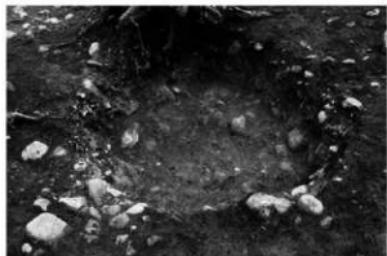
大川添(1) 遺跡



第16号土坑完掘（南から）



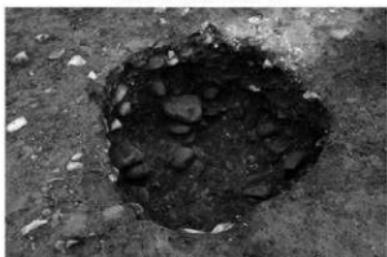
第16号土坑土層断面（南から）



第19号土坑完掘（東から）



第19号土坑土層断面（東から）



第33号土坑完掘（東から）



第33号土坑土層断面（東から）



第37号土坑完掘（東から）

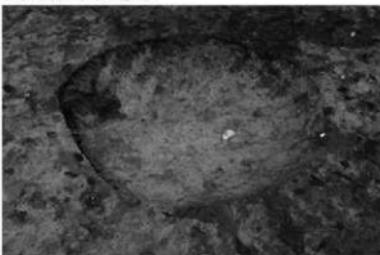


第37号土坑土層断面（東から）

写真7 土坑(AⅢ類①)

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

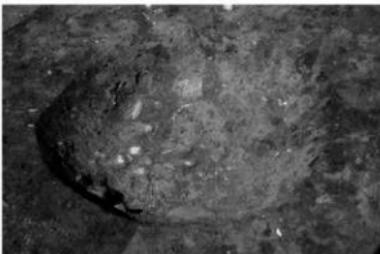
### 大川添(1) 遺跡



第40号土坑完掘（東から）



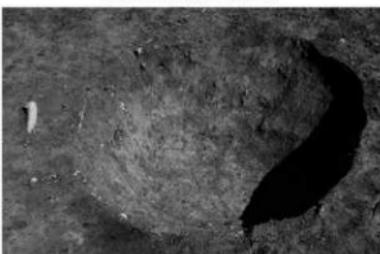
第40号土坑土層断面（東から）



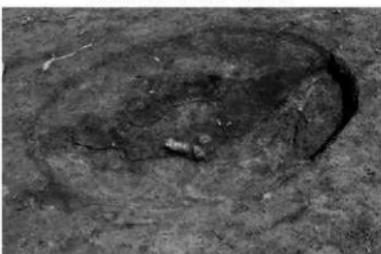
第42号土坑完掘（東から）



第42号土坑土層断面（東から）



第64号土坑完掘（南から）



第64号土坑土層断面（南から）



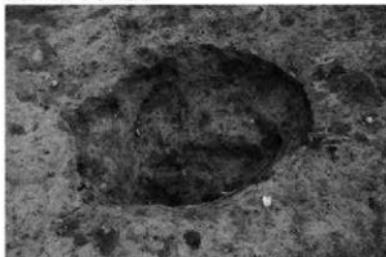
第74号土坑完掘（南東から）



第74号土坑土層断面（南東から）

写真8 土坑(A III類②)

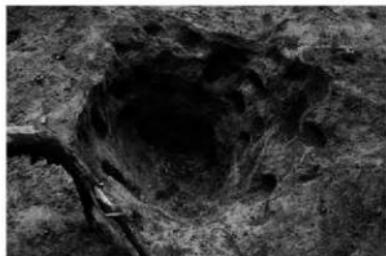
大川添(1) 遺跡



第39号土坑完掘（南から）



第39号土坑土層断面（南から）



第66号土坑完掘（南から）



第66号土坑土層断面（南から）



第46・47号土坑完掘（南から）



第46・47号土坑土層断面（南から）

写真9 土坑(AⅣ類)

大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 大川添(1) 遺跡

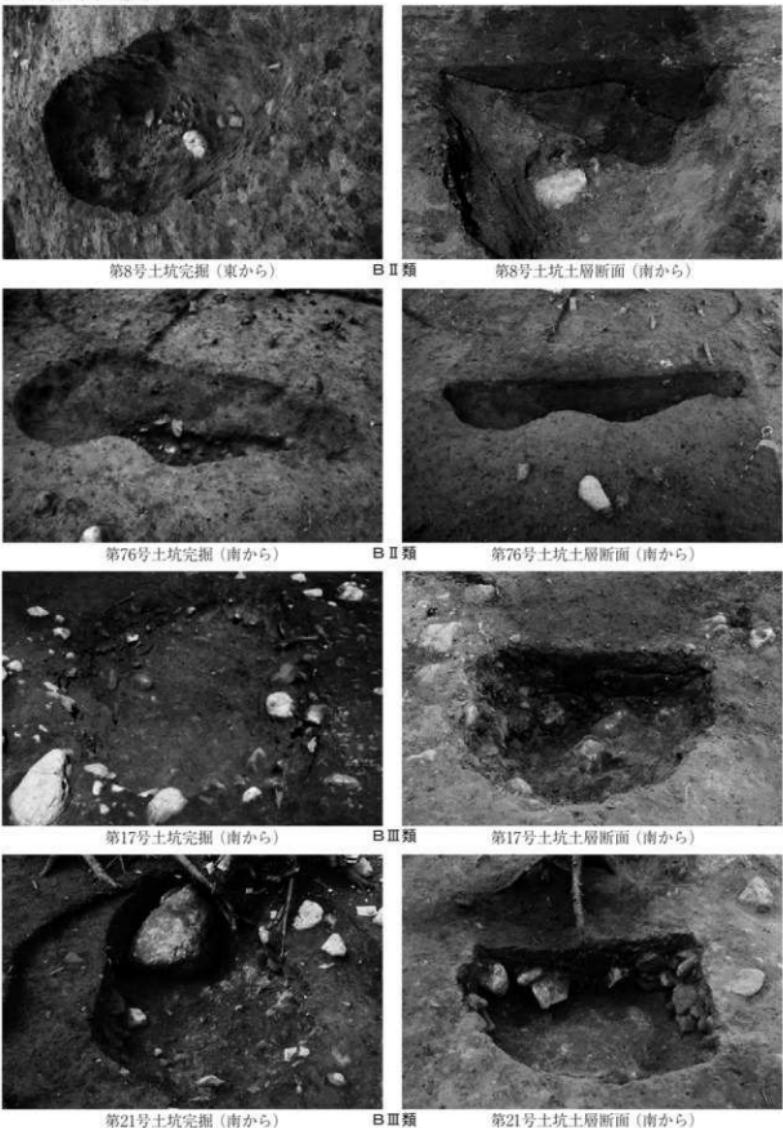


写真10 土坑(B II・III類)

大川添(1) 遺跡

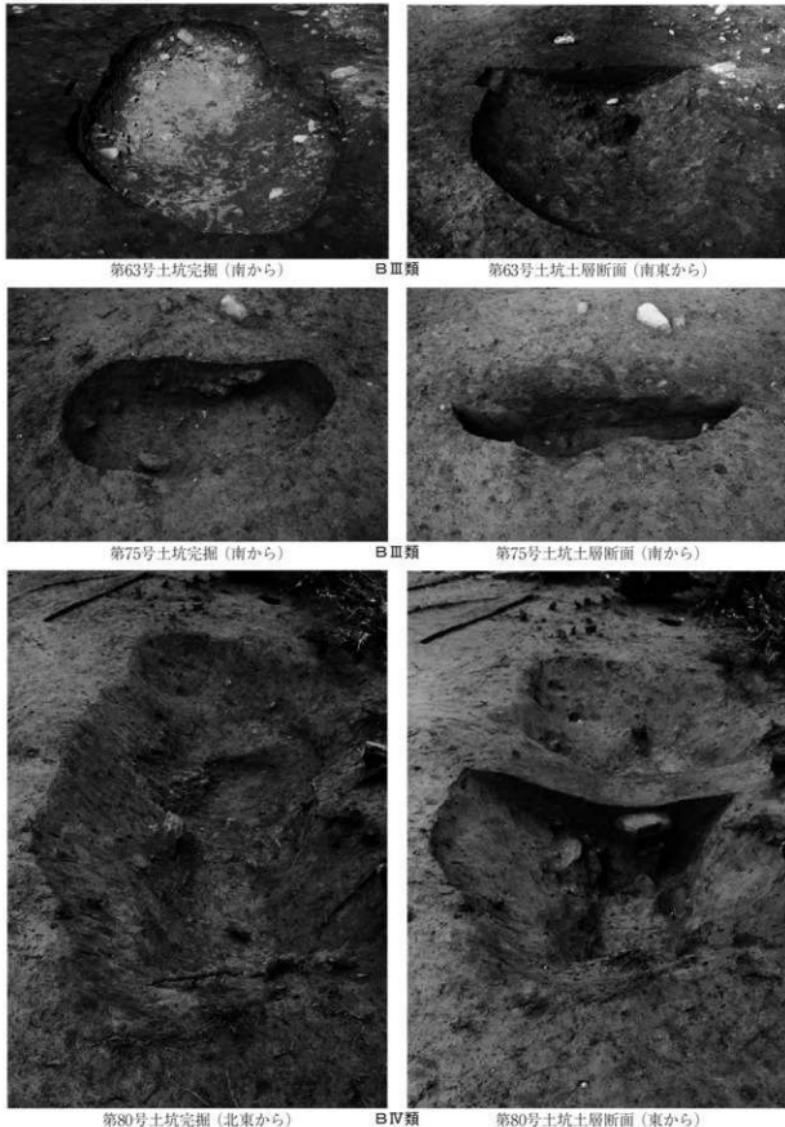


写真11 土坑(B III・IV類)

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 大川添(1) 遺跡

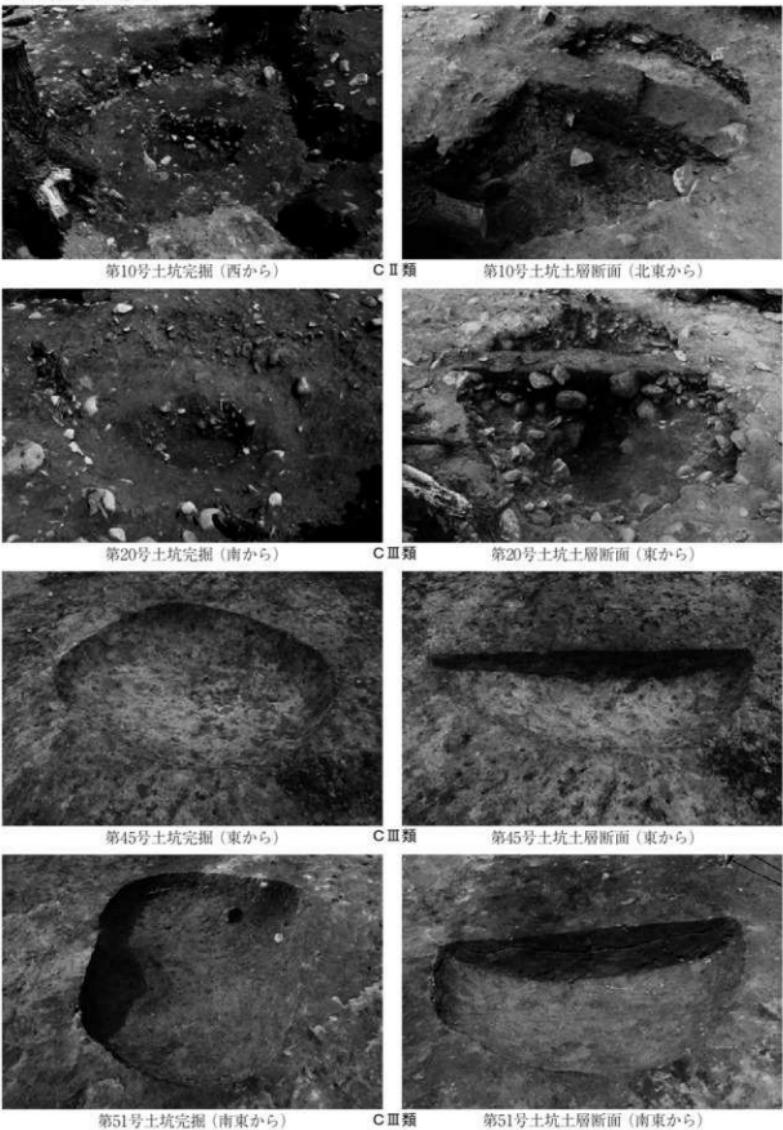


写真12 土坑(C II・III類)

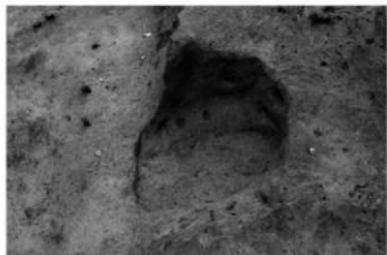
大川添(1) 遺跡



第13号土坑完掘（東から）



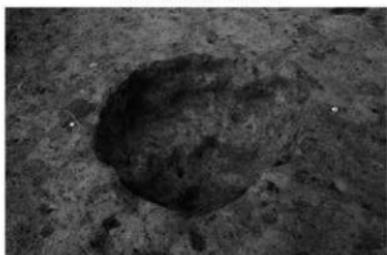
第13号土坑土層断面（東から）



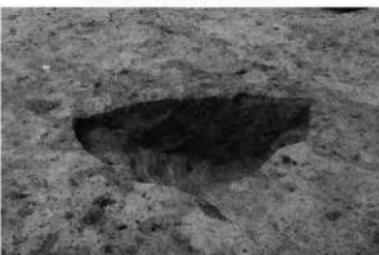
第67号土坑完掘（北から）



第67号土坑土層断面（東から）



第72号土坑完掘（南から）



第72号土坑土層断面（南から）



第79号土坑完掘（南西から）

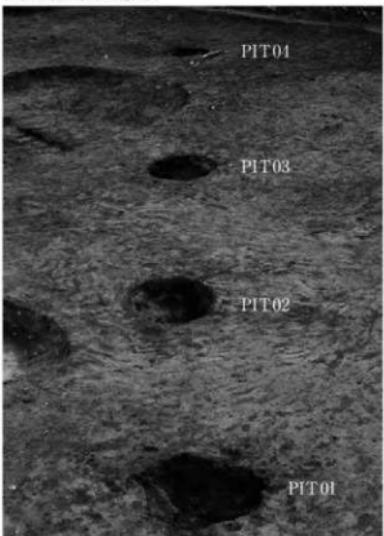


第79号土坑土層断面（南西から）

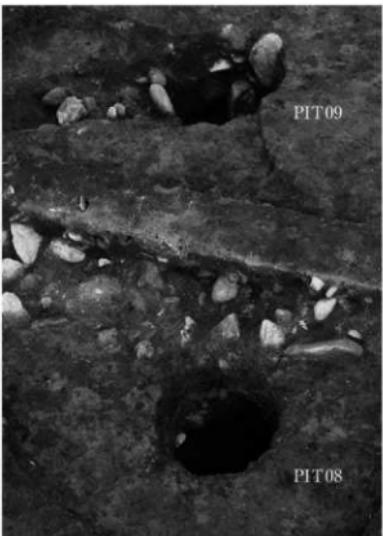
写真13 土坑(C IV類)

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 大川添(1) 遺跡



PIT-01・02・03・04完掘（南西から）



PIT-08・09完掘（南から）



第4号焼土遺構（南西から）



第5号焼土遺構（北東から）

遺物集中範囲捨て場1（南から）

写真14 その他の遺構・遺物集中範囲

## 大川添(1) 遺跡

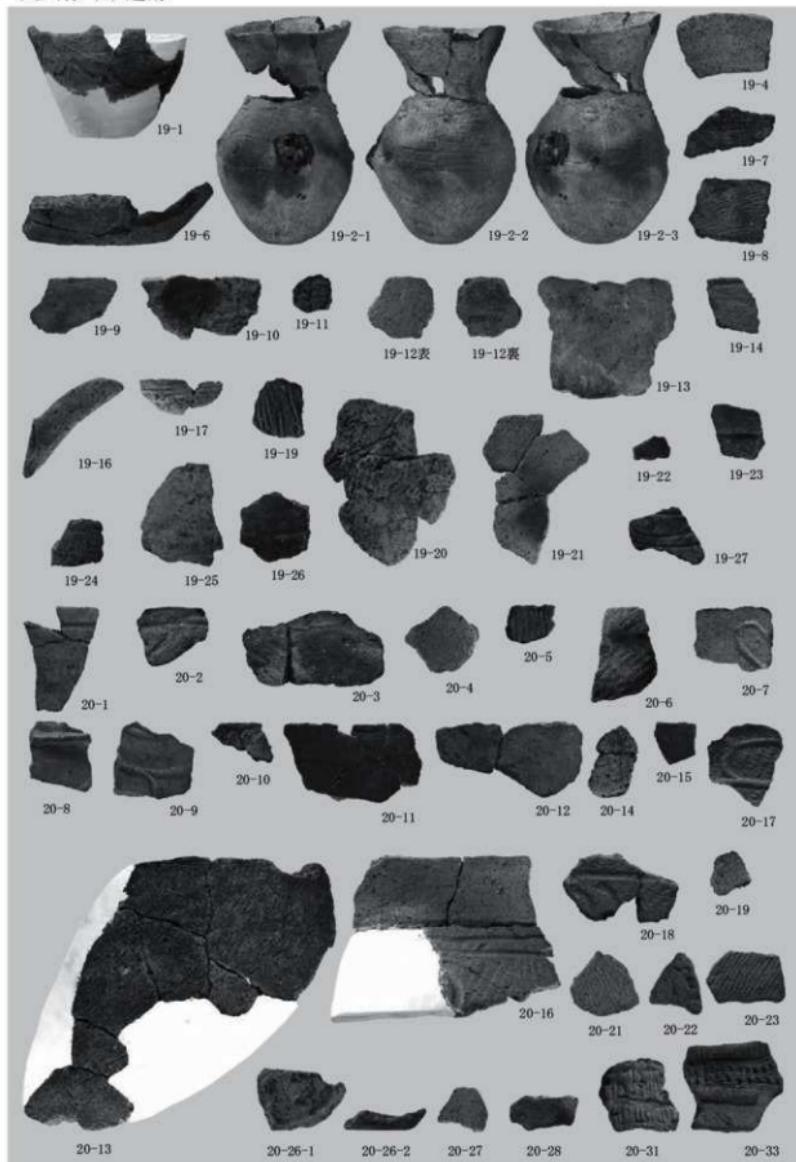


写真15 遺構内出土土器・遺構外出土土器(1)

大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 大川添(1) 遺跡

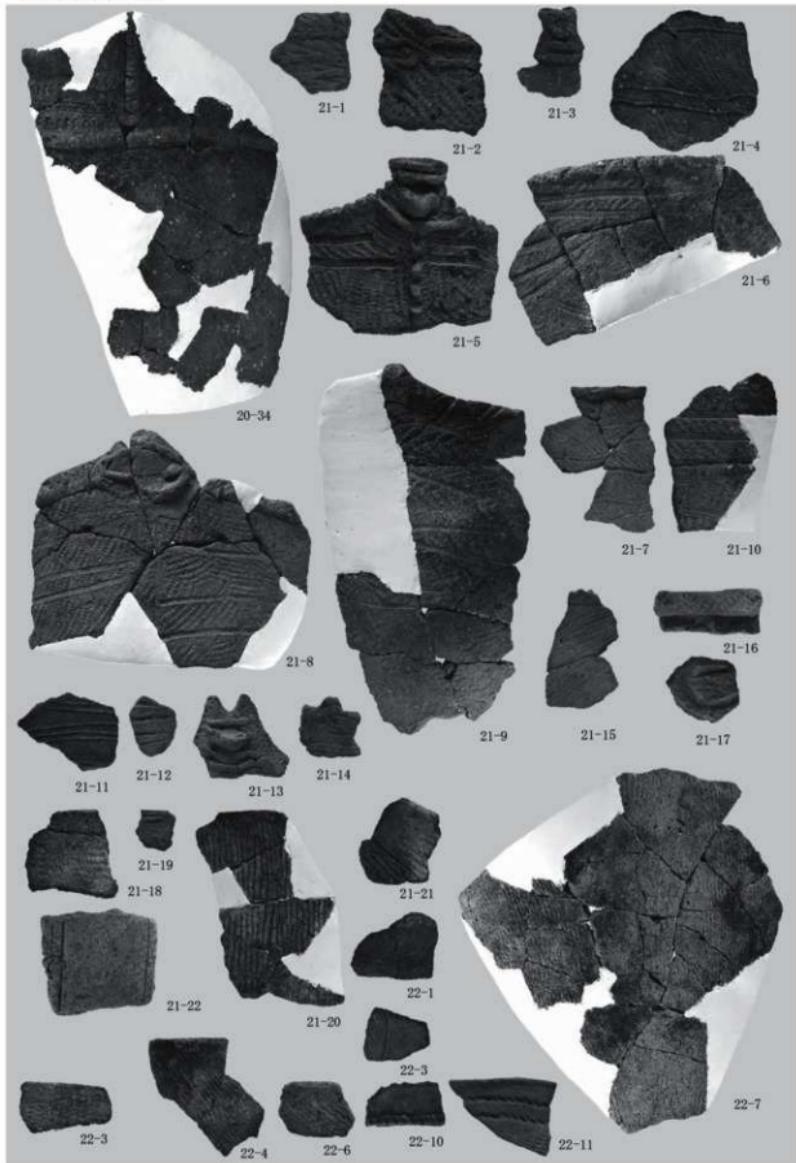


写真16 遺構外出土土器(2)

## 大川添(1) 遺跡

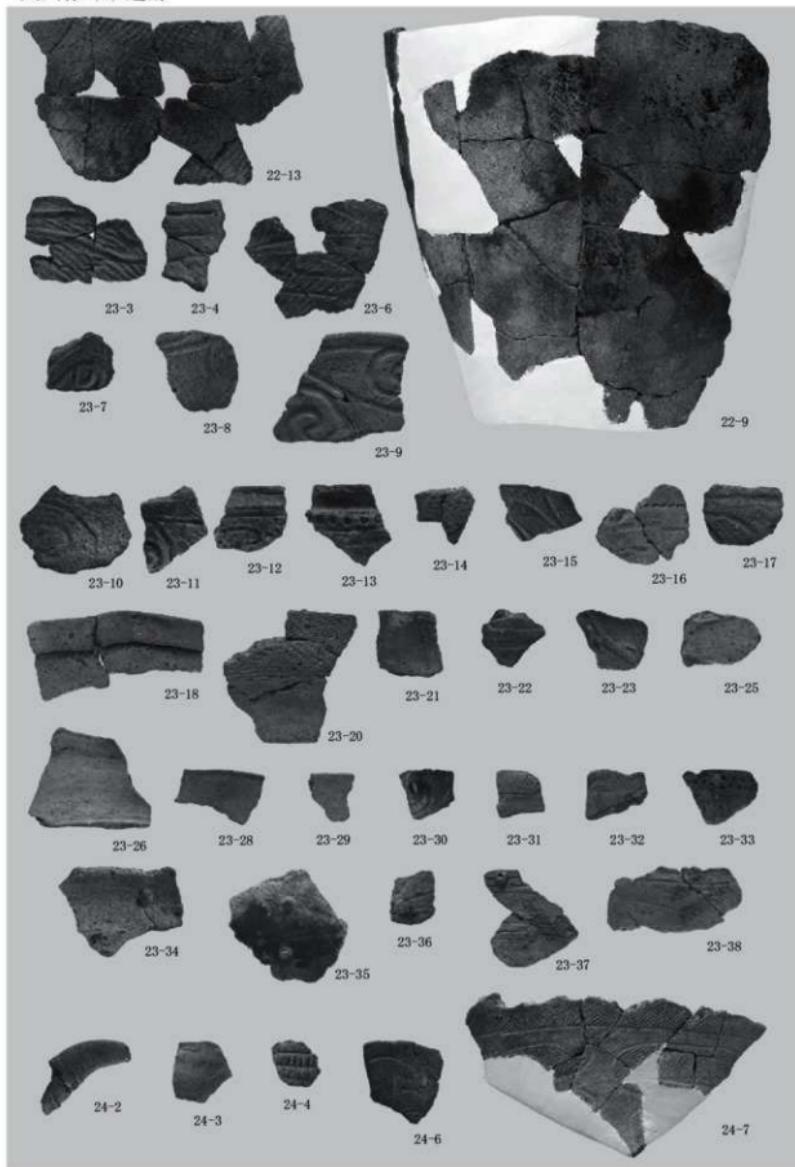


写真17 遺構外出土土器(3)

大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 大川添(1)遺跡

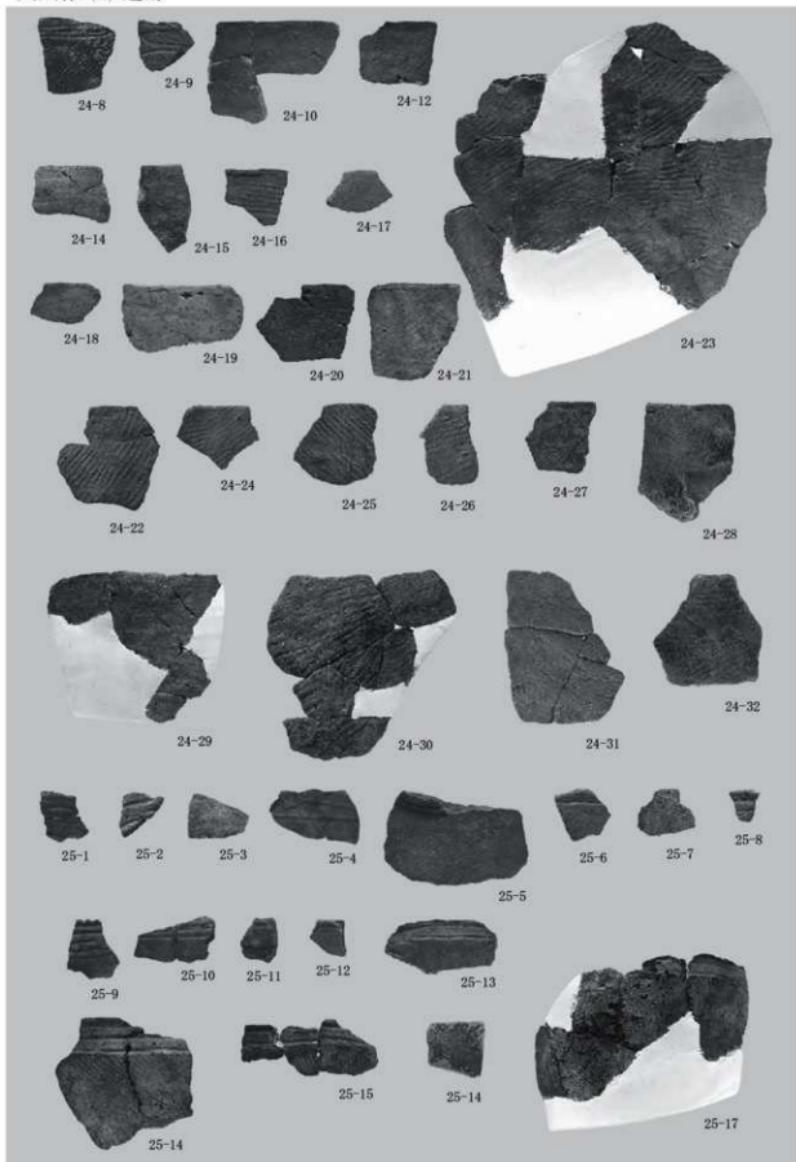


写真18 遺構外出土土器(4)

## 大川添(1) 遺跡

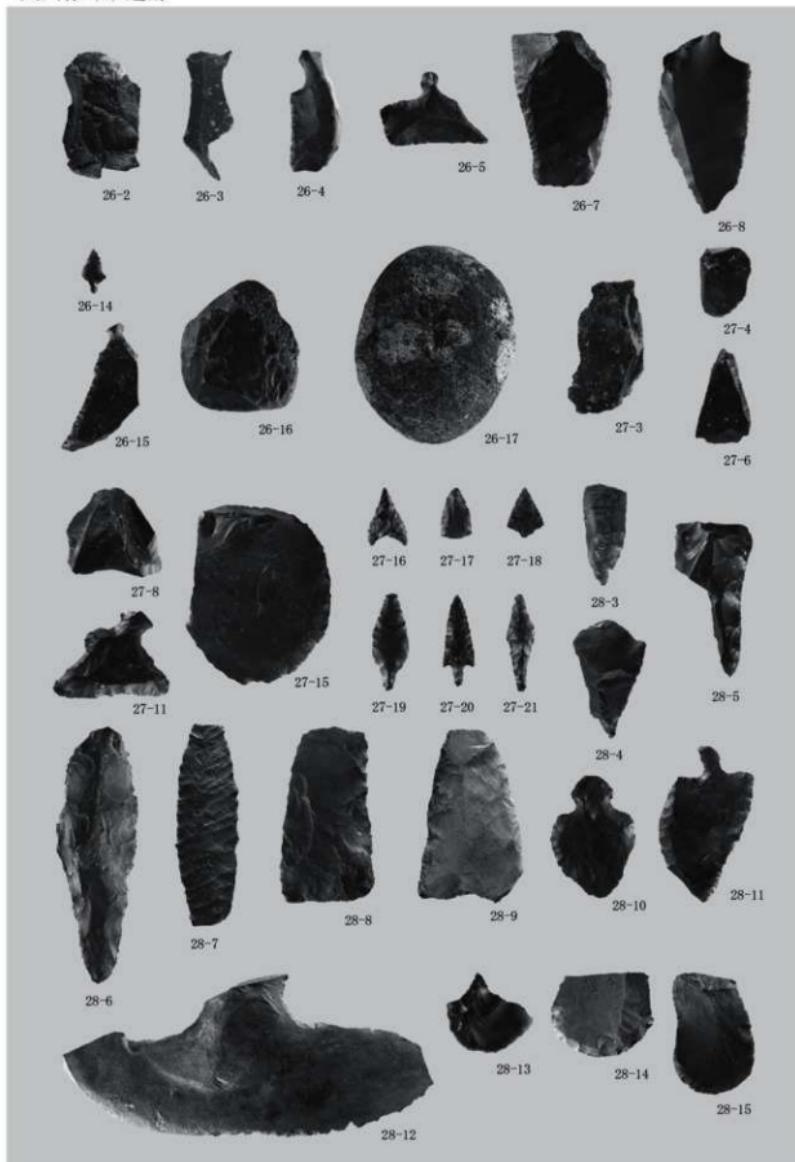


写真19 遺構内出土石器・遺構外出土石器(1)

大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

大川添(1)遺跡



写真20 遺構外出土石器(2)

大川添(1) 遺跡

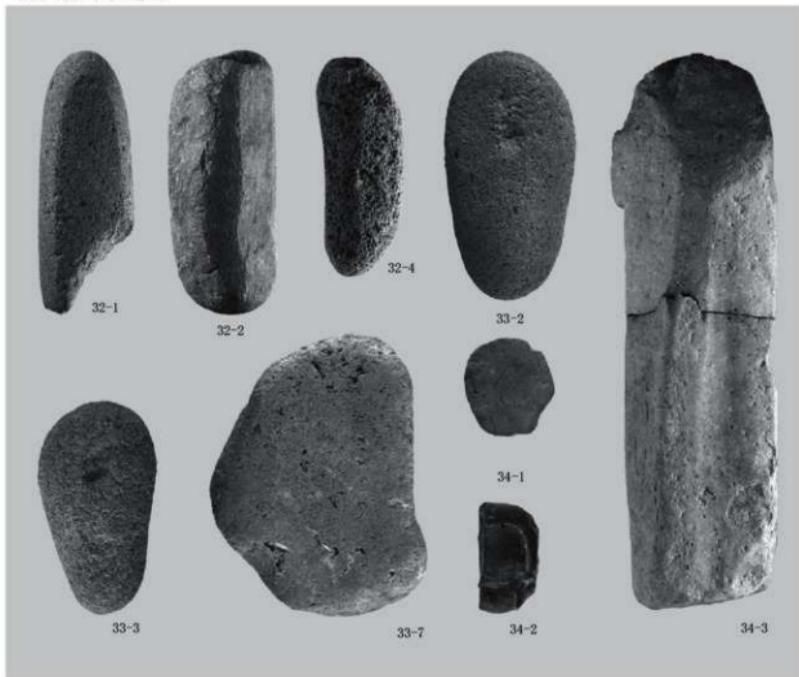


写真21 遺構外出土石器(3)・遺構内外出土石製品

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 水上(4) 遺跡



調査区全景（東から）



埋没沢全景（写真上が西）

写真22 遺跡全景

水上(4) 遺跡



埋没沢近景（南から）

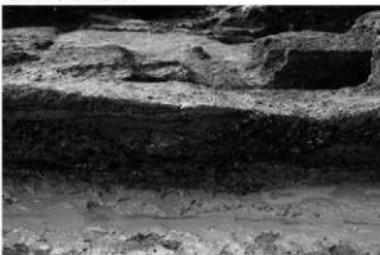


埋没沢の土層（北から）

写真23 埋没沢(1)

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路

### 水上(4)遺跡



埋没沢右岸の土層（北から）



埋没沢左岸の土層（北から）



埋没沢完掘状況（北から）



埋没沢右岸A区の土層（北から）



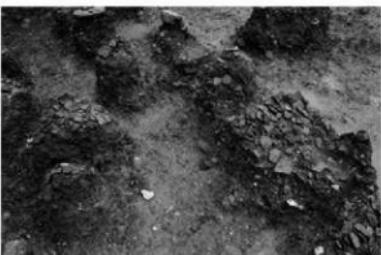
埋没沢遺物出土状況（西から）



埋没沢右岸遺物出土状況（北から）



A区8層上部遺物出土状況（南から）



A区8層中部遺物出土状況（南から）

写真24 埋没沢(2)・遺物包含層遺物出土状況

## 水上(4) 遺跡

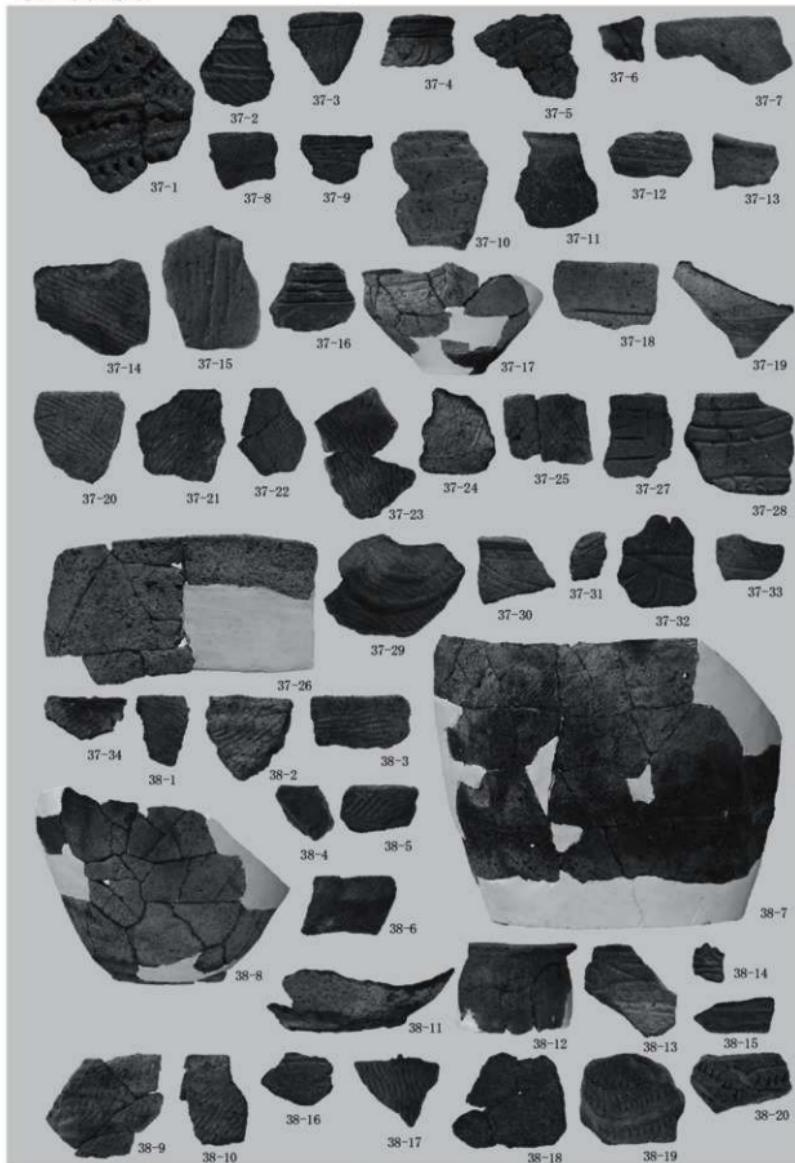


写真25 遺物包含層出土土器(1)

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)道路

### 水上(4)遺跡

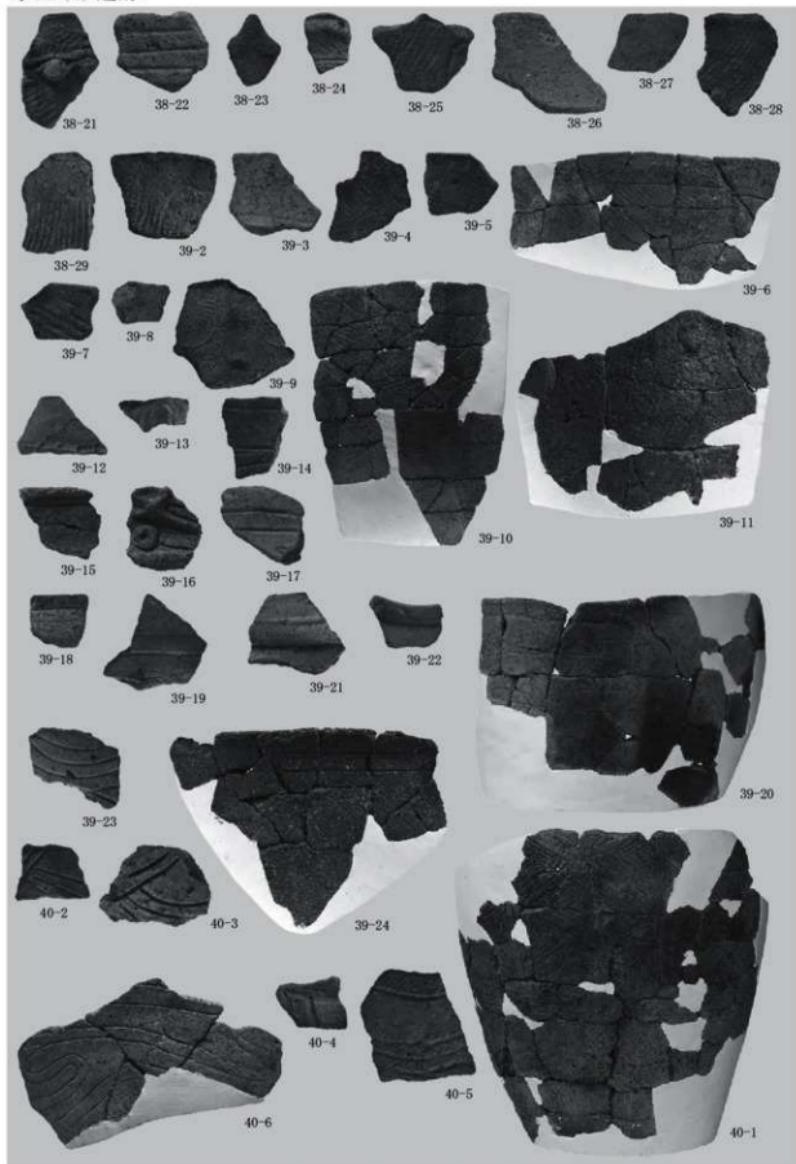


写真26 遺物包含層出土土器(2)

## 水上(4) 遺跡

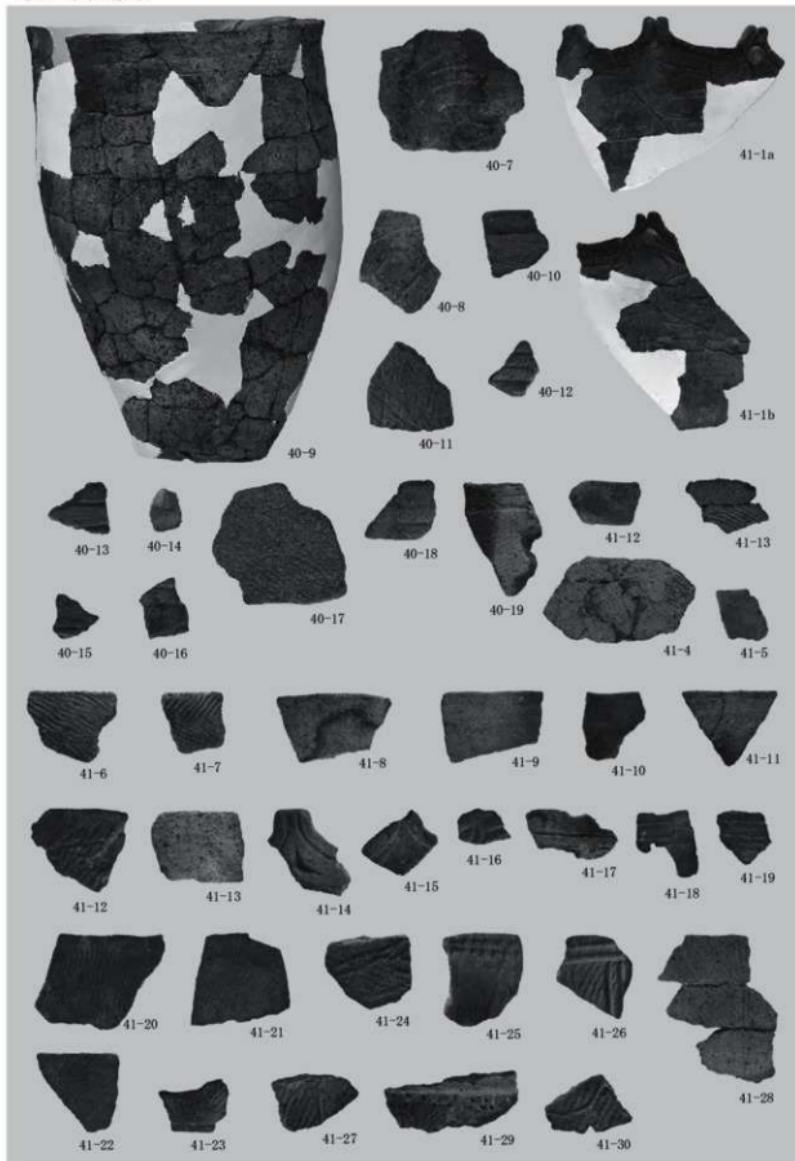


写真27 遺物包含層出土土器(3)

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 水上(4)遺跡

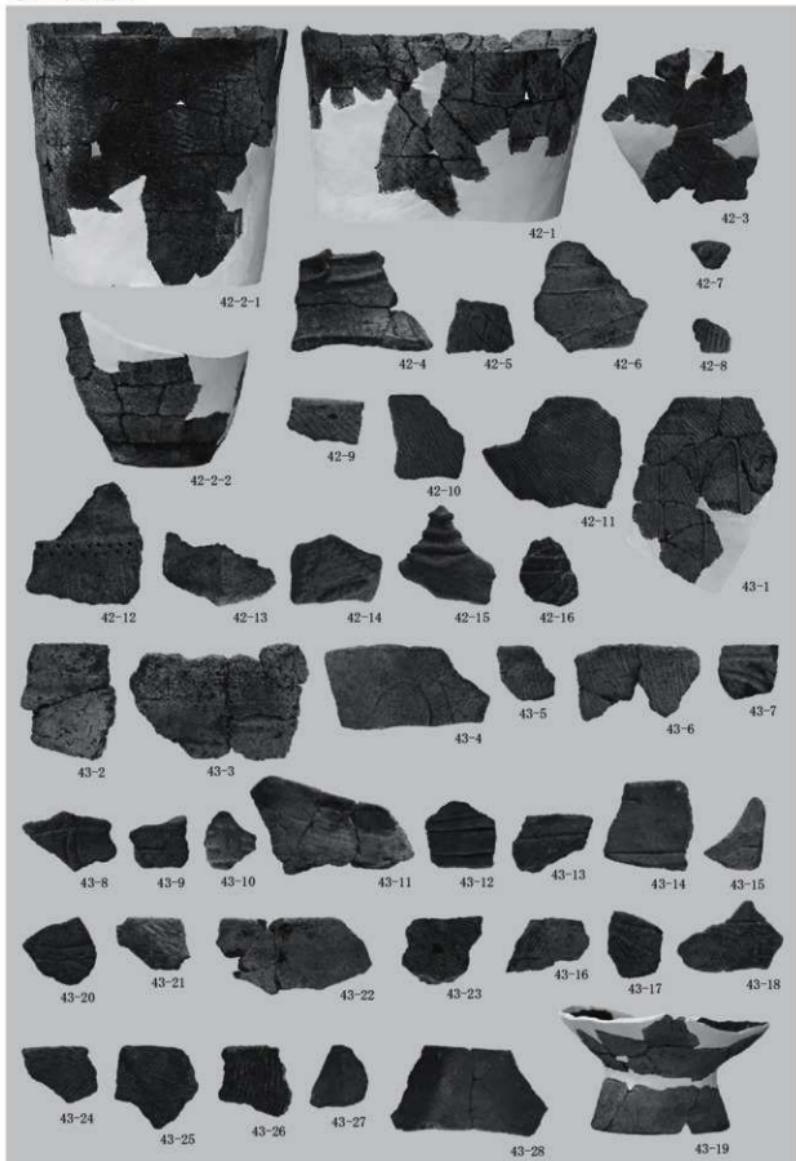


写真28 遺物包含層出土土器(4)

## 水上(4) 遺跡

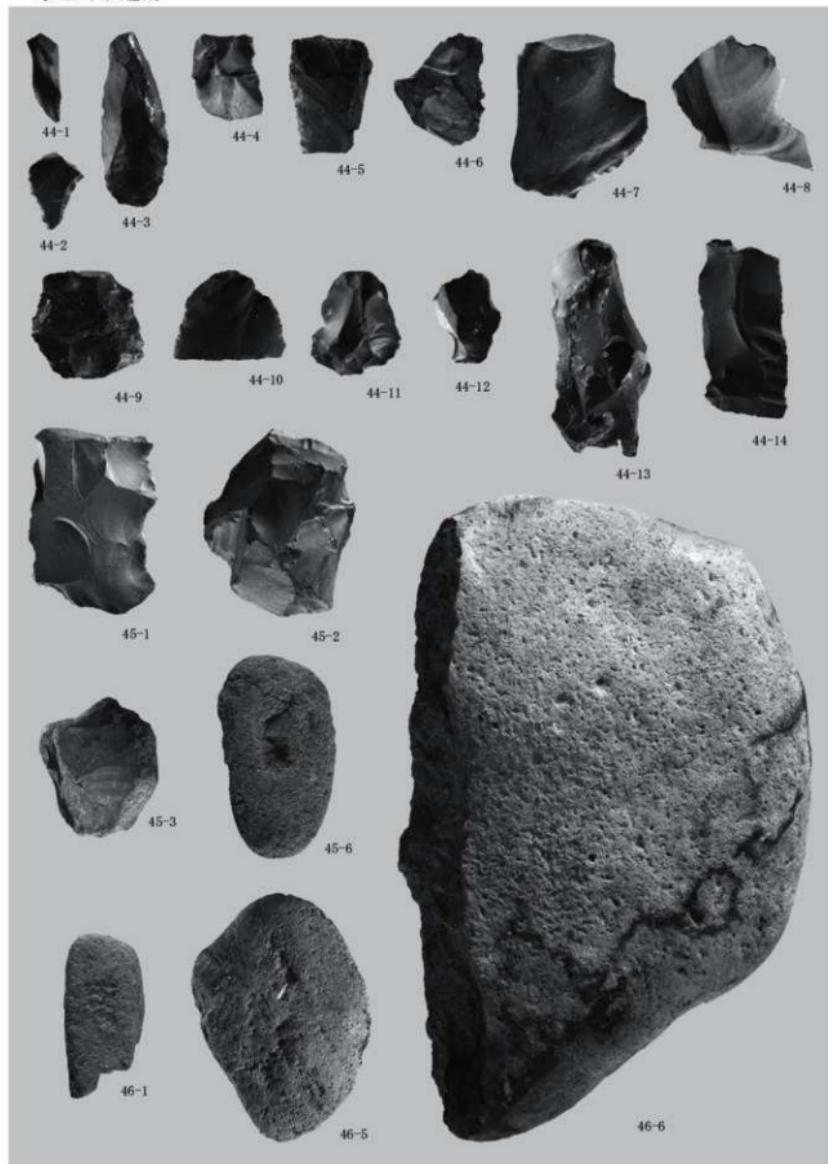


写真29 遺物包含層出土石器

大川添(1)道路・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡

### 芦沢(1)遺跡



遺跡全景（写真上が南）



作業風景（南東から）

写真30 平成21年度調査区

芦沢(1) 遺跡



調査区遠景（北東から）



作業風景（東から）

写真31 平成22年度調査区

大川添(1)道路・水上(4)道路Ⅱ・芦沢(1)道路

芦沢(1) 遺跡

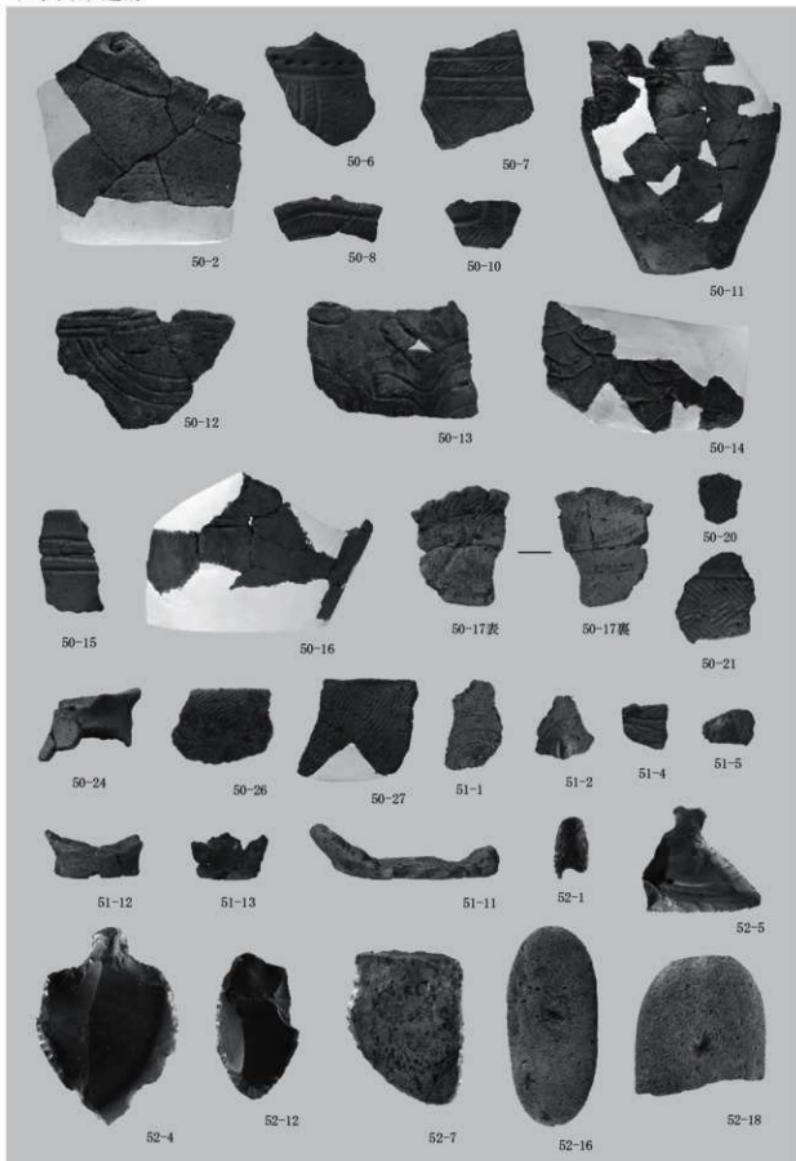


写真32 遺構外出土土器・石器

# 報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行機関 発行年月日	おおかわぞえかっこいちいせき・みずがみかっこよんいせき・あしざわかっこいちいせき 大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 青森県埋蔵文化財調査報告書 第500集 中嶋友文・新山隆男・佐々木雅裕・佐藤純子・菅原優太 青森県埋蔵文化財調査センター 〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702 青森県教育委員会 西暦2011年4月27日										
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因			
		市町村	遺跡番号	世界測地系 (JGD 2000)	北緯						
大川添(1)遺跡	青森県 津軽郡西目屋村川原平 字大川添	40° 31' 25° 40° 31' 45°	140° 13' 23° 140° 12' 58°	40°	140°	20090507	7,800	津軽ダム建 設事業に伴 う事前調査			
				31'	13'	~					
				25°	23°	20090828	1,000				
				40°	140°	20101005					
				31'	12'	~					
水上(4)遺跡	西目屋村砂子瀬字水上	40° 31' 58°	140° 15° 19°	40°	140°	20101028					
				31'	12'						
				58°	19°	20090915	2,400				
				40°	140°	~					
				32'	14'	20091029					
芦沢(1)遺跡	西目屋村砂子瀬字芦沢	40° 31' 58°	140° 15° 19°	40°	140°	20090603	4,300				
				31'	15'	~					
				58°	19°	20091113					
				40°	140°	20100506	2,500				
				32'	14'	~					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項				
			堅穴住居跡	2軒	縄文土器・石器・ 石製品	河岸段丘高位面と低位面 から縄文時代後期の堅穴住居 跡を検出。					
			土坑	83基							
			ピット	32基							
			焼土遺構	2基							
水上(4)遺跡	散布地	縄文時代			縄文土器・石器	埋没沢から縄文時代中期か ら後期の遺物が大量に出土。					
芦沢(1)遺跡	散布地	縄文時代			縄文土器・石器 石製品						

要 約	<p>大川添(1)遺跡では、河岸段丘高位面と低位面から、縄文時代後期の堅穴住居跡が検出された。また、土坑などの遺構は、縄文時代中期中葉から晩期までの時期に分かれ、長期間にわたって集落が営まれていたことが明らかとなった。</p> <p>水上(4)遺跡では、遺構は検出されなかったが、埋没沢から縄文時代中期から晩期にかけての遺物が大量に出土した。</p> <p>芦沢(1)遺跡では、遺構は検出されなかったが、遺物包含層から縄文時代中期から後期にかけての遺物が出土した。</p>
--------	--

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第500集

## 大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡II・芦沢(1)遺跡

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 2011年4月27日

発 行 青森県教育委員会

〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

T E L 017-788-5701 F A X 017-788-5702

印 刷 ワタナベサービス株式会社

〒030-0803 青森市安方二丁目17-3

T E L 017-777-1388 F A X 017-735-5982